

柳堀遺跡・茶臼遺跡・川原宮Ⅱ遺跡

国道432号大庭バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 1

2016年3月

島根県教育委員会

序

本書は、島根県教育委員会が島根県土木部から依頼を受けて、平成 23 年度から平成 26 年度にかけて実施した国道 432 号大庭バイパス建設予定地内に所在する柳堀遺跡、茶臼遺跡、川原宮Ⅱ遺跡の発掘調査成果をまとめたものです。

これらの遺跡は、いずれも松江市大庭町に所在しています。周辺には、山代二子塚古墳や大庭鶏塚古墳など著名な古墳があります。また、近隣は、史跡出雲国府跡、出雲国分寺跡、山代郷正倉跡など出雲の古代史を考える上で重要な遺跡が集中する場所で、一帯は島根県立八雲立つ風土記の丘として整備されています。

柳堀遺跡では、溝跡や杭列、道路状遺構など弥生時代から近世にかけての集落の様子を知る手がかりを得ることができました。茶臼遺跡では、古代の地方政治に携わった役人の職階制度を示す服飾品の石製巡方が出土して注目されます。川原宮Ⅱ遺跡では、奈良時代から中世初頭に掘られた 300 近い粘土探掘坑が発見されました。また、これらの遺跡では、複数の自然河道の痕跡が発見され、古環境や古地形についても貴重な成果を得ることができました。

本報告書がこの地域の人々の歴史を解明する基礎資料として広く活用されることを願っております。

最後になりましたが、発掘調査と報告書の作成に当たりご協力いただきました地元住民の皆様や、松江市並びに島根県土木部をはじめとする関係機関の皆様に厚くお礼を申し上げます。

平成 28 年 3 月

島根県教育委員会

教育長 藤原孝行

例 言

1. 本書は、鳥根県土木部道路建設課からの委託を受けて、鳥根県教育委員会が平成23年度から平成26年度にかけて実施した国道432号大庭バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

2. 発掘調査地は下記のとおりである。

柳堀遺跡 鳥根県松江市大庭町745-1 外

茶臼遺跡 鳥根県松江市大庭町754-1 外

川原宮Ⅱ遺跡 鳥根県松江市大庭町141-1 外

3. 調査組織は次のとおりである。

平成23年度試掘確認調査、本調査

[事務局] 川原和人(埋蔵文化財調査センター所長)、三島 伸(総務グループ課長)、丹羽野裕(管理グループ課長)、熱田貴保(調査第三グループ課長)

[調査担当者] 大庭俊次(調査第三グループ主幹)、中川 寧(調査第三グループ企画員)、田中玲子(同調査補助員)、福田沙織(同調査補助員)

平成24年度試掘確認調査、本調査

[事務局] 廣江耕史(埋蔵文化財調査センター所長)、三島 伸(総務グループ課長)、熱田貴保(管理グループ課長)

[調査担当者] 大庭俊次(調査第一グループ課長)、田中玲子(同調査補助員)、井谷朋子(同調査補助員)

平成25年度現地調査

[事務局] 廣江耕史(埋蔵文化財調査センター所長)、渡部宏之(総務課長)、熱田貴保(管理課長)

[調査担当者] 今岡一三(調査第一課長)、田中玲子(同調査補助員)、井谷朋子(同調査補助員)

平成26年度現地調査

[事務局] 廣江耕史(埋蔵文化財調査センター所長)、渡部宏之(総務課長)、池淵俊一(管理課長)

[調査担当者] 大庭俊次(調査第一課長)、米田美江子(同調査補助員)、福田市子(同調査補助員)

平成27年度報告書作成

[事務局] 廣江耕史(埋蔵文化財調査センター所長)、渡部宏之(総務課長)、池淵俊一(管理課長)

[調査担当者] 大庭俊次(調査第三課長)、秦 愛子(同調査補助員)

4. 平成24年度から平成26年度にかけての発掘調査作業(安全管理、発掘作業員の雇用、機械による掘削、測量等)については、鳥根県教育委員会が株式会社祥好建設へ委託した。

5. 発掘調査にあたっては、以下の方々、関係機関から御指導いただいた。(順不同、敬称略)
大橋康夫(鳥根大学法文学部教授)、木本雅康(長崎外国語大学外国語学部教授)、勝部 昭(元

島根県教育次長)、渡邊正巳(文化財調査コンサルタント株式会社代表取締役)、中村唯史(三瓶自然館サヒメル)、花谷 浩(島根県出雲市市民文化部学芸調整官)

6. 本書の編集及び写真撮影は、各調査担当者が行い、掲載した図表は、調査担当者及び遺物整理作業員が作成した。
7. 本書の編集にあたっては、DTP方式を採用し、Adobe社のAdobe InDesign CS5及びCS6、Adobe Illustrator CS5及びCS6、Adobe Photoshop CS5及びCS6を用いて作業を行った。
8. 挿図中の方位北は、測量法に基づく平面直角座標第Ⅲ系のX軸方向を指す。座標系のXY座標は世界測地系による。また、レベル高は海拔高を示す。
9. 本書で使用した第3図は国土地理院の1/25,000地図を使用して作成したものである。
10. 柳屋遺跡及び川原宮Ⅱ遺跡の本調査に伴って実施した自然化学分析は文化財コンサルタント株式会社に委託して行ったものであり、その成果については、本書第6章に掲載した。
11. 本書掲載の図面、写真、出土遺物は、島根県教育庁埋蔵文化財調査センター(松江市打出町33)で保管している。

凡 例

1. 遺構の略号は下記のとおりである。

SK：土坑 SD：溝状遺構 SX：性格不明遺構

2. 本文中・挿図中・写真図版中の遺物番号は一致する。

3. 本報告書で用いた遺物の分類および編年観は、下記の文献や論文を参考にした。

「出雲・隠岐地域」、松本岩男著、『弥生土器の様式と編年 山陰・山陽編』、松本岩男・正岡睦夫編、木耳社、1992年

『南講武草田遺跡』講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書5、鳥根県鹿島町教育委員会編、1992年

「小谷寺再検討―出雲平野における新資料から」、松山智弘著、『鳥根考古学会誌第17集』、鳥根考古学会編、2000年

「出雲における古墳時代前半期の土器の様相―大東式の再検討」、松山智弘著、『鳥根考古学会誌第8集』、鳥根考古学会編、1991年

『鳥根県における弥生時代・古墳時代の木製品集成』、鳥根県古代文化センター編、2006年

「出雲地域の須恵器の編年と地域色」、大谷兎二著、『鳥根考古学会誌第11集』鳥根考古学会編、1994年

『史跡出雲国府跡―9総括編―』、鳥根県教育委員会編、2013年

「山陰地域の古墳時代後期～奈良時代の炊飯具について」、岩橋孝典著、古代文化研究11、鳥根県古代文化センター編、2003年

「山陰地域の土器集成」、内田律雄・岩橋康子・藤原 哲著、『鳥根考古学会誌第22集』鳥根考古学会編、2005年

『山陰における中世前期の貿易陶磁器』、第26回山陰考古学研究会集事事務局編、1998年

『概説 中世の土器・陶磁器』、中世土器研究会編、真臨社、1995年

『九州陶磁器の編年―九州近世陶磁学会10周年記念―』、九州近世陶磁学会、2000年

『古志本郷遺跡1』変伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書VI、鳥根県教育委員会編、1998年

『近世の出土銭Ⅱ―分類図版編―』、永井久美男編、兵庫埋蔵文化財調査会、1998年

4. 遺物実測図の断面は、須恵器を黒塗り、土器、土製品を白ヌキ、陶磁器類を網掛け、木器木製品、石器石製品、金属製品を斜線入りで示した。木製品の被熱部分について網掛けして表示した。
5. 遺物実測図の網掛けは被熱により赤く変色した箇所を示す。

本文目次

第1章 調査に至る経緯と経過（今岡・大庭・中川）	1
第1節 調査の経緯	
第2節 調査の経過	
第2章 位置と環境（中川）	3
第3章 柳堀遺跡	5
第1節 トレンチ調査（中川）	
第2節 調査の方法（中川）	
第3節 A区の調査（中川）	
第4節 B区の調査（中川）	
第5節 C区の調査（中川）	
第6節 D区の調査（中川）	
第7節 E区の調査（中川）	
第8節 A～E区の出土遺物（中川）	
第9節 F・G・H区の調査（大庭）	
第4章 茶臼遺跡（今岡）	43
第1節 調査の経過	
第2節 調査の概要	
第3節 小結	
第5章 川原宮Ⅱ遺跡（大庭）	63
第1節 調査の経過	
第2節 調査の概要	
第3節 小結	
第6章 自然化学分析（渡邊）	113
第1節 柳堀遺跡	
第2節 川原宮Ⅱ遺跡	
第7章 総括（今岡・大庭）	134

插图目次

第 1 図	柳堀遺跡・茶臼遺跡・川原宮Ⅱ遺跡の位置	1
第 2 図	柳堀遺跡・茶臼遺跡・川原宮Ⅱ遺跡調査区配置図	2
第 3 図	周辺の遺跡	3
第 4 図	柳堀遺跡調査区配置図	6
第 5 図	柳堀遺跡トレンチ調査出土遺物実測図	7
第 6 図	柳堀遺跡 A 区平面実測図	9
第 7 図	柳堀遺跡 A 区東壁北壁セクション図	10
第 8 図	柳堀遺跡 A 区 SD10 実測図	11
第 9 図	柳堀遺跡 A 区 SD13 実測図	11
第 10 図	柳堀遺跡 A 区杭列実測図	12
第 11 図	柳堀遺跡 B 区平面実測図	13
第 12 図	柳堀遺跡 B 区セクション図・杭列実測図	14
第 13 図	柳堀遺跡 C 区実測図	16
第 14 図	柳堀遺跡 D 区実測図	17
第 15 図	柳堀遺跡 E 区セクション図	18
第 16 図	柳堀遺跡本調査区出土遺物実測図	19
第 17 図	柳堀遺跡 A・B 区出土杭実測図 1	21
第 18 図	柳堀遺跡 A・B 区出土杭実測図 2	22
第 19 図	柳堀遺跡 F・G・H 区グリッド配置図	23
第 20 図	柳堀遺跡 F・G・H 区全体図	24
第 21 図	柳堀遺跡 F・G・H 区セクション図 1	26
第 22 図	柳堀遺跡 F・G・H 区セクション図 2	27
第 23 図	柳堀遺跡 F・G・H 区 SD14・15 実測図	28
第 24 図	柳堀遺跡 F・G・H 区 SD14 出土遺物実測図	29
第 25 図	柳堀遺跡 F・G・H 区自然河道跡実測図	30
第 26 図	柳堀遺跡 F・G・H 区自然河道出土遺物実測図 1	31
第 27 図	柳堀遺跡 F・G・H 区自然河道出土遺物実測図 2	32
第 28 図	柳堀遺跡 F・G・H 区自然河道出土遺物実測図 3	33
第 29 図	柳堀遺跡 F・G・H 区道路状遺構平面図	34
第 30 図	柳堀遺跡 F・G・H 区道路状遺構断面図	35
第 31 図	柳堀遺跡 F・G・H 区道路状遺構出土遺物実測図	35
第 32 図	柳堀遺跡 F・G・H 区包含層出土遺物実測図 1	36
第 33 図	柳堀遺跡 F・G・H 区包含層出土遺物実測図 2	37
第 34 図	柳堀遺跡 F・G・H 区包含層出土遺物実測図 3	38
第 35 図	茶臼遺跡調査区位置図・グリッド配置図	44
第 36 図	茶臼遺跡調査区セクション図 1	45

第37図	茶臼遺跡調査区セクション図2	46
第38図	茶臼遺跡SD01実測図	47
第39図	茶臼遺跡SD01出土遺物実測図	48
第40図	茶臼遺跡SX01実測図	48
第41図	茶臼遺跡SX01出土遺物実測図	49
第42図	茶臼遺跡調査区全体図	50
第43図	茶臼遺跡SR01出土遺物実測図1	51
第44図	茶臼遺跡SR01出土遺物実測図2	52
第45図	茶臼遺跡SR01出土遺物実測図3	53
第46図	茶臼遺跡SR01出土遺物実測図4	54
第47図	茶臼遺跡SR01出土遺物実測図5	55
第48図	茶臼遺跡SR01出土遺物実測図6	56
第49図	川原宮Ⅱ遺跡調査区配置図1	64
第50図	川原宮Ⅱ遺跡遺構平面図	65
第51図	川原宮Ⅱ遺跡調査区セクション図1	66
第52図	川原宮Ⅱ遺跡調査区セクション図2	67
第53図	川原宮Ⅱ遺跡調査区セクション図3	68
第54図	川原宮Ⅱ遺跡調査区セクション図4	69
第55図	川原宮Ⅱ遺跡自然河道平面図	70
第56図	川原宮Ⅱ遺跡遺構セクション図1自然河道1以北及び自然河道1以南1	71
第57図	川原宮Ⅱ遺跡遺構平面図2自然河道1以北	72
第58図	川原宮Ⅱ遺跡遺構セクション図2自然河道1以南2	73
第59図	川原宮Ⅱ遺跡遺構平面図3自然河道1以南	74
第60図	川原宮Ⅱ遺跡遺構セクション図3自然河道1以南3 A区東1	75
第61図	川原宮Ⅱ遺跡遺構平面図4 A区東	76
第62図	川原宮Ⅱ遺跡遺構セクション図4 A区東2	77
第63図	川原宮Ⅱ遺跡遺構平面図5 A区B区境界	78
第64図	川原宮Ⅱ遺跡遺構セクション図5 A区B区境界1	79
第65図	川原宮Ⅱ遺跡遺構平面図6 B区西	80
第66図	川原宮Ⅱ遺跡遺構セクション図6 A区B区境界2 B区西	81
第67図	川原宮Ⅱ遺跡遺構平面図7 B区東	82
第68図	川原宮Ⅱ遺跡遺構セクション図7 B区東	83
第69図	川原宮Ⅱ遺跡遺構平面図8 B区南東隅	84
第70図	川原宮Ⅱ遺跡遺構セクション図8	85
第71図	川原宮Ⅱ遺跡遺構平面図9 B区南西	86
第72図	川原宮Ⅱ遺跡自然河道1出土遺物実測図	87
第73図	川原宮Ⅱ遺跡遺構出土遺物実測図	88
第74図	川原宮Ⅱ遺跡A区地山直上出土遺物実測図	89

第75図	川原宮Ⅱ遺跡B区5層及び6層出土遺物実測図	90
第76図	川原宮Ⅱ遺跡B区6層出土遺物実測図	91
第77図	川原宮Ⅱ遺跡A区3層出土遺物実測図1	92
第78図	川原宮Ⅱ遺跡A区3層出土遺物実測図2	93
第79図	川原宮Ⅱ遺跡A区3層出土遺物実測図3	94
第80図	川原宮Ⅱ遺跡B区3層出土遺物実測図1	95
第81図	川原宮Ⅱ遺跡B区3層出土遺物実測図2	96
第82図	川原宮Ⅱ遺跡B区3層出土遺物実測図3	97
第83図	川原宮Ⅱ遺跡B区3層出土遺物実測図4	98
第84図	川原宮Ⅱ遺跡B区3層出土遺物実測図5	99
第85図	川原宮Ⅱ遺跡B区上層出土遺物実測図	100
第86図	川原宮Ⅱ遺跡その他の出土遺物実測図	100
第87図	柳堀遺跡A区平面図(試料採取地点)	113
第88図	柳堀遺跡A区東壁断面図と試料採取位置	113
第89図	軟X線写真 左:軟X線写真 中:実視 右:解析結果	114
第90図	軟X線写真と分割資料	116
第91図	花粉ダイヤグラム	118
第92図	水田での生物擾乱の影響 上:試料採取地点 下:遺跡内別地点	120
第93図	川原宮Ⅱ遺跡試料採取地点	127
第94図	試料採取層準	127
第95図	分析試料採取状況	127
第96図	軟X線写真観察結果(左:実視線 中:軟X線 右:解析結果)	129
第97図	暦年較正図	131
第98図	花粉ダイヤグラム	133

表 目 次

第1表	柳堀遺跡出土土器観察表	39
第2表	柳堀遺跡出土木製品観察表	41
第3表	柳堀遺跡出土金属製品観察表	41
第4表	柳堀遺跡出土石器観察表	42
第5表	柳堀遺跡出土古銭観察表	42
第6表	柳堀遺跡出土杭観察表	42
第7表	鳥根県内出土鈎帯関連遺物一覧	57
第8表	茶臼遺跡出土土器観察表	59
第9表	茶臼遺跡出土木製品観察表	61
第10表	茶臼遺跡出土鉄製品・石製品・古銭観察表	61
第11表	川原宮Ⅱ遺跡土坑一覧表	103

第12表	柳堀遺跡川原宮Ⅱ遺跡出土土器・瓦・土製品観察表	107
第13表	川原宮Ⅱ遺跡出土土製品観察表	112
第14表	川原宮Ⅱ遺跡出土金属製品観察表	112
第15表	川原宮Ⅱ遺跡出土石器石製品観察表	112
第16表	川原宮Ⅱ遺跡出土銭貨観察表	112
第17表	柳堀遺跡微化石概査結果	117
第18表	柳堀遺跡花粉化石組成表	119
第19表	川原宮Ⅱ遺跡AMS年代測定結果	131
第20表	川原宮Ⅱ遺跡微化石概査結果	132

写真図版目次

図版1	1. 柳堀遺跡調査前(南から) 2. 柳堀遺跡A区北壁土層	2. 柳堀遺跡B・C・D・E区出土遺物
図版2	1. 柳堀遺跡A区東壁土層(上:北側 中:中央 下:南側)	図版13
図版3	1. 柳堀遺跡A区SD10東断面 2. 柳堀遺跡A区SD10北側土層 3. 柳堀遺跡A区SD10中央土層	1. 柳堀遺跡A区出土杭 2. 柳堀遺跡B区出土杭
図版4	1. 柳堀遺跡A区SD10南側土層 2. 柳堀遺跡A区SD13東側土層 3. 柳堀遺跡A区SD13東断面	図版14
図版5	1. 柳堀遺跡A区完掘(北から) 2. 柳堀遺跡B区東壁土層	1. 柳堀遺跡B区出土杭 2. 柳堀遺跡B区出土杭
図版6	1. 柳堀遺跡B区南壁SX07土層 2. 柳堀遺跡B区北壁SX08土層	図版15
図版7	1. 柳堀遺跡B区SX08完掘 2. 柳堀遺跡B区杭列検出	1. 柳堀遺跡F・G・H区調査区遠景(北から) 2. 柳堀遺跡F・G・H区調査区遠景(南から)
図版8	1. 柳堀遺跡B区完掘(北から) 2. 柳堀遺跡C区南壁土層	図版16
図版9	1. 柳堀遺跡C区完掘 2. 柳堀遺跡D区SX04土層	1. 柳堀遺跡F・G・H区完掘状況(上空から) 2. 柳堀遺跡F・G区調査前(北から)
図版10	1. 柳堀遺跡D区SX05土層 2. 柳堀遺跡D区完掘(南から)	図版17
図版11	1. 柳堀遺跡E区東壁土層 2. 柳堀遺跡トレンチ調査出土遺物及び本調査D区出土遺物	1. 柳堀遺跡H区表土掘削後(南から) 2. 柳堀遺跡G区東壁セクション
図版12	1. 柳堀遺跡A区出土遺物	図版18
		1. 柳堀遺跡H区SD14検出状況(西から) 2. 柳堀遺跡H区SD14木製品出土状況
		図版19
		1. 柳堀遺跡H区SD15検出状況(北東から) 2. 柳堀遺跡H区SD14・15完掘状況(南から)
		図版20
		1. 柳堀遺跡H区SD15完掘状況(北東から) 2. 柳堀遺跡F・G区自然河道完掘状況

- 況(北から)
- 図版 21 1. 柳堀遺跡 G 区南壁セクション(北から)
2. 柳堀遺跡 F 区南端南北セクション(東から)
- 図版 22 1. 柳堀遺跡 F・G・H 区自然河道弥生土器出土状況
2. 柳堀遺跡 F・G・H 区自然河道弥生土器出土状況
- 図版 23 1. 柳堀遺跡 F・G・H 区自然河道木製品出土状況
2. 柳堀遺跡 F・G・H 区自然河道木製品出土状況
- 図版 24 1. 柳堀遺跡 F 区道路状遺構完掘状況(東から)
2. 柳堀遺跡 F 区道路状遺構完掘状況(東から)
- 図版 25 1. 柳堀遺跡 F 区道路状遺構断剖状況(西から)
2. 柳堀遺跡 F 区道路状遺構断剖状況(北から)
- 図版 26 1. 柳堀遺跡 F 区道路状遺構断剖状況(北から)
2. 柳堀遺跡 F 区道路状遺構石材除去後(東から)
- 図版 27 1. 柳堀遺跡 H 区 SD14 出土遺物
- 図版 28 1. 柳堀遺跡 F・G・H 区自然河道出土遺物
- 図版 29 1. 柳堀遺跡 F・G・H 区自然河道出土遺物及び F 区道路状遺構出土遺物
- 図版 30 1. 柳堀遺跡 F・G・H 区包含層出土遺物
- 図版 31 1. 柳堀遺跡 F・G・H 区包含層出土遺物
- 図版 32 1. 柳堀遺跡 F・G・H 区包含層出土遺物
- 図版 33 1. 茶臼遺跡調査区遠景(南西から)
- 図版 34 1. 茶臼遺跡 SD01 セクション
2. 茶臼遺跡 SD01 遺物出土状況(東から)
- 図版 35 1. 茶臼遺跡 SD01 完掘状況(東から)
2. 茶臼遺跡 SX01 木製品出土状況(北から)
- 図版 36 1. 茶臼遺跡 SX01 完掘状況(東から)
2. 茶臼遺跡 SR01 遺物出土状況
- 図版 37 1. 茶臼遺跡 SR01 遺物出土状況
2. 茶臼遺跡 SR01 遺物出土状況
- 図版 38 1. 茶臼遺跡完掘状況(北から)
2. 茶臼遺跡開掘状況(南から)
- 図版 39 1. 茶臼遺跡 SD01 出土遺物
2. 茶臼遺跡 SD01、SX01 出土遺物
- 図版 40 1. 茶臼遺跡 SR01 出土遺物 1
2. 茶臼遺跡 SR01 出土遺物 2
- 図版 41 1. 茶臼遺跡 SR01 出土遺物 3
- 図版 42 1. 茶臼遺跡 SR01 出土遺物 4
- 図版 43 1. 茶臼遺跡 SR01 出土遺物 5
2. 茶臼遺跡 SR01 出土遺物 6
- 図版 44 1. 茶臼遺跡 SR01 出土遺物 7
2. 茶臼遺跡 SR01 出土遺物 8
- 図版 45 1. 茶臼遺跡 SR01 出土遺物 9
2. 茶臼遺跡 SR01 出土遺物 10
- 図版 46 1. 茶臼遺跡 SR01 出土遺物 11
- 図版 47 1. 川原宮Ⅱ遺跡調査前全景(北西から)
2. 川原宮Ⅱ遺跡 A 区発掘状況(上空から国府方向)
- 図版 48 1. 川原宮Ⅱ遺跡 A 区完掘状況(空中撮影)
2. 川原宮Ⅱ遺跡 A 区南壁セクション(SK67 上、北から)
- 図版 49 1. 川原宮Ⅱ遺跡 A 区 SK108 土器出土状況
2. 川原宮Ⅱ遺跡 B 区発掘状況(上空から国府方向)
- 図版 50 1. 川原宮Ⅱ遺跡 B 区発掘状況(空

- 中撮影)
2. 川原宮Ⅱ遺跡粘土採掘坑(南西から)
- 図版 51 1. 川原宮Ⅱ遺跡 B 区粘土採掘坑と自然河道
2. 川原宮Ⅱ遺跡 SK137 土師器出土状況(東から)
- 図版 52 1. 川原宮Ⅱ遺跡 SK137 土師器出土状況(東から)
2. 川原宮Ⅱ遺跡 B 区南東隅粘土採掘坑(南東から)
- 図版 53 1. 川原宮Ⅱ遺跡 B 区南西発掘状況(北東から)
2. 川原宮Ⅱ遺跡 B 区南端発掘状況(西から)
- 図版 54 1. 川原宮Ⅱ遺跡 B 区土馬出土状況
2. 川原宮Ⅱ遺跡 B 区土馬出土状況
- 図版 55 1. 川原宮Ⅱ遺跡 B 区西壁セクション(南東から)
2. 川原宮Ⅱ遺跡 B 区断割トレンチ掘削状況(西から)
- 図版 56 1. 川原宮Ⅱ遺跡自然河道 1 出土遺物
2. 川原宮Ⅱ遺跡遺構出土遺物
- 図版 57 1. 川原宮Ⅱ遺跡遺構出土遺物
2. 川原宮Ⅱ遺跡 A 区地山直上出土遺物
- 図版 58 1. 川原宮Ⅱ遺跡 B 区 5 層及び 6 層出土遺物
- 図版 59 1. 川原宮Ⅱ遺跡 B 区 6 層出土木製品
2. 川原宮Ⅱ遺跡 A 区 3 層出土遺物
- 図版 60 1. 川原宮Ⅱ遺跡 A 区 3 層出土遺物
- 図版 61 1. 川原宮Ⅱ遺跡 A 区 3 層出土遺物
- 図版 62 1. 川原宮Ⅱ遺跡 A 区 3 層出土遺物
2. 川原宮Ⅱ遺跡 B 区 3 層出土遺物
- 図版 63 1. 川原宮Ⅱ遺跡 B 区 3 層出土遺物
2. 川原宮Ⅱ遺跡 B 区 3 層出土遺物

- 図版 64 1. 川原宮Ⅱ遺跡 B 区 3 層出土遺物
2. 川原宮Ⅱ遺跡 B 区 3 層出土遺物
- 図版 65 1. 川原宮Ⅱ遺跡 B 区 3 層出土遺物
2. 川原宮Ⅱ遺跡 B 区 3 層出土遺物
- 図版 66 1. 川原宮Ⅱ遺跡 B 区 3 層出土遺物
2. 川原宮Ⅱ遺跡 B 区 3 層出土遺物
- 図版 67 1. 川原宮Ⅱ遺跡 B 区上層出土遺物
2. 川原宮Ⅱ遺跡その他の出土遺物
3. 川原宮Ⅱ遺跡出土石器石材

第1章 調査に至る経緯

第1節 調査の経緯

一般国道432号は、広島県竹原市を起点として鳥根県松江市へ至る延長約210kmの路線であり、「しまへの新たな道づくりビジョン」において、広域幹線（県内外の都市間を連結し、県内の道路網の骨格となる一般国道）に位置づけられている。大庭バイパスは現道の松江市古志原地内から同市大草町までの区間で問題となっている慢性的な交通渋滞の解消を目的として計画された延長1.9kmの道路である。大庭地区の一部区間については、松江市の土地区画整理事業と連携して整備される計画となっている。

鳥根県教育委員会では、平成21年度に鳥根県土木部松江県土整備事務所から遺跡有無の照会を受けて平成21・22年度に土地区画整理事業地内の当該部分について試掘確認調査を実施し、柳堀遺跡を発見した。それを受けて松江県土整備事務所から平成23年4月12日付けで土木工事の通知が鳥根県教育委員会教育長に対して行われ、平成23年4月15日付けで工事着手前に発掘調査が必要な旨を回答した。これに基づき平成23・24年度に柳堀遺跡の発掘調査を実施し、平成25年度には茶臼遺跡の発掘調査と土地区画整理事業地から北側の道路用地の試掘調査を実施して、川原宮Ⅱ遺跡を発見した。平成26年度に川原宮Ⅱ遺跡の発掘調査を実施し、当該地区の発掘調査は終了した。

第2節 調査の経過

(1) 平成23年度までの調査 柳堀遺跡A～E区

柳堀遺跡は松江市大庭町に所在し、史跡山代郷正倉跡の西にある谷底平野の水田地帯に位置する。

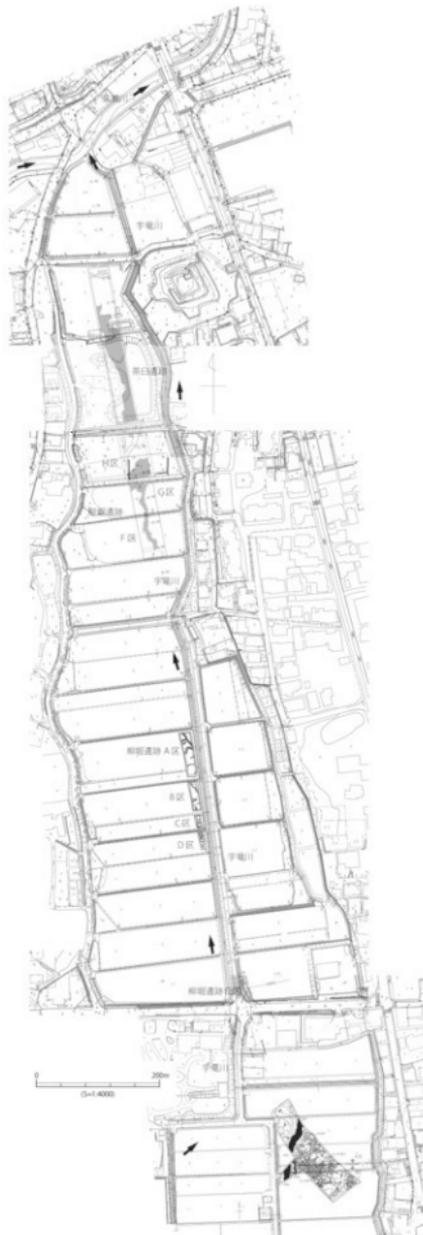
平成22年度は本調査の範囲を確定するためトレンチ調査を実施した。5m×2mのトレンチを11か所設定し、平成22年12月6日から12月16日までの期間に試掘確認調査を行い、柳堀遺跡を発見し、A区～E区の本調査範囲を確定した。

平成23年度は柳堀遺跡A～E区の本調査と並行してトレンチ調査も実施した。トレンチ調査は平成23年10月21日から11月4日まで行った。その結果、遺物包含層や遺構を検出し、柳堀遺跡については、A区～E区のほかにF・G・H区となる部分1,600m²についての本調査が必要となることがわかった。

A～E区の本調査は平成23年10月20日から12月21日まで実施した。それぞれ重複はあるが調査区C→D→B→A→Eの順に着手し、弥生時代後期や奈良・平安時代のものを含む溝状遺構5、中世の杭列2条、平安時代のものを含む性格不明土坑状遺構5な



第1図 柳堀遺跡・茶臼遺跡・川原宮Ⅱ遺跡の位置



第2図 大庭バイパス各遺跡調査区配置図

どを検出した。これらの遺構に関わる出土遺物、包含層出土遺物としては、弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、木製品などが出土した。

(2) 平成24年度の調査 柳塚遺跡F・G・H区

柳塚遺跡のうちF・G・H区は松江市大庭町の国史跡大庭鶴塚古墳の南に広がる谷底平野の水田に位置している。調査面積は1600㎡、現地調査期間は平成24年5月30日から10月26日まで実施した。調査の結果、近世以前のものと思われる集石と杭によって造成された石敷きの道路状遺構1条、溝跡2条(古墳時代後期)、自然河道2条を検出した。遺構や包含層、自然河道からは、弥生時代から近世までの土器、陶磁器、木製品、石器、瑪瑙原石などが出土している。

(3) 平成25年度の調査 茶臼遺跡

茶臼遺跡は松江市大庭町の国史跡大庭鶴塚古墳の西側に広がる水田に位置している遺跡で、調査面積は約2,000㎡、現地調査期間は6月4日から10月10日まで実施した。調査の結果、調査区全般に自然河道跡が存在していたことから、検出できた遺構は古墳時代前期の溝状遺構と性格不明の遺構のみであった。

(4) 平成26年度の調査 川原宮Ⅱ遺跡

川原宮Ⅱ遺跡は松江市大庭町の国史跡出雲国代郷正倉跡の西側に広がる水田に位置している遺跡で、調査面積は約2,500㎡、現地調査期間は6月9日から12月25日まで実施した。調査の結果、12世紀代までに営まれたと思われる約300基の粘土採掘坑と、奈良時代の8世紀前葉に埋まったと思われる北流する2条の自然河道が検出された。粘土採掘坑と自然河道流路は二三の例外を除いて切り合いはなく、混在しない。遺物は、縄文時代から近世までのものが出土しているが、奈良時代から平安時代前半の須恵器や古代末中世前半の土師器椀皿類が多く出土している。中世の輸入陶磁器(中国陶磁器)、古代瓦破片が20点、土馬が4点、青銅製経筒の蓋(つまみ)など特徴的な遺物が出土している。

第2章 柳堀遺跡の位置と環境

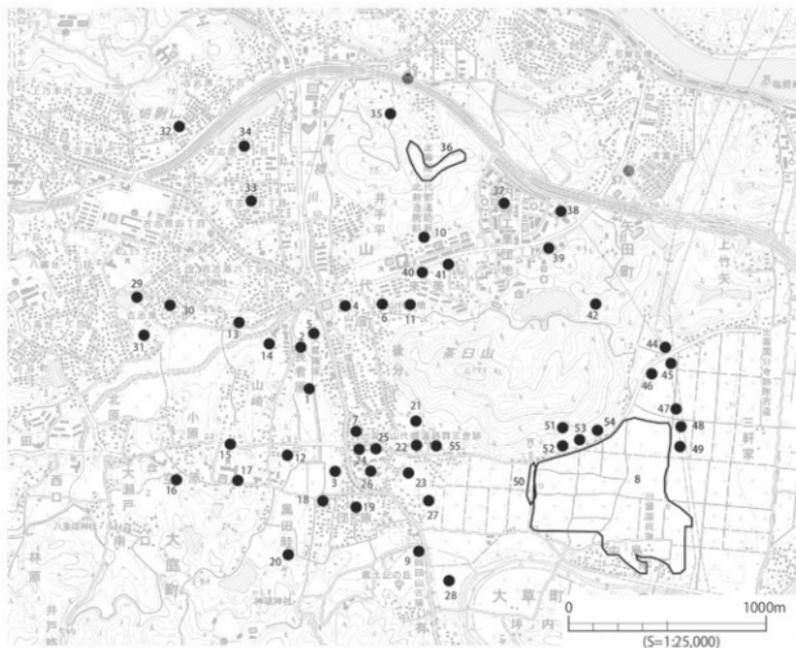
柳堀遺跡は、鳥根県松江市大庭町に所在し、意宇平野の北西端の水田に位置する。現在この地域では、宇竜川が流れており、柳堀遺跡の各調査区は、この川に沿って配置する形となった。宇竜川は北流して馬橋川に合流する。

松江市には約2,000か所の埋蔵文化財包蔵地が確認されている。

現在までに松江市内では旧石器時代の遺跡はあまり多くないが、下黒田遺跡では石器製作跡と考えられるユニットを確認した。また、山代郷北新造院跡の造成土中から玉髓製のナイフ形石器が見つかっている。

縄文時代の遺跡は、石台遺跡、上小紋遺跡、さっぺい遺跡、才塚遺跡などが知られている。

弥生時代の遺跡として、弥生時代前期から中期の溝や土坑を確認した布田遺跡がある。布田遺跡では貯木施設が見つかっており、農耕土木具の未成品も出土している。弥生時代中期までは丘陵裾



- 1柳堀遺跡 2茶臼遺跡 3川原宮II遺跡 4山代二子塚古墳 5大庭鶏塚古墳 6山代方墳 7山代郷正倉跡 8出雲国府跡 9岡田山古墳群 10山代郷北新造院跡 11永久氏宅古墳 12東淵寺古墳 13向山1号墳 14下ノ原遺跡 15大庭小学校校庭遺跡 16空原遺跡 17大庭畑田遺跡 18神魂神社参道遺跡 19黒田畦遺跡 20出雲国造館跡 21市場遺跡 22寺の前遺跡 23小無田遺跡 24下黒田遺跡 25黒田館跡 26田原遺跡 27田原古墳 28岩屋後古墳 29香ノ木池遺跡 30向山西古墳 31向山西遺跡 32古志原遺跡 33練兵場I遺跡 34練兵場II遺跡 35上谷遺跡 36南外古墳群 37来美墳墓 38寺山小田遺跡 39十王免横穴墓群 40狐谷遺跡 41狐谷横穴墓群 42畑田古墳群 43出雲国分寺跡 44間内遺跡 45大平遺跡 46才塚遺跡 47上小紋遺跡 48向小紋遺跡 49四配田遺跡 50大坪遺跡 51大谷遺跡 52真奈内遺跡 53聖岩遺跡 54大谷遺跡 55山代郷南新造院跡 56石台遺跡 57間内越墳墓群

第3図 周辺の遺跡

部に遺跡が位置することが多いが、弥生時代後期になると意宇平野の中央部に遺跡が位置するようになり、上小紋遺跡、向小紋遺跡、夫敷遺跡では水田が見つかっている。また、四隅突出型墳丘墓である米美墳墓や間内越墳墓群などが築かれる。

古墳時代には、古墳時代前期末の廻田1号墳をはじめ、古墳時代後期の首長墳と想定される山代双子塚古墳や山代方墳、造り出し付方墳である大庭鶴塚古墳、銘文をもつ大刀が出土した岡田山1号墳、石棺式石室である向山1号墳、横穴墓では狐谷横穴墓群、十王横穴墓群など多くの古墳・横穴墓が築かれる。集落遺跡では、出雲国府跡の下層において初期須恵器や筒形土製品など渡来系の要素が強い遺物が見つかっており、夫敷遺跡の初期須恵器とあわせて、古墳時代中期以降対外交流を示す遺物が急増することが、のちに古墳・横穴墓が多く作られる基盤となったことがうかがえる。

『出雲国風土記』では、意宇平野に出雲の国庁がおかれたと記されている。この出雲国府の位置を確認するために、1968（昭和43）年から発掘調査が実施された。3か年に及ぶ発掘調査の結果、大型建物跡や規則的に配置された掘立柱建物跡などの遺構や礎や木簡、墨書土器などが出土し、国庁の存在を確定することができた。さらに2001（平成11）年から再開した発掘調査により、政庁や館、後方官衙、工房などを確認し、奈良時代から鎌倉時代にいたる遺構・遺物の変遷を把握することができた。

柳堀遺跡の約250m東の段丘上には山代郷正倉跡が位置しており、規格的に配置された総柱建物群が見つかっている。また、その南には下黒田遺跡、黒田畦遺跡、黒田館跡が位置しており、意宇平野の西端は官衙関連遺跡が集中する場所となっている。寺院には山代郷北新造院（米美庵寺）や山代郷南新造院（四王寺跡）があり、古代出雲の一大拠点であったことがうかがえる。

鎌倉・室町時代には、黒田館跡では、掘立柱建物跡と井戸、溝などの遺構や白磁、青磁、粉青沙器などの輸入陶磁器が出土している。また、出雲国造館跡からも貿易陶磁器が出土している。さらに、黒田畦遺跡では約100枚の古銭が出土した16世紀代の木棺墓が見つかっている。また、茶臼山城は中世の山城と考えられている。

【参考文献】

- 『出雲国庁発掘調査概報』、松江市教育委員会編、1970年
- 『史跡出雲山代郷正倉跡』、島根県教育委員会編、1981年
- 『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書13 米美庵寺』、島根県教育委員会編、2002年
- 『史跡出雲国府跡1』、島根県教育委員会編、2003年
- 『史跡出雲国府跡2』、島根県教育委員会編、2004年
- 『史跡出雲国府跡3』、島根県教育委員会編、2005年
- 『史跡出雲国府跡4』、島根県教育委員会編、2006年
- 『山代郷北新造院』、島根県教育委員会編、2007年
- 『史跡出雲国府跡5』、島根県教育委員会編、2008年
- 『史跡出雲国府跡6』、島根県教育委員会編、2009年
- 『史跡出雲国府跡7』、島根県教育委員会編、2011年

第3章 柳堀遺跡

第1節 トレンチ調査

大庭バイパス建設予定地のうち、本発掘調査の範囲を確定するため、トレンチ調査を実施した。

平成22年度は、5m×2mのトレンチを11か所設定して、平成22年12月6日から12月16日まで実施した。

基本層序は、上から表土、灰色粘質土、(黒色粘質土)、(黄褐色粘質土)、緑灰色砂質土(地山)であり、地山までの深さは1～1.5mである。表土の標高は、北が低く南が約2.5m高い。最下部で確認される、地山である砂質土層の高さはT1で標高12.6m前後、T11で約15mである。

遺物が出土したトレンチはT2、T3、T6、T9、T11、遺構の可能性のある落ち込みを確認したトレンチはT1、T5、T7、T8、T11である。特にT5の5層と6層の関係、T7の5層、T9の7～9層が顕著である。また、T1、T3、T5、T7、T9、T11では標高13～14mに黒色や暗灰色の粘質土を確認した。T11の黒色粘質土層からは中世の須臾器が出土していることから、この段階では古代から中世の水田層の存在を想定していた。なお、冬季の調査で排水を十分に行えなかったことから、遺物の出土層位を確認することが難しかった。

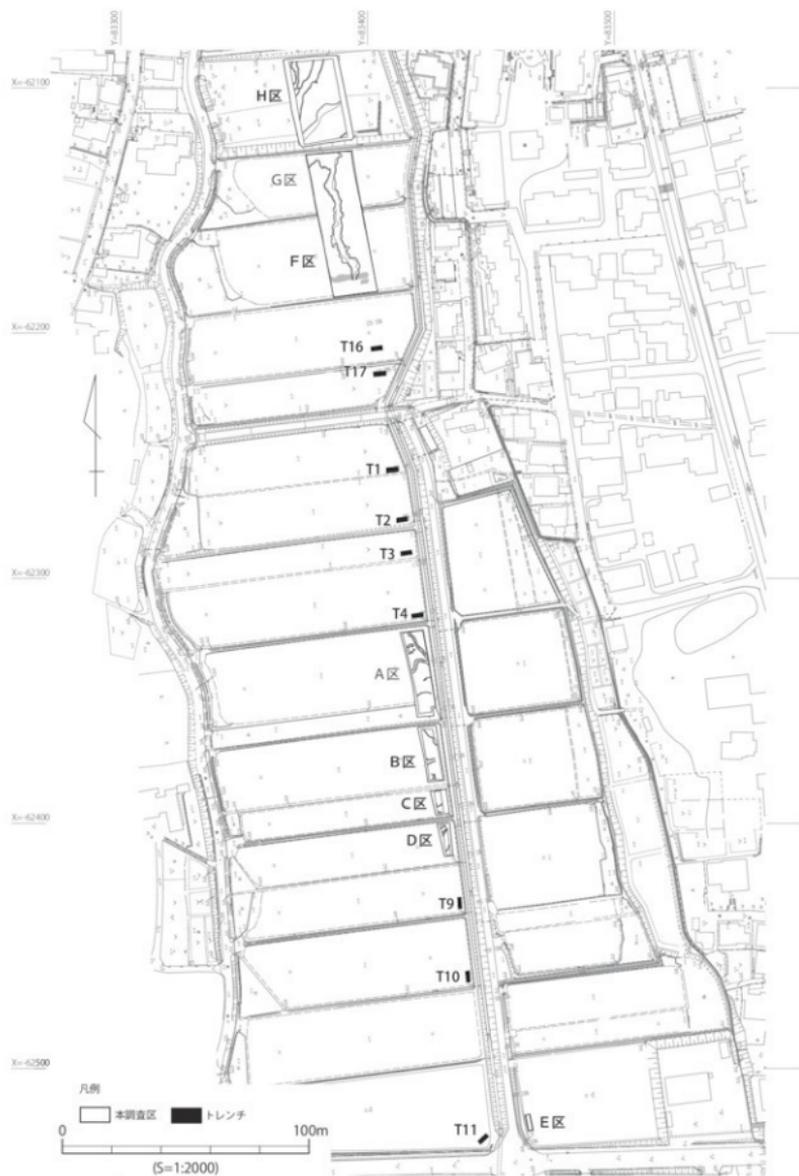
トレンチ調査では、古代から中世の水田層の可能性のある黒色系の粘質土が存在し、さらに遺構の可能性のある落ち込みを複数のトレンチで確認した。このことから、堆積が連続しており、落ち込みが認められるT5以南の1,950mlを埋蔵文化財包蔵地として判断し、字名から「柳堀遺跡」と呼称することにした。

平成23年度のトレンチ調査は、柳堀遺跡の発掘調査と並行して、平成23年10月21日から実施した。トレンチを設定した場所は、平成22年度にトレンチを設定した位置よりも北側を対象に、5m×2mのトレンチを7箇所設定した。T12、13を設定した北側とT14～18を設定した南側に分かれる。

T12、T13は表土下約50cmで地山である砂礫混じりの層に至る。T12では東西方向に溝状の落ち込みを確認し、2、3層から土器が出土したので、北側へトレンチを拡張した。拡張した部分の北側にも落ち込み状の土色の違いを確認した。耕作土・盛土の厚さが20cm、包含層である2層の厚さが20～30cmと平成22年度のトレンチ調査における耕作土・盛土の厚さと比べて薄く、後世の耕作などにより削平を受けたと判断した。

T14、T15は表土下50～60cmで地山である淡黄色砂礫層に至るが、T16、T17は30～40cmとやや浅く、耕作土や盛土などによりT16では包含層が削られており、T17では包含層が認められなかった。なお、T16では地山に貼り付くように土器が出土した。T14とT15では粘質の黄灰色土から土器が出土した。なお、この黄灰色土上面で遺構を確認することはできなかった。T18は盛土を約2m除去し、標高11.6m付近で旧表土を確認した。粘質の土を掘り下げ、標高11m付近で溝状の落ち込みを確認した。落ち込みの幅約9m、深さ約30cmであり、南北方向にのびると考えられる。上位に堆積した褐色土は砂を含み、流水があったことを示唆する。その下位の黒褐色土からは木製品が出土した。

包含層の有無やその厚さから、T14、T15、T18の位置する部分約1,600mlを翌年度の発掘調査

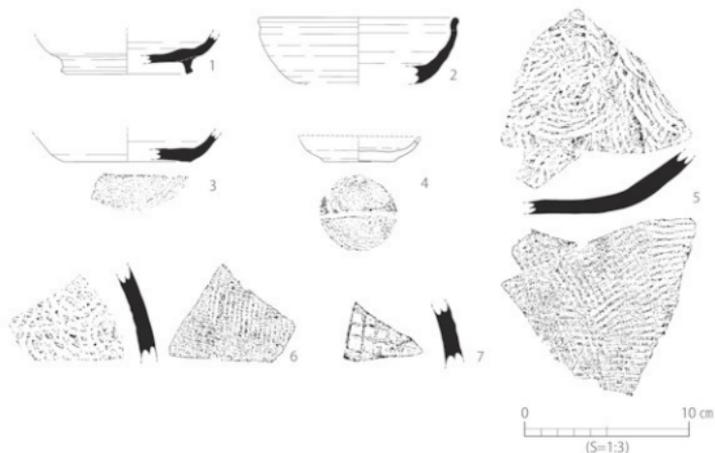


第4図 柳堀遺跡調査区配置図

範囲と判断した。T15 から T18 の位置する北へ向けて標高が下がっていると考えられる。

トレンチ調査出土遺物 (第5図)

第5図はトレンチ調査で出土した遺物である。出土遺物は細片が多く、図示できるものは少なかった。7はT11から出土した中世の須恵器である。外面の格子目タタキは6mm角とやや大きい。焼成は軟質である。2はT15の3層中から出土した須恵器の坏である。1～6はT16から出土した。2と4は地山である5層に貼り付くように出土した。2の口縁は内面へわずかに肥厚し、口縁部の下は凹む。坏IA5類と考えられる。3は須恵器の坏の底部である。底部は回転糸切りである。1は須恵器の壺の底部である。高台の断面はコ字状である。5、6は須恵器の甕である。6は底部付近と考えられる。4は中世土師器である。27-2はT18の5層から出土した木製品である。分類群と器種は農耕土木具の一木平鋤である。身の1/4弱しか遺存していないが、身の上部を厚く作り、中央には柄から続く高い稜が残る。断面は水平ではなく、わずかに上方へ反る。加工痕は見えない。身の上が四角形で厚く作ることから、古墳時代中期以降の一木平鋤の可能性ある(鳥根県古代文化センターほか編2006)。



第5図 柳堀遺跡トレンチ調査出土遺物実測図

第2節 調査の方法

柳堀遺跡の本発掘調査範囲は、平成22年度のトレンチ調査の結果に基づき、T5からT11までの範囲とした。しかし、道路として使用している部分があることから、T5からT8までの部分とT11の東側の部分に調査区を設定した。調査に際しては畔の部分の下に排水用の水路が伸びており、畔を無くしてしまうと調査区の排水に困難が予想されたため、畔を残して調査区を設定した。また、調査区内にも水路が伸びており、水路部分を残した調査区もある。耕作土を機械により掘削し、その後人力による掘削を行った。

調査区の名称は北からAからEまで設定したが、発掘調査はD区から開始し、順次北へ移動して行い、A区とE区を最後に調査した。電気工事の都合により、C区やD区ではポンプを使う時間が限られ、排水が不十分なまま調査せざるを得ない時期があり、不十分な記録しかとれない部分があった。細長い調査区や狭い調査区があることから、グリッドは設定せず、遺構に伴わない遺物は層位を確認して取り上げた。出土遺物はコンテナ7箱である。

第3節 A区の調査

A区は平成23年度に調査した範囲で最も北に位置する調査区である。T5部分に設定した。長さ約35m、幅約8mの細長い調査区である。調査面積は約250m²である。遺構は溝3条(SD10,13,14)、性格不明遺構1(SX08)、杭5本、ピットである。

(1) 層位

1層(耕作土・盛土)は他の調査区ではもっと厚いが、A区では約40cmの厚さであった。2層は約20cmの厚さで、削ると硬く引っかかる感があった。3層は粘性が高く、小さな鉱物の有無でa、bに細分した。上位には小さな鉱物が少なく、下位に鉱物が多い。両者とも認められる場所と3b層のみ認められる場所があり、調査区の北東側は両者があったが、南側や西側では3b層のみが認められた。3b層の下にすぐ12層(地山)がある部分と、調査区の東側には5層(粘質)や6層(細砂)がそれぞれ約10cmの厚さで堆積している部分がある。また、3b層と12層の間には凹凸が認められる部分があり、3b層からの踏み込みなどによる可能性がある。遺物は3b層から出土した。12層は粘土のような黄褐色土であり、粘り気が強く、雨の後は滑りやすい特徴を示した。調査区の南側は性格不明遺構(SX08)が位置していたため12層を確認できなかった。12層上面の標高は13.5mで、ほぼ平坦である。

なお、A区東壁は軟X線分析、花粉分析を行っており、その結果は第6章に記した。1層、2層が耕作土の可能性が強いこと、3層は耕作土の可能性があるが、1、2層より根拠は低いこと、SX08の堆積環境は3b層の堆積環境と大きく異なることなどが指摘されている。

(2) 遺構

SD10(第8図)

調査区の北側で検出した。北西-南東方向(N25°W)であり、調査区外へのびる。屈曲しながら伸びており、現状で長さ約13m、幅約0.8~1.1m、深さ最大0.6mである。断面は逆台形の部分や深いU字形的の部分があり、調査区の東壁などオーバーハングしている部分もあった。遺構の底面は凹凸があり、北が高く南へ向かって低くなっている。埋土は粘質である。1層は砂が混じ



第6図 柳堀遺跡A区平面実測図

り、砂の混じる量で細分した。1、2層に比べ3層はやや青灰色がかっており、堆積状況が異なる可能性がある。また、遺構の北側のセクション(A-A')では3層の中に砂質の4層があり、流水の存在を示唆する。北壁では埋土の分層ができなかったが、調査区東では1～3層に相当する部分の両側にe層が、下位にf層が堆積している。なお、1層は2層を切るように溝の一部に堆積していることから、溝の再掘削が行われた可能性がある。

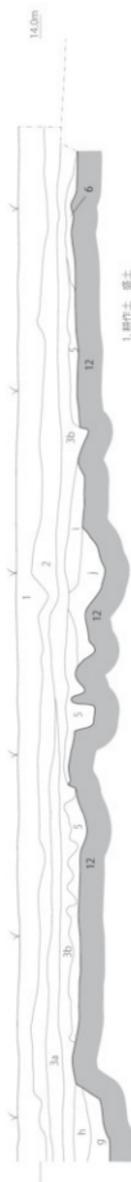
SD10の上面から16-1が、1層から16-2、3が出土した。その他の遺物は確認できなかった。これらの土器から、SD10の時期は弥生時代後期と考えられる。

SD13 (第9図)

調査区の中央やや北側に位置する。調査区の中程で大きく屈曲し、北へ向かって凸の形をとる。調査区外へのびるが、北東—南西へのびると考えられる。遺構の東側では明瞭に検出できたが、遺構の西側は断面では確認できるものの、平面では確認が難しい部分があった。埋土は粘質が強く、暗オリーブ色やオリーブ黒色であった。

SD13の東端、溝の上面で16-4が出土した。この土器から、SD13の時期は奈良時代～平安時代と考えられる。

東壁



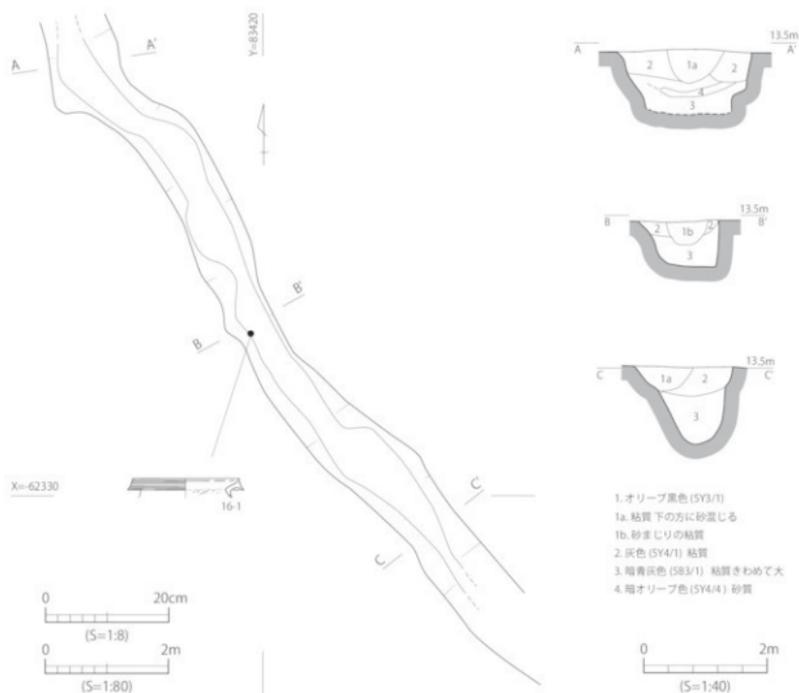
1. 耕作土、盛り
2. 褐色黄色 (23575/2) 砂混じり層 薄い
- 3a. 褐色色 (10785/1) 粘質 粘物少ない
- 3b. 褐色色 (10785/1) 粘質 粘物多い
4. 灰黄褐色 (10786/2) 粘質大
5. 灰オリーブ色 (5162/1) 粘質 粘質なし
6. オリーブ褐色 (5162/2) 粘質 粘質なし
7. 灰黄褐色 (10784/2) 粘質
8. にぶい黄褐色 (10796/4) 粘質
9. にぶい黄褐色 (10795/4) 砂質
10. にぶい黄褐色 (10787/2) 砂質 断面ほど粘りが大きい
11. 灰色 (10762/1) 砂質大
12. 黄褐色 (10787/8) 粘土山 > 粘質大
13. 黄褐色 (10787/6) 粘質 断面が砂
14. 黄褐色 (23574/1) 砂質
- a. 黄褐色 (23575/1) 粘質大
- b. オリーブ褐色 (5147) 砂混じりの粘質
- c. 灰色 (5147) 粘質 わずかに砂混じり
- d. 暗黄褐色 (5181/1) きわめて粘質
- e. 灰黄褐色 (10785/2) 粘質
- f. 黄褐色 (5192/1) きわめて粘質
- g. 暗黄褐色 (5184/1)
- h. 黄褐色 (582/1)
- i. 黄褐色 (5956/1)
- j. 黄褐色 (5984/1)

3aと12(粘土山)の間は凸凹している。上からのかく乱が

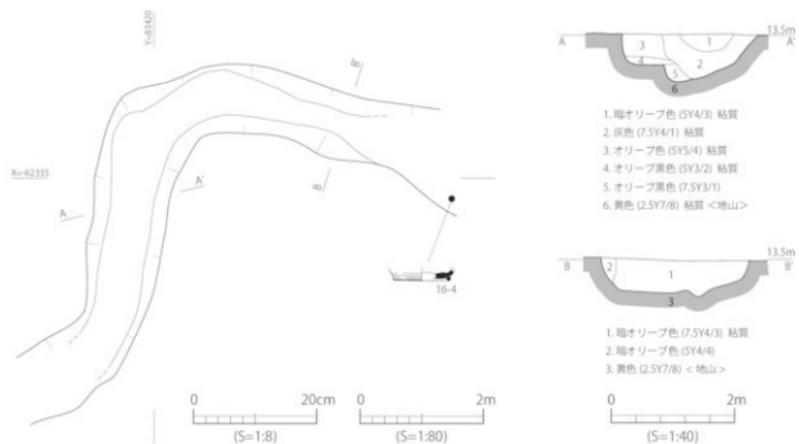
北壁



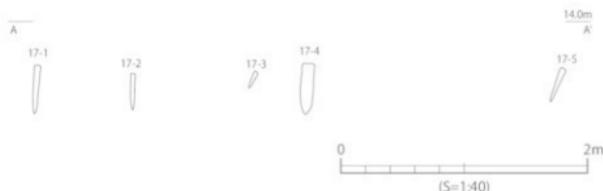
第7図 柳堀遺跡 A 区東壁北壁セクション図



第8図 柳堀遺跡A区SD10 実測図



第9図 柳堀遺跡A区SD13 実測図



第10図 柳堀遺跡 A区杭列実測図

SD14

調査区の中央やや南側に位置する。調査区東壁で色の違いを確認し、それが調査区内へびること確認できたが、平面で検出することが難しく、部分的にしか検出できなかった。長さ3m、東壁では幅約30cm程度あるが、東へのびるに従って細くなるようである。

遺物が出土しなかったため、時期は不明である。

SX08 (第6, 11図)

調査区の南側に位置し、南側のB区にまで及ぶ。遺構の端は不明瞭で、明確な肩部は確認できなかった。B区におけるSX08の遺構の肩部は明瞭であり、大きく異なる。遺構の規模は現状で長軸20m、短軸13mであり、調査区の東へ続く。遺構の掘削では標高13m付近で人頭大の礫を確認したことに加え、湧水で足場が悪いことから掘削を止めたが、礫が隙間無くあったことから、遺構の底面付近まで掘削したと判断した。

A区他の部分では3b層の下に地山である12層を確認することができたが、SX08では3b層の下に7層や8層といった粘質の層が、さらにその下には9層や10層といった砂質の堆積しており、調査区の南側ほど砂粒が大きい傾向を示した。SX08の北側では黒色の11層があり、湧水と足場の悪さで調査に困難な側面があった。

遺物は須恵器の甕がA区の部分から1点出土したのみで、流木なども出土しなかった。3b層の下位に位置していることから、奈良・平安時代から鎌倉・室町時代までという時期しかわからない。杭(第10図)

調査区の中央やや南側、SD14の南側で杭を5本検出した。杭1と杭5はやや南へ傾いていたが、他はほぼ垂直であり、流水などによる傾きは確認できなかった。杭の頂部の標高は13.6m前後で、列状に並んでいる。

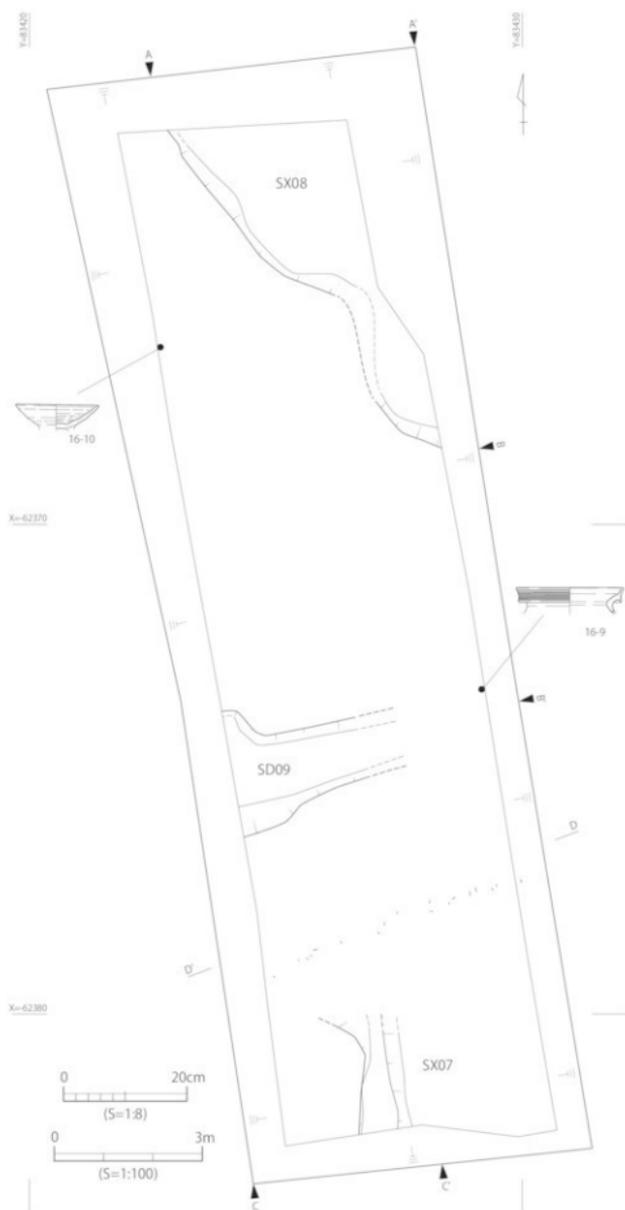
杭の時期は、鎌倉・室町時代の可能性がある。

第4節 B区の調査

B区はA区の南、T6部分に設定した。長さ約23m、幅約7m、調査面積約160㎡である。遺構は溝1条(SD09)、性格不明遺構2(SX07.08)、杭列である。調査区内の南北や東西に暗渠が伸びており、その部分から湧水があるため、調査時には暗渠を残して調査を行い、調査の最後に暗渠部分を撤去したので、遺構のつながりなどを把握できなかった部分がある。

層位(第12図)

調査区の北西部分は耕作土や盛土である1層が表土下約90cmまで及ぶ部分があったが、平均して約40cmの厚さがあった。東壁では、2層、3層は砂質だが硬質であった。その下には黒っぽ



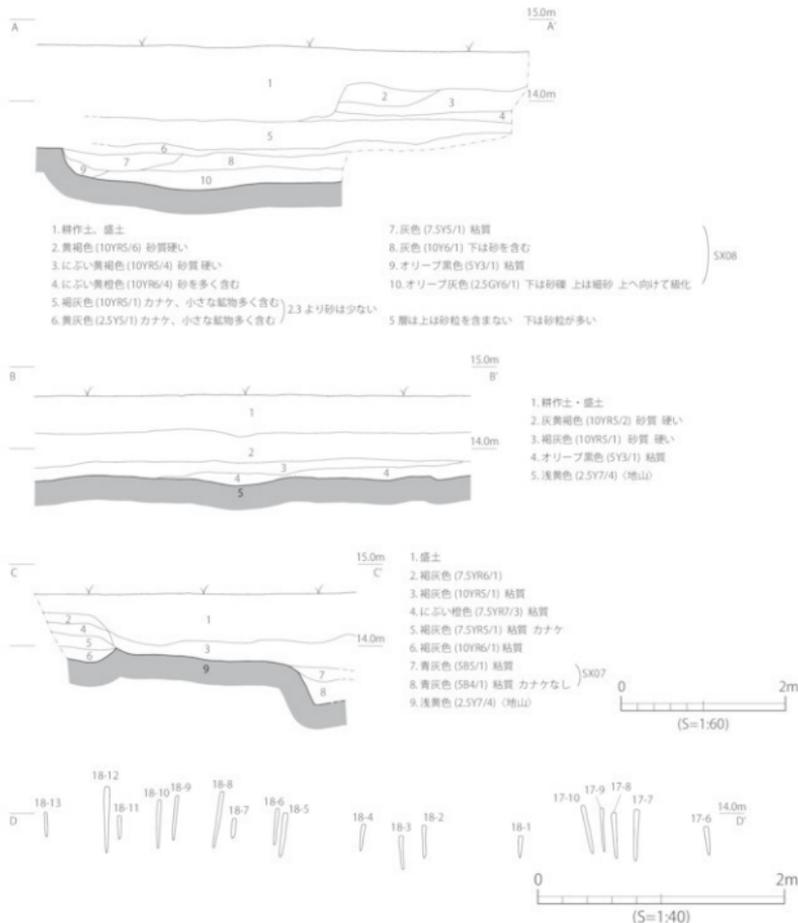
第11图 柳堤遺跡B区平面実測図

い粘質の4層が薄く堆積していた。地山である5層は粘り気が強く、雨の後は滑りやすい特徴を示した。また、地山上面は小さな凹凸があり、平坦ではなかった。北壁では、褐灰色土層(5層)が約40cm、黄灰色土層(6層)が約10cmの厚さで堆積していた。ともに小さな鉱物を含む。

地山上面の標高は13.5m～14.0mであり、北側ほど高く、南側はやや低かった。

SX08 (第11図)

A区から続く性格不明遺構である。B区の調査区内では北東隅に位置する。遺構の北側部分とは異なり、地山とは明瞭に色調が異なり、検出は容易であった。B区北壁の7～10層がSX08の埋土である。10層の下はA区同様、10層の下位の標高約13m付近で人頭大の礫を隙間無く確認し



第12図 柳堀遺跡B区セクション・杭列実測図

たことから、遺構の底面付近まで掘削したと判断した。7～9層はやや粘質であった。10層の上位は細砂、下位は砂礫であり、上方へ向けて級化していた。このことから、10層の堆積時には流水があったことを示しているが、A区SX08の花粉分析の結果では、SX08付近が湿原や湿地であったことを示しており、異なる結果を示している。この要因として、花粉分析を行った地点から南へ向かうほど砂質が強い傾向があり、湿原や湿地の地点と流水がある地点が近接していたという、堆積環境が異なっていることに因るのかもしれない。

B区 SX08 から遺物は出土しなかった。A区から出土した土器から、奈良・平安時代以降、鎌倉・室町時代以前と考えられる。なお、調査区の北東隅では8層または10層から流木が確認された。SX07 (第11図)

調査区の南端に位置する。調査時は北側と東側を暗渠で囲まれていたため、全体の規模は不明である。遺構を標高約13.3mまで下げたところ、人頭大の礫が確認でき、埋土の色が変わったことから、遺構の底面まで完掘したと判断した。調査区の南東隅でも同程度の深さまで掘削し、埋土の様子が似ていたことから、調査区の南東側へ広がると考えられる。北側は後述する杭列部分には及んでいなかったことから、南北の寸法は3m前後と考えられる。埋土は青灰色で粘質であった。

遺構内から遺物が出土しなかったため、時期は不明である。

SD09

調査区の中央やや南側に位置する。東西へのびる溝状の遺構である。西壁付近では遺構の深さ約20cmであったが、東側ほど遺構の肩部が不明瞭になり、暗渠部分から東は浅い窪みになっていた。土層を記録する前に畔が崩れてしまったので、土層図を記録することができなかった。遺構内から遺物が出土しなかったため、時期は不明である。

杭列 (第12図)

調査区の南側で18本確認した。暗渠部分を最後に調査した段階で確認した。北東-南西方向、おおむねN65°Wの方向に伸びている。A区の杭列とは異なり、杭の頂部の標高は約13.8～14.0mと若干差がみられる。調査区の中央は低く、調査区の東側や西側ではやや高い。杭は垂直のものは少なく、頂部を南側に向けやや傾いて確認した。杭同士の間隔は不均一であるが、杭の頂部の標高に若干の差があることから考えると、一時に打ち込まれたものではない可能性がある。

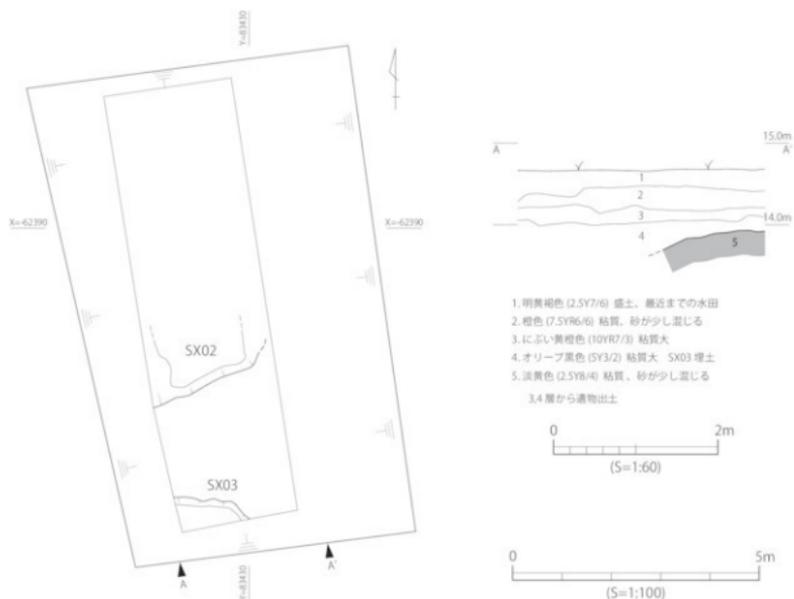
杭の時期は、杭の打ち込まれた層位は、一部頂部が2層にまで至るものがあることから、鎌倉・室町時代と考えられる。

第5節 C区の調査

C区はB区とD区の間、T7部分に設定した。長さ約10m、幅約6m、調査面積約60㎡である。遺構は性格不明遺構2である(SX02.03)。暗渠が調査区の中央を東西にのび、調査区の東壁部分にも暗渠が伸びていたことから、下端で十分な面積を確保することができなかった。また、電気工事の都合で、夜間の排水を行えなかったことから、排水を十分に行うことができなかった。

層位 (第13図)

1層は耕作土・盛土で約20～30cmの厚さで堆積している。2層は砂が混じる粘質土であるが、3層はより粘質であり、深くなるにしたがって粘質が増す。3層から遺物が出土した。4層はSX03の埋土であり、粘質が大きい。5層は地山で、粘質ではあるが若干砂が混じる。



第13図 柳堀遺跡C区実測図

SX02

調査区の中央に位置する。暗渠の部分が調査できなかったので、全体の形は不明である。調査区の北側では確認できなかったことから、調査区の東西へのびると考えられる。遺構の深さ約30cmである。暗渠からの湧水で土層を記録することができなかった。

遺物が出土しなかったため、時期は不明である。

SX03

調査区の南端に位置する。調査区の南東へ続くことから、遺構の北東端を検出したことになる。埋土はオリブ黒色で、30cm以上堆積していたが、調査区の南壁の傾斜の関係で遺構の底面まで掘削することができなかった。

遺物が出土しなかったため、時期は不明である。

第6節 D区の調査

C区の南側、T8部分に設定した。長さ約13m、幅約5m、調査面積約60㎡である。遺構は溝1条(SD04)、性格不明遺構1(SX05)である。暗渠が調査区の中央を東西に伸びている。耕作土・盛土の下から平安時代の須恵器が出土した(16-18)。

SD04 (第14図)

調査区の北側に位置する。北東—南西方向にのびる。幅約1.5～2.3m、深さ約80cm、断面逆

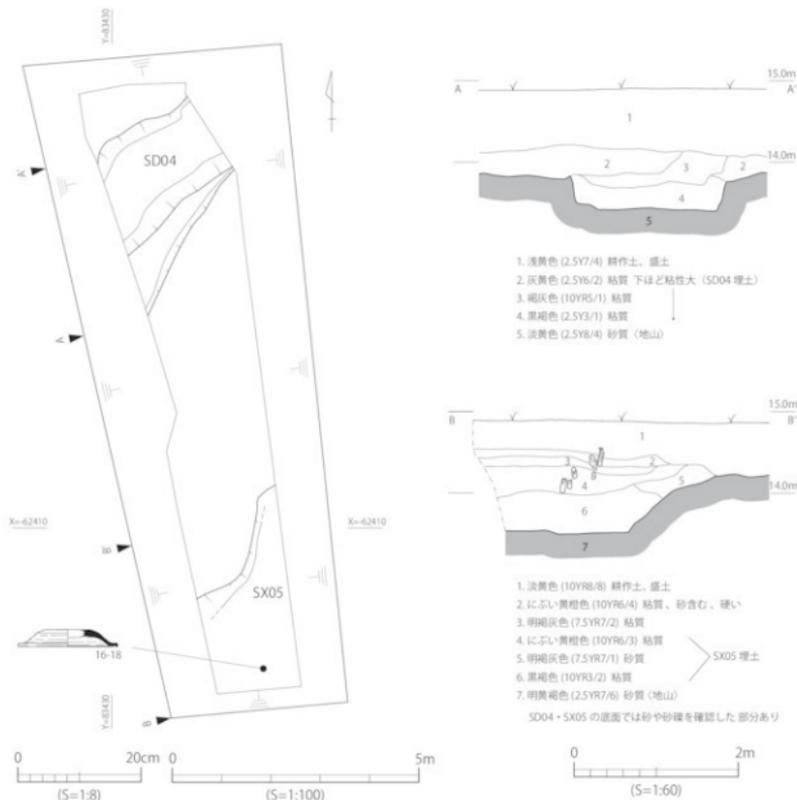
台形の溝である。南東側は二段になっている。表土下約70cmまでは1層の耕作土・盛土であり、1層を除去するとすぐにSD04を検出することができた。埋土は3層に分かれ、下ほど粘質が強い。3層の堆積に不連続な部分がある。溝の底面は粘り気が強く、湧水もあることから調査に困難をきたした。

遺物が出土しなかったため、時期は不明である。

SX05 (第14図)

調査区の南側に位置する。北東-南西方向にのび、調査区外へと続く。調査中に南壁が崩れるおそれがあったため遺構の幅を確かめることができなかったが、下端で3m以上になると考えられる。断面は逆台形である。西壁面には3~4層に属すると考えられる杭を確認した。また、6層には大きな流木を確認した。

遺物は4層から平安時代の須恵器が出土していることから、遺構の埋没時期は平安時代と考えられる。また、下駄と考えられる木製品も出土した(16-19)。

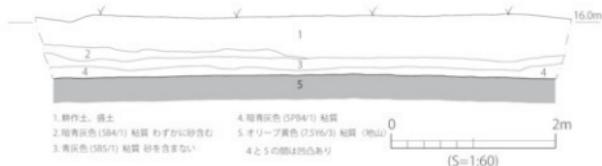


第14図 柳堀遺跡D区実測図

第7節 E区の調査

調査地の最も南側、D区の南約120mの道路沿いに設定した。長さ約7m、幅約2m、調査面積約14㎡の細長く狭い調査区である。調査区の西側には南北に暗渠がのびていた。A～D区に比べて標高がやや高い。層位は、耕作土・盛土は表土の下約50cmの厚さであった。わずかに砂を含む暗青灰色土が調査区の北半分に薄く堆積していた。表土下約70cmの標高15.4m付近に、遺物包含層である暗青灰色土が約10cmの厚さで堆積していた。遺構は確認できなかった。

包含層出土土器は、図示した中世土師器(16-20)のほか、須恵器の甕胴部片があることから、包含層の時期は奈良・平安時代から鎌倉・室町時代と考えられる。



第15図 柳堀遺跡E区セクション図

第8節 出土遺物

第16図1～8はA区出土の遺物である。

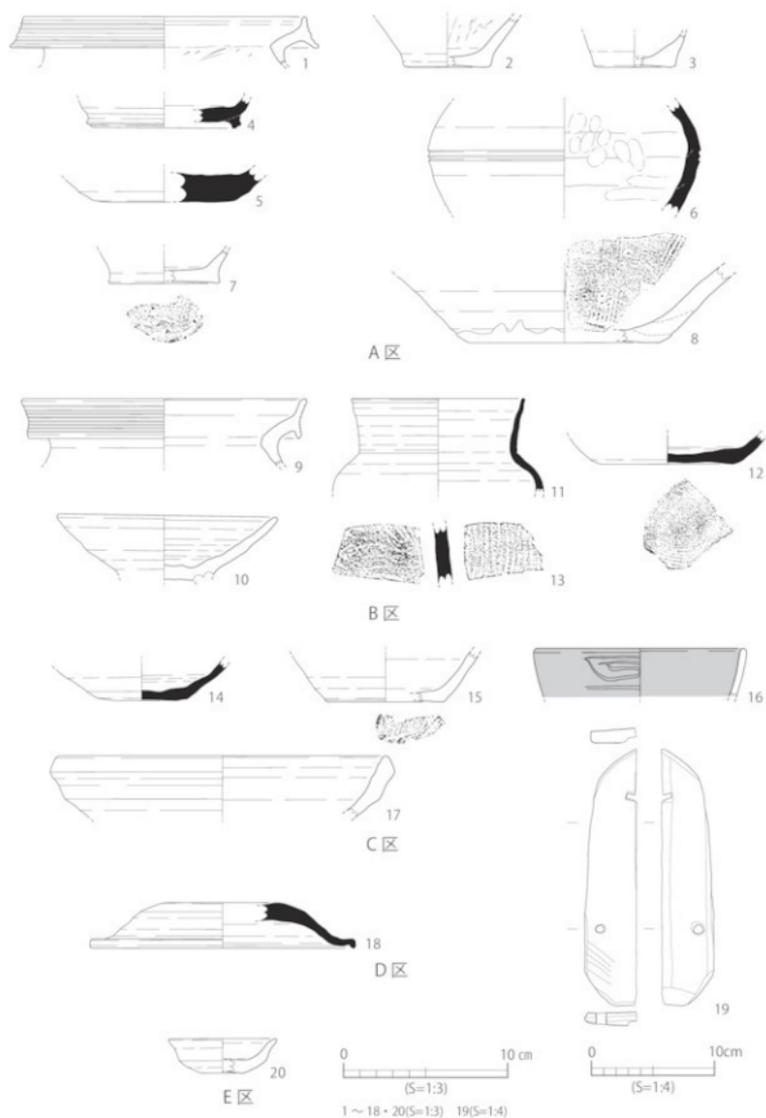
1～3はSD10から出土した弥生土器である。いずれも磨滅が著しい。1は甕である。口縁部を斜め方向の上下に拡張し、5条の凹線文がある。頸部内面は明瞭な稜がある。口縁部を上下に拡張する特徴から、内傾4類(鳥根県教育委員会編2012)に相当し、V-1様式(松本1992)と考えられる。2,3は甕の底部である。ともに平底である。4～6は須恵器の壺である。4は高台がつく。5は丸底である。6は胴部に2条の沈線がある。7は中世土師器の坏の底部である。8は播鉢の底部である。内面には6本一単位の播目があり、よく使いこまれていて平滑である。

第16図9～13はB区出土の遺物である。

13はSX08から出土した須恵器の甕である。内面は当て具痕をナデ消している。9は弥生土器の甕である。口縁部が直立して上方へ大きくのび、下方へもわずかに伸びる。8条の櫛形直線文がある。直立3類に相当し、V-3様式と考えられる。11は須恵器の壺である。口縁がのび、薄く作られている。12は須恵器の無高台坏で、底部に回転条切りが残る。10は土師器の坏である。10は器形がわかるもので、高台がつく。口縁部は直線的にのびる。

第16図14～17はC区出土の遺物である。14は須恵器の坏身である。底部は回転ヘラケズリである。15は土師器の坏である。17は土器の鉢と考えられる。口縁端部は拡張しない。16は青磁の碗である。口縁に雷文帯があることから、雷文帯碗C2類と考えられ、15世紀中頃～後半と考えられる。

第16図18はD区SX05の4層出土の須恵器である。口縁部を折り返し、下へ短くのびる。蓋の内面は平滑な部分があり、転用された可能性がある。焼成はやや軟質であり、口縁部の特徴とあわせて蓋IID2a類と考えられる。



第16图 柳堀遺跡本調査区出土遺物実測図

20はE区出土の土師器の皿である。

19はD区SX05出土の木製品である。板の角の部分加工して多角形に仕上げている。長方形と円形の孔があり、服飾具の連筒下駄と考えられる。木取りは板目である。

第17、18図は杭である。

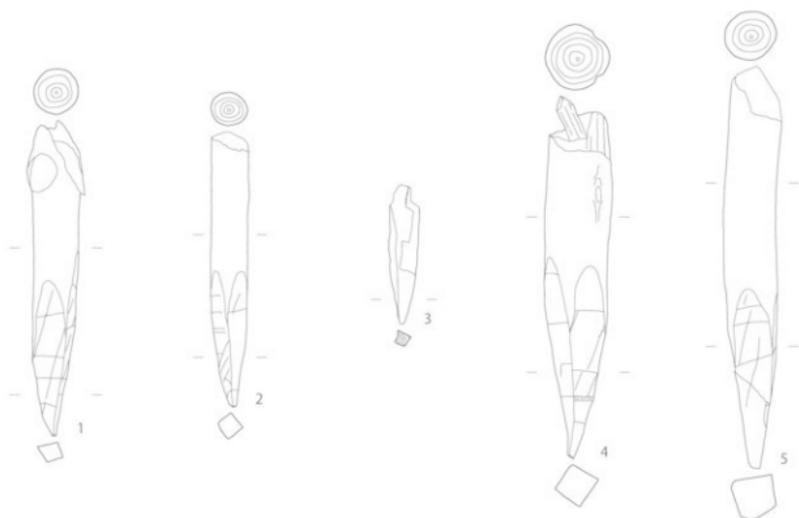
杭17-1～5はA区、杭17-6～10、杭18-1～13はB区から出土した。

杭は長さ30～40cm、直径4～6cmの材の枝を落として、中ほどから先端に向け四方から先を尖らせて削るものがほとんどである。そのため杭の先端部分の断面は菱形など四角形になる。年輪数は10～20が多いが、10未満のものがある一方、25を超えるものもある。節があるものもあり、直径10cm以下の小径木や枝を利用して杭にしたことがうかがえる。木取りは芯持材がほとんどである。遺存状況は良好なものが多く、針葉樹を利用しているものが多いが、広葉樹も1/3程度みられる。

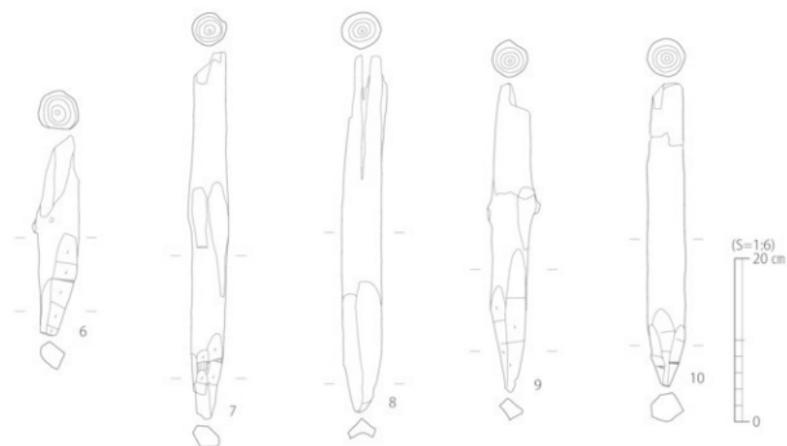
杭17-1、4、5は削る方向と杭の長軸とが異なっている。杭17-3は半分以上を欠損し、遺存状況も悪いが、広葉樹を用いている。

杭17-7、8は先端の加工の長さがそろっていない。また、節を削って太さを均一にしている。杭17-9は広葉樹と考えられ、木目は不鮮明である。三方から加工する。杭17-10、18-1は年輪数が5または6と少ない。杭18-2は二方向から削って節を落としている。他の杭と違い、先端を尖らせて削っていない。杭18-4は先端のみ遺存している。加工痕は不明瞭である。杭18-6の末端約10cmは表面が荒れており、地表に出ていることをうかがわせる。杭18-8は屈曲している。加工部分の長さは短い、六方向から削っている。杭18-9は先端以外は遺存状況が悪い。杭18-10は樹皮が残る。加工部分の長さは短く、五方向から削る。杭18-12は1/4に分割した材の先端を四方向から加工する。杭18-13も分割材であり、遺存状況は悪いが、四方向から削っている。杭18-12、13は広葉樹と考えられる。

A区出土

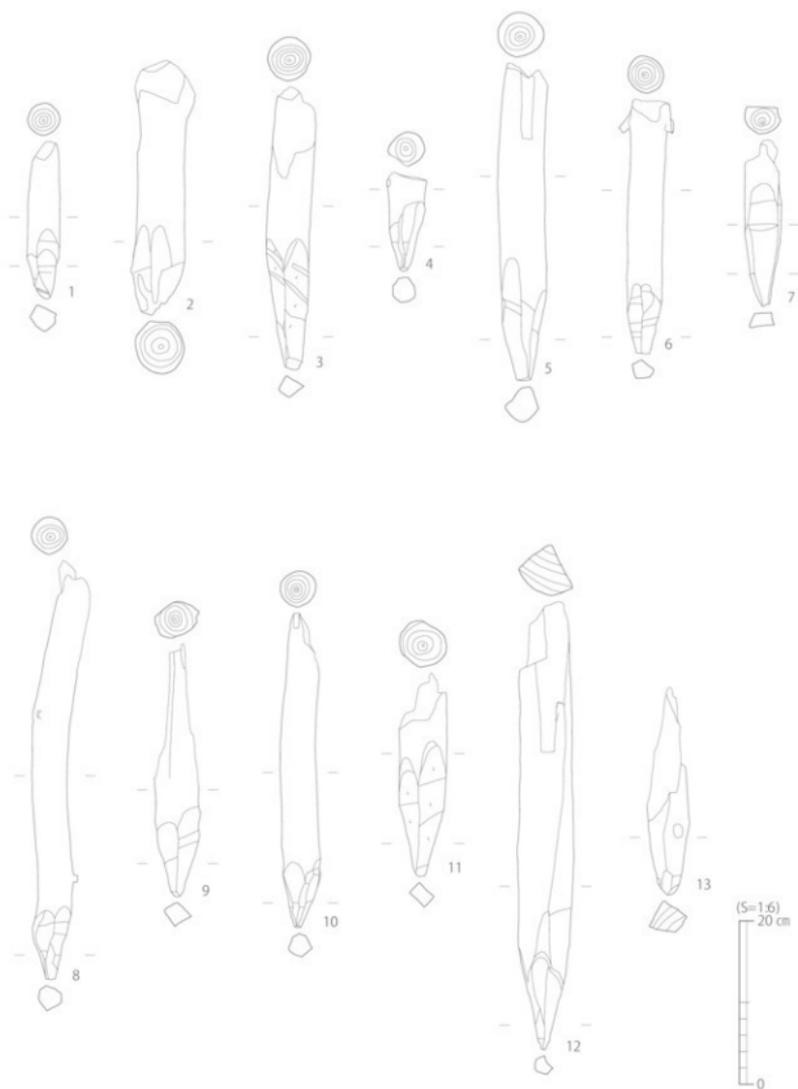


B区出土



第17图 柳堀遺跡A・B区出土杭突測図1

B区出土



第18图 柳堀遺跡A・B区出土杭実測図2

第9節 F・G・H区の調査

(1) 調査の経過

柳堀遺跡F・G・H区の現地調査は、平成24年5月30日から10月26日まで行った。この三区画の調査区は、平成23年度に実施した柳堀遺跡A区～E区に比べて北に位置しており、本報告書第4章で記述する茶臼遺跡に隣接する(第2図)。今年度の調査面積は1600㎡であった。A区～E区と併せて本調査2,000㎡となる。

平成24年5月30日からF区及びG区の重機による表土掘削を開始し、6月5日までに終了した。F・G区とH区の間には自然発生的な水路があり、H区の表土掘削の着手は6月11日からとなり、同月28日までを費やした。これは、排土処理位置がF・G区に比べて遠隔地になったためである。

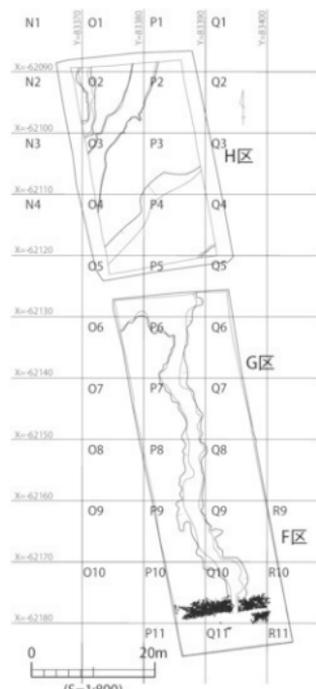
6月5日からF区の人力による包含層掘削を開始し、順次G区に移行した。この間、遺構や土層セクションの実測、遺物出土状況の実測、測量、写真撮影等の記録作業を行いながら、8月22日にはF・G区の自然河道流路の河床(現地表の1.4m下)まで到達した。翌、8月23日には、表土掘削をすでに終えていたH区に移行して人力による遺物包含層及び自然河道流路の覆土を掘削した。また、SD14及びSD15の溝状遺構の検出、遺構掘削も並行して行った。遺構や土層セクションの実測、遺物出土状況の実測、測量、写真撮影等の記録作業を行いながら、10月4日作業員による包含層掘削、遺構掘削の作業を終了した。10月11日には、空中写真撮影を行った。その後、必要な遺構や土層の実測、地形測量をして10月26日に終了した。この間、10月10日に、元島根県教育次長勝部昭氏(島根県文化財保護審議会委員)から遺跡全般について、中村唯史氏(三瓶自然館サヒメル)から古環境、地質、石材等について調査指導を受けた。

(2) 調査の概要

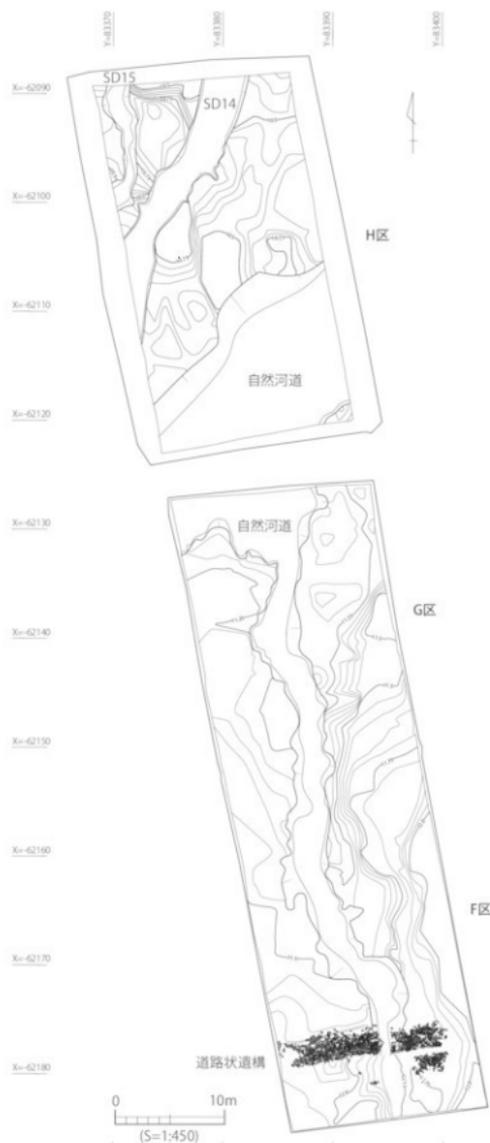
柳堀遺跡F・G・H区は、松江市大庭町に所在する谷底平野の水田部分に立地している。現在は住宅地に囲まれて、標高12m足らずと周囲の台地より少し低い位置に立地している。付近には、山代二子塚、大庭鶏塚、東淵寺古墳や、山代郷正倉跡など著名な古墳や史跡があり、風土記の丘地内の一角を占める。

F・G・H区各調査区は、現状の水田区画に従っており、H区とF・G区との間には自然発生的な水路が横たわっていて隔絶される。H区から400m北にある馬橋川に向かって田面の標高が徐々に下がっていく地形である(第2図)。

区画には第Ⅲ座標軸系に基づき座標軸に合わせた



第19図 柳堀遺跡F・G・H区グリッド配置図



第20図 柳堀遺跡 F・G・H区全体図

10 m四方のグリッドを設定した。X = -62080、Y = 83360を原点として、東に向けてアルファベット順、南に向かってアラビア数字順に呼称し、それぞれの区画は各交点の北西隅をもってグリッド名称とした(第19図)。これに基づいて遺物の取り上げ等を行っている。

調査区の基本層序は上層から耕作土(各壁1層)、水田床土(北壁2層、西壁2層)、旧水田耕作土(北壁3~4層、南壁3層、西壁4層)自然河道の覆土(西壁4層、南壁3層)の順で堆積している(第21図及び第22図)。旧水田耕作土と自然河道の覆土は遺物を含んでいる。調査指導を受けた三瓶自然館サヒメルの中村氏によれば、水田耕作土下の遺物包含層や自然河道の覆土下の河床は礫層で、ほとんどが大庭地区の台地を構成する流紋岩で構成されている。礫層中の礫一つ一つは円礫や亜円礫で角張ったものは少なく、大きさも大小さまざまで、人頭程度までの比較的小さいものが多く、一抱えもあるような大きなものは少ない傾向にある。これらの岩石は、上流から流されてきたものでなく、川の流れの作用によって基盤層から洗い出されたもの

で、これらの流紋岩の中には、若干の瑪瑙の原石が混じっている。

検出した遺構としては、H区で検出した溝状遺構2条（SD14及びSD15）とF区南端で検出した集石と杭、建築部材によって造成された道路状遺構である。また、全調査区にまたがって北に向かって続く自然河道を検出した。

SD14（第23図）

SD14は、H区の北西隅で検出された。幅約2.5m、長さ15m、深さ約20cmを測る。断面形は逆台形を呈し、人工的な流路と考えられる。検出した底部の傾向から、南西から北東へ流れていると考えられる。

出土遺物としては、古墳時代後期6世紀後半ごろの須恵器蓋環（第24図1.2）や土師器高環の脚部（第24図3）などがあり、遺構の時期を示していると考えられる。また、建材や曲物と思われる木製品（第24図4～13）が出土している。

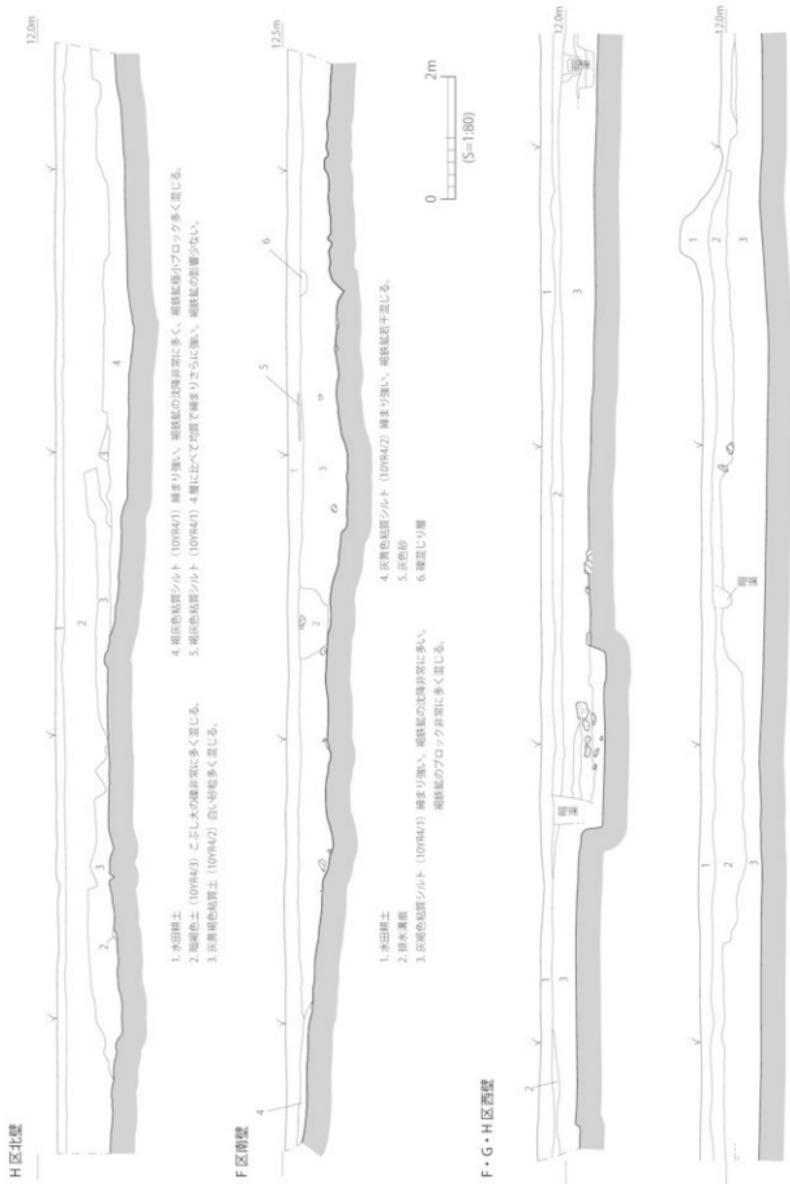
SD15（第23図）

SD15は、H区の北西隅で検出された。幅約1.3m、長さ10m、深さ20cmを測り、断面形は皿状を呈している。検出した底部の傾向から、調査区内では北流していたと考えられる。遺物は出土していない。SD14とSD15には、調査区内においては切合い関係がないので先後関係は分からないが、切合いがないということは、小規模なSD15の方が後から作られた可能性が高いと思われる。

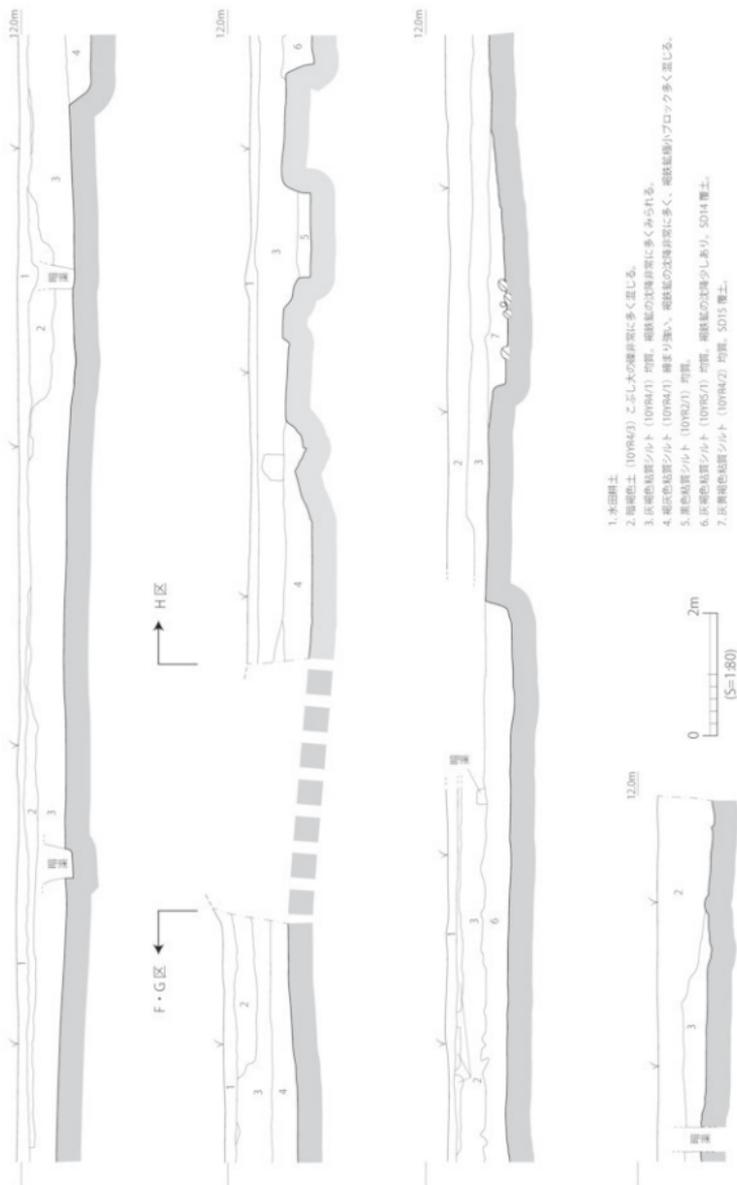
自然河道（第20図及び第25～28図）

柳堀遺跡F・G・H区では、調査区を南北に貫く自然河道の痕跡を検出した。F・G区内では、70mを測る。F・G区の中央を南側から北に向かって蛇行するこの自然河道の痕跡は、支流の細い流れ（幅約2.5～4m）であり、G区の北側とH区の南側に南西から流入する幅広い流路の痕跡が本流（幅約12m）であったと考えられる。これらの自然河道は検出された河床の高さから、調査区内で合流してほぼ北流し、馬橋川に流入していたものと考えられる。今の河道は、宇竜川と呼ばれ、神魂神社近くにある大石池に端を発し、柳堀遺跡付近では、遺跡東側の台地の裾に沿って北流し、馬橋川に流入している。この旧宇竜川とも呼ぶべき旧河道の河床は礫層である。流紋岩の河床が現れるその検出位置は、最も深い地点で現地表から1.4mを測る。礫層はその下に1m以上堆積している。自然河道の流路を埋めている覆土中及びその上の旧水田耕作土たる遺物包含層からは、以下に述べる遺物が出土している。

弥生時代前期から後期の土器片、また、黒曜石の剥片などの石器が出土している（第32図1、第26図4～5、第33図16～19）。続いて、古墳時代から奈良時代の須恵器や土師器が多く出土している。（第26図1～3、5、第32図2～16、22～32、第33図1～11）。特に奈良時代のもものが多く（第32図25～32、第33図1～11）、全体の出土遺物の中でも最も多くの点数が出土している。一方、古墳時代の須恵器は、坏や高環などの供膳具（第32図22～24）、土師器は、高環や甕などが出土している（第32図2～16）。奈良時代の須恵器は、甕や壺などの貯蔵具の破片が多く、次いで、坏などの供膳具が多く出土している。奈良時代に限ると、土師器の甕などの貯蔵具、調理具の出土は少なかった。古墳時代中期の土師器高環が完形の状態で出土してお

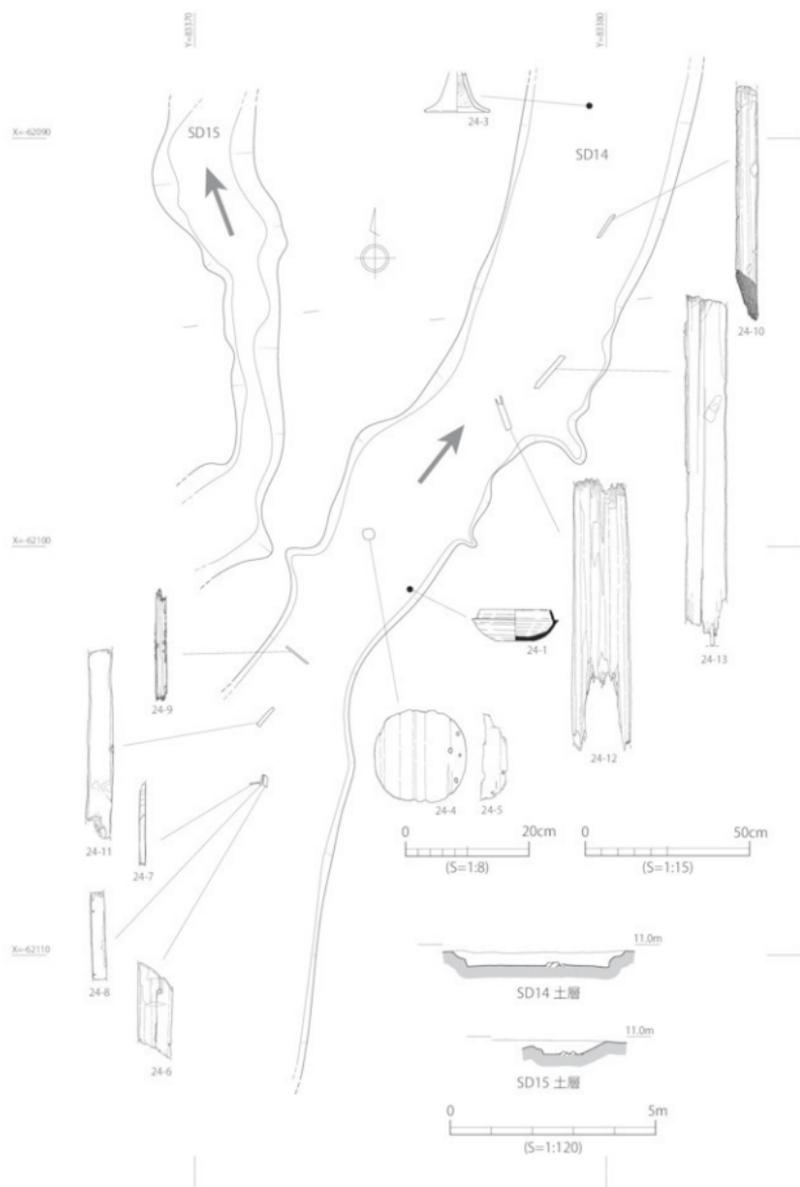


第21図 柳堀遺跡F・G・H区セクション図1

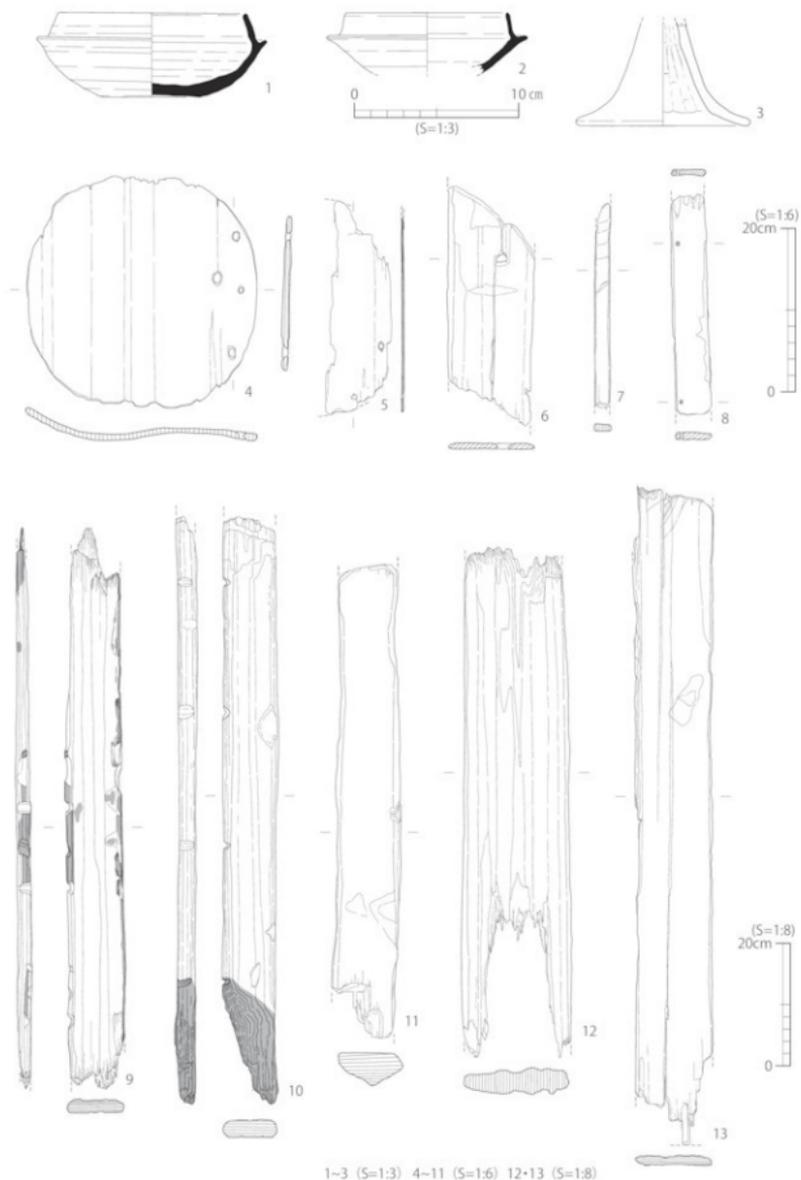


1. 水田層土 (10YR4/3) ころしの層非常に多く混じる。
2. 褐色土 (10YR4/1) 均質。焼灰の浸透非常に多くみられる。
3. 灰褐色粘質シルト (10YR4/1) 均質。焼灰の浸透非常に多くみられる。
4. 褐色粘質シルト (10YR4/1) 粘まり強い。焼灰の浸透非常に多く、焼灰跡小ブロック多く混じる。
5. 黒色粘質シルト (10YR2/1) 均質。
6. 灰褐色粘質シルト (10YR5/1) 均質。焼灰の浸透少しあり。S014層上。
7. 灰褐色粘質シルト (10YR4/2) 均質。S015層上。

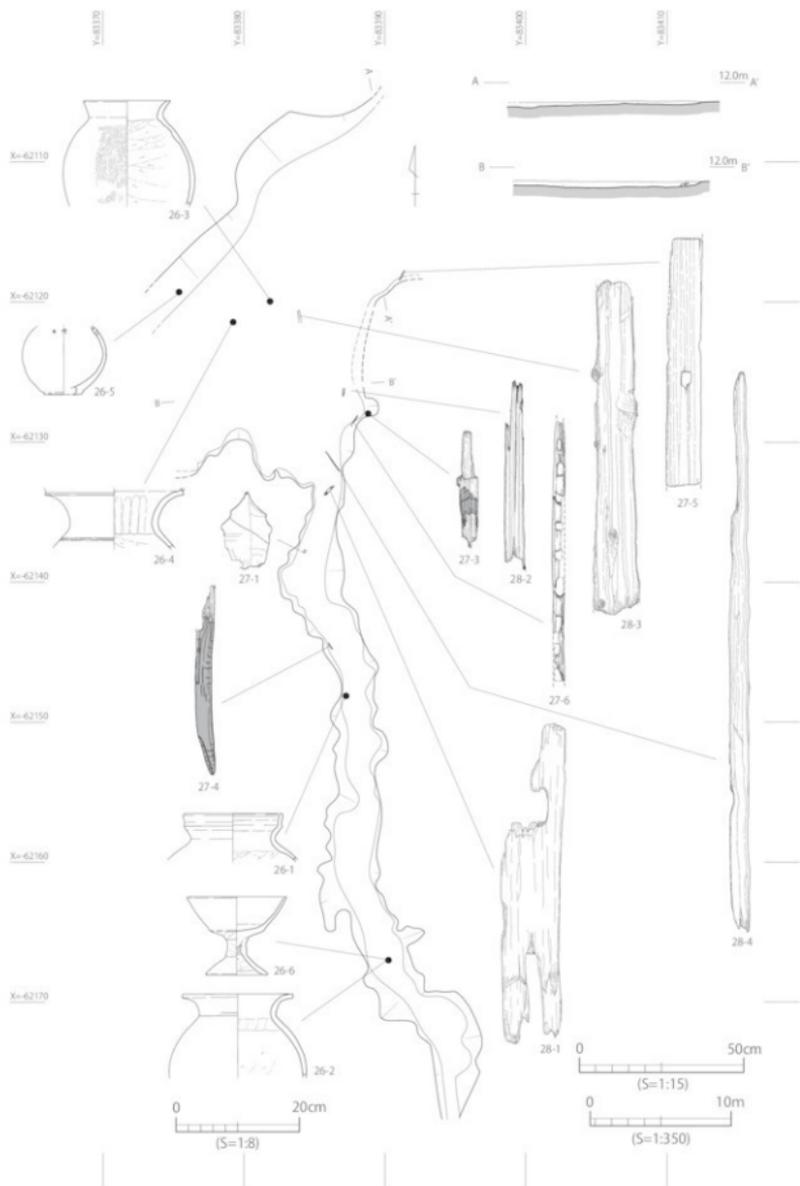
第22図 柳堀遺跡F・G・H区セクション図2



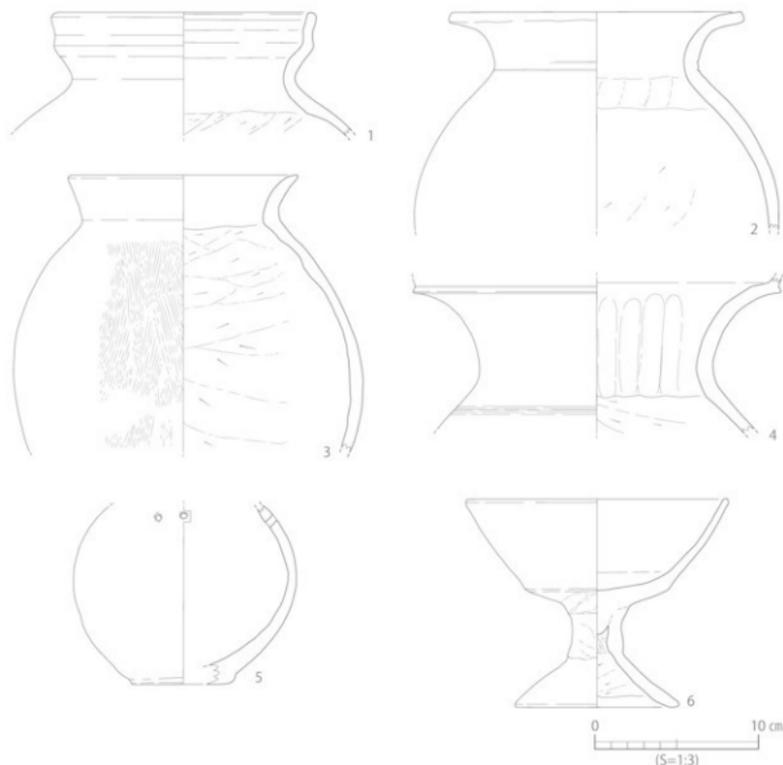
第23图 柳堀遺跡F・G・H区SD14・15実測図



第24図 柳堀遺跡 F・G・H区 SD14 出土遺物実測図



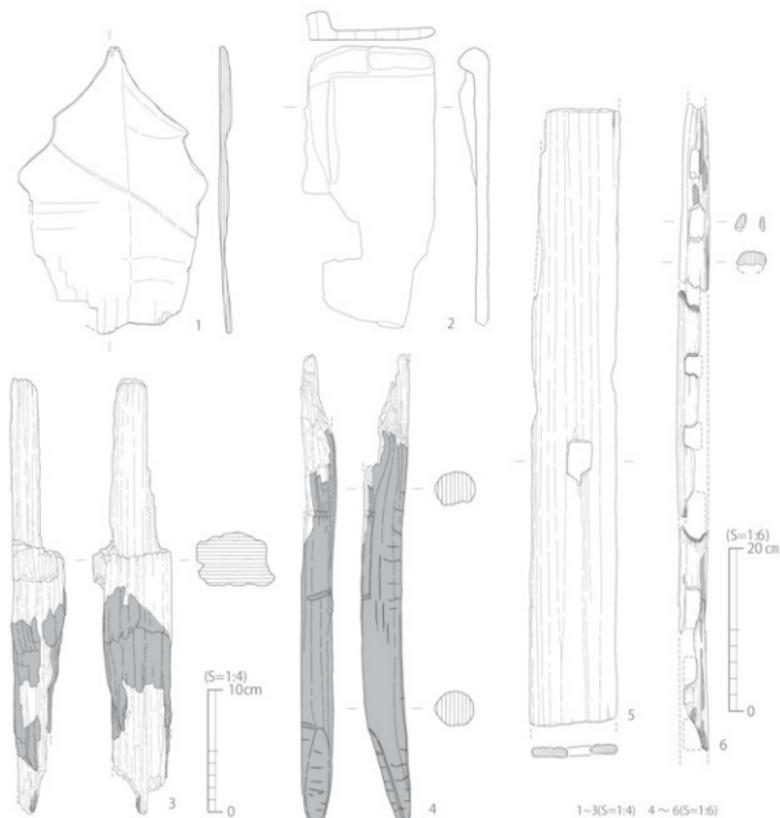
第25図 柳堀遺跡 F・G・H区自然河道実測図



第26図 柳堀遺跡F・G・H区自然河道出土遺物実測図1

り（第26図6）、使用位置が近かったことがうかがえる。中世の遺物も若干出土している（第32図17～21）。高台のない土師器の坏や皿の破片が主だが、中には、輸入陶磁器の白磁（第33図15）や青磁（第33図14）のほか、褐釉の碗の破片も出土している。土師器の坏や皿の特徴（柱状高台皿）などから、12世紀代～13世紀代のものが多いと思われる。また、かなり上層のものも含まれると思われるが、第33図12、13に示した徳利や皿の破片のほか、33図4に掲げる火鑽白などの木製品、簀、煙管、刀剣類の破片、天秤皿などの金属製品、天聖元寶（北宋銭）や寛永通寶などの古銭が出土している。総じて、この旧宇竜川の支流は、近世に埋まっていたことが考えられる。

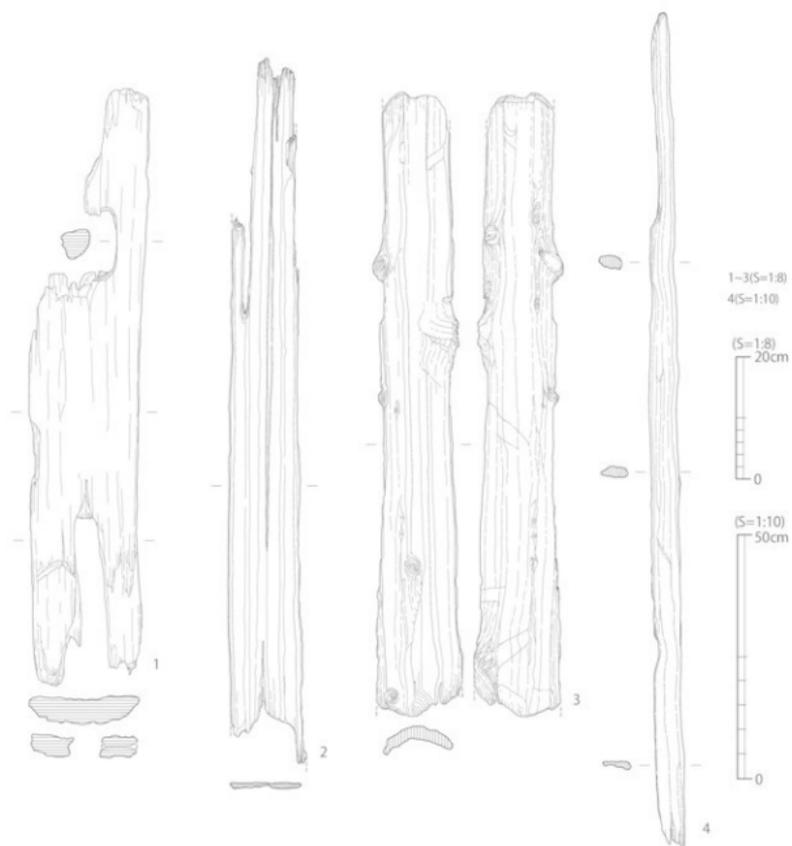
この旧河道からは、木製の建築部材や、農具など多様な木製品が出土している（第25図及び第27～28図）。建築部材は板材や壁材などが出土しているが、なかでも木製の樋が出土しており（第28図3）注目される。この木樋は、旧宇竜川の本流と支流の合流部で出土したもので、長さ1.02m、幅14.3cm、厚み2.2cmを測る。川幅とは全く規模が違うが、何かの水利に関係するものであった可能性はある。また、農耕具としてはなす型の又鉤が出土している（第27図1）。



第27図 柳堀遺跡F・G・H区自然河道出土遺物実測図2

道路状遺構 (第29～31図)

F区南端では、東西に延びる石敷きの道路状遺構を検出した。この石敷きの道路状遺構は、集石と杭など材木によって構築されている。石敷きの幅約2m、長さ約14mを測る。東端では、石敷き自体が南に屈折しているように見える(第29図)。石敷きの中からは備前焼の鉢の破片(第31図1)が出土したことから、近世以降に構築されたものと考えられる。このことは、自然河道流路の覆土中から出土した遺物のほとんどが中世以前のものであったことと符合する。石敷きの周辺は、石の敷かれているところ以外は地盤高そのものが盛り上がり、特に、東側の土質は、地山が硬くしまった状態であって、石敷きの道路を構築する必要がなかったとも考えられる。そもそも、道路状遺構が構築されている位置は、流路に直交する横断面で見れば河床が表れる位置は、最低部であり(第21図F区南壁セクション図)、周囲の道路がどのような経路を通じてこの道路状



第28図 柳堀遺跡F・G・H区自然河道出土遺物実測図3

遺構につながっているのか不明であるが、集石や杭を用いたこのような構築物は、この調査区内のこの位置でしか必要なかったことも考えられる。しかし、最低部にあったために、耕地化に当たって破壊されずに残された可能性もまた考えられなくもない。

(3) 小結

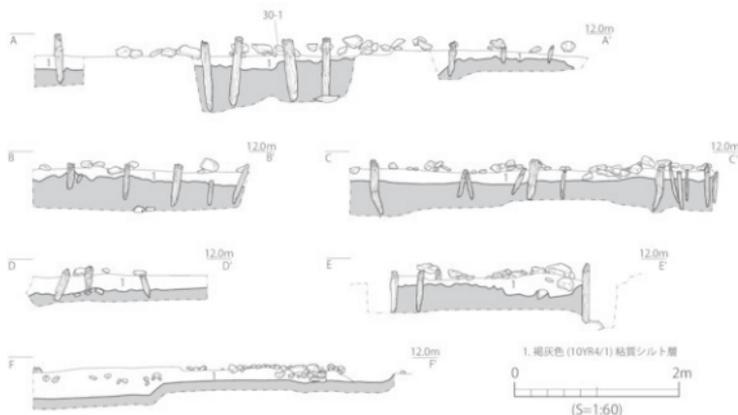
柳堀遺跡A～E区の調査では、弥生時代後期や奈良・平安時代のものを含む溝状遺構5、中世の杭列2条、平安時代のものを含む性格不明不定形遺構5などを検出した。

A区で検出したSD10は今回報告する大庭バイパスの3遺跡の中で唯一、弥生時代後期のものとして確認できた遺構である。また、奈良時代の遺構としてSD13を検出した。D区では、平安時代に埋没したと考えられるSX05から下駄が出土している。A区とB区では中世の杭列が出土した。

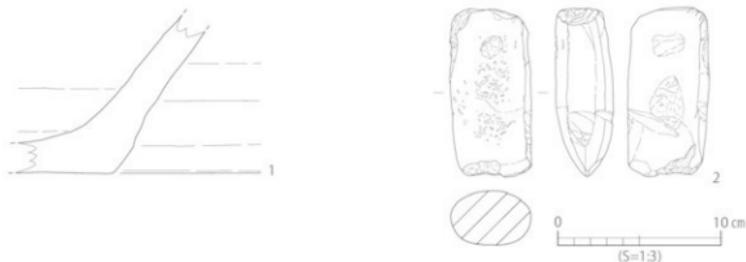
A区の東壁で採取した試料の自然科学的分析から、奈良・平安時代に近辺で水田耕作が行われて



第29图 柳堰遺跡 F·G·H 区道路状遺構平面図



第30図 柳堀遺跡F・G・H区道路状遺構断面図

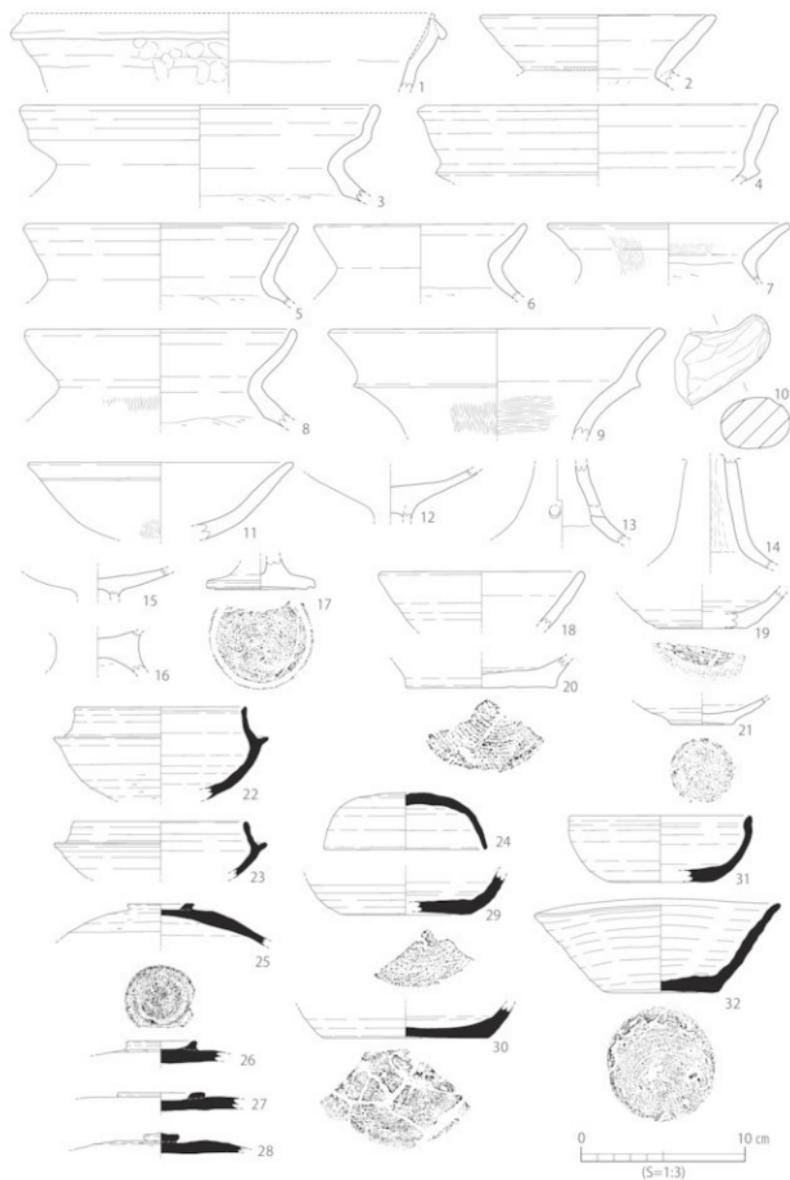


第31図 柳堀遺跡F・G・H区道路状遺構出土遺物実測図

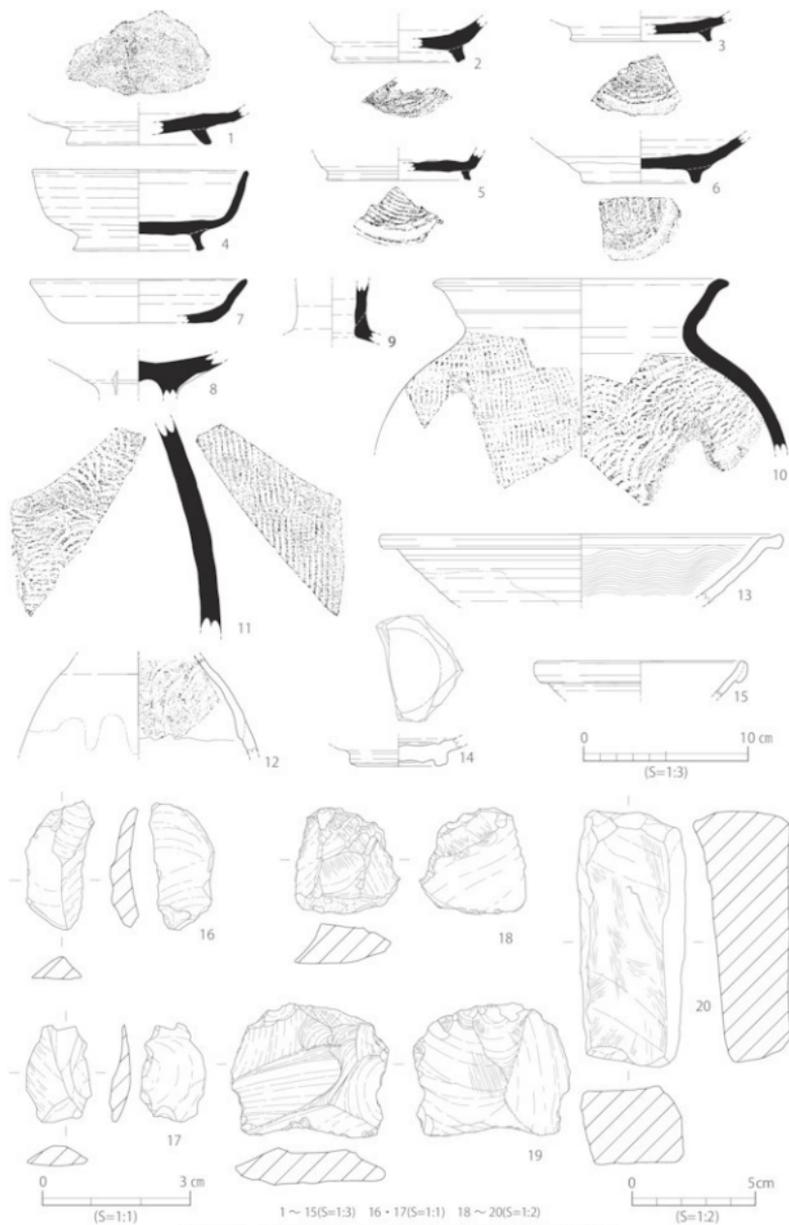
いた可能性があることが指摘されたが、調査区内で水田耕作の痕跡を遺構としてとらえることはできなかった。遺構や包含層からは弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、木製品などが出土した。

柳堀遺跡F・G・H区の調査では、H区の北西隅に2条の溝状遺構を検出した。SD14とSD15である(第23図)。SD14からは古墳時代後期の須恵器や土師器とともに建築部材や容器などの多様な木製品が出土した。自然河道が検出される谷底低地ということもあり、集落本体にかかる顕著な遺構は検出されなかった。出土した木製品は、建築部材と思われるものが多い。ついで容器、農耕具の順である。柳堀遺跡A区の自然化学分析によって遺跡近辺で奈良時代以降に水田化された可能性が指摘されているが、第27図1及び2に掲げた農耕具などがかるうじてそのことを示していると言える。

F区南端で検出した集石と杭などの建材で構築された道路状遺構は、明治初頭の切図では表現されていない。この時までには、すでに廃絶されていた可能性が考えられ、下限が近代にまで及ばないと考えられる。今回の発掘調査で湿地を横断する道路状遺構が検出されたことにより、谷底を横断する道路網の一端が明らかになった。石敷きが調査区内東側に南に屈折していたように、丘陵に沿って一旦南北に延伸していたことがうかがえる。



第 32 图 柳堀遺跡 F・G・H 区包含層出土遺物実測図 1



第33图 柳堀遺跡F・G・H区包含層出土遺物実測图2



第 34 图 柳堀遺跡 F・G・H 区包含層出土遺物実測図 3

第1表 柳堀遺跡出土土器観察表

検出 番号	遺物 番号	写真 図版	種類	器種	出土 地点	層位	口径 (cm)	その他の 寸法 (cm)	残存率 (%)	胎土	形態・文様の 特徴	色調	備考
5	1	11	須置器	高台付杯	T16	4	底径(7.4)		20	密(1mm)の砂粒を少量含む	内外素焼	オリーブ灰5GY6/1	内外・自然輪が分かる
5	2	11	須置器	無高台杯	T16	5直上	(11.8)	底径(7.8)	15	密(1mm以下)の砂粒を多く含む。5mmの鏝を1つ含む	回転素焼	青灰5B5/1	内・自然輪が分かる
5	3	11	須置器	無高台杯	T16	4	底径(7.6)		20	密(1.5mm以下)の砂粒を多く含む	回転素焼	灰10Y5/1	
5	4	11	土師器	極小皿	T16	5直上	(7.3)	底径(14.4)	75	密(1mm以下)の砂粒を多く含む	外面素焼 回転素焼	外・橙2.5YR6/6 内・灰白7.5YR7/4	
5	5	11	須置器	甕	T16	4			10	密(0.5～1mm)の砂粒を少量含む	外・灰白10Y4/1 内・オリーブ灰2.5GY6/1		
5	6	11	須置器	甕	T16	4			小片	密(0.5mm)の砂粒を多く含む	外・明オリーブ灰5GY7/1 内・灰白10Y7/1		外・薄く自然輪が分かる
5	7	11	中須置器	甕	T11	4			小片	密(1mm以下)の砂粒を少量含む	焼成軟質	外・灰10Y6/1 内・灰白7.5YR/2	
16	1	12	弥生土器	甕	A区SD10	上面	(17.0)			密(0.5～2mm)の砂粒を多く含む	5条の凹線文	淡黄2.5Y8/3	内輪4類 V-1
16	2	12	弥生土器	甕	A区SD10			底径(5.2)	25	密(0.5～2mm)の砂粒を多く含む	磨滅	外・暗緑10YR3/3 内・淡黄緑10YR8/4	
16	3	12	弥生土器	甕	A区SD10			底径(5.0)	20	密(0.5～2mm)の砂粒を多く含む	磨滅 外面は焼熟	外・灰白10YR8/2 内・灰白2.5Y8/2	
16	4	12	須置器	高台付杯	A区SD13	上面		底径(8.4)	15	密(0.5mm)の砂粒を少量含む	高台は十字	外・青白5B6/1 内・灰白10Y7/1	
16	5	12	須置器	無高台甕	A区	東溝			25	密(1mm)の砂粒を少量含む	底面回転素焼	灰白7.5Y7/1	
16	6	12	須置器	壺	A区北側	2～3b		胴径(16.6)	10	密(0.5～2mm)の砂粒を少量含む	胴部改良2条	灰5Y6/1	
16	7	12	須置器	無高台杯	A区北側	2～3b		底径(6.6)	40	密(0.5～2mm)の砂粒を多く含む	底面回転素焼	外・灰黄2.5Y6/2 内・明オリーブ5Y4/3	外・自然輪が分かる
16	8	12	陶器	榊鉢	A区	埴土		底径(11.6)	15	密(0.5～2mm)の砂粒を多く含む	6本一単位の罫目。内面は平滑	明赤黄2.5YR5/6	罫間焼
16	9	12	弥生土器	甕	B区	褐色色(17.2)			小片	密(0.5～1mm)の砂粒を多く含む		黄2.5Y7/8	直立3類 V-2
16	10	12	土師器	高台付杯	B区	褐色色(13.6)			20	密(0.5～1.5mm)の砂粒を少量含む	素焼	黄2.5Y8/6	
16	11	12	須置器	直口壺	B区	褐色色(10.4)		胴径(12.8)	15	密(1mm)の砂粒を少量含む	外・頸部内・明青灰5B7/1 胴部内・青灰5B2/1		
16	12	12	須置器	無高台杯	B区	褐色色		底径(8.0)	15	密(0.5～1mm)の砂粒を少量含む	底面回転素焼	外・にい・黄緑10YR6/3 内・にい・黄緑10YR7/2	
16	13	12	須置器	甕	B区SX08				小片	密(1mm)の砂粒を少量含む	焼成や軟質	灰白10Y8/2	
16	14	12	須置器	坏身	C区			底径5.5	40	密(1mm)の砂粒を少量含む	底面回転へうすり	灰N7/	
16	15	12	土師器	無高台杯	C区			底径(7.0)	15	密(0.5～3mm)の砂粒を多く含む	底面回転素焼	外・淡黄2.5Y7/4 内・暗灰黄2.5Y5/2	
16	16	12	青磁	碗	C区	(12.6)			小片	密	外面へうすり	明緑灰7.5GY8/1	市文庫蔵C2
16	17	12	土師器	惣柄か鉢	C区	にい・黄褐色	(19.8)		小片	密(0.5～4mm)の砂粒を多く含む		灰白10YR8/2	
16	18	12	須置器	蓋	D区SX05		(17.0)		15	密(1～2mm)の砂粒を多く含む	焼成や軟質 内面は一部平滑	オリーブ灰5GY6/1	蓋10Da類
16	20	12	土師器	極小皿	E区		(6.4)	底径(2.6) 器高2.1	15	密(0.5～1mm)の砂粒を少量含む		外・淡黄2.5Y8/4 内・黄緑10YR8/6	
24	1	27	須置器	坏身	H区	褐色	11.3	底径(6.8)	ほぼ完存	密(2mm以下)の砂粒を多く含む	底面回転へうすり	外・灰N4/ 内・灰N6/	出雲2期
24	2	27	須置器	坏身	H区SD15		(6.8)	受部(11.8) 器高(3.7)	20	密(2～3mm)の砂粒を多く含むが、1mm前後の砂粒をわずかに含む	底面回転へうすり	灰N6/	出雲3～4期
24	3	27	土師器	高杯	H区SD15	褐色		底径(10.3)	ほぼ完存	密(0.5～1mm)の砂粒を少量含む	内面しじり痕	淡黄2.5Y8/3	
26	1	28	土師器	甕	G区		(15.4)		20	密(0.5～2mm)の砂粒を多く含む		灰白2.5Y8/2	
26	2	28	土師器	壺	G区	3	(17.6)		15	密(1mm以下)の砂粒を少量含む	胴部改良2条	外・淡黄緑7.5YR8/4 内・淡黄緑10YR8/4	
26	3	28	土師器	甕	H区	3	13.8	胴径21.4	完存	密(0.5～1mm)の砂粒を多く含む		外・灰黄2.5Y7/2 内・にい・黄緑10YR7/2	
26	4	28	弥生土器	壺	H区	3		器高(9.7)	35	密(0.5～2mm)の砂粒を多く含む	平行線文3条	外・淡黄緑2.5Y7/3 内・淡黄2.5Y8/3	
26	5	28	土師器	無高台甕	H区			底径5.8	80	密(0.5～0.3mm)の砂粒を多く含む	穿孔2か所	淡黄緑10YR8/4	
26	6	28	土師器	高杯	G区	3	(15.8)	底径9.7	完存	密(1mm以下)の砂粒を少量含む		灰白10YR8/2	
31	1	29	陶器	甕	F区			器高(9.8)	10	密	外・にい・赤黒2.5YR5/3 内・にい・赤黒5YR5/3		罫間
32	1	30	弥生土器	甕	H区		(24.8)		10	密(0.5mm)の砂粒を少量含む	軟質	淡黄緑10YR8/3	
32	2	30	土師器	甕	F区		(14.0)		20	密(1～2mm)の砂粒を少量含む		外・淡黄緑10YR8/3 内・灰白10YR8/2	
32	3	30	土師器	甕	F区		(21.4)		35	密(0.5～1mm)の砂粒を多く含む		灰白2.5Y8/2	
32	4	30	土師器	甕	G区		(21.0)		20	密(1mm以下)の砂粒を少量含む		灰白2.5Y8/2	
32	5	30	土師器	甕	G区		(16.0)		小片	密(0.5～1mm)の砂粒を少量含む		灰白10YR8/2	
32	6	30	土師器	甕	H区		(12.6)		25	密(1mm以下)の砂粒を多く含む		淡黄緑10YR8/3	

第3章 柳堀遺跡

検出番号	遺物番号	写真図版	種別	器種	出土地点	層位	口径 (cm)	その他の寸法 (cm)	残存率 (%)	胎土	形態・文様の特徴	色調	備考
32	7	30	土師器	甕	H区		(14.8)		25	底1mm以下の砂粒を少量含む		外・灰黄緑2.5YR8/3 内・灰黄緑10YR8-3	埋付者
32	8	30	土師器	甕	F区	3	(16.0)		20	底1mm以下の砂粒を少量含む		灰白10YR8/2	
32	9	30	土師器	甕	F区	3	(19.8)		35	底0.5～1mmの砂粒をやや多く含む		外・灰黄2.5YR7/2 内・灰黄緑10YR7/2	
32	10	30	土師器	甕	F区			長さ5.2	完存	底0.5～1.5mmの砂粒を多く含む		灰白黄緑10YR7/3	把手のみ
32	11	30	土師器	高坏	F区		(16.2)		20	底0.5～2mmの砂粒を多く含む	沈線1条	外・灰白黄緑10YR7/3 内・灰白10YR7/4	
32	12	30	土師器	高坏	G区			器高(3.2)	40	底1mmの砂粒を少量含む		灰黄2.5Y8/3	
32	13	30	土師器	高坏	G区			器高(4.9)	40	底0.5mmの砂粒をわずかに含む	円形透孔3か所	外・灰白10YR8/2	
32	14	30	土師器	高坏	F区	3		器高(6.8)	20	底1mm以下の砂粒を少量含む		外・赭2.5YR6/6 内・灰白黄緑10YR7/4	
32	15	30	土師器	低脚杯	F区	3		器高(1.8)	25	底0.5mmの砂粒を少量含む		灰白10YR8/2	
32	16	30	土師器	低脚杯	H区			器高(2.6)	40	底0.5～1.5mmの砂粒を多く含む		外・灰白2.5YR8/2 内・灰黄2.5Y8/4	
32	17	30	土師器	柱状高台付杯	F区			底径6.6	75	底0.5mmの砂粒をわずかに含む	底部回転糸切り	灰白10YR8/2	
32	18	30	土師器	杯	G区		(12.2)		40	底0.5mmの砂粒をわずかに含む		灰白2.5Y7/2	
32	19	30	土師器	無高台杯	F区			底径(5.2)	35	底0.5～2mmの砂粒を少量含む	底部回転糸切り	外・灰白黄緑10YR7/3 内・灰白黄緑10YR7/4	
32	20	30	土師器	無高台杯	G区			底径(9.2)	50	底1mm以下の砂粒を少量含む	底部回転糸切り	外・黄灰2.5YR6/1 内・黄灰10YR7/2	
32	21	30	土師器	無高台杯	G区			底径4.0	完存	底0.5mmの砂粒をごくわずかに含む	底部回転糸切り	外・灰白2.5Y8/2	
32	22	30	須恵器	坏身	F、G区	3	10.4	受部13.0 器高(5.7)	20	底0.5mm以下の砂粒を多く含む	底部回転糸切り	外・灰白7.5Y7/1 内・灰白N7/	出雲1～2期
32	23	31	須恵器	坏身	H区		(10.4)	受部(12.8) 器高(3.5)	10	底0.5mm以下の砂粒を多く含む		灰7.5Y6/1	出雲3期
32	24	31	須恵器	坏蓋	H区		(9.7)	器高3.5	40	底1.5mm以下の砂粒を多く含む		灰N6/	
32	25	31	須恵器	蓋	G区			つまみ径4.0	75	底0.5～1.5mmの砂粒をわずかに含む	輪状つまみ	灰N6/	
32	26	31	須恵器	蓋	G区			つまみ径4.2	40	底1mmの砂粒を少量含む	輪状つまみ	灰N7/	
32	27	31	須恵器	蓋	F区	3		つまみ径5.4	15	底0.5mmの砂粒をわずかに含む。7mmの砂粒を1個含む	輪状つまみ	外・灰5Y5/1 内・灰10Y6/1	
32	28	31	須恵器	蓋	F区	3		つまみ径2.2	20	底1.5mmの砂粒を多く含む	宝珠つまみ	外・灰7.5Y5/1 内・灰白7.5Y5/1	
32	29	31	須恵器	無高台杯	G区			底径(6.0)	25	底1.5mm以下の砂粒をやや多く含む	底部回転糸切り	灰7.5Y6/1	
32	30	30	須恵器	無高台杯	F区			底径(10.0)	50	底0.5mmの砂粒を少量含む	底部回転糸切り	灰白黄緑5YR5/4	
32	31	31	須恵器	無高台杯	F区		(11.0)	底径(6.6) 器高4.1	10	底0.5mm以下の砂粒をわずかに含む	底部回転糸切り	外・灰5Y5/1 内・灰N5/	
32	32	30	須恵器	無高台杯	G区		14.8	底径(7.1)	ほぼ完存	底0.5mmの砂粒をわずかに含む	底部回転糸切り	外・灰白N7/ 内・灰N5/	
33	1	31	須恵器	高台付杯	G区			底径(8.7)	25	底1.5mm以下の砂粒をわずかに含む		外・灰N5/ 内・灰N6/	
33	2	31	須恵器	高台付杯	G区			底径(7.3)	20	底0.5mm以下の砂粒をわずかに含む	底部回転糸切り	灰N6/	
33	3	31	須恵器	高台付杯	F区	3		底径(6.2)	15	底0.5mmの砂粒を1個、2mm以下の砂粒を多く含む	底部回転糸切り	黄灰2.5Y5/1	
33	4	31	須恵器	高台付杯	H区		(12.8)	底径(7.4)	75	底0.5mm以下の砂粒を多く含む		灰N5/	
33	5	31	須恵器	高台付杯	H区	表土		底径(6.6)	15	底1mmの砂粒をわずかに含む	底部回転糸切り	外・灰N5/ 内・灰N6/	
33	6	31	須恵器	高台付杯	H区			底径(6.6)	25	底0.5mmの砂粒を数個、1mm以下の砂粒を多く含む	底部回転糸切り	外・灰5Y6/1 内・灰5Y7/1	
33	7	31	須恵器	無高台皿	H区		(13.0)	底径(6.8) 器高2.7	40	底0.5mm以下の砂粒を多く含む	底部回転糸切り	外・灰白黄2.5Y6/3 内・灰黄2.5Y6/2	
33	8	31	須恵器	高坏	G区	3		器高(2.4)	20	底1mm以下の砂粒を多く含む	杯下部切込み2か所	外・灰10Y5/1 内・灰10Y6/1	
33	9	31	須恵器	長脚罐	F区	3		器高(3.5)	15	底0.5mmの砂粒を多く含む		外・灰5Y5/1 内・灰5Y6/1	
33	10	31	須恵器	甕	F区	3	(17.0)		20	底1mmの砂粒をわずかに含む		外・灰オリーブ2.5Y5/2 内・灰5Y4/1	
33	11	31	須恵器	甕	T15	3			小片	底0.5～2mm以下の砂粒を多く含む		青灰5B6/1	
33	12	31	陶器	甕	G区			胴径(14.4)	10	密	外面鉄輪 内面同心円状突起を具	外・黄灰黄2.5Y4/2 内・黄灰2.5Y6/1	備前九陶二期
33	13	31	陶器	中皿	G区		(24.2)		35	密	ロウロ水飛ぎ 見込目文	灰黄2.5Y7/2	備前九陶第一～四期
33	14	31	磁器(青磁)	甕	H区			底径(5.0)	40	密	見込み輪刺ぎ	釉・明オリーブ2.5GY7/1 露胎・灰N6/	中国(龍泉窯系)

検出番号	遺物番号	写真回数	種別	器種	出土地点	層位	口径 (cm)	その他の寸法 (cm)	残存率 (%)	胎土	形態・文様の特徴	色調	備考
33	15	31	磁器 (白磁)	碗	H区		(12.4)		25	青	口ラ口先狭き口縁玉縁	灰白 5Y7/2	中国

第2表 柳堀遺跡出土木製品観察表

検出番号	遺物番号	写真回数	種別	器種	出土地点	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	形態・文様の特徴	木取り	痕跡	備考
16	19	11	服飾具	下駄	D区/SX05		(21.0)	(4.2)	1.2	角を嵌として多角形に仕上げる。板目あり。	板目	スギ	遺跡下駄
24	4	27	容器	底板	H区/SD14	溝層	28.5	27.8	0.9	3孔。	板目	スギ	
24	5	27	容器	底板	H区/SD14	溝層	(26.3)	(7.9)	(0.2)	薄く削がれた一部。1孔か。	板目?	ヒノキ科	
24	6	27	容器	底板	H区/SD14		(29.2)	1.05	0.8	1孔。	板目	ヒノキ科	
24	7	27		板状製品	H区/SD14		(25.0)	1.9	0.9	先端加工。	板目		
24	8	27		板状製品	H区/SD14		(27.0)	4.4	0.9	2孔。	板目		
24	9	27		板状製品	H区/SD14	溝層	(68.4)	7.0	1.8	側面くぼみ6か所。焼痕あり。	板目		
24	10	27		板状製品	H区/SD14		(71.6)	6.8	2.2	側面くぼみ4~5か所。先端焼痕あり。	板目		
24	11	27		用途不明材	H区/SD14		(58.0)	7.8	4.1		板目		
24	12	27	建築部材	板状製品	H区/SD14		(83.3)	17.0	4.5		板目		
24	13	27	建築部材	板状製品	H区/SD14		(107.3)	12.3	1.4	両先端斜めに加工。	板目		
27	1	28	農耕土具	鏝	G区	3	23.7	15.4	0.9		板目	アカガシ系属	
27	2	28	農耕土具	直柄平鋤	H区	5	(23.1)	(10.8)	鋤大厚 2.4	身の上部を平く作る。断面は若干上に戻る。			アカガシ一木平鋤
27	3	28	部材	棒状製品	G区		(35.8)	6.4	4.4	切り込み入る。焼痕あり。	板目		
27	4	29		杭	H区		(52.0)	5.0	4.4	先端加工で尖る。焼痕あり。	板目		
27	5	29		母材か	H区		(75.8)	10.5	1.2	方形孔 13.0 × 4.0cm	板目		
27	6	29	農耕具	山下駄杵	H区	3	(79.0)	(3.6)	(1.8)	孔の間隔 5.5cm、8孔。焼痕あり。	板目	スギ	
28	1	29	建築部材	板状製品	G区		(98.4)	1.80	3.3 ~ 5.5	方形孔。	板目		
28	2	29		板状製品	G区		(111.1)	11.6	1.0		板目		
28	3	29	建築部材	榑	G区		(102.2)	14.3	2.2	中央に割り込み。	板目	スギ?	
28	4	29		板状製品	G区		(171.2)	6.0	1.8 ~ 2.8		板目		
34	1	32	調理具	蓋か底板	G区		9.2	(4.5)	1.2	窪りあり。	板目	アスナロ属	
34	2	32	容器	底板か	F区/端渠		12.6	(7.5)	0.8		板目		
34	3	32		不明(魚骨分)	H区		(27.2)	7.6	1.2	紐状のものが付てある。	板目	アスナロ属	
34	4	32	燈火具	火燭白	G区		(9.3)	2.2	1.5	摩擦面 10か所。焼痕あり。	板目	スギ	
34	5	32		板状製品	G区		14.3	4.9	1.2		板目		

第3表 柳堀遺跡出土金属製品観察表

検出番号	遺物番号	写真回数	種別	出土地点	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	その他の寸法・法量 (cm)	備考
34	6	32	簪	F区	3	(6.7)	1.55	0.35		
34	7	32	釘	G区		9.2	0.55	0.7		
34	8	32	釘	F区	3	4.5	0.5	0.5		
34	9	32	大釘	F区		(15.3)	2.8	0.3		
34	10	32	大秤皿	G区		口径 8.4	底径 6.0		輪径 1.0	輪 4個
34	11	32	燈管	G区		(5.8)	1.0	0.1		木製ぬい口残る

第4表 柳堀遺跡出土石器観察表

採回 番号	遺物 番号	写真 回数	種類	出土地点	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石材	備考
31	2	29	磨製石斧	F区		10.4	5	3.5	330.22		全面研磨
33	16	32	剥片	F区	3	2.6	1.2	0.45	1.25		
33	17	32	剥片	F区	3	2	1.8	0.4	0.97	黒曜石	
33	18	32	剥片 (スクレイパー)	F区		4.3	4.2	1.6	3.161		
33	19	32	剥片 (未成品)	F区	3	5.4	6.2	1.5	53.47	黒曜石	
33	20	32	砥石	G区		10.6	4.3	3.9	271.22		2面研磨 1面敲打

第5表 柳堀遺跡出土古銭観察表

採回 番号	遺物 番号	写真 回数	名称	出土地点	層位	銭径 (A) / 銭径 (B) (mm)	内径 (C) / 内径 (D) (mm)	銭厚 (mm)	重量 (g)	備考
34	12	32	天聖元寶	G区		24.6 / 24.7	21.3 / 20.2	1.3	2.92	北宋、初編年 1023年
34	13	32	寛永通寶	F区		23.0 / 23.0	16.9 / 16.9	1.1	2.82	銅貨 寛永通寶3期(新寛永)、背元、元禄10年(1697)～延享4年(1747)、明和4年(1767)～天明元年(1781)
34	14	32	不明	F区		23.6 / 23.7	18.5 / 18.5	1.2	2.91	

第6表 柳堀遺跡出土杭観察表

採回 番号	遺物 番号	写真 回数	出土 調査区	長さ (cm)	直径/幅 (cm)	特徴
17	1	13	A区	38.5	5.5	芯持、枝をカットした部分あり、四方から削る、杭に対してやや斜めに加工、年輪数12
17	2	13	A区	33.7	4.5	四方から削る、年輪数9～10
17	3	13	A区	17.1	3.7	芯持、広葉樹、四方から加工、軟質、劣化著しい、径の半分以下欠損、年輪数約15
17	4	13	A区	44.2	8.0	芯持、節あり、四方から削る、杭の長軸と削りの方向が異なる、年輪数20以上
17	5	13	A区	49.2	5.9	杭4に似る、四方から大きく削る、加工は長軸から少し斜め、年輪数25前後
17	6	13	B区	24.5	4.9	節あり、節を削る部分あり、三方から加工、年輪数8
17	7	13	B区	44.9	4.2	芯持、節を削る、五方向から加工、若干劣化部分あり、年輪数13
17	8	13	B区	43.7	4.9	遺存不良、芯持、広葉樹(木目見えない)、節、樹皮有、三方から加工、軟質
17	9	13	B区	37.8	4.5	芯持、節あり、節をカットした部分あり、四方から加工、年輪数11
17	10	13	B区	37.1	4.7	芯持、六方向から加工、年輪数6
18	1	14	B区	19.3	4.0	芯持、四方から加工、やや軟質、年輪数5
18	2	14	B区	31.2	6.5	芯持、節を落とす、硬質、二方のみ加工、他の杭と違い先端を尖らせる加工を行わない、節を落とすのみ、年輪数15以上
18	3	14	B区	34.6	5.3	芯持、硬質、四方から削る、長軸に対して斜めから加工、年輪数10
18	4	14	B区	12.1	4.4	遺存不良、芯持、広葉樹、六方向から加工、加工痕不明瞭、軟質部分あり、年輪数12?
18	5	14	B区	38.9	5.7	四方から削る、年輪数21
18	6	14	B区	31.1	4.5	芯持、節あり、五方向から削る、反れている部分あり、年輪数7
18	7	14	B区	20.4	4.5	節、樹皮が残る、四方から削る、うち一方は短い、年輪数13
18	8	14	B区	46.4	4.9	六方向から削る、末は残っている、年輪数6
18	9	14	B区	30.9	5.4	遺存不良、芯持、広葉樹、四方から削る、劣化して元の径を保っていない部分あり、年輪数12以上
18	10	14	B区	38.5	4.4	節あり、樹皮残る、五方向から削る、削る部分は短く、末端の方は残っている、年輪数6
18	11	14	B区	24.8	6.0	芯持、樹皮残る、四方から削る、加工部分あり、年輪数25
18	12	14	B区	54.3	6.6	広葉樹(樹乳材)の可能性、1/4に分割した材の先端を四方から加工、年輪数現存10
18	13	14	B区	25.3	5.1	遺存さわるまで不良、分節材、広葉樹、節あり、四方から削る

第4章 茶臼遺跡

第1節 調査の経過

調査は調査対象地に盛られていた造成土の撤去から開始した。撤去作業は6月4日から重機等を使って行ったが、造成土は1m以上と厚く盛られていることと、排土置き場が遠いことなどの問題もあり、6月13日までの間で計9日間を費やした。その後、土量測量やグリッド杭設置等を行い、人力による掘削は6月24日から調査区南側より着手した。調査開始後すぐに耕作土下層に遺物包含層が存在していることを確認したものの、当初の想定より包含密度は粗く、遺物の状況としては細片のものが多数を占めていた。この包含層下層で基盤層に至るが、自然河道がほぼ調査区全面に存在していたことから、確認できた遺構は土坑状遺構1と溝状遺構1のみであった。遺物の取り上げや遺構の測量、写真撮影等を行いながら調査を進め、10月10日に調査区完了状況の空中写真撮影を行い調査は終了した。

第2節 調査の概要

茶臼遺跡は松江市大庭町に所在し、国史跡大庭鶴塚古墳の西側に広がる水田に位置している。調査区域は土地区画整理事業用地の中央を南北に通過する大庭バイパス建設用地内で調査面積は約2,000㎡である。

調査区は第Ⅲ座標軸系に基づき座標軸に合わせた10m四方のグリッドを設定した。X=-61950、Y=83352を原点として、東に向けてアルファベット順、南に向かってアラビア数字順に呼称し、それぞれの区画は各交点の北西隅をもってグリッド名称とした(第35図)。これに基づいて遺物の取り上げ等を行っている。

調査区の基本層序は上層から耕作土(2層・16層)、水田床土(4層・15層)、自然河道の覆土(10層)の順で堆積している(第36・37図)。水田床土と自然河道の覆土は遺物を含んでいることから前者を包含層1、後者を包含層2として調査を行った。なお、遺物の大半はこの包含層2から出土しており、古墳時代の土器から中世までの遺物が混在しているものの、出土量的には古墳時代のものが中心を占めていた。

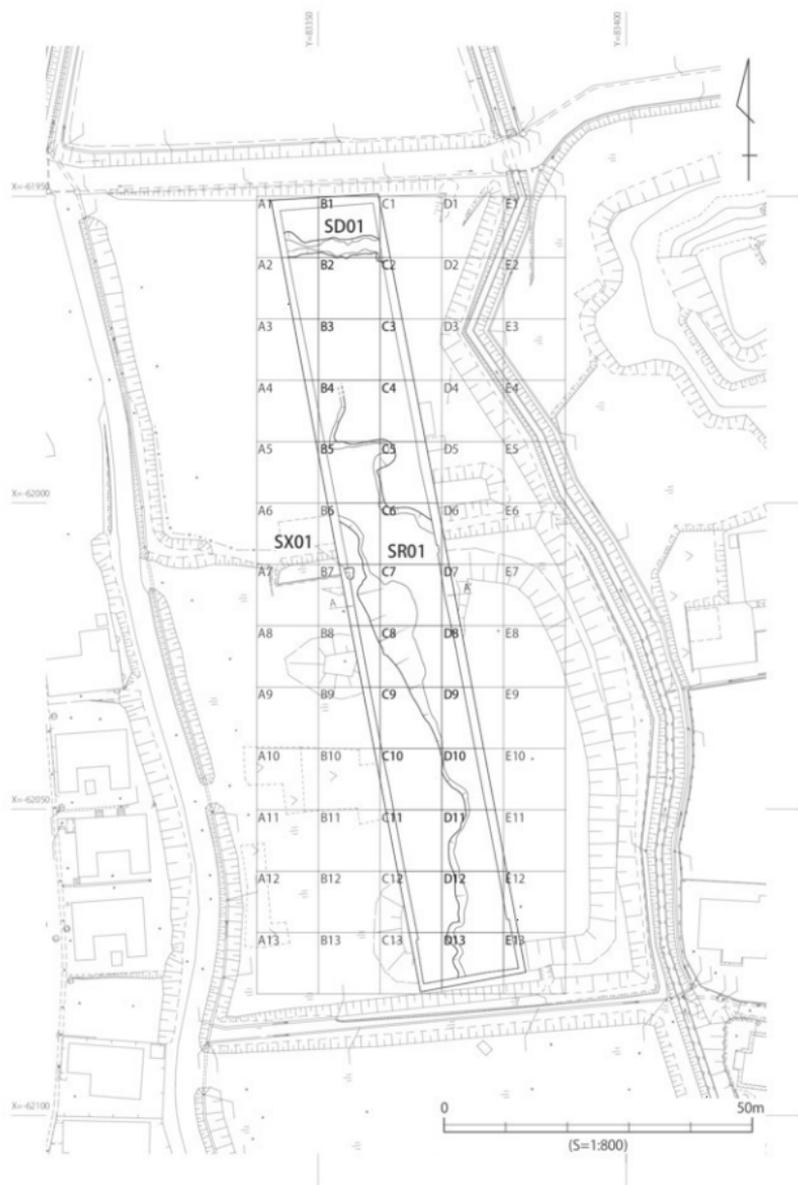
今回の調査では耕作土下層に調査区全面をほぼ南北に流れる自然河道(SR01)が存在していたため、確認できた遺構は調査区を東西方向に延びる溝状遺構(SD01)、用途不明の土坑状遺構(SX01)だけであった。他に遺構が存在していたとしても、その多くは自然河道によって削平されたものと推察される。

SD01(第38図)

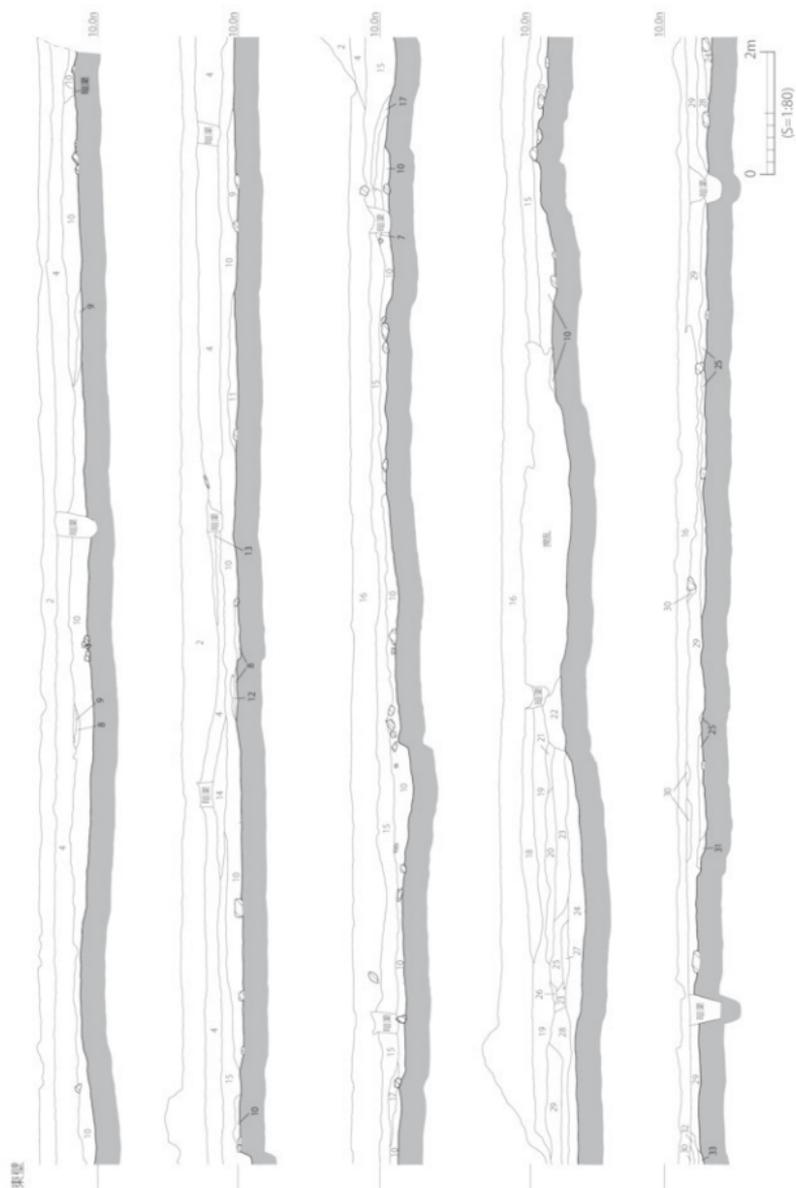
SD01は調査区北端で東西方向に延びる状況で検出した。確認できた規模は長さ15.5m、幅は2.0~4.2mと水田耕作等の影響を受けてか不整形となっている。深さは東側で約60cm、西側で約40cmを測り、底面の形状は平らに近くなっているが、底面のレベルは西側に向かって若干下っている状況が確認できる。覆土は粘質土や砂質土が混在して堆積していた。

遺物は溝上面から須恵器環1点、底面より土師器壺甕類4点、土師器高環1点が出土している。

底面出土土器の特徴からみて古墳時代前期頃の溝状遺構と推測されるものの、その用途等につ



第35図 茶臼遺跡調査区位置図・グリッド配置図

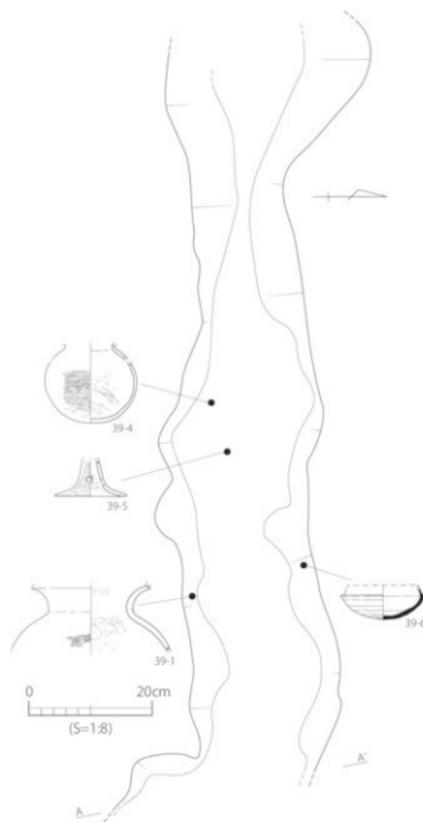


第36図 茶臼遺跡調査区セクション図1

いては把握できなかった。

SD01出土遺物 (第39図)

1は複合口縁の壺で口縁部を欠損しているが、やや横方向に突出する複合口縁の稜が残っている。2も口縁部を欠損する複合口縁の壺であるが、1より複合口縁の稜が下方に向くタイプである。3は単純口縁の甕口縁部である。4は壺頸部の胴部で球形を呈している。5は高杯脚部で脚部にはハの字形に開き、3方向の円形透孔を有する。6は溝上から出土した須恵器坏身で口縁端部を欠損している。



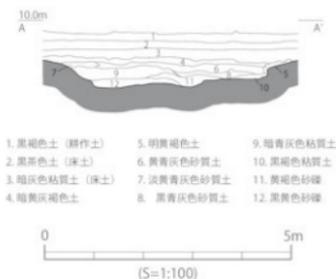
SX01 (第40図)

SX01は調査区中央西壁寄りて壁に半分かかる状態で検出した。検出された形態から平面形は楕円形状に近いものと推測される。確認できた規模は南北2.0m、東西1.5m、深さ25cmを測る。覆土は黒灰褐色粘土と暗灰白色砂層で内部には板状及び杭状の木製品が残存していたが、その用途については把握できなかった。

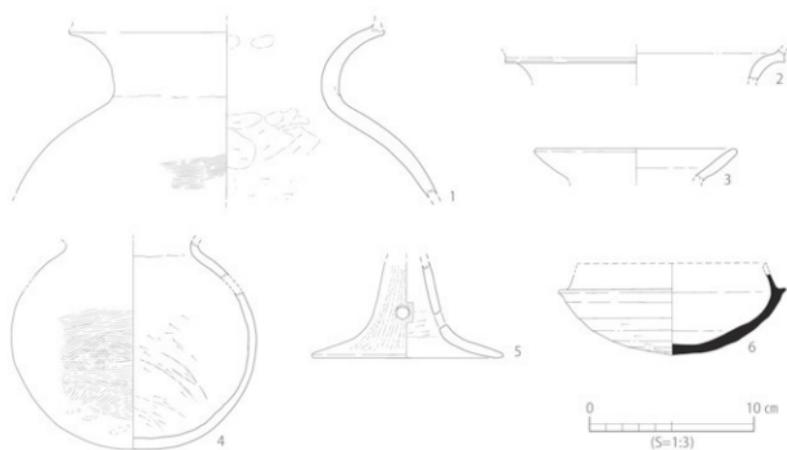
土器が出土していないため時期についても特定できないが、SRO1下層で検出したことから見れば中世以前と推測できる。

SX01出土遺物 (第41図)

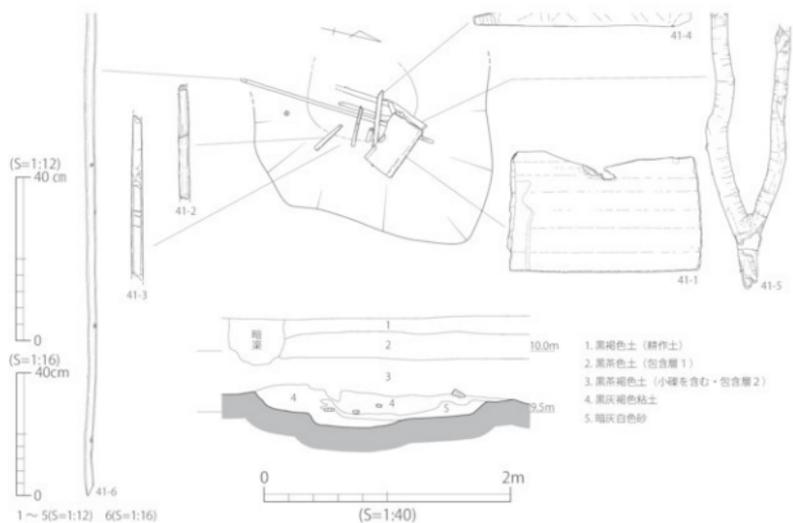
土器は認められず、いずれも木製品である。1は長方形の板状のもので、丁寧な面取りが施されている。片方の側面は「く」の字状に加工されているが、用途は不明である。2、3は細長い板状のもので両端を欠損している。何かの部材と考えられるものの判別は難しい。4も細長い棒状のものであるが、先端を加工して尖らせていることから、杭などの用途が推測できる。5は二又状の木製品で二又部分以外は枝打ちをしたものであるが、用途は不明である。6は細長い杭で先端を加工して尖らせている。



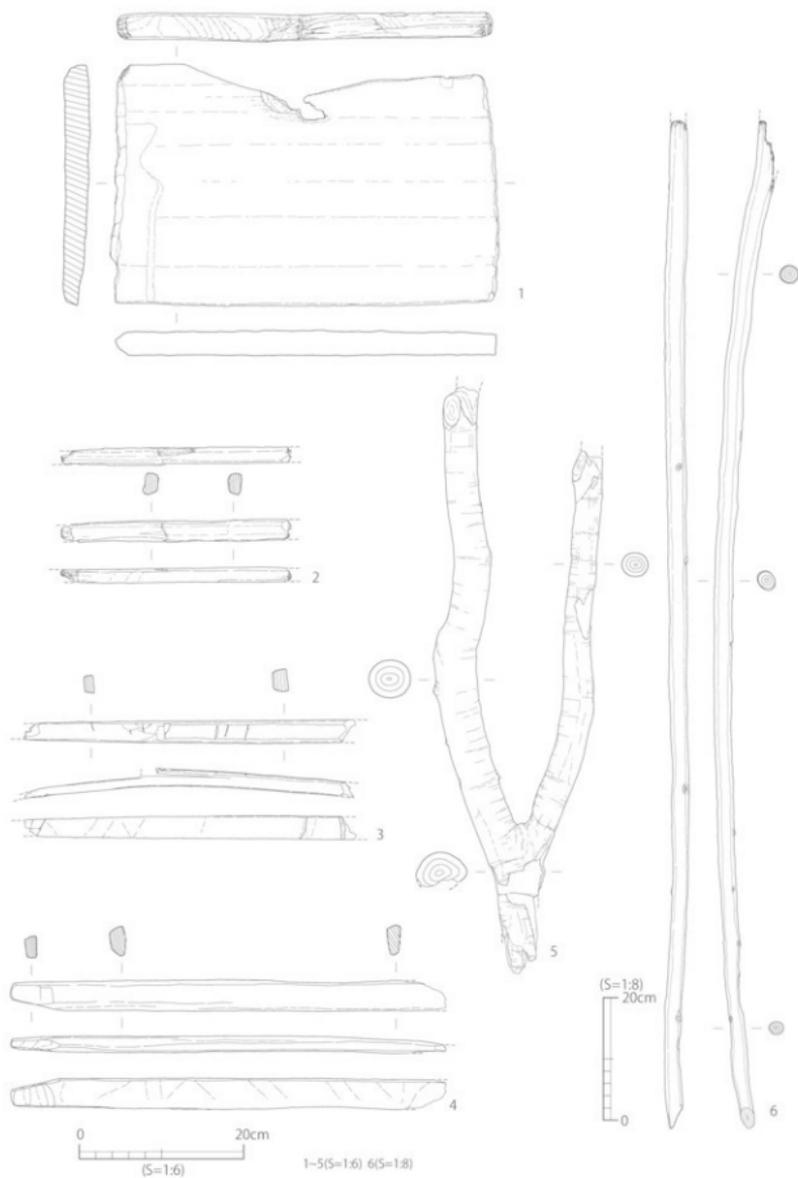
第38図 茶白遺跡SD01実測図



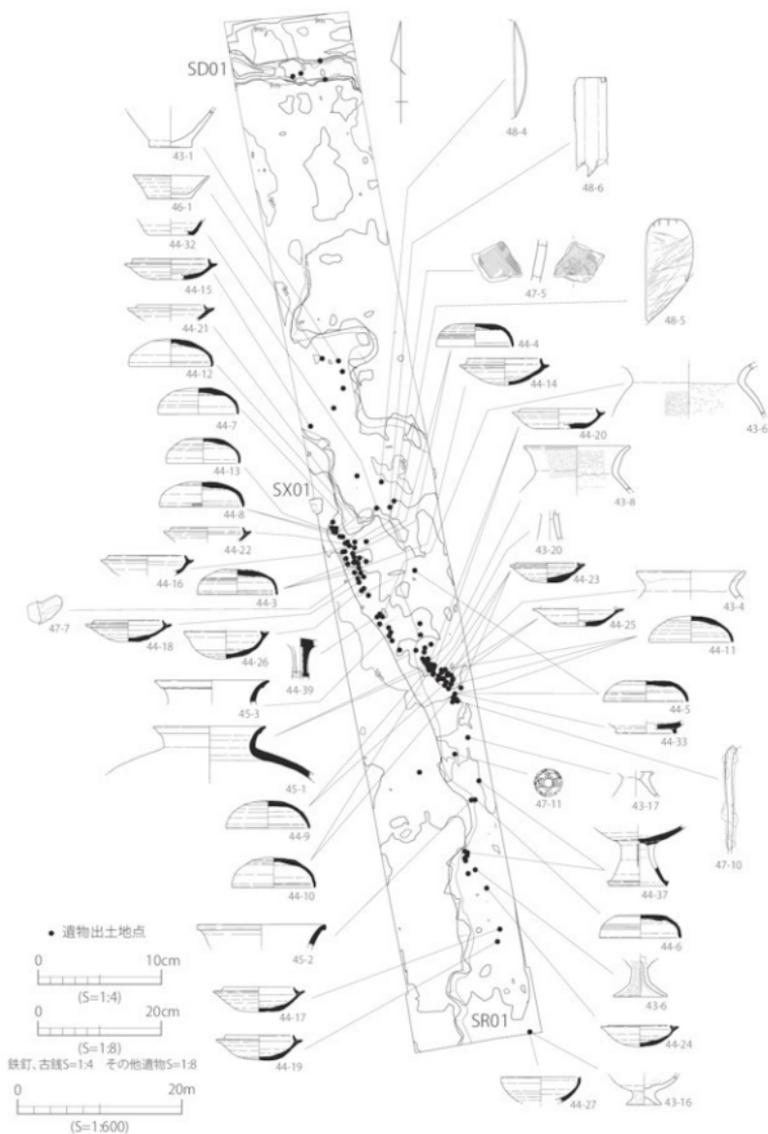
第39図 茶臼遺跡 SD01 出土遺物実測図



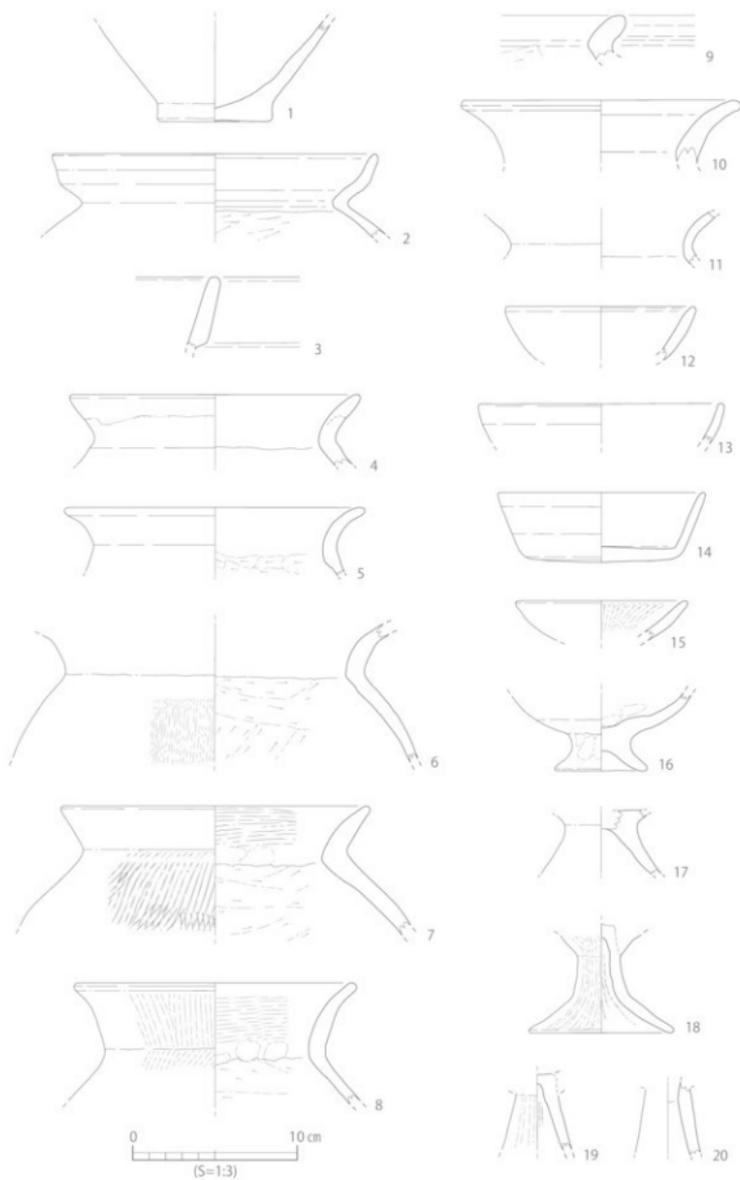
第40図 茶臼遺跡 SX01 実測図



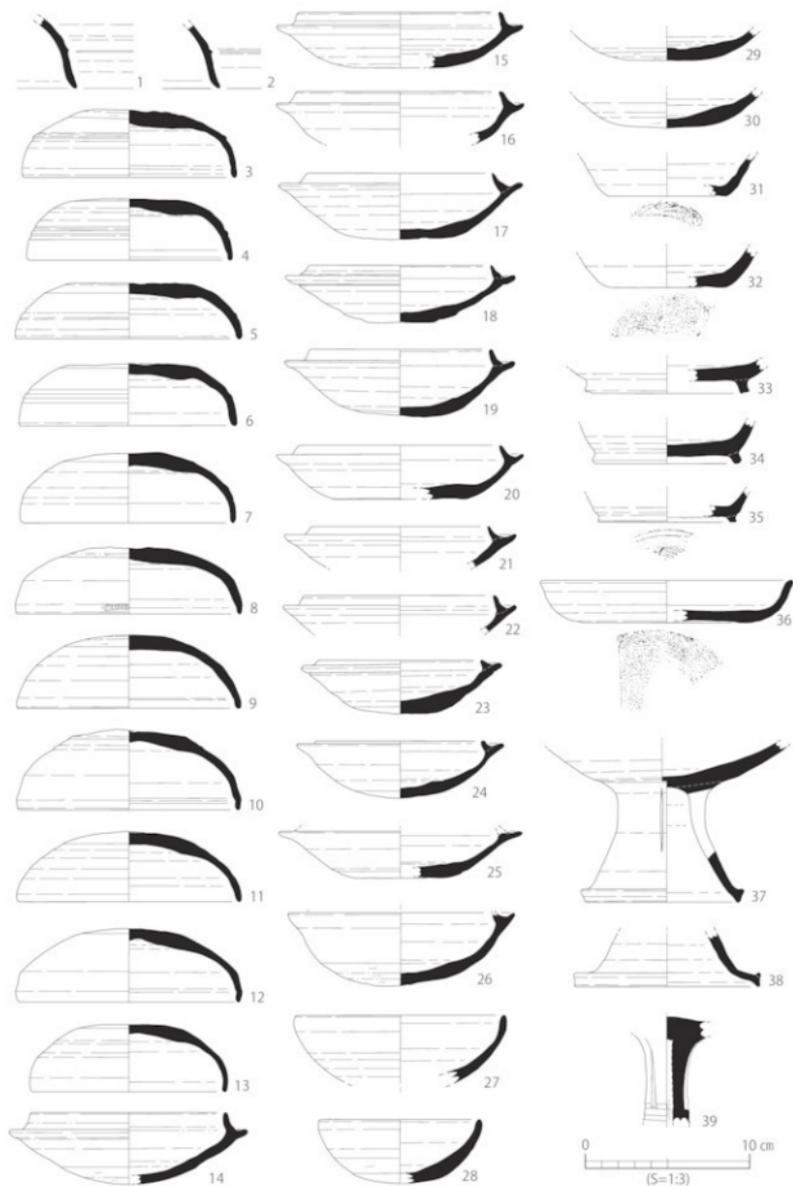
第41図 茶臼遺跡 SX01 出土遺物実測図



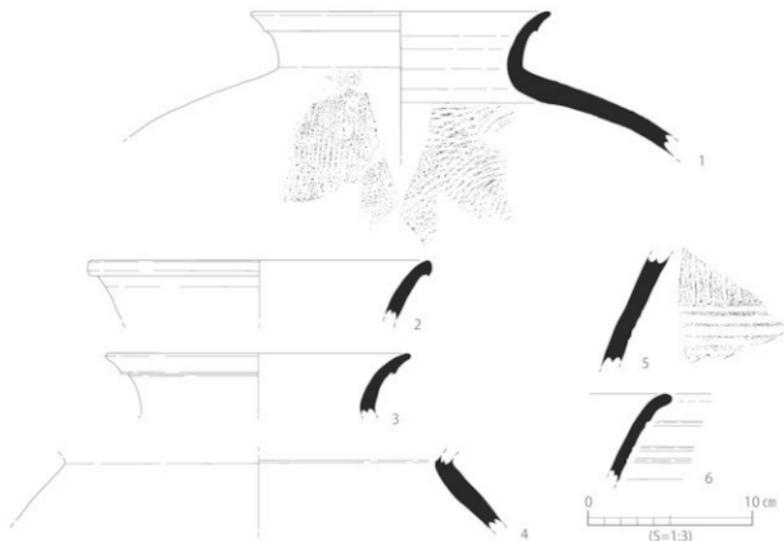
第42図 茶臼遺跡調査区全体図



第43图 茶白遺跡 SR01 出土遺物実測圖 1



第44図 茶白遺跡SR01出土遺物実測図2



第45図 茶臼遺跡SR01出土遺物実測図3

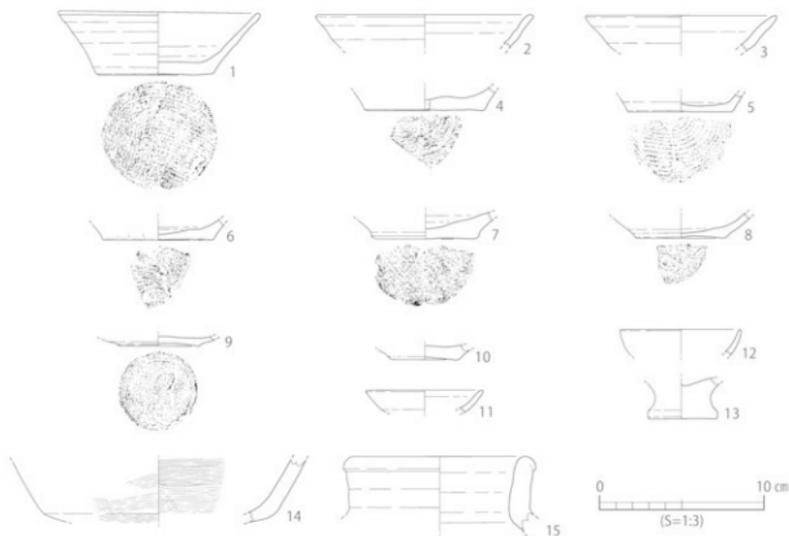
SR01 (第42図)

SR01は水田耕作により大半が削平を受けているため正確な規模は判断としないが、最大幅約18m、深さ40cm～1m程度が確認できた。調査区南端から北に向かって流れ、中央付近から西に向かって緩やかに曲がりながら調査区外に流れていくようである。覆土中に弥生時代から中世にかけての土器を含んでいることから判断すれば、中世までは川として機能し、その後埋没したものと推測される。遺物には土器のほかに石鏃や石製巡方、古銭なども出土している。

SR01出土遺物(第43～49図)

第43図の1は弥生土器、2以下は土師器である。1は壺類の底部で平底を呈している。2は退化した複合口縁を有する甕口縁部である。3も壺類の複合口縁部である。4～11は単純口縁の甕で大きく外方に屈曲するものと9のように短く屈曲するものがある。12～14は環で、12・13は内湾気味にのびる口縁部を有し、14は平らに近い底部からやや直線的に立ち上がる口縁部を持つ。15～17は低脚環である。15は外方に大きく開く口縁部をもち、16は口縁端部を欠損するが内湾気味に立ち上がる口縁部と考えられる。17はやや大きな脚部である。18～20は高脚環で、18の脚部はハの字状に開く。

第44・45図は須恵器である。第44図1～13は環蓋で1～3のように体部との境に鋭い稜を有するタイプ、4～6のように丸みをもつ稜と沈線を有するタイプとそれの無いものが存在する。8の口縁端部外面には工具痕であろうか楕円形状の刺突がある。14～32は坏身で14～26は立ち上がり有するものである。27・28は丸みをもつ体部で、31・32は平らに近い底部を有する。33～35は高台付坏で高台は低く外方にのびるものである。36は皿で口縁端部が若



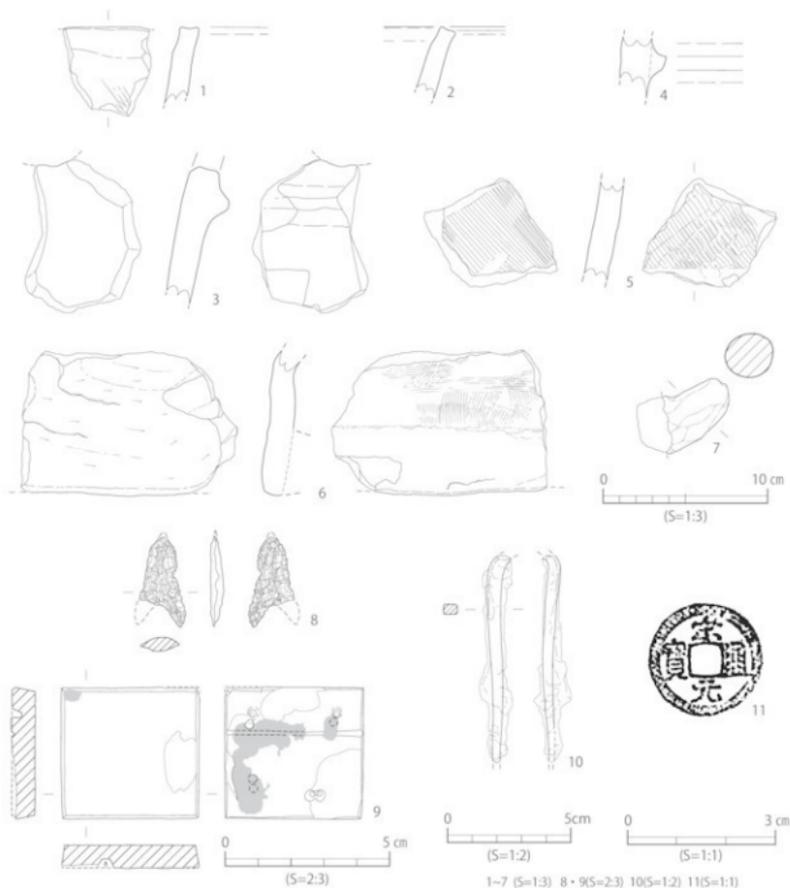
第46図 茶臼遺跡SR01出土遺物実測図4

干外反している。37～39は高坏で37は2方向の刻目状の透かし、39はおそらく長脚で3方向の2段透かしを有するものと考えられる。第45図1～6は甕で外反する口縁部を有する。

第46図1～14は土師質土器である。1～12は坏及び皿で口縁部を欠損するものが多い。底部に回転糸切り痕を残すものも認められる。13は柱状高台付坏であるが全体的に磨滅が著しい。14は器種不明であるが碗のようなものであろうか。15は中世須恵器の壺口縁部で端部は分厚く作られ丸みをもつ。

第47図1～5は円筒埴輪の破片で全体的に磨滅が著しい。1・2は口縁端部で端部中央が若干凹んでいる。3・4はタガ部分で3のタガ上方には透孔の痕跡が残る。5は比較的残りが良い個体で、内外面に斜め方向のハケ目を施しているが、外面はハケ目後、指頭圧痕で調整している。6は甕の破片で外面に底の痕跡が認められる。7は甕の把手である。8は黒曜石の石鎌である。9は石製巡方で、縦4.05cm、横4.2cm、厚さ0.7cmと大きい部類に属し、無孔で潜り孔を施している。表裏及び側面は入念に研磨されているが、部分的に金属と思われる付着物が認められ、帯に留めるための銅線が腐食したものであろうか。裏面には潜り孔が4ヶ所と板状素材時に付けたと考えられる切断用の溝が残っている。10は鉄釘で先端を欠損し、頭部はわずかに折り曲げられている。11は古銭の「宋元通寶」である。

第48図は木製品である。1は漆器碗の口縁部片で内外面に朱漆を塗布している。2は棒状製品で先端をやや尖らせている。焼痕と貫通していないが小孔が施されている。3は曲物の底板で小孔が施されている。4も曲物の底板と考えられるが黒漆が塗布されている。5は曲物の底板と思われるが、刃先痕が認められることから、まな板等に転用されたものであろう。6は折敷の側板と考えられる。7は棒状製品で両端を欠損する。8は板状のものであるが用途は不明である。

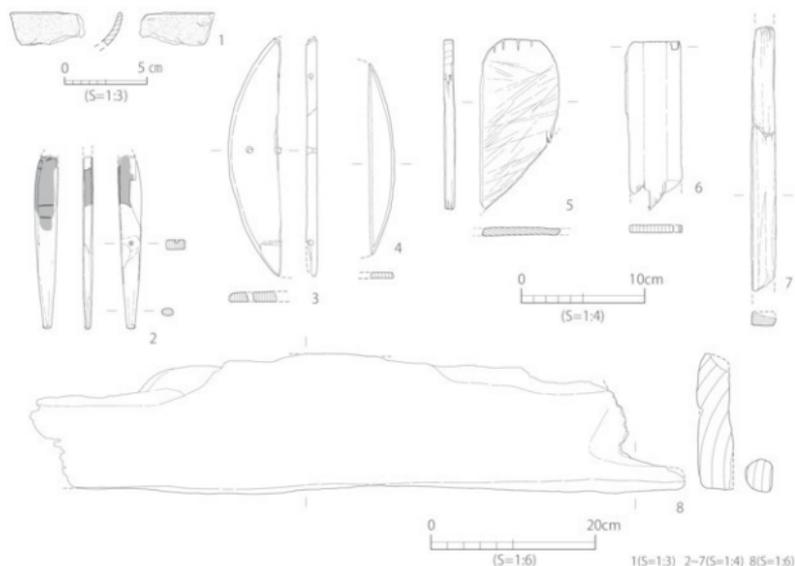


第47図 茶臼遺跡 SRO1 出土遺物実測図 5

第3節 小結

今回の調査では自然河道や水田耕作等による削平が著しく検出された遺構は極めて少なかったものの、SDO1の存在は古墳時代前期にはこの地域に集落等が営まれていたことが想定できる貴重な成果といえる。また、遺物の大半は自然河道から出土し、弥生時代～中世までと時期幅が認められるが、風土記の丘地内の特異性から石製巡方が出土していることが注意される。

鳥根県の腰帯具の出土例としては40例目、石製巡方としては8例目となり(第7表)、縦4.05cm、横4.2cmの規模のものは大型の石帯に分類され、鳥根県内では江津市波来浜遺跡出土例のものと同規模の大きさを測る。この大きさと帯幅は一致するものと指摘され、帯幅の太い細



第48図 茶臼遺跡SR01出土遺物実測図6

いは位階の違いを示しているとも考えられている。また、衣服令では、五位以上には「金銀装腰帯」、六位以下は「烏油腰帯」を着けることとされており、当遺跡出土のものは六位以下のものであることは確実であろうが、その大きさから察すれば正六位の可能性が高いと推測されよう。ただ、官衙遺跡や墓などからの出土ではないことから、この位階を有する人物像については知り得ることはできず、自然河道から出土したことについても、現時点では「廃棄」もしくは「落とし物」として理解しておきたい。

参考文献

- 『鈿帯めぐる諸問題』奈良文化財研究所 2002年
 『波来浜遺跡発掘調査報告書』江津市教育委員会 1973年

第7表 鳥根県内出土騎帯関連遺物一覧

番号	遺跡名	所在地	類別	遺構	形式	法量			備考	出典
						全体 値	厚	透孔 幅		
1	茶臼遺跡	松江市大野町	石製部方 包合層	包合層	無孔・磨り穴	4.05	0.70		黒面色付着物	鳥根県教育委員会「柳屋遺跡・茶臼遺跡・山原宮古遺跡」2016
2	団原古墳	松江市山代町	石製部方 墳丘	墳丘	無孔・磨り穴	3.65	0.70		乳白色地に黒斑、石黄砂岩	鳥根県教育委員会「風土記の丘」地内遺跡発掘調査報告書Ⅱ」1989
3	タテチョウ遺跡	松江市西川町	石製部方 包合層	包合層	無孔・棒肌	3.00	0.45		黒色粘板岩	鳥根県教育委員会「新開川河川改修工事に伴うタテチョウ遺跡発掘調査報告書Ⅱ」1990
4	白根谷遺跡	松江市法吉町	石製部方 採集品	採集品	無孔・磨り穴	4.00	0.70		乳白色地に黒斑、石黄砂岩	鳥根県教育委員会「茶臼遺跡発掘調査報告書Ⅱ」1989
5	田中谷遺跡	松江市法吉町	石製部方 包合層	包合層	無孔・棒肌	3.10	0.45		黒色粘板岩	鳥根県教育委員会「茶臼遺跡発掘調査報告書Ⅱ」1989
6	才ノ木遺跡	松江市竹ノ町	石製丸駒 遺構外	遺構外	小片のため不明	3.00	2.50	1.40	碧玉か、未製品か	鳥根県教育委員会「田中谷遺跡・塚山古墳・下がり松遺跡・所谷遺跡」2002
7	蛇喰遺跡	松江市玉湯町	鉄製長尺 区 SX01	区 SX01		3.90	5.60			鳥根県教育委員会「高志本遺跡発掘調査報告書」1984
8	神定寺遺跡	松江市八雲町西 岩坂	石製丸駒 遺構外	遺構外	無孔・磨り穴	3.00	4.50	0.80	黒色	玉湯町教育委員会「蛇喰遺跡」1999
9	庄遺跡	松江市六郷町	石製丸駒 遺構外	遺構外	無孔・磨り穴	2.40	1.40	0.70	黒色	松江市教育委員会「神定寺遺跡」2006
10	出雲国府跡	松江市大野町	石製部方 遺構外	遺構外	磨孔・磨り穴	3.50	3.80	0.60	滑石系、裏面黒面色付着物	鳥根県教育委員会「庄遺跡・深坪遺跡」2010
11	高尾遺跡	安来市里井田	銅製丸駒 N区	N区	磨孔・鉄釘?	2.35	3.85	0.41	黒粘板岩	鳥根県教育委員会「高尾遺跡発掘調査報告書」1984
12	三田谷ノ遺跡	出雲市上塩治	銅製丸駒 SD06	SD06	磨孔・粗 磨り穴?	3.02	3.35	0.63	黒粘板岩	鳥根県教育委員会「三田谷ノ遺跡」2000
13	占志本遺跡	出雲市占志町	銅製丸駒 包合層	包合層	磨孔・粗 磨り穴?	2.35	3.35	0.55	整形時の研ぎ・擦痕あり、 2ヶ所に突起、神門部突起 か	鳥根県教育委員会「占志本遺跡Ⅴ」2003
14	菅原寺遺跡	出雲市船町	石製丸駒		無孔・磨り穴	2.80	4.20	0.60	黒色頁岩	日本道路公団中国支社、鳥根県教育委員会「朝ノ前遺跡・菅原寺遺跡・クボ山遺跡・菅原寺遺跡・菅原寺遺跡・朝ノ前ノ内ノ遺跡」2005
15	矢野遺跡	出雲市大野町	石製部方 SE4027	SE4027	磨孔・磨り穴	3.10	3.40	0.50	濃緑色、仕上げ付肌、	鳥根県教育委員会「矢野遺跡」2010
16	峠谷跡大田遺跡	出雲市湖廣町	銅製丸駒 包合層	包合層	磨孔・磨り穴	2.60	4.30	0.35		鳥根県出雲県立整備事務所、出雲市教育委員会「矢野遺跡」2010
17	馬場遺跡	雲南市三月屋町 馬場	銅製丸駒 包合層	包合層	磨孔・磨り穴	3.80	4.60	0.90		湖廣町「湖廣町誌」2000
18	武穴内遺跡	雲南市三刀屋町	銅製丸駒 V区	V区	磨孔・磨り穴 磨孔	3.20	3.20	0.70	黄金属残存	鳥根県教育委員会「穴内遺跡」2009
19	神原寺遺跡	津見	銅製丸駒 SD01	SD01	磨孔・磨り穴	4.05	3.80		黒粘板岩	鳥根県教育委員会「神原寺遺跡Ⅲ」2003
20	立平丘遺跡	大田町三ノ町	石製丸駒 包合層	包合層	無孔・磨り穴	3.70	5.00	0.55	乳白色地に黒斑、石黄砂岩	鳥根県遺跡「松江市・白根谷遺跡」について「八雲及ノ風土記」の頁、No.97、鳥根県立八雲ノ風土記の頁、1989
21	波来田遺跡	江津市波来田	石製丸駒 包合層	包合層	無孔・磨り穴	2.80	4.20	0.70	乳白色地に黒斑、石黄砂岩	
22			石製丸駒 包合層	包合層	無孔・磨り穴	2.80	4.20	0.70	乳白色地に黒斑、石黄砂岩	
23			石製丸駒 包合層	包合層	無孔・磨り穴	2.80	4.10	0.70	乳白色地に黒斑、石黄砂岩	
24			石製丸駒 包合層	包合層	無孔・磨り穴	2.65	4.00	0.80	乳白色地に黒斑、石黄砂岩	
25			石製丸駒 包合層	包合層	無孔・磨り穴	4.00	4.20	0.70	乳白色地に黒斑、石黄砂岩	
26			石製丸駒 包合層	包合層	無孔・磨り穴	4.00	4.20	0.70	乳白色地に黒斑、石黄砂岩	江津市教育委員会「波来田遺跡発掘調査報告書」1973

番号	遺跡名	所在地	種別	遺構	形式	法量			透孔	備考	出典
						全体	厚	幅			
						幅	厚	幅	幅		
27	平田浜高遺跡	江津市二宮町	石製形瓦	遺構外	小片のため不明	1.75～	0.50	0.50			鳥取県教育委員会「一期国道9号江津遺跡建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書1」1995
28	人廻り遺跡	徳島県津和野町	銅製部方	遺構外	細長孔・煎?	3.70	3.50	0.30	0.30	2.90	緑色凝灰岩系
29	人廻り遺跡	徳島県津和野町	銅製部方	遺構外	細長孔・煎?	2.50	2.20	0.15	0.35	1.65	煎6方州 煎4方州
30	野化遺跡	徳島県津和野町	石製丸鍋	遺構外	無孔・煎り穴	2.80	4.40	0.70			粘板岩か
31			銅製部方	2号墳		3.80	2.90				漆付着
32			銅製部方	2号墳		(1.30)	2.30	0.12			表金具、漆付着
33			銅製部方	2号墳		2.30	0.15				表金具、漆付着
34			銅製部方	2号墳		(0.95)	2.30	0.10			黄金具、漆付着
35	大塚西遺跡	徳島県徳島の島町	銅製丸鍋	2号墳		(1.30)	2.30	0.10	0.80	1.60	黄金具
36			銅製丸鍋	2号墳		(1.05)	(2.05)	0.10	0.50	1.40	表金具
37			銅製丸鍋	2号墳		(0.40)	(1.40)	0.12			表金具、漆付着
38			銅製部方	2号墳		(1.80)	0.10				黄金具か、漆付着
39			銅製部方	2号墳		(1.85)	(0.70)	(0.08)			漆付着
40	四河遺跡	徳島県西ノ島町	銅製丸鍋	包含層	細長孔・煎?	2.40	3.80	0.90	0.40	2.50	漆付着

第8表 茶臼遺跡出土土器観察表

検出 番号	遺物 番号	写真 図版	種類	器種	出土 地点	層位	口径 (cm)	その他の 寸法 (cm)	残存率 (%)	胎土	形態・文様 の特徴	色調	備考
39	1	39	土師器	甕	SD01	1			50	黒(1~2mmの砂粒を多く含む)	外:浅黄緑 7.5YR8/6 内:浅黄緑 10YR8/4		
39	2	39	土師器	甕	SD01	1			小片	黒(1mm以下の砂粒を少量含む)	内:黄緑 10YR7/2		
39	3	39	土師器	甕	SD01	1	(12.4)		15	黒(0.5mmの砂粒を少量含む)	灰白 2.5YR/2		
39	4	39	土師器	甕	SD01	2		底部 3.0	50	黒(0.5~1mmの砂粒を多く含む)	底部残存あり 外:浅黄緑 10YR8/3 内:黄緑 10YR7/3		
39	5	39	土師器	高坏	SD01	1		底径 11.6	50	黒(0.5~1.5mmの砂粒をやや多く含む)	円形透孔 3ヶ所 外:浅黄 2.5Y/2 内:浅黄緑 10YR8/3		
39	6	39	陶器	坏身	SD01	1			ほぼ 完存	黒(1~3mmの砂粒を少量含む)	外:黄緑 5YR7/1 内:白 N7		
43	1	40	赤土器	甕	B5	2		底径 7.0	50	黒(0.5~3mmの砂粒をやや多く含む)	内外赤褐色 外:橙 5YR7/6 内:橙 5YR6/6		
43	2	40	土師器	甕	D11	2	(19.8)		15	黒(0.5~1.5mmの砂粒を多く含む)	外:黄緑 10YR8/3 内:黄緑 2.5Y6/3		
43	3	40	土師器	甕	C2	1			小片	黒(0.5~1.5mmの砂粒を少量含む)	橙 5YR7/6		
43	4	40	土師器	甕	D9	2	(17.6)		25	黒(1~2mmの砂粒を多く含む)	浅黄緑 10YR8/3		
43	5	40	土師器	甕	D9	2	(18.3)		15	黒(1~1.5mmの砂粒を多く含む)	外:黄緑 10YR7/3 内:浅黄緑 10YR8/3		
43	6	40	土師器	甕	C8	2			25	黒(1~2mmの砂粒を少量含む)	外:黄緑 10YR7/2 内:黄 2.5Y/2		
43	7	40	土師器	甕	E13	1	(18.8)		15	黒(0.5~1.5mmの砂粒を多く含む)	外:黄緑 10YR7/3 内:黄緑 10YR7/2		
43	8	40	土師器	甕	C9	2	(17.2)		15	黒(0.5~1mmの砂粒を多く含む)	黄緑 10YR7/3		
43	9	40	土師器	甕	D11	2			小片	黒(0.5~3mmの砂粒を非常に多く含む)	外:黄緑 10YR5/3 内:黄緑 10YR6/4	内外:黒付着	
43	10	40	土師器	甕	C10	1	(17.0)		15	黒(1~1.5mmの砂粒を多く含む)	内:赤褐色 外:黄緑 10YR8/2 内:黄緑 10YR7/3		
43	11	40	土師器	甕	B7	2			小片	黒(0.5~1mmの砂粒を多く含む)	外:浅黄 2.5Y7/4 内:浅黄 2.5Y7/3		
43	12	40	土師器	36 or 甕	C7	2	(11.4)		10	黒(0.5~1mmの砂粒を少量含む)	黄灰 2.5Y5/1	外:黒付着	
43	13	40	土師器	坏	C5	2	(15.0)		小片	黒(0.5mmの砂粒を少量含む)	外:浅黄 2.5Y7/4 内:橙 5YR7/6	内:赤彩	
43	14	41	土師器	坏	D13	(12.4)	器高 4.3 底径 7.3		25	黒(0.5~1.5mmの砂粒を少量含む)	底部回転へら切り後ナデか 灰白 10YR5/1	外:黒付着	
43	15	40	土師器	低脚坏	C8	1	(12.4)		15	黒(0.5mm以下の砂粒をわずかに含む)	黄 2.5YR/3		
43	16	41	土師器	低脚坏	D13	1		底径 5.6	50	黒(0.5~1mmの砂粒をやや多く含む)	外:灰白 2.5YR/2 内:浅黄 2.5YR/3		
43	17	40	土師器	高坏	D10	2			50	黒(1mm以下の砂粒を少量含む)	外:浅黄 2.5Y7/4 内:浅黄 2.5Y7/3		
43	18	41	土師器	高坏	D11	2		底径 8.8	50	黒(0.5mmの砂粒をわずかに含む)	外:黄緑 10YR7/3 内:浅黄緑 7.5YR8/3	内外:赤彩	
43	19	40	土師器	高坏	C6	1			小片	黒(1mm以下の砂粒を少量含む)	浅黄緑 7.5YR8/6		
43	20	40	土師器	高坏	C9	2			脚部のみ	黒(1~2mmの砂粒を多く含む)	外:黄緑 10YR7/4 内:黄緑 10YR6/4		
44	1	43	陶器	坏蓋	C7	2			小片	黒(0.5~1mmの砂粒を少量含む)	灰 N6/6		
44	2	43	陶器	坏蓋	D8	1			小片	黒(1mmの砂粒をわずかに含む)	灰 N7/7		
44	3	41	陶器	坏蓋	B6 B7	2	(13.0)	器高 4.1	25	黒(1mm以下の砂粒をやや多く含む)	底部回転へら切り後ナデ 外:灰 N6/6 ~ 5/ 内:灰 N6/6		
44	4	41	陶器	坏蓋	B7 C6 C7	2	(12.2)	器高 3.75	25	黒(0.5~1mmの砂粒を少量含む)	底部回転へら切り後ナデ 外:灰 N7/7 内:灰 N6/6		
44	5	41	陶器	坏蓋	C7 D8 D9	2	(13.6)	器高 3.4	25	黒(1mm以下の砂粒をわずかに含む)	灰白 N7/7		
44	6	41	陶器	坏蓋	D10 D11	2	(13.1)	器高 3.8	50	黒(1.5mm以下の砂粒を多く含む)	底部回転へら切り後ナデ 灰白 N7/7		
44	7	43	陶器	坏蓋	B7	2	(12.8)	器高 4.35	50	黒(1~2mmの砂粒を多く含む)	底部回転へら切り後ナデ 灰白 N7/7		
44	8	41	陶器	坏蓋	B7	2	(13.8)	器高 4.1	15	黒(0.5mmの砂粒を少量含む)	外:口縁に工具痕あり 外:灰 7.5Y7/1 内:灰 5Y7/1		
44	9	43	陶器	坏蓋	C7 C9 D8 D9	2	(13.6)	器高 4.5	25	黒(1mm以下の砂粒を少量含む)	灰白 N7/7		
44	10	41	陶器	坏蓋	C9 D9	2	(13.3)	器高 4.95	30	黒(0.5~1mmの砂粒を少量含む)	底部回転へら切り後ナデ 外:灰 5Y7/1 内:灰 2.5Y7/1		
44	11	41	陶器	坏蓋	D9	2	(13.5)	器高 4.3	25	黒(1mmの砂粒を少量含む)	底部回転へら切り後ナデ 外:灰 N4/4 内:灰 N6/6	横さびみが激しい	
44	12	42	陶器	坏蓋	B7 C6	2	(13.3)	器高 4.5	25	黒(1mm以下の砂粒を多く含む)	底部回転へら切り後ナデ 灰白 N7/7		
44	13	42	陶器	坏蓋	B7	2	(11.7)	器高 4.1	25	黒(0.5~1.5mmの砂粒を少量含む)	底部回転へら切り後ナデ 灰 N6/6		
44	14	43	陶器	坏身	C7	2	(12.0)	器高 4.4	25	黒(0.5~2mmの砂粒を少量含む)	灰白 5Y7/1		
44	15	43	陶器	坏身	B6	2	(12.0)	器高 3.4	25	黒(0.5~1mmの砂粒を少量含む)	外:黄灰 2.5Y7/2 ~ 内:黄緑 10YR7/4 内:黄緑 2.5YR8/4		
44	16	43	陶器	坏身	B7	2	(12.4)		25	黒(0.5mmの砂粒を少量含む)	灰白 N7/7		

第4章 茶臼遺跡

種別 番号	遺物 番号	写真 図説	種別	器種	出土 地点	層位	口径 寸法 (cm)	その他の 寸法 (cm)	残存率 (%)	胎土	形態・文様の 特徴	色調	備考
44	17	42	須恵器	坏身	D12	2	11.3	器高 4.0	50	密(1～3mmの砂粒を少量含む)	底部回転へら切りの残ナデ	外: 灰白 N6/ 内: 灰白 N7/	外一箇所すく自然輪が分かる
44	18	43	須恵器	坏身	C8	2	(11.1)	器高 3.5	25	密(1mmの砂粒をやや多く含む)	底部回転へら切りの後未調整か	灰白 N7/	外・自然輪が分かる
44	19	42	須恵器	坏身	D12	2	11.0	器高 4.45	ほぼ 完存	密(1mm以下の砂粒を多く含む)	底部回転へら切りの残ナデ	灰白 N7/	やや焼け具合
44	20	42	須恵器	坏身	C9	2	(12.2)	器高 3.3	25	密(0.5～1.5mmの砂粒を少量含む)	底部回転へら切りの残ナデ	灰白 5Y7/1	
44	21	43	須恵器	坏身	B7	2	(10.7)		15	密(1mm以下の砂粒を少量含む)	底部回転へら切りの残ナデ	外: 灰白 5Y7/1 内: 灰白 2.5Y7/1	
44	22	43	須恵器	坏身	B7	2	(11.4)		15	密(1mm以下の砂粒を少量含む)	底部回転へら切りの残ナデ	灰白 N7/	
44	23	42	須恵器	坏身	D9	2	9.9	器高 4.3	50	密(1～1.5mmの砂粒を多く含む)	底部回転へら切りの残ナデ	灰白 N7/	
44	24	43	須恵器	坏身	D11	2	(10.1)	器高 3.5	25	密(1～2mmの砂粒を多く含む)	底部回転へら切りの残ナデ	灰白 N7/	
44	25	43	須恵器	坏身	D9	2			25	密(1mm以下の砂粒を少量含む)	底部回転へら切りの残ナデ	外: 灰白 N7/ 内: 灰白 N6/	焼成やや不良
44	26	43	須恵器	坏身	C8	2			25	密(0.5～1mmの砂粒を少量含む)	底部回転へら切りの残ナデ	外: 灰白 N8/ 内: 灰白 5Y7/1	
44	27	43	須恵器	坏身	D13	1	(12.8)		15	密(0.5mmの砂粒をわずかに含む)		灰白 N6/	
44	28	42	須恵器	坏身	C12 E13	2	(10.0)	器高 3.9	50	密(1mm以下の砂粒を少量含む)		灰白 N7/	
44	29	43	須恵器	坏身	B7	2			50	密(1mm以下の砂粒を少量含む)	底部回転へら切りの後周縁を回転へらで削り	灰白 N6/	
44	30	44	須恵器	坏身	C6 D9	2			50	密(0.5～2mmの砂粒を少量含む)	底部回転へら切りの後周縁を削り	外: 灰白 N7/ 内: 灰白 N6/	
44	31	44	須恵器	坏身	C7	2		底径(7.3)	25	密(1～1.5mmの砂粒を少量含む)	底部回転系切り	灰白 N7/	
44	32	44	須恵器	坏身	D12	2		底径(7.0)	25	密(0.5～1.5mmの砂粒を多く含む)	底部回転系切り	灰白 N6/	
44	33	44	須恵器	高台 付坏	D9	2		底径(10.0)	15	密(1～2mmの砂粒を少量含む)		外: 灰白 N7/ 内: 灰白 10Y7/1	底部～外面にかけて自然輪が分かる
44	34	44	須恵器	高台 付坏	C6	2		底径(8.6)	10	密(1mm以下の砂粒をわずかに含む)	底部回転系切り 残ナデか	外: 灰白 5Y7/1 内: 灰白 7.5Y8/1	焼成やや不良
44	35	44	須恵器	高台 付坏	C7	2		底径(8.3)	10	密(1mmの砂粒をわずかに含む)	底部回転系切り	外: 灰白 N6/ 内: 灰白 N7/	
44	36	42	須恵器	皿	A2 A3 B2	2	(15.2)	器高 2.6 底径(9.5)	25	密(1mmの砂粒を少量含む)	底部回転系切り	外: 黄灰 5B6/1 内: 灰白 N5/	
44	37	42	須恵器	高坏	D10 D11	2		底径 9.2	50	密(1～2mmの砂粒を多く含む)	刀子状の工具による切込み状の透孔2カ所	外: 灰白 7.5Y8/1 内: 灰白 5Y8/1	内面重ね焼きの痕跡あり
44	38	44	須恵器	高坏	D13	2		底径(11.1)	25	密(0.5～1mmの砂粒を少量含む)		灰白 N5/	
44	39	44	須恵器	高坏	C8	2				脚部(四部)のみ	注輪、二箇三方 三角形透孔(透孔は貫通しない)	外: 灰白 N6/ 内: 灰白 N4/	
45	1	42	須恵器	甕	C9	2	(18.2)		15	密(1mmの砂粒を少量含む)	平行タタキ、同心円文当具痕		口縁の内外面に自然輪が分かる
45	2	44	須恵器	甕	D10	2	(20.6)		25	密(1mm以下の砂粒をわずかに含む)		灰白 7.5Y7/1	口縁の内外面に自然輪が分かる
45	3	44	須恵器	甕	B7 C8	2	(18.6)		15	密(0.5mmの砂粒を少量含む)		外: 灰 10Y6/1 内: 灰 7.5Y6/1	
45	4	44	須恵器	甕	C10	2			小片	密(1mm以下の砂粒をわずかに含む)		灰白 N5/	
45	5	44	須恵器	甕	B2	1			小片	密(0.5mm以下の砂粒をわずかに含む)	破状文、洗痕	外: 灰白 N7/ 内: 灰白 N6/	外面に自然輪が分かる
45	6	44	須恵器	甕	C10	2			小片	密(0.5～1.5mmの砂粒を少量含む)	注輪	外: 灰 10Y4/1 内: 灰 5Y6/1	
46	1	42	土師質土器	坏	B5	2	12.2	器高 3.95 底径 7.1	75	密(1～2mmの砂粒をやや多く含む)	底部静止系切り	外: 浅黄緑 10YR8/3 内: 橙 5YR7/6	
46	2	45	土師質土器	坏	C7	2	(13.0)		15	密(0.5mmの砂粒をやや多く含む)		外: 灰 2.5Y7/2 内: 黄黒 2.5Y3/1	
46	3	45	土師質土器	坏	D11	1	(11.6)		小片	密(0.5mmの砂粒を少量含む)		灰白 10YR8/2	
46	4	45	土師質土器	坏	C8	2		底径(7.4)	15	密(0.5～2mmの砂粒を多く含む)	底部回転系切り	外: 黄灰 2.5Y8/3 内: 黄灰 2.5Y8/4	
46	5	45	土師質土器	坏	D13	1		底径 6.4	50	密(0.5mmの砂粒をわずかに含む)	底部回転系切り	灰黄 2.5Y7/3	
46	6	45	土師質土器	坏	B6	2		底径(6.8)	25	密(0.5～1mmの砂粒をやや多く含む)	底部回転系切り	灰白 2.5Y8/2	
46	7	45	土師質土器	坏	D10	2		底径(6.5)	30	密(0.5～1.5mmの砂粒を多く含む)	底部回転系切り	灰白 2.5Y8/2	
46	8	45	土師質土器	坏	C7	2		底径(5.4)	25	密(0.5mmの砂粒をごくわずかに含む)	底部回転系切り	外: ぶい・橙 7.5YR7/4 ～浅黄緑 10YR8/3 内: ぶい・橙 7.5YR7/4	
46	9	45	土師質土器	坏	C7	2		底径 5.0		密(1mm以下の砂粒を多く含む)	底部回転系切り	橙 5YR7/6	
46	10	45	土師質土器	坏	D11	1		底径 4.0		密(1mm以下の砂粒を少量含む)	削滅	灰白 2.5Y8/2	
46	11	45	土師質土器	坏	C7	1	(7.6)		小片	密(0.5mmの砂粒をわずかに含む)		外: 浅黄緑 7.5YR8/4 内: 橙 5YR7/6	
46	12	45	土師質土器	坏	D13		(7.4)		小片	密(1mm以下の砂粒を少量含む)		外: ぶい・黄緑 7.5YR7/4 内: 橙 7.5YR7/6	

採回 番号	遺物 番号	写真 図版	種別	器種	出土 地点	層位	口径 (cm)	その他の 寸法 (cm)	残存率 (%)	胎土	形態・文様の 特徴	色調	備考
46	13	45	土師質土器	柱状高台(小片)	C13	1		底径(4.2)	50	密(0.5～1mmの砂粒を少量含む)	消滅	浅黄緑 10YR8/4	
46	14	45	中世土師器	不明	C6	2			小片	密(0.5mmの砂粒を少量含む)		外: 灰黄 2.5Y7/2 内: 灰白 5Y7/2	外: 黒い付着物あり
46	15	45	中世須恵系陶	甕	C10	1	(10.5)		10	密(1mmの砂粒を多く含む)	内: 当具痕か	外: 灰黄/内: 黄緑 2.5Y5/1	口縁に自然釉がかかる
47	1	45	埴輪	円筒埴輪	D8	1			小片	密(0.5～2mmの砂粒を多く含む)		外: 灰黄 7.5YR7/4 内: 灰白 10YR7/3	
47	2	45	埴輪	円筒埴輪	C2	1			小片	密(0.5～1mmの砂粒を多く含む)	消滅	外: 緑 5YR7/6 内: 灰白 10YR6/1	
47	3	45	埴輪	円筒埴輪	B1	1			小片	密(1～5mmの砂粒を多く含む)	消滅	外: 浅黄緑 10YR8/3 内: 淡黄 2.5Y8/3	
47	4	45	埴輪	円筒埴輪	B1	1			小片	密(1～4mmの砂粒をやや多く含む)	内: 消滅	外: 緑 5YR7/6 内: 浅黄緑 2.5YR8/6	
47	5	45	埴輪	円筒埴輪	C7	2			小片	密(0.5～1mmの砂粒を多く含む)		外: 浅黄緑 2.5YR8/3 内: 灰白 10YR7/1	
47	6	45	土製品	甕	A2	1			小片	密(0.5～1.5mmの砂粒を多く含む)		外: 明黄緑 10YR6/6 内: 灰黄緑 10YR6/4	
47	7	45	土師器	甕	C7	2			把手のみ	密(0.5～1.5mmの砂粒を多く含む)		外: 浅黄 2.5Y7/3 内: 灰黄緑 10YR7/3	一部破片着

第9表 茶臼遺跡出土木製品観察表

採回 番号	遺物 番号	写真 図版	種別	器種	出土 地点	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	形態・文様の 特徴	木取り	備考
41	1	39	不明	板状製品	SX01		42.6	29.6	3.2	挟りあり	梃目	
41	2	39	部材	棒状製品	SX01		(28.0)	2.6	1.7	加工痕あり	梃目	
41	3	39	部材	棒状製品	SX01		(40.5)	2.8	1.8	工具痕あり	梃目	
41	4	39	部材	棒状製品	SX01		(53.8)	3.7	1.55 (最大)	先端加工で尖る	梃目	
41	5	39	不明		SX01		(71.65)	9.5 (最大)	4.6 (最大)	二又部分以外は枝打ちをしている 樹皮残存	丸太	
41	6	39	部材	棒状製品	SX01		(164.3)	3.1	3.4	先端加工で尖る。枝打ち。	丸太	
48	1	46	蓋部	漆器桶	C10	1	(2.0)	(4.55)	0.4	内外面朱漆 口縁部は使用により剥離	横木取り	
48	2	46	部材	棒状製品	C10	1	(14.15)	1.85	0.85	3.0×3.5mmの孔1つ。先端やや尖る。 横痕あり。曲物底板を転用か	梃目	
48	3	46	容器	曲物底板か蓋	C13		(19.4)	(4.05)	0.9	径5.5mm、径4mmの孔1つずつ。 縦筋痕あり。	梃目	
48	4	46	容器	曲物	C6	2	(15.7)	(2.1)	0.5	表面黒塗	梃目	
48	5	46	部材		B7	2	13.8	(6.4)	0.7	曲物を転用。笠丁痕あり。	梃目	
48	6	46	容器	煎敷	C7	2	(13.8)	4.5	0.6	8.5×5.0mmの方形孔1つ	梃目	
48	7	46	部材か	棒状製品	D13	1	(21.7)	2.0	1.2		梃目	
48	8	46	部材	板状製品	C9	2	(79.3)	16.6	4.3	表面加工は不明	梃目	

第10表 茶臼遺跡出土鉄製品・石製品・古銭観察表

採回 番号	遺物 番号	写真 図版	種別	出土地点	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
47	10	46	鉄釘か	D9	2	(8.45)	5.50	4.00		頭部わずかに折り曲がる
47	8	46	石鏝	C8	2	2.70	1.40	0.40	0.89	黒曜石。凹縁式。欠損あり
47	9	46	石製端方	B7	2	4.05	4.05	0.70	28.99	溝り穴4ヵ所。幅1～2mm・深さ0.5mmの切断面用溝あり。全周縁状のものが見える
47	11	46	宋通元貨	D10	1	直径(A) / 直径(B) 2.35 / 2.36	内径(C) / 内径(D) 1.84 / 1.85	0.8～0.9	2.14	北宋。初鑄年960年

第5章 川原宮Ⅱ遺跡

第1節 調査の経過

現地調査は、委託者である島根県土木部の都合により、調査対象区域をA区及びB区の二調査区に分け、工期も前期A区(6月9日～10月3日)、後期B区(9月22日～12月25日)の二期に分けて連続して実施した。

A区の調査は、平成26年6月9日から重機による表土掘削を開始し、水田耕作土(後述1層)と水田床土(後述2層)の除去を行い、6月17日にこの工程を終了した。掘削土量の測量検査確認を経て、6月23日からA区南端から遺物包含層(後述3層)の人力による掘削に着手した。遺物出土状況の測量、実測や写真撮影を行いながら、地山あるいは遺構面近くまで達し、7月28日に終了した。7月30日から遺構検出作業を開始した。自然河道1条、土坑、ピット131基を検出し、調査区各壁セクション、遺構上端検出状況等の測量、実測、写真撮影を行い、9月2日に終了した。翌9月3日からは、遺構掘削の作業を開始した。遺構ごとの土層セクション、遺物出土状況、完掘状況等の測量、実測、写真撮影を行いながら、9月19日にA区全体の空中写真撮影を実施し、9月29日に検査を行ってA区の発掘調査にかかる掘削土量を確定した。その後、必要な補則を行って、10月3日A区の調査を終了した。なお、同日A区南壁(粘土採掘坑SK67上)で自然化学分析のための分析試料を採取した。また、この間9月24日には元島根県教育次長の勝部昭氏(島根県文化財保護審議委員)によるA区全般の調査指導を受けている。

B区の調査は、当初、A区の遺構掘削段階と工程が重複する形で開始した。平成26年9月22日に重機による表土掘削を開始し、水田耕作土(後述1層)と水田床土(後述2層)の除去を行い、9月26日にこの工程を終了した。掘削土量の測量検査確認を経て、10月7日からB区東側から遺物包含層(後述3層)の人力による掘削に着手した。遺物出土状況の測量、実測や写真撮影を行いながら、地山あるいは遺構面近くまで達し、11月6日に終了した。11月7日に遺物包含層掘削の土量を検査確認して確定した後、11月10日から遺構検出作業を開始した。遺構検出作業では、自然河道2条、土坑、ピット177基を検出し、調査区各壁セクション、遺構上端検出状況等の測量、実測、写真撮影を行った。また、B区の発掘調査においては、11月11日から、遺構検出が終わった区域から順次遺構掘削の作業を並行して進めた。遺構ごとの土層セクション、遺物出土状況等の測量、実測、写真撮影を行いながら、11月21日には遺構検出、遺構掘削とも作業を終了した。11月27日にはB区の空中写真撮影を行った。そして、12月5日にはB区の掘削土量を測量検査確認して確定させたが、のちに、B区西壁沿いに断削トレンチを掘削することとなり、別途作業工程を組んで実施した。この後、遺構の実測、写真撮影、完掘状況の地形測量等を実施して、12月25日にB区の調査を終了した。この間、11月27日と12月11日には元島根県教育次長の勝部昭氏(島根県文化財保護審議委員)、12月3日と12月11日には島根大学法文学部教授大橋泰夫氏(島根県文化財保護審議委員)、12月12日には島根県出雲市市民文化部学芸調整官花谷浩氏(出雲弥生の森博物館)、12月22日には長崎外国語大学外国語学部教授木本雅康氏の調査指導を受けている。12月24日には第6章自然化学分析を執筆した渡邊正巳氏が断削の状況や、調査の最終的な状況を観察確認されている。

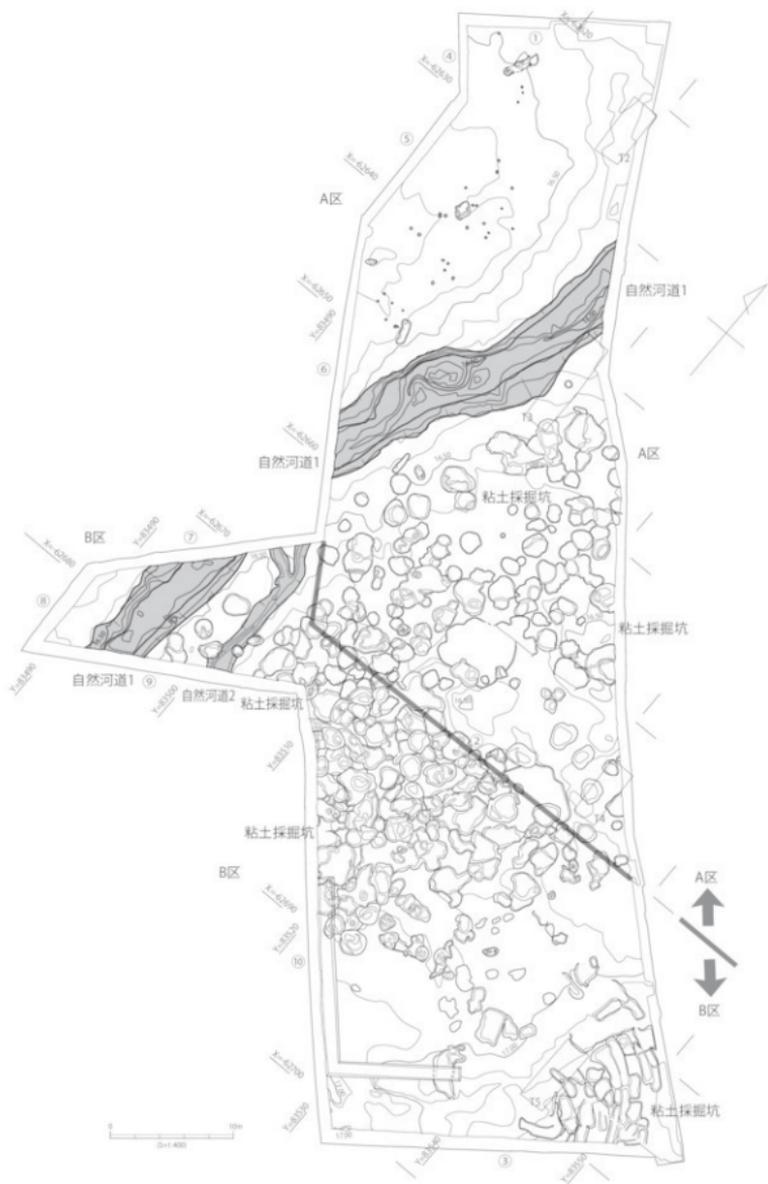


第49図 川原宮Ⅱ遺跡調査区配置図(S=1/1,000)

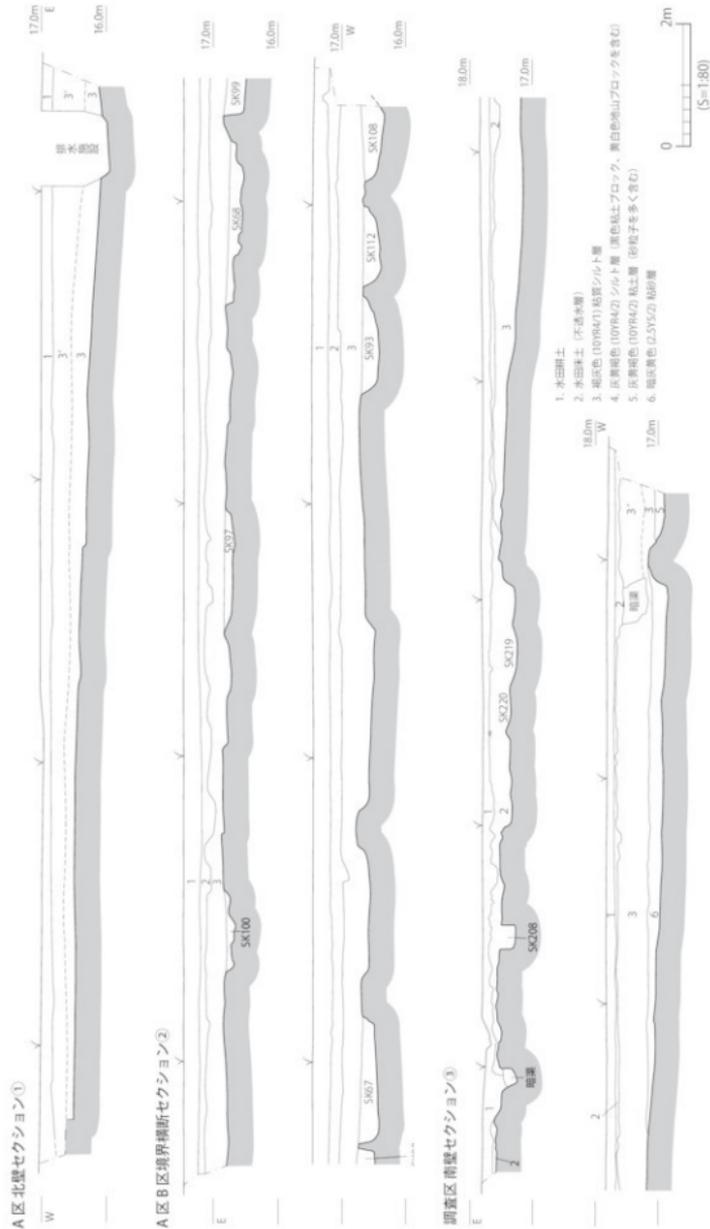
第2節 調査の概要

国道432号の大庭バイパス建設事業では、ほぼ南北に延伸する道路建設予定地及びその周辺について、平成20年度から試掘確認調査及び本調査を実施してきた。北から概観すると、馬橋川近くの山代町鼻曲から大庭鶴塚の西、山代郷正倉跡の西を経て黒田畦近辺まで調査したことになる。平成26年度本調査した川原宮Ⅱ遺跡は、国道432号沿いの南北に延びる開析谷に立地する。遺跡の北辺は、東の山代郷正倉跡のある微高地と西の東淵寺古墳のある低丘陵に挟まれて一旦タコつば状にすぼまった後、北に向かってまた大きく広がる地形となり柳堀遺跡へと続く。近年の圃場整備による削平や、河川流路の整理などで、大きな地形的改变を受けているものと考えられる。

発掘調査は、前年度試掘確認調査で遺物包含層と遺構が確認された遺跡範囲の中で、嵩上げされる道路の用地全幅で調査区を設定して実施した。調査対象面積は2,500㎡であったが、諸般の事情



第50图 川原宮Ⅱ遺跡遺構平面図1(S=1/400)



第51図 川原宮Ⅱ遺跡調査区セクション図 1(S=1/80)

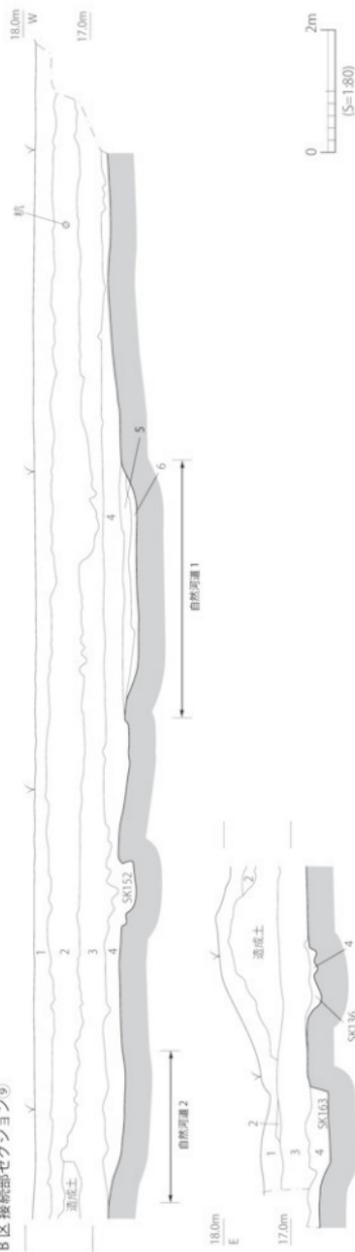
B区接続部セクション⑦



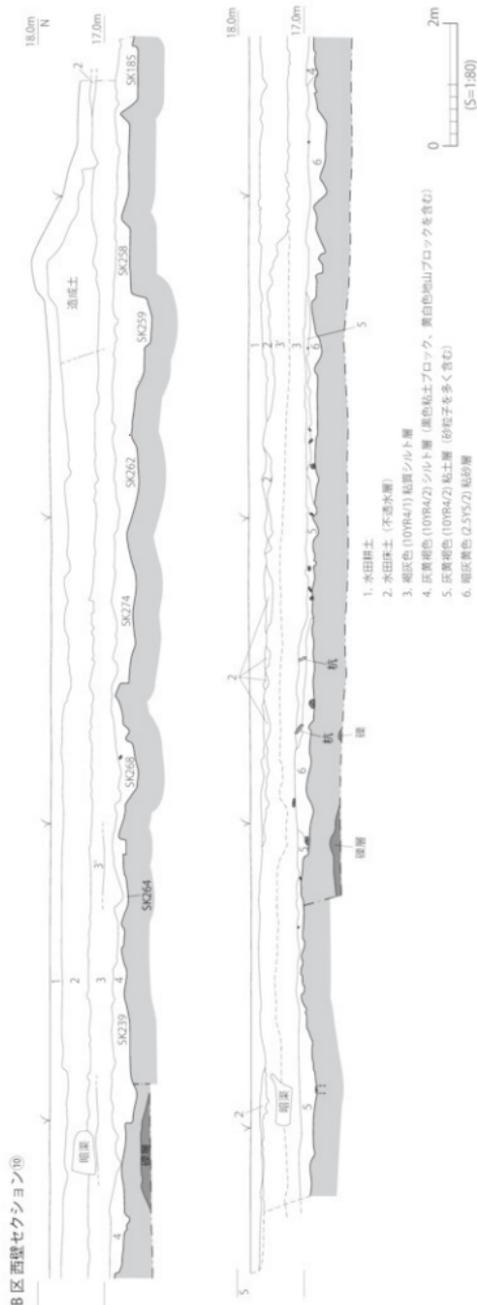
B区接続部セクション⑧



B区接続部セクション⑨



第53図 川原宮Ⅱ遺跡調査区セクション図3(S=1/80)



第54図 川原宮Ⅱ遺跡調査区セクション図4(S=1/80)

から一括着手できず、6月当初からはA区に着手し、A区の調査終了後に10月からB区に着手するという順序で2期に分けて実施した。

(1) 基本層序

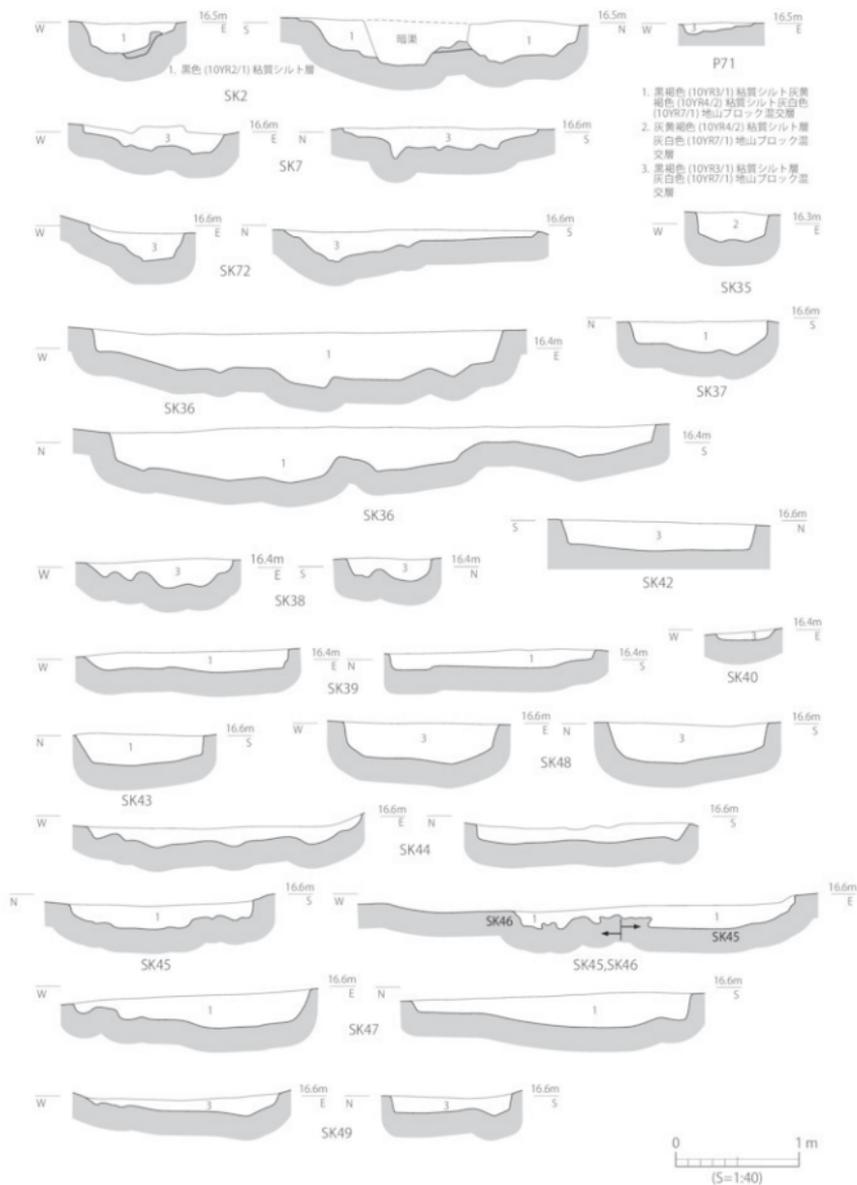
基本層序は、上から水田耕土層(1層)、次いで水田床土の不透水層(2層)あり、その下に30cm～60cmの遺物包含層(3層)がある。これは、遺構として明確にとらえられなかったが、圃場整備以前の水田耕土層に相当すると考えられる。4層は土坑などの遺構埋土、5層と6層は自然河道の覆土と思われる。地山は遺構の基盤層としての還元色の白い粘質シルトのローム層がある。その下はラミナ構造の砂層、さらにその下は段丘礫層が形成されている。遺構の基盤層以下はいずれも河川の堆積作用による堆積であり、最終氷河期の終わりごろまでに形成されたものと考えられる。

(2) 遺構の概要

最も顕著な遺構は、粘土採掘坑と考えられる大小さまざまな土坑群で、調査区の中央から南にかけて密集して検出された。その数は約300基程度とみられるが、切関関係が複雑で不確定である。規模は大小定まらず、小は径数十cm深さ20cm前後のものから、大は2m近い径を測り、深さも1m近くに達するものまでである。また、トレンチ状



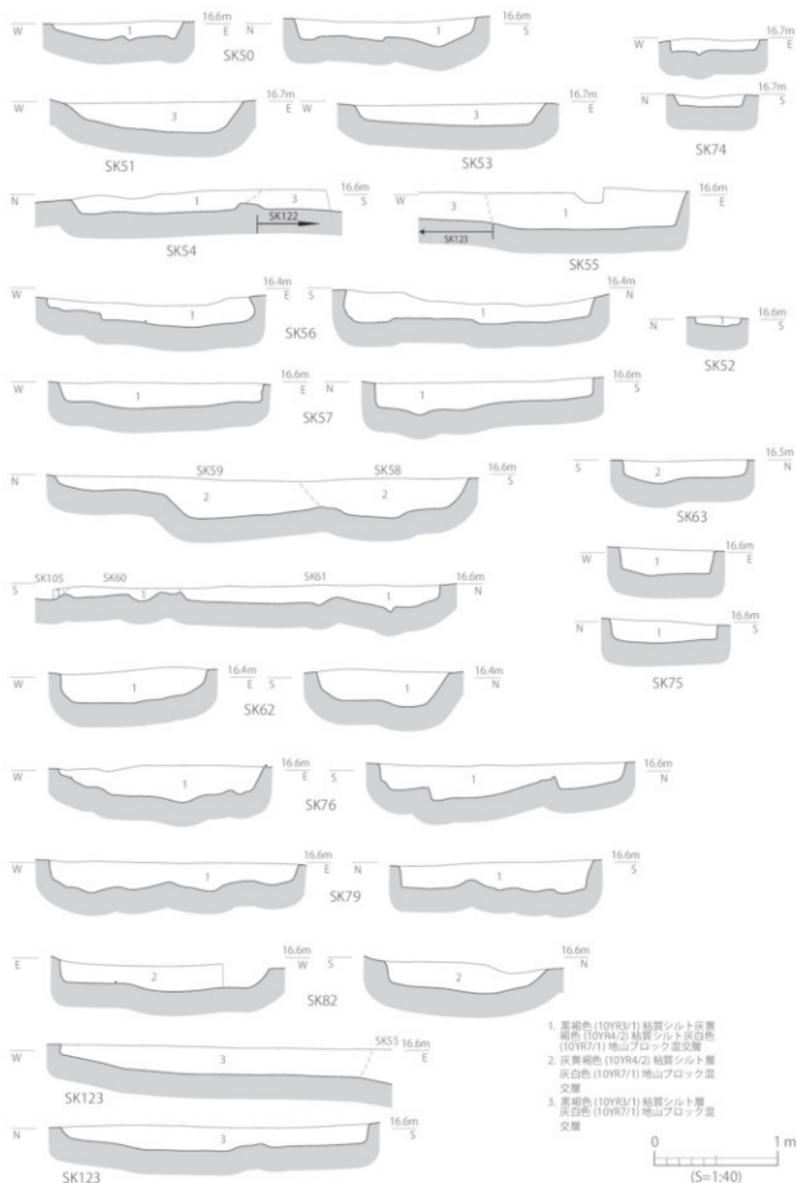
第55図 川原宮Ⅱ遺跡自然河道平面図(S=1/200)



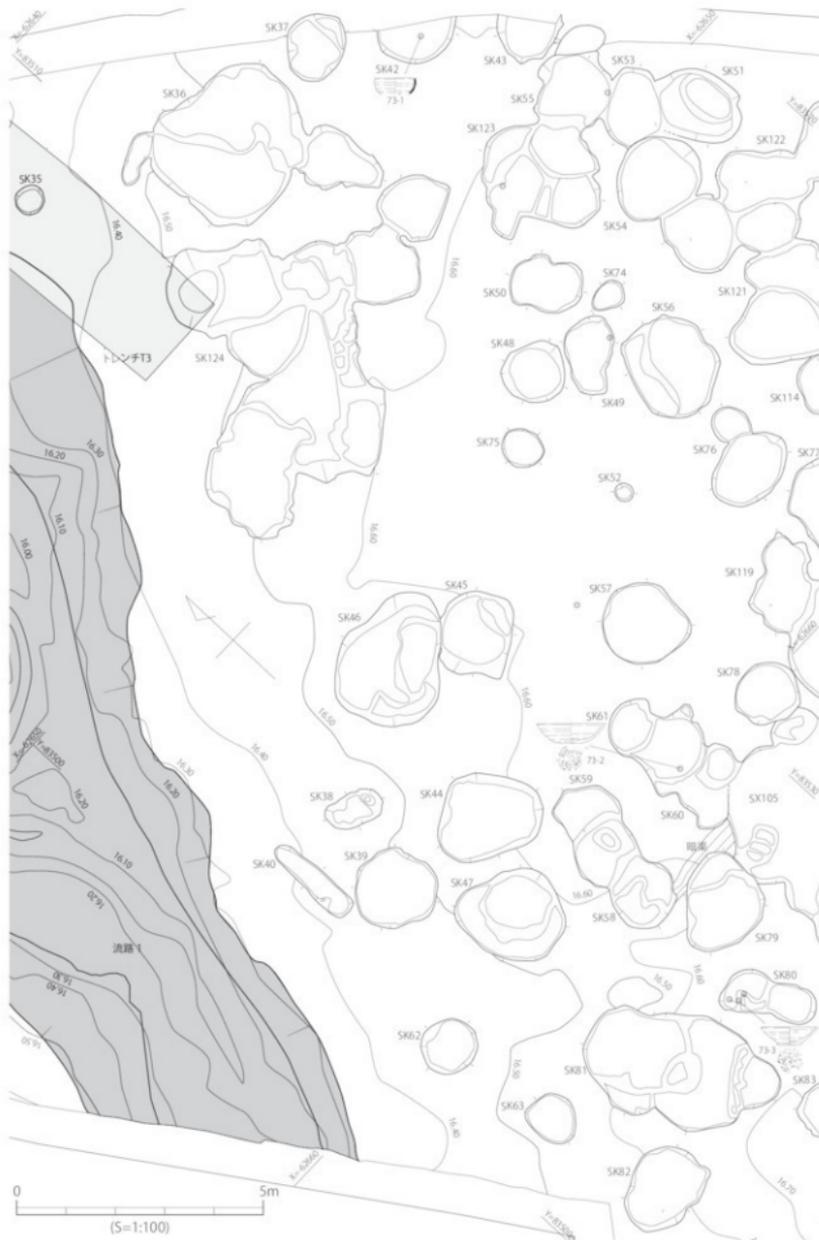
第56図 川原宮Ⅱ遺跡遺構セクション図1 自然河道以北及び自然河道南1 (S=1/40)



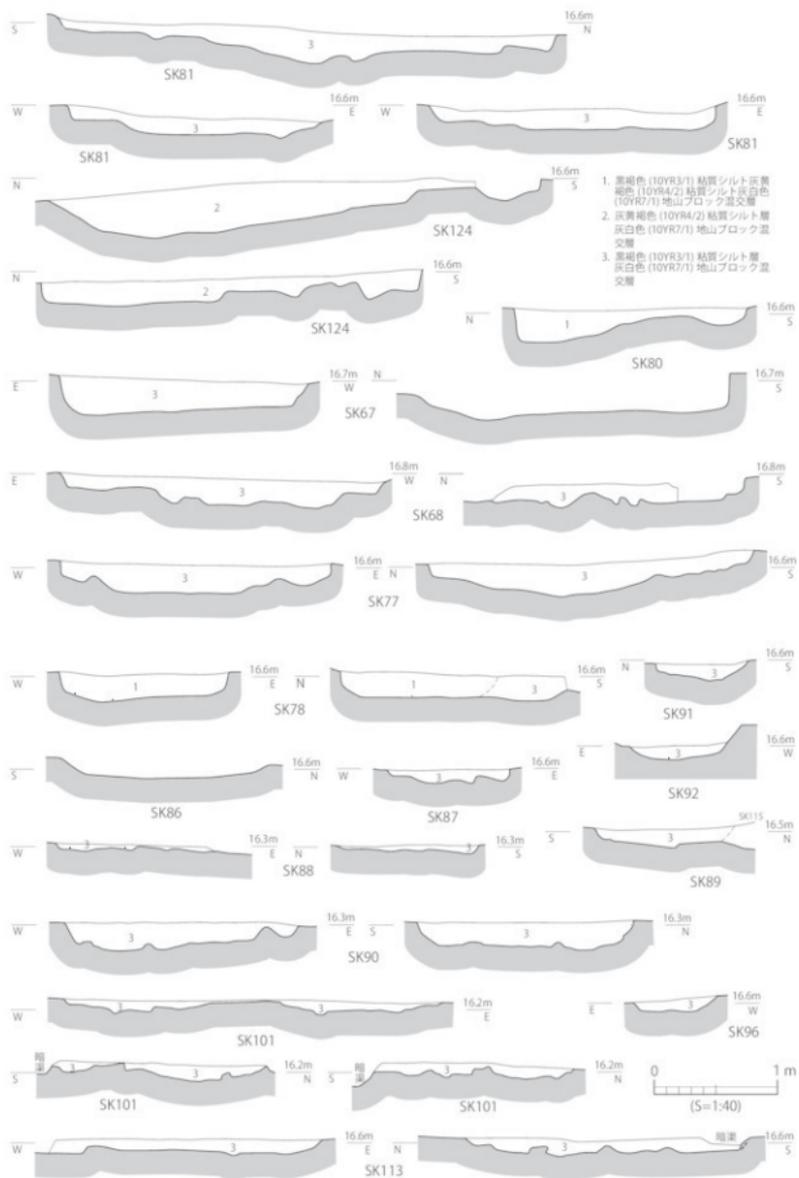
第57図 川原宮Ⅱ遺跡遺構平面図2自然河道1以北(S=1/100)



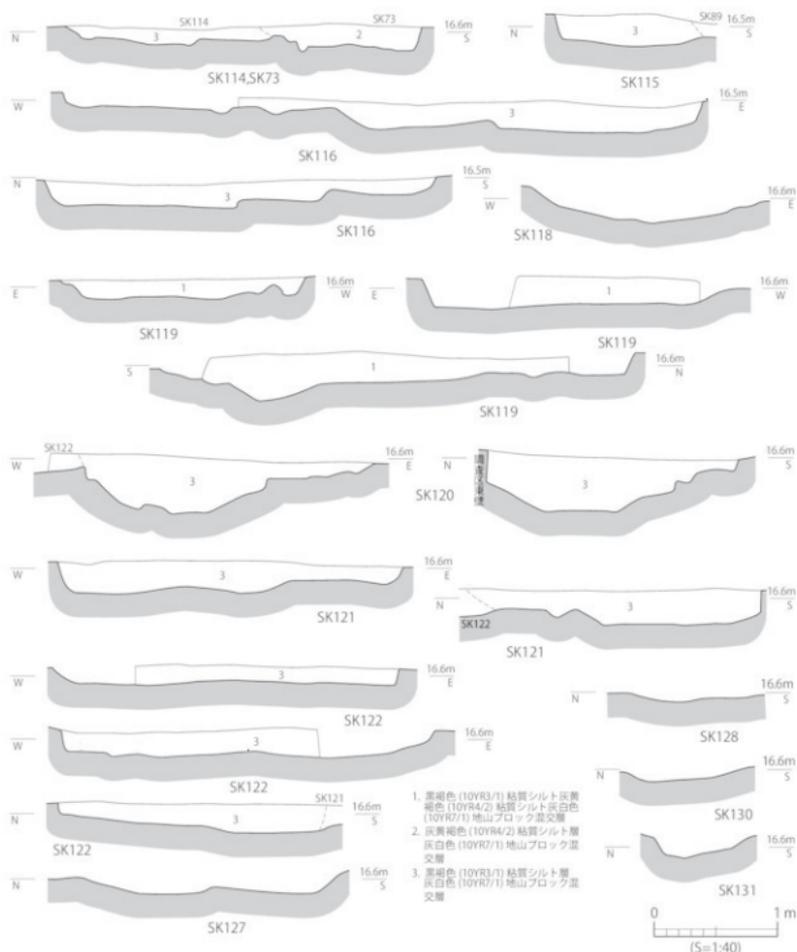
第58図 川原宮Ⅱ遺跡遺構セクション図2 自然河道1以南2 (S=1/40)



第59図 川原宮Ⅱ遺跡遺構平面図3 自然河道1以南(S=1/100)



第60図 川原宮Ⅱ遺跡遺構セクション図3 自然河道1以南3A区東1 (S=1/40)

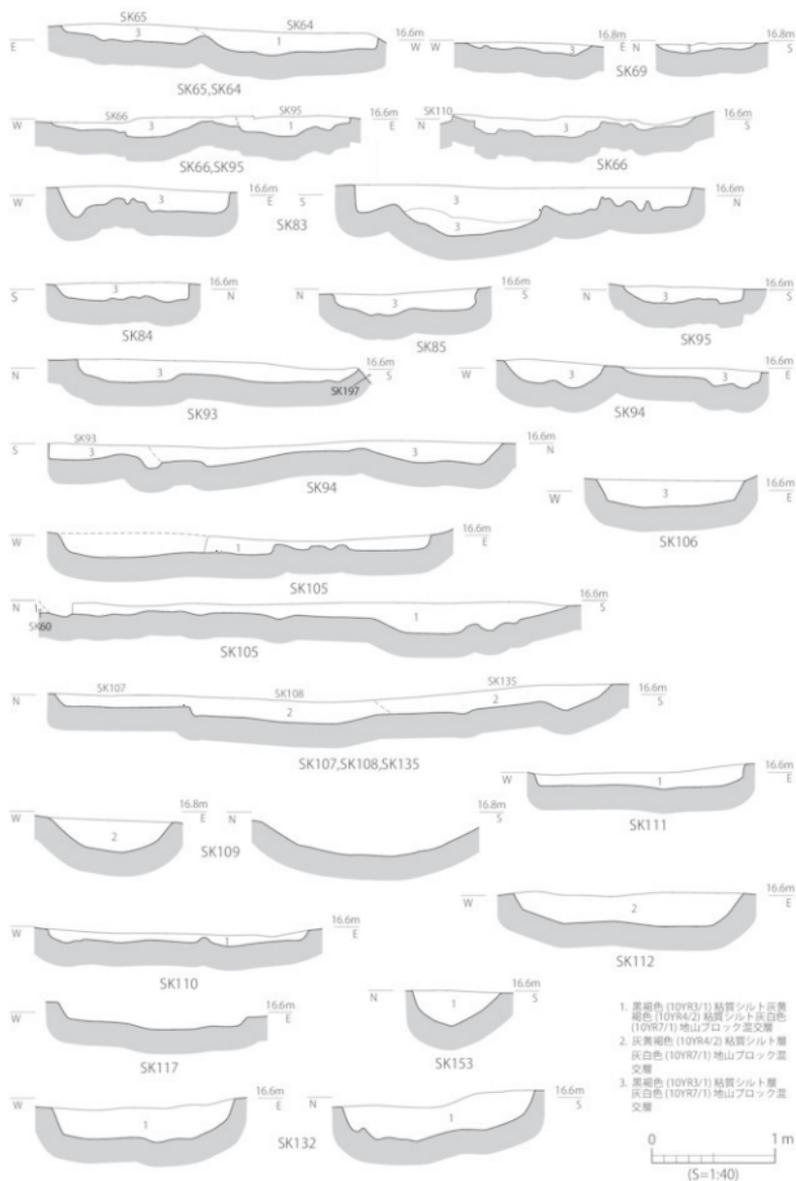


第62図 川原宮Ⅱ遺跡遺構セクション図4A区東2 (S=1/40)

がうかがえる。掘削痕跡の形状には大きく2系統ある。不整形ながら、平面円形に近い土坑が連なる系統と、今ひとつは、長大なトレンチ状の掘削跡である。前者の平面形状が円形に近く、互いに切りあっている土坑群の中には、正置した完形の土師器碗（平安末期から鎌倉時代初め頃）が出土したり、2枚重ねの土師器小环、あるいは北宋銭が出土しているので、これらの遺構の時期をある程度反映しているものと考えられる。採掘坑の遺構の中には、奈良時代の須恵器の破片が出土したものもあるが、出土状況からみると包含層からの混入と考えられる。後者の長大なトレンチ状の平面長方形の掘削痕跡の埋土には、近代以降の遺物も混入しており、近年の採掘坑の



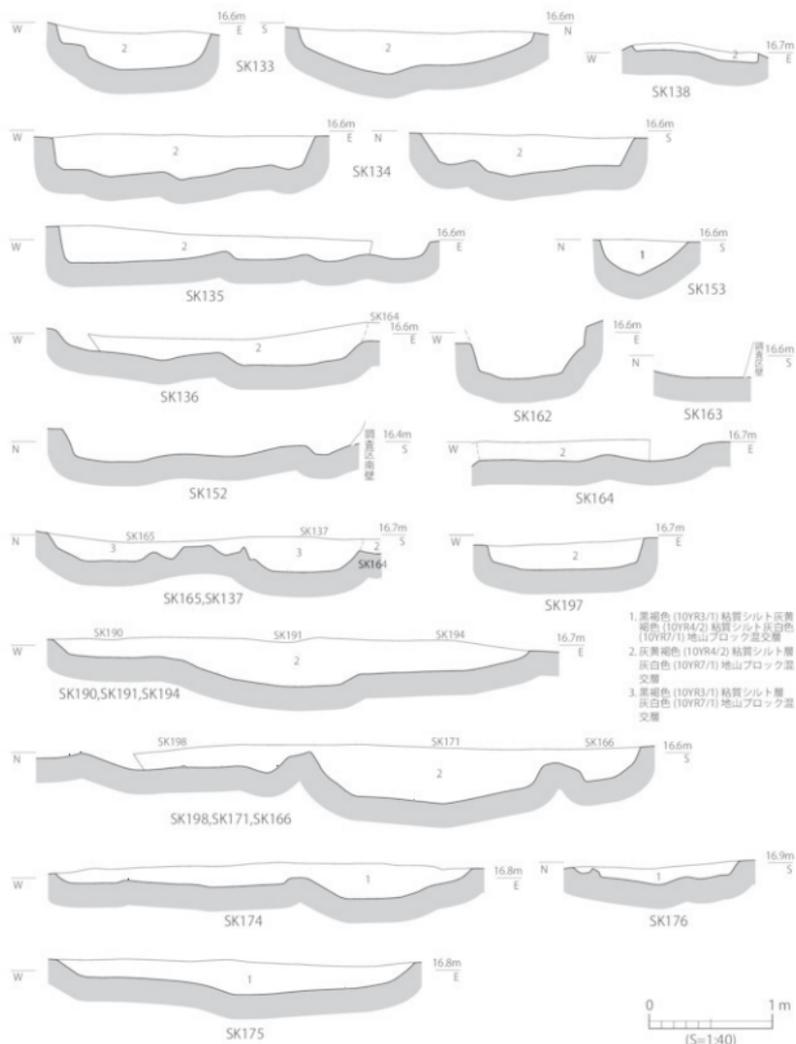
第 63 図 川原宮Ⅱ遺跡遺構平面図 5A 区 B 区境界 (S=1/100)



第64図 川原宮Ⅱ遺跡遺構セクション図5A区B区境界1 (S=1/40)



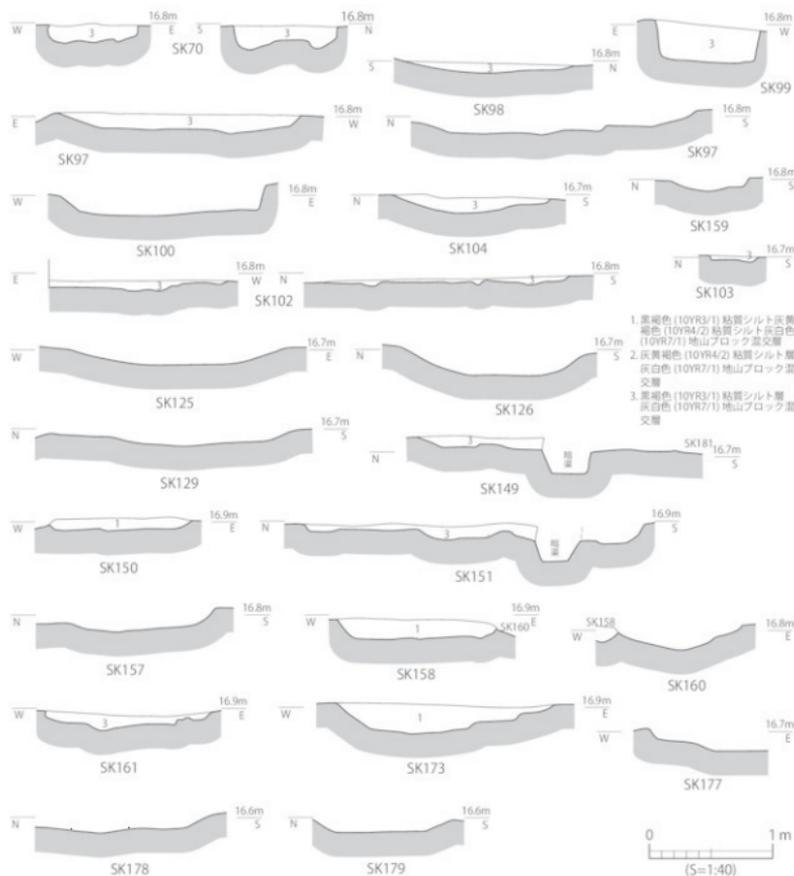
第65図 川原宮Ⅱ遺跡遺構平面図6B区西(S=1/100)



第66図 川原宮Ⅱ遺跡遺構セクション図 6A区B区境界2B区西(S=1/40)



第 67 図 川原宮Ⅱ遺跡遺構平面図 7B 区東 (S=1/100)



第68図 川原宮Ⅱ遺跡遺構セクション図7B区東(S=1/40)

可能性が考えられる。長大な平面長方形の採掘坑は、調査区の南東隅に集中して分布する。

今年度調査した川原宮Ⅱ遺跡では、大きくは、河川自然河道の痕跡を調査したことになる。河川の活動によって運ばれ形成されたこのローム層に対して、使用目的は不明と言わざるを得ないが、採掘を目的とした土坑が調査区内で300基程度検出された。不整形な円形土坑はほとんどの場合切合いがあり、採掘に時間差があることを物語っている。これは、すでに黒い耕土層に覆われている中、以前に採掘して粘質シルト層が確実に採掘できる保証のある部位を狙ったためにできた痕跡(切合い)と考えられる。これらの土坑の中には、埋土中に土師器環が正置された状態で出土するものや、土師器小環が折り重なったまま出土するもの、さらに、北宋銭が出土するものなどがあり、地鎮めや、仕事始め、仕事納めの祭祀と考えられる。これらの出土遺物は概ね



第 69 図 川原宮Ⅱ遺跡遺構平面図8B区南東隅 (S=1/100)

平安時代末(12世紀末頃)から鎌倉時代のもと考えられ、ある程度遺構の時期を反映していると考えられる。

(3) 遺物の概要

自然河道から出土した遺物のうち図化できるものは第72図に掲げたとおりである。1は出雲国府第2型式の杯蓋で、口縁端部が垂下している。2は出雲国府第3～4型式の坏高台である。3は打製石斧、4は黒曜石の石鏃(二等辺三角形凹基式)である。2は自然河道埋土の上半5層から出土しており、9世紀前葉までにこの自然河道が埋まったことを示していると思われる。

粘土採掘坑と思われる遺構から出土した遺物については第73図に掲げたとおりである。遺物番号のほかに出土した遺構の記号番号を付した。

1は、SK42から出土した出雲国府第4～5型式の須恵器坏である。2～4.13は土師器無高台坏である。いずれも回転系切りの痕跡を残す。12世紀代までのものと思われる。SK108から出土した4の土師器坏については、その出土状況を写真図版49に掲載した。9、10は土師器極小皿である。SK137の地山に突き刺さるように立って二つ重なって出土した。その出土状況を写真図版52に掲載した。5は土師器壺の口縁端部である。6は北宋銭の崇寧通寶(初铸崇寧元

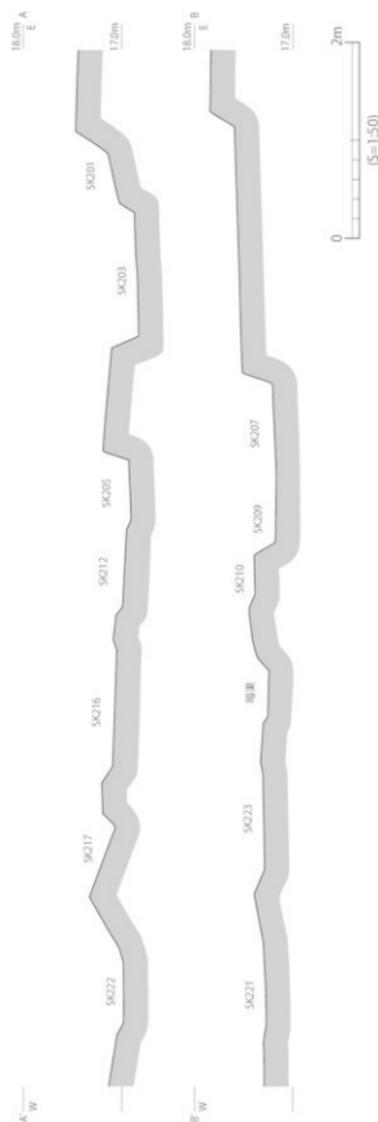
(1102)年)である。欠損したまま出土している。7は出雲国府第2型式の須恵器直口壺の口縁、8は出雲国府第4型式の無高台壺の底部である。11は須恵器甕の口縁である。メリハリの無い波状文がある。12は須恵器無高台壺の底部である。回転糸切りの痕跡を残す。14は須恵器の甕かあるいは甕の把手部分である。11、12、14とも8世紀末から10世紀代と思われる。15は出雲国府第2型式の須恵器環蓋で、口縁端部が垂直に屈曲して垂下している。16は土馬である。体部上半のみ残り、それ以外の部位の頭、首、腹、足、尻尾は欠損している。17は須恵器無高台環の底部である。糸切りの痕跡を残す。18、19は高台環壺の底部である。いずれも貼付高台で19は糸切りの痕跡を残す。17～19は出雲国府3～4型式に属する。

遺物包含層からは多彩な遺物が出土した。

第74図にあげた遺物は、遺構検出の工程で地山直上から出土したものを掲げた。

1、2は、出雲3～4期の須恵器環身である。3は中国製の青白磁の蓋付鉢(合子)である。型押し成形の方形区画文が施されている。12世紀頃のものと思われる。4は土師器甕の把手である。9世紀後半～12世紀代まで残るものと思われる。5は軟質の平瓦である。凸面縄目痕凹面布目痕で11～12世紀頃と思われる。6は硬質の平瓦である。凹面布目痕が見られる。古代のものと思われる。7は黒曜石の石鏃(凹基式)である。このように地山直上で12世紀代の遺物が出土するので、遺構出土遺物の下限と一致する傾向が見られる。

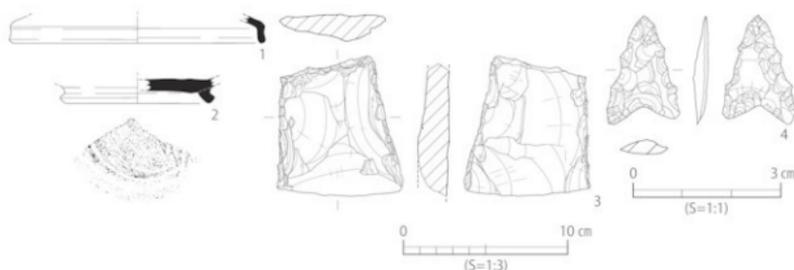
第75図にはB区5層、6層出土遺物を掲げた。5層から出土したもので図化できたものは10のみであった。ほかは6層出土である。1は、出雲国府第3型式の須恵



第70図 川原宮Ⅱ遺跡遺構セクション図8 (S=1/50)



第71図 川原宮Ⅱ遺跡遺構平面図9B区南西(S=1/100)



第72図 川原宮Ⅱ遺跡自然河道1出土物実測図

器高坏の脚受部接合部である。脚部内面にしぼり痕が残る。2は出雲国府第2～3型式の高台坏壺の底部である。貼付高台で糸切痕を残す。3は出雲国府第4～5型式の無高台壺の底部である。底部両面に指頭痕多数を残す。4は瓦質土器製の口縁である。5は土師器瓶の把手である。6～7は土製支脚である。9世紀前半代までのものと思われる。9は硬質の平瓦である。凸面繩甲目痕凹面布目痕がある。

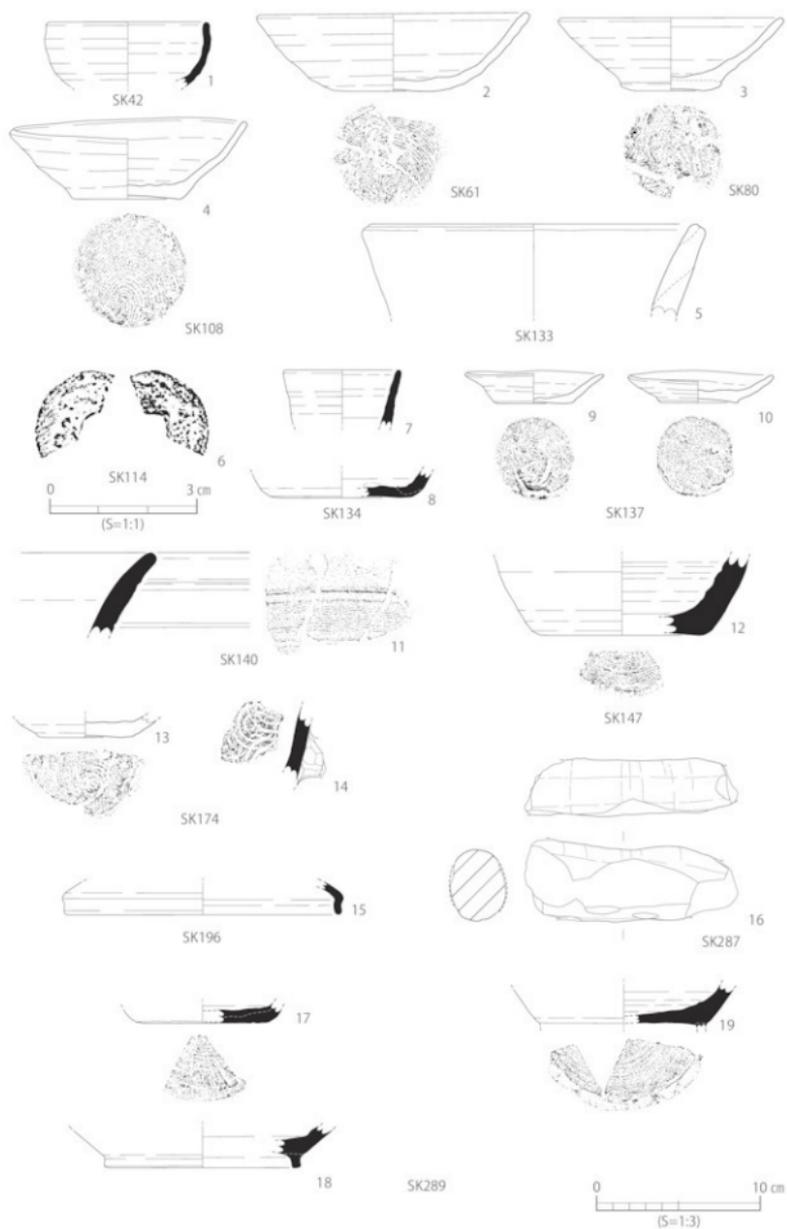
第76図1はB区南端に近い6層から出土した木製品である。農耕具のえぶりの可能性があると思われる。

第77図に掲げたのはA区3層から出土した須恵器である。

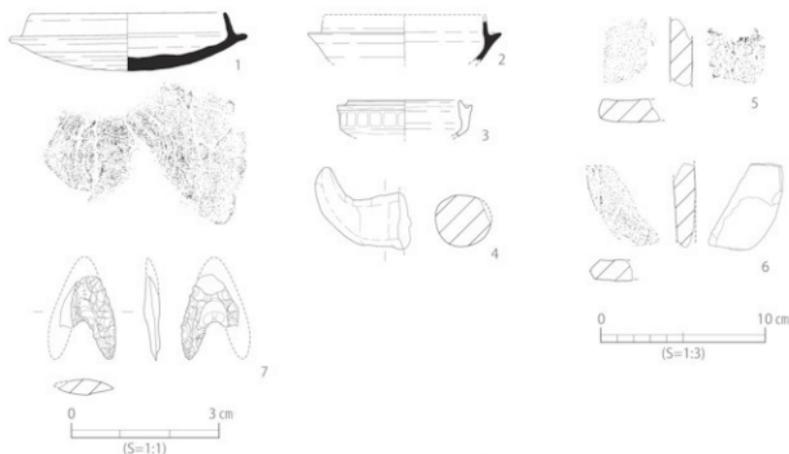
1,2は出雲4～5期の坏身である。3は出雲国府第4～5型式の蓋の擬宝珠つまみである。4は出雲国府第2型式の蓋の輪状つまみである。5～7は高台坏である。いずれも貼付高台で回転糸切り痕跡を残す。5は出雲国府第2型式、6は出雲国府第4型式、7は出雲国府第3型式である。8は高台皿で貼付高台回転糸切り痕跡を残す。出雲国府第4型式である。9は無高台坏で口縁端部がくびれ回転糸切り痕跡を残す。出雲国府第4～5型である。10も無高台坏である。静止糸切り痕跡を残す。出雲国府第3～4型式である。11は出雲国府第2～3型式の短頸壺底部である。12は甕の頸部である。波状文が見られる。出雲3～4期である。13～16は高坏である。13は受部、14,15は受部と脚部の接合部、16は脚台部である。13は出雲国府第4型式、14は出雲国府第3～4型式である。15は三方向に切り込み状透かしが見られる。出雲4期である。16は出雲4～5期である。17～20は甕口縁から頸部にかけての破片である。17の波状文は非常に退化している。8世紀末～10世紀代のものと思われる。18の口縁端部は断面三角で外に逆刺がつき波状文は屈折してシャープである。8～9世紀代のものと思われる。19は17, 18, 20のように口縁が長く立ち上がる形ではなく、短く屈曲する形である。外面平行叩目文内面同心円当具痕がある。7世紀末～10世紀代と思われる。20は18の口縁端部に比べて丸みを帯びている。直立してあまり広がらない。胴部に窩体の付着が見られる。8～9世紀代のものと思われる。

第78図ではA区3層出土の弥生土器、土師器、陶磁器、金属製品、古銭を掲げた。

1は弥生時代中期(Ⅲ-2)の広口壺口縁端部である。2,3は土師器無高台坏である。2は底部径に比べて口縁が大きく開く。3は底部からの立ち上がりがかくびれている。いずれも回転糸切り痕跡を残す。9世紀後半～12世紀代のものと思われる。4～6は土師器極小皿である。回転糸切り痕跡を残す。7は瓦質土器の坏である。胴部に貼付突帯がある。出雲国府第5型式である。



第73図 川原宮Ⅱ遺跡遺構出土遺物実測図

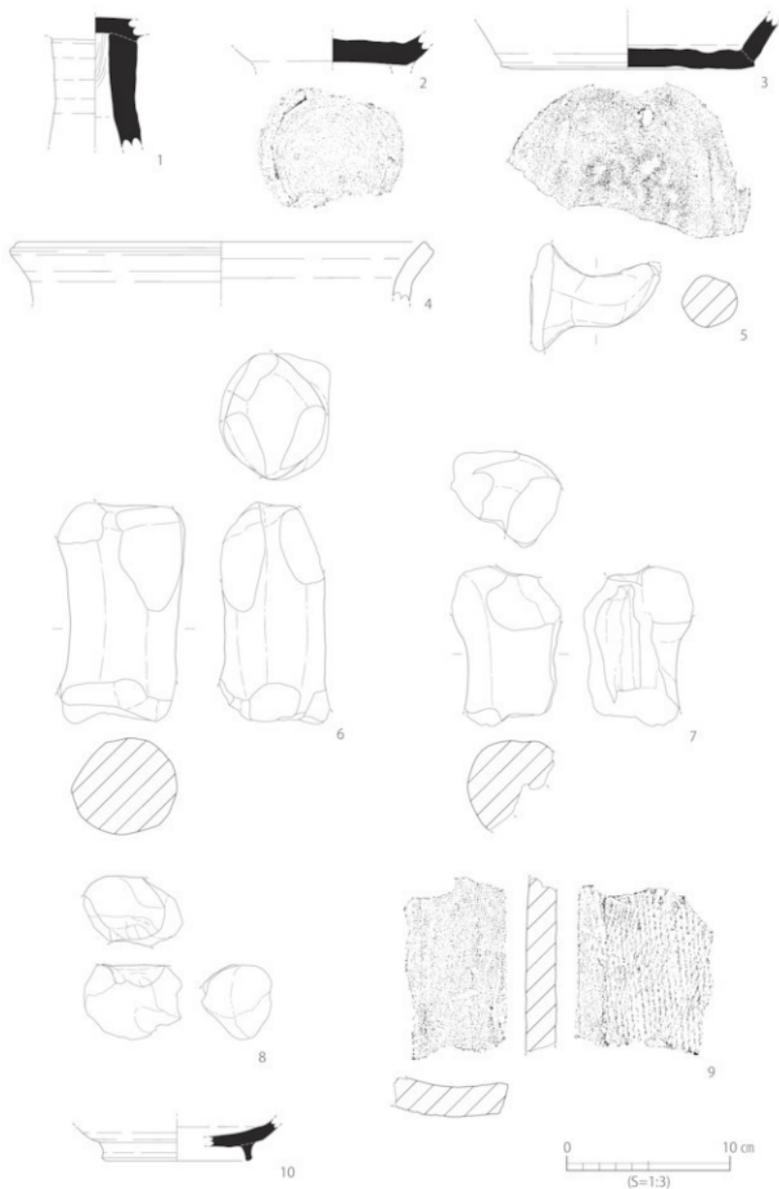


第74図 川原宮Ⅱ遺跡A区地山面上出土遺物実測図

8は土師器甕の把手である。9は瀬戸・美濃の陶器小皿である。綠色釉がかかり、見込みに刺刺ぎ痕跡あり。16世紀頃のものと思われる。10は肥前系陶器の小皿である。11は布志名焼陶器小碗である。12は瓦質土器の挿鉢である。13は備前焼陶器の挿鉢である。14～16世紀のものと思われる。14も備前焼陶器の挿鉢である。14世紀頃のものと思われる。15は肥前系磁器の染付中碗（端反形）で圈線の中に唐草文がある。九陶Ⅱ-2期である。16は中国同安窯系青磁中碗である。見込みにへら彫りの草花文がある。17は中国龍泉窯系青磁中碗である。畳付無軸である。15世紀代のものと思われる。18は中国龍泉窯系青磁の折縁形の大皿である。内面にへら彫りの鑄連弁文がわずかに見える。15世紀末のものと思われる。19も龍泉窯系青磁碗で内面にへら彫りの草花文がある。12世紀後半～13世紀前半と思われる。20, 21は中国白磁碗で白磁Ⅳ類で12世紀代のものと思われる。22は経筒の蓋と思われる。23は煙管雁首である。17世紀以降のものと思われる。24～26は古銭である。24, 25は北宋銭の熙寧元寶（初鑄北宋熙寧元（1068）年）である。26は北宋銭の元符通寶（初鑄元符元（1098）年）である。

第79図に掲げたのはA区3層出土の瓦類である。1は軟質の軒丸瓦と思われる。2は軟質の玉縁式の丸瓦である。3は硬質の平瓦で凸面繩目目痕凹面布目痕がある。4は軟質の平瓦で凸面繩目目痕凹面布目痕がある。

第80図にはB区3層出土の須恵器を掲げた。1は古墳時代6世紀後半出雲3～4期の环蓋である。2,3,5,6は出雲国府第2型式の环蓋である。5,6は端部が垂直に屈曲する。4は出雲国府第4型式の宝珠つまみの环蓋である。7は出雲国府第3～4型式の宝珠つまみの环蓋である。口縁端部の逆刺は非常に短く内傾して屈曲する。8は出雲国府第3～4型式の宝珠つまみの环蓋である。器面が非常に滑らかであることから転用碗の可能性が推測される。9～11は出雲国府第2型式の高台付坏である。いずれも貼付高台で、10,11は回転系切り痕跡を残す。ナデ消し当てこすりの痕跡あり。12,14は出雲国府第2型式の高台付坏である。いずれも貼付高台で、14は回転系切り痕跡を残す。13, 15は出雲国府第3～4型式の高台付坏である。貼付高台で、回転



第75図 川原宮Ⅱ遺跡B区5層及び6層出土遺物実測図

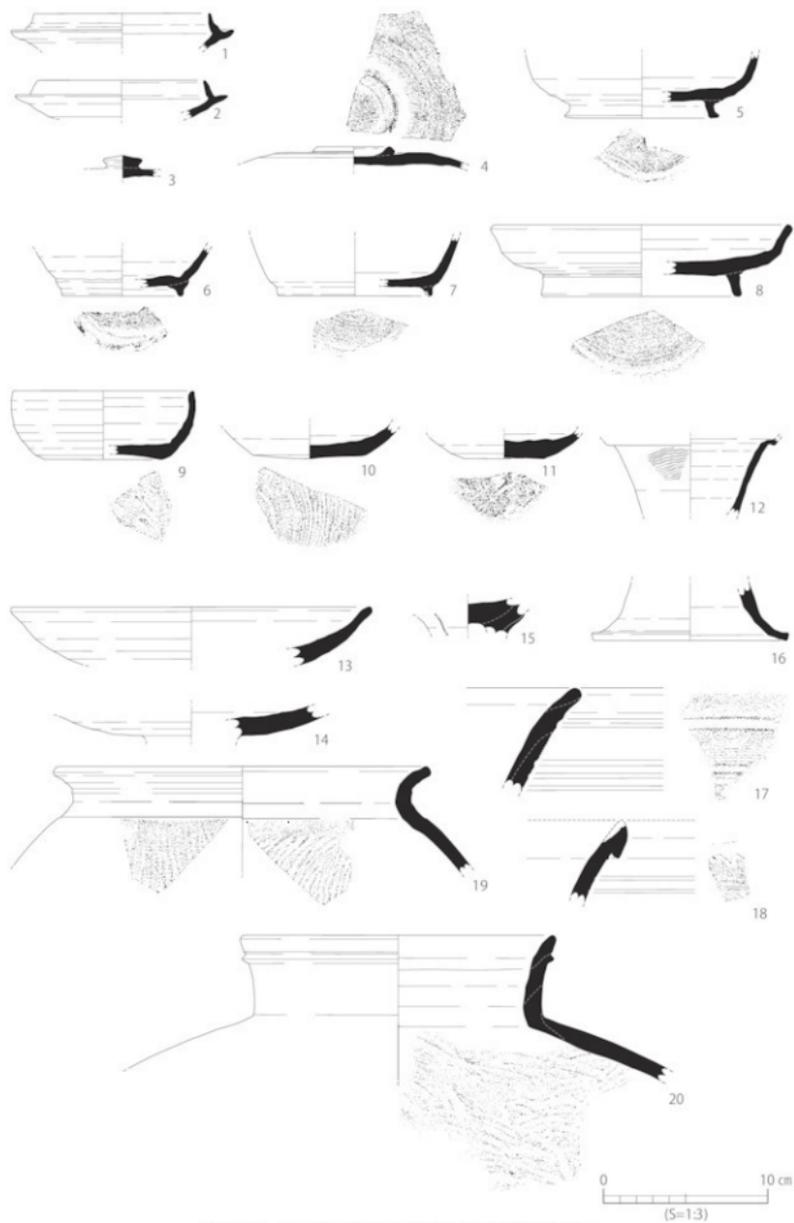


第76図 川原宮Ⅱ遺跡B区6層出土遺物実測図

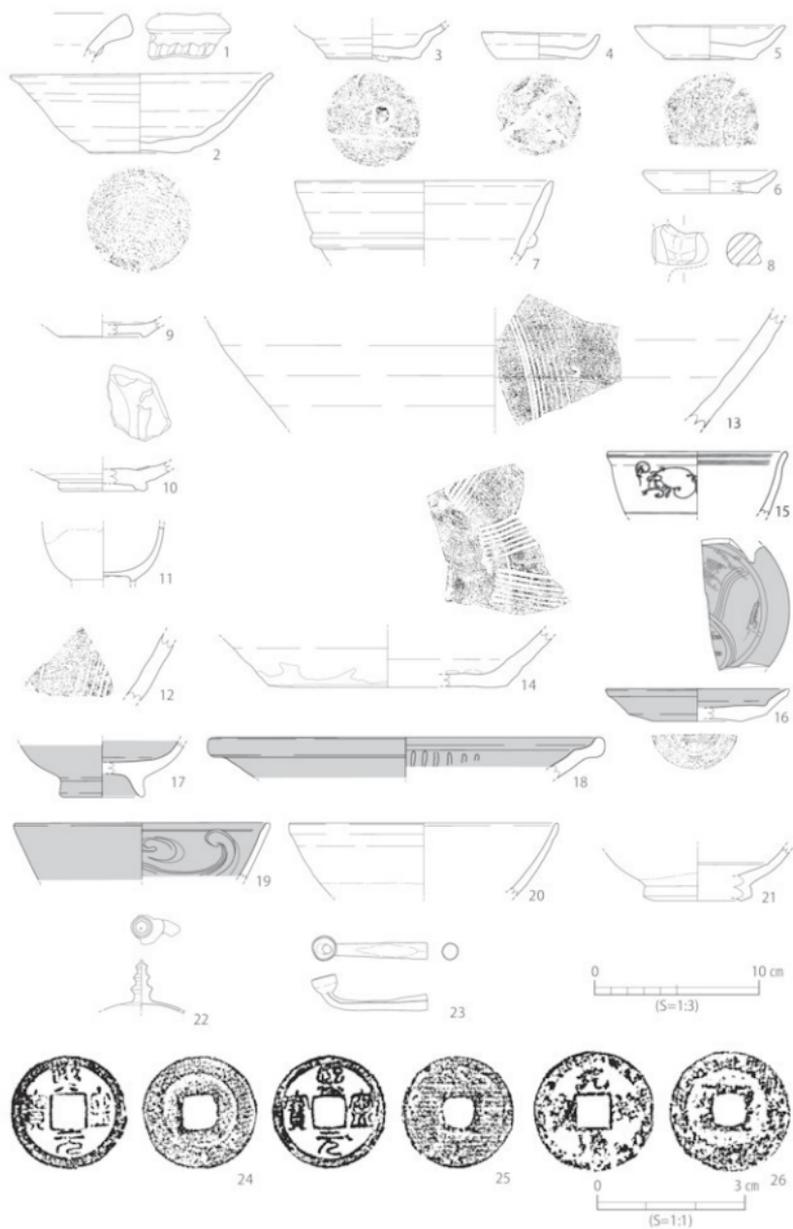
系切り痕跡を残す。16～18は貼付高台で回転系切り痕跡を残す高台付皿である。16は出雲国府第4型式で、器面が非常になめらかであることから転用碗の可能性が推測される。17は出雲国府第5型式、18は出雲国府第4型式のものである。19～22は回転系切り痕跡を残す無高台環である。19,21,22は出雲国府第5型式、20は出雲国府第3～4型式のものである。23は風字碗である。回転系切り痕跡を残す。脚が1つ残存している。出雲国府第4～5型式に当たる。24は出雲国府第4型式の高環の受部である。器面が非常に滑らかであることから転用碗の可能性が推測される。25は出雲国府第1～2型式の高環の脚部である。

第81図にはB区3層から出土した須恵器の壺壺類を掲げた。1～4は壺の口縁である。3は口縁部が長く立ち上がって開き口唇部の断面が三角形形状呈するものである。5は出雲3～4期の短頸壺と思われるが、底部外面に一文字のヘラ描きがある。6は出雲国府第5型式の壺と思われるが、頸部に突帯1条がある。7は古墳時代7世紀代の長頸壺と思われる。肩部沈線2条、自然軸がかかる。8は出雲国府第4型式の壺と思われる。9は出雲国府第2～3型式の壺と思われる。10,11は出雲国府第2～3型式の貼付高台の高台壺である。12～15は無高台壺の底部である。14は出雲国府第4～5型式のもと思われる。16は外面に格子タタキ文を残す甌と思われる。17は器種は判然としなが外面に平行叩目文、内面に同心円当具痕を残す。18は鉢と思われる。外面に平行叩目文、内面に同心円当具痕を残す。

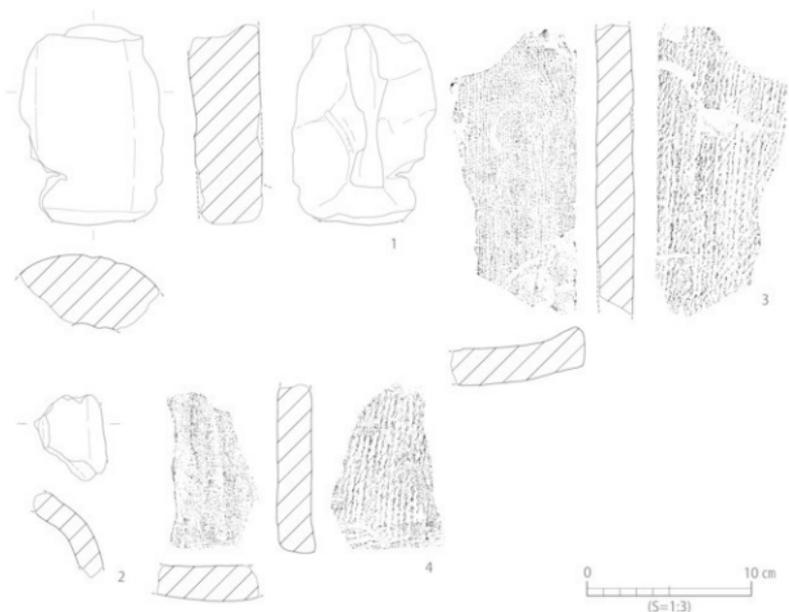
第82図にはB区3層出土遺物を掲げた。1は弥生時代中期の広口壺口縁の破片と思われる。2は弥生時代前期の壺の口縁の破片と思われる。3は円筒埴輪の突帯である。4～7は土師器の無高台環の底部である。4～6は回転系切り痕跡を残す。7は底径が小さく高台状に削り出されている。8～10は出雲国府第10型式以降の柱状高台付環である。8,10は回転系切り痕跡を残す。11～13は手づくね成形の土師器極小皿である。12,13は、口縁端部に油煙痕跡があり、灯明皿として使用されたことが考えられる。14は回転系切り痕跡を残す土師器極小皿である。15は瓦質土器の高台付環で、貼付高台である。16は瓦質土器の鍋の破片と思われる。胴部に貼付突帯が見られる。17は瓦質土器裏胴部の破片である。外面に格子状叩目文が残る。18～20は土馬である。18は頸部、たてがみ、体部、左前脚が残り、頭部、右前脚左右後脚、尻尾が欠けている。馬具装着の表現がなく裸馬である。尿道、肛門の表現があり、頸部左傾して牡馬である。19は口で馬具の表現があるように見受けられる。20は頸部とたてがみの表現が残り、右傾して



第77図 川原宮Ⅱ遺跡A区3層出土遺物実測図1



第78図 川原宮Ⅱ遺跡A区3層出土遺物実測図2



第79図 川原宮Ⅱ遺跡A区3層出土遺物実測図3

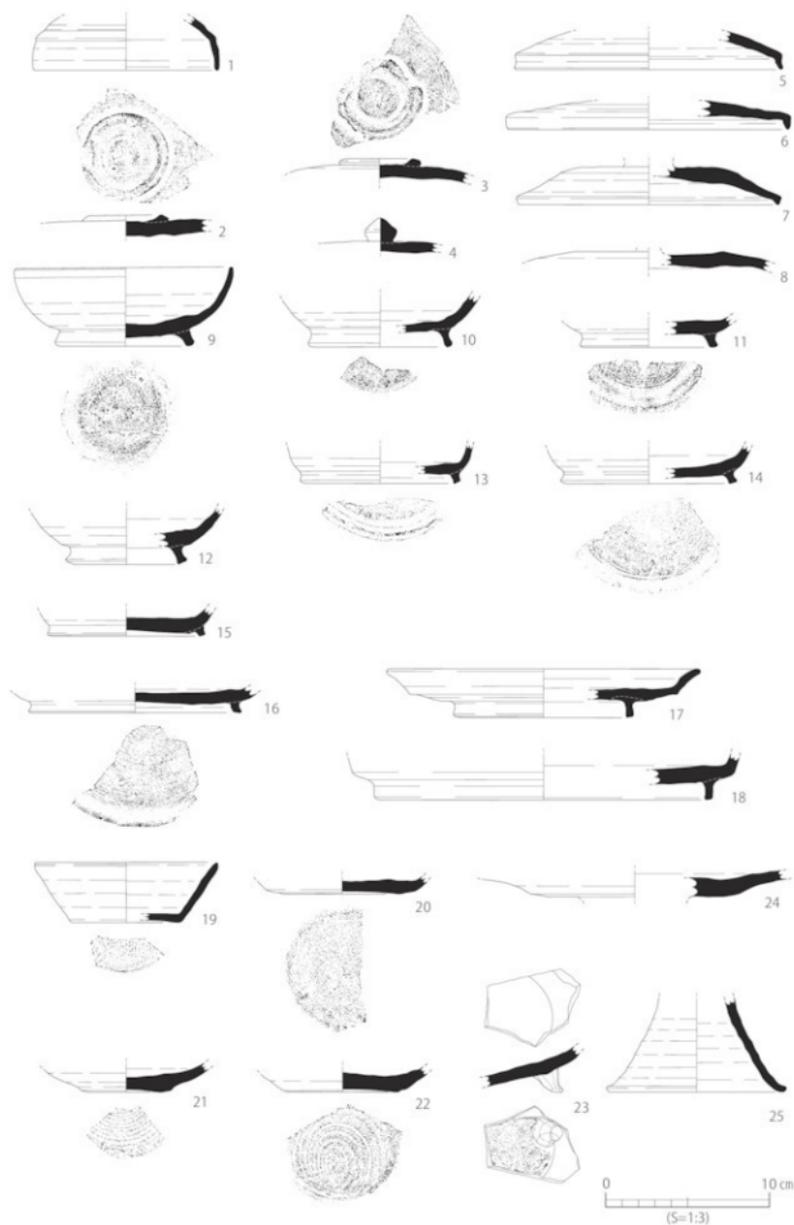
牝馬と思われる。

第83図にはB区3層出土遺物のうち、陶磁器、銭貨、石器を掲げた。1は肥前系陶器の小皿である。2は肥前系陶器の中碗である。3は陶器摺鉢で山口県萩市須佐産のものと思われる。4は肥前系磁器色絵小碗である。5は肥前系磁器染付中碗である。草花文があらわれる。6は肥前系磁器白磁の極小皿である。7.8は肥前系白磁小皿である。9は肥前系磁器染付小皿である。10は肥前系磁器陶胎染付香炉である。11は中国龍泉窯系青磁皿Ⅳ類の小皿である。内面にヘラ彫りの草花文がある。12は中国龍泉窯系青磁碗Ⅰ類の碗である。13は中国白磁端反形の小坏である。14は中国白磁碗Ⅳ類の碗である。15は多孔質の石材を使用した石錘である。16.17は古銭である。16は寛永通寶、17は開元通寶である。

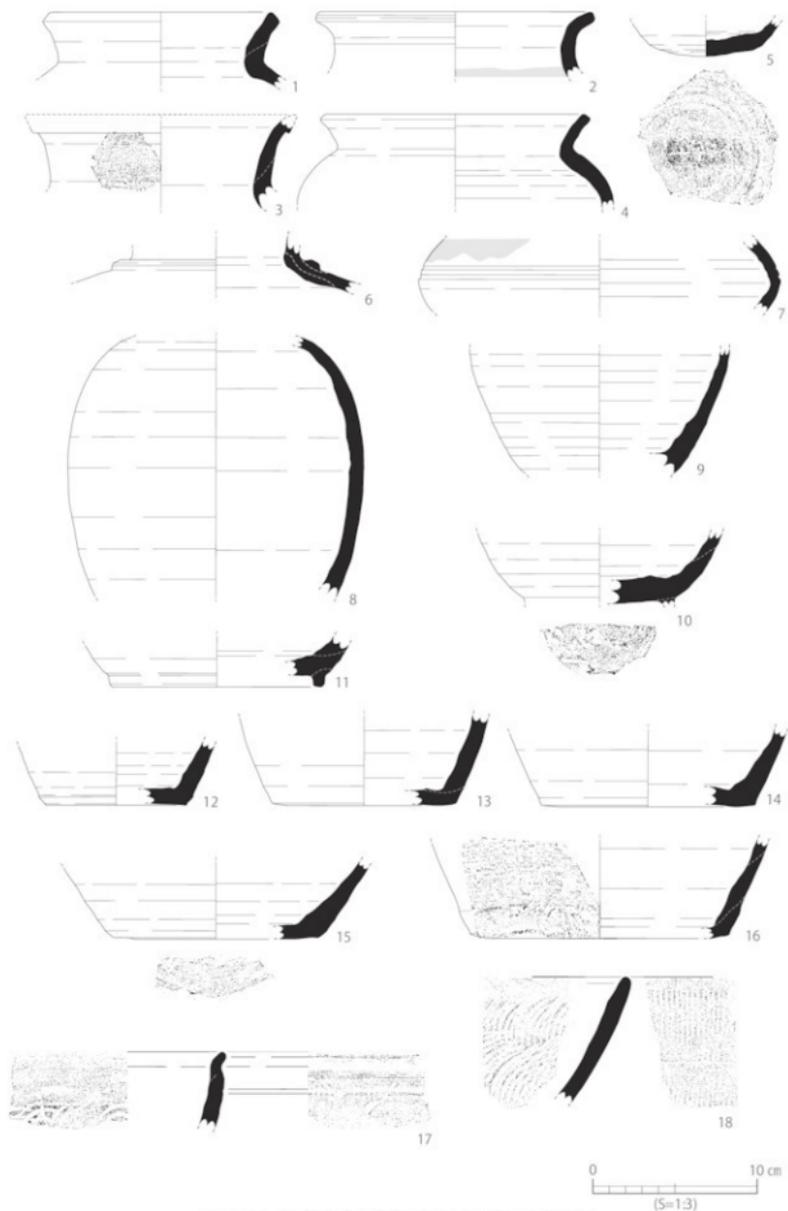
第84図にはB区3層出土遺物のうち瓦類を掲げた。1は丸瓦の破片である。2は軟質の丸瓦の破片である。3.4は軟質の平瓦で凸面ナデ凹面布目痕である。5は軟質の平瓦で凸面縄目痕凹面布目痕である。6は硬質の平瓦で凸面ナデ凹面布目痕である。7は軟質の平瓦の破片である。

第85図にはB区上層の水田耕作土中や水田床土中から出土した遺物を掲げた。1は出雲国府第1～2型式の長頸壺の貼付高台部分である。2は土師器柱状高台付坏の下部である。回転系切り痕跡がある。3は五輪塔の空風輪である。

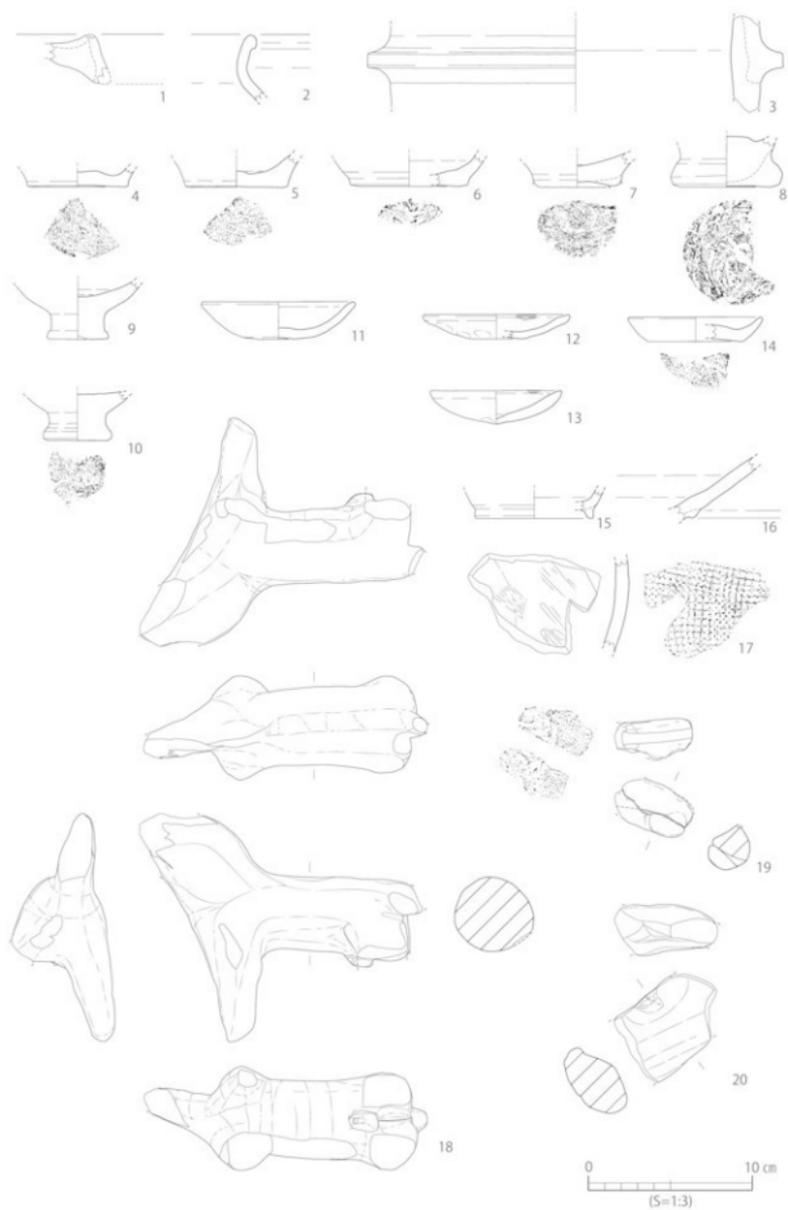
第86図にはB区3層出土遺物のうち、出土位置を特定できなかった遺物を掲げた。1は出雲国府第2～3型式の須恵器坏蓋の輪状つまみ部分である。器面が非常に滑らかであることから転用硯の可能性が推測される。2は出雲国府第2～3型式の貼付高台の須恵器長頸壺と思われる。



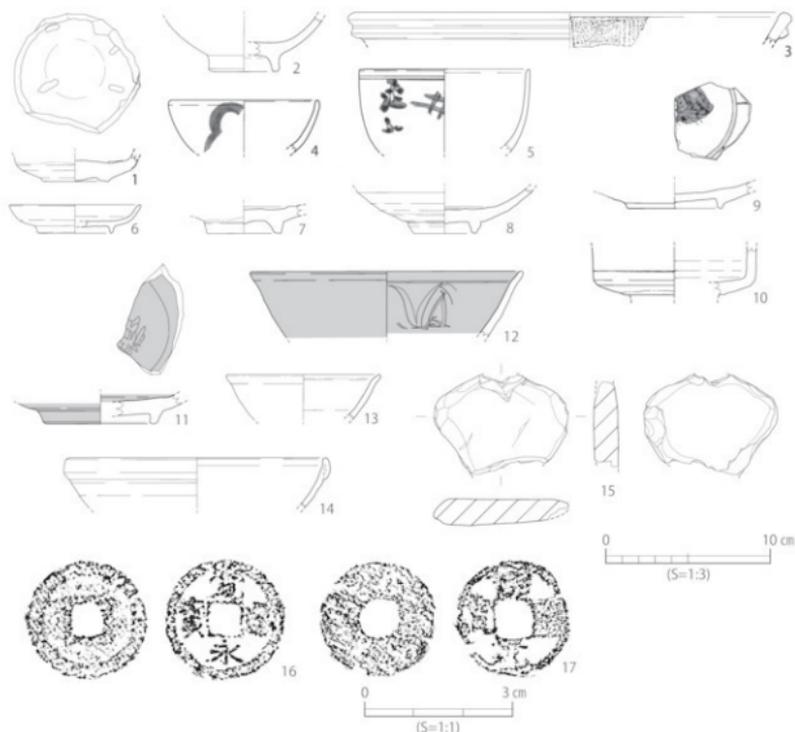
第80図 川原宮Ⅱ遺跡B区3層出土遺物実測図1



第 81 図 川原宮Ⅱ遺跡 B 区 3 層出土遺物実測図 2



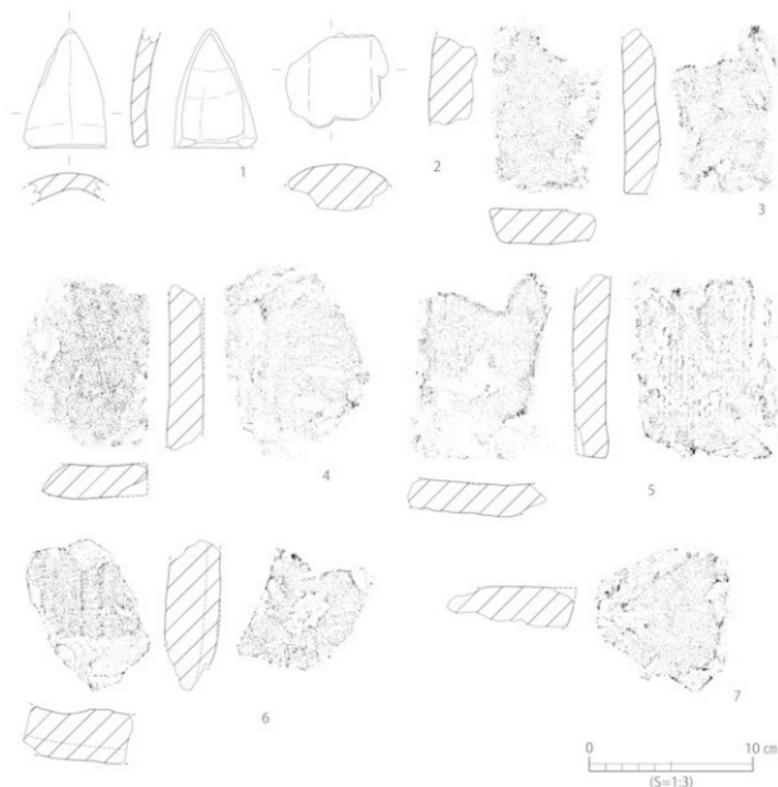
第 82 図 川原宮Ⅱ遺跡 B 区 3 層出土遺物実測図 3



第83図 川原宮Ⅱ遺跡B区3層出土遺物実測図4

回転糸切り痕跡がある。3は口縁部が大きく立ち上がる須恵器甕の頸部から口縁部の破片である。胴部内面に同心円当具痕が残る。4は陶器で中世前期の備前焼播鉢の破片である。5は中国龍泉窯系青磁碗Ⅲ類の碗で口縁端反形、外面にへら彫りの鎔連弁文がある。6、7は中国白磁碗Ⅳ類の碗で6は口縁端部を外に折れ曲げて玉縁状にしている。7は高台無軸で、見込みで沈線1条あり。8は肥前系磁器の白磁小杯で口縁が端反形である。9は肥前系磁器染付の小杯で口縁が端反形である。染付の意匠は蘭文で、畳付無軸で、粗砂が付着している。

遺物の時期は、概ね、古墳時代後期（出雲3期以降の須恵器など）から寛永通寶や近世陶磁器までが出土する。遺物量のピークは奈良時代、平安時代末から鎌倉時代、近世の三時期にあると考えられる。奈良時代の遺物は、須恵器甕壺類、須恵器蓋杯が多く、古代瓦、硯などが若干出土している。平安時代末以降の遺物は土師器碗皿類がほとんどである。近世以降は陶磁器が多い。古墳時代中期以前の遺物としては黒曜石、玉髓、瑪瑙などの石器石材がほとんどで、土師器、須恵器はもとより、弥生土器、縄文土器は皆無に等しい。木器木製品の出土も1点のみであった。特徴的な遺物としては、経筒かあるいは仏具の蓋の破片と思われる金属製品（残存3cm足らず）と土馬（残存長17.5cm、残存高13cm、残存幅7.5cm）が出土している。

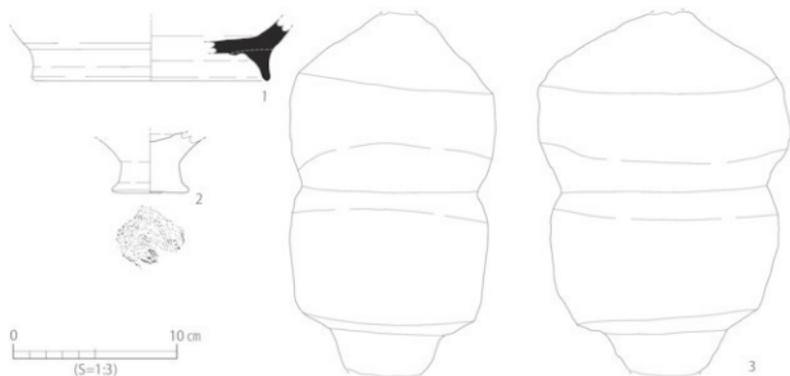


第84図 川原宮Ⅱ遺跡B区3層出土遺物実測図5

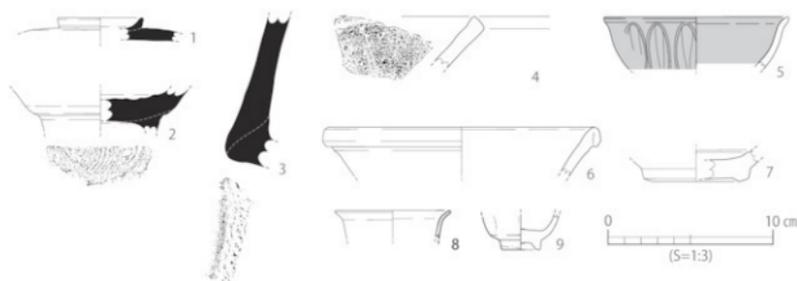
遺物包含層については、まとまった量のものとしては、古墳時代後期の須恵器の一群があり、その上限を示しているものと考えられる。石器石材の中に縄文時代以前のものと考えられるものが数点見出せるが、古墳時代中期以前の土器、土製品の出土は、弥生時代、縄文時代含めて皆無に等しい。包含層遺物の下限は近世の陶磁器である。包含層遺物の出土量には三時期の遺物量の最盛期があり、その一つが奈良時代の須恵器等の遺物群、また、平安時代末から中世前期の上師器供膳具及び輸入陶磁器の一群が挙げられる。前者には硯や古代瓦など寺院官衛に関わる遺物が含まれる。

第3節 小結

川原宮Ⅱ遺跡では、300基に及ぶ非常に多くの土坑を検出した。ほとんどの土坑が不整形ではあるが、形状をよく残しているものは、平面円形で断面砲弾状あるいは弧状に掘り進めている。これらの土坑の性格については次のようなことが考えられる。



第85図 川原宮Ⅱ遺跡B区上層出土遺物実測図



第86図 川原宮Ⅱ遺跡その他の出土遺物実測図

- ・土層中に落ち込みや弛みがほとんど見られず廃棄物の痕跡がないと思われるので、廃棄物を埋め立てるための土坑ではないと思われる。
- ・断面袋状など貯蔵穴特有の形状が見られないので貯蔵穴とも考えにくい。
- ・墓坑としては大きすぎるものがほとんどである。坑の底部を加工して平らに作る意識が感じられない。木棺や石棺など棺の痕跡がない。副葬品のなものが伴っていない。などのことから墓坑としては考えにくい。

以上のようなことから、廃棄土坑や貯蔵穴、墓坑などの遺構の可能性は低く、ほとんどすべての土坑に共通しているのは、灰白色粘土層を狙って掘り出し、すぐに埋め立てて資源を保護した粘土採掘坑の痕跡と考えられることである。土坑埋土の堆積状況を見るとほとんど一様で、セクションの端部に斜めの立ち上がり無く、必要な白色粘土を選って掘り出した後にすぐ埋め戻していると思われる。さらに言えば、この土坑群は、土坑を掘った後にその坑を何かのために掘り込まれたのではなく、灰白色粘土の採掘を目的にして掘った跡を、今日的に発掘調査してみると、土坑が密集して切り合っているように見えると思われる。

これらの粘土採掘坑の中には遺物が出土していて時期が特定できるものがある。SK108あるいはSK137などである。特にSK137については粘土採掘の作業が一段落したか、一定の操業期間が

終わった段階で祭祀が行われたことを反映していると考えられる。これらの遺物及び第73図に掲げた遺物によって、粘土採掘坑の採掘期間が奈良時代から平安時代末に限定されてくると考えられる。

また、粘土採掘坑が自然河道の北に一切展開していないことについては、その粘土が褐鉄鉱の浸潤を受けて黄色に変色していることが関係しているのではないかと考えた。ただし、奈良時代から平安時代末にかけてとした採掘時期に、自然河道以北の粘土が黄色みを帯びていたかどうかはわからない。さらに、B区南東部の粘土採掘坑の様相は他の区域に展開する採掘坑と異なり、細長い痕跡を残している。また、掘り出された粘土も黄色みを帯びたものだったことが、残された部分の土質からうかがえる。この区域の採掘坑からは、近代以降の陶磁器などの異物が混入しており、この区域の採掘港については近代以後の時期も考慮する必要があると思われる。

このような粘土採掘坑の例は、当遺跡の近隣においては、松江市竹矢町の中竹矢遺跡同矢田町間内遺跡にその例がある。中竹矢遺跡では、昭和55(1980)年度に189基と平成2(1990)年度に73基の計262基の土坑が2次にわたって発掘調査されている。昭和55年度調査の189基については、弥生時代前期後半から古墳時代前期までの年代が与えられている。平成2年度調査の73基については、縄文時代晩期から古墳時代中期までの年代が与えられている。また、この間、昭和58(1983)年度には、間内遺跡でも同様の土坑が43基検出され、その中には、縄文時代晩期から奈良時代までの遺物が出土するものがあり、個別に年代が与えられている。中竹矢遺跡の昭和55年度調査の時点では、これらの土坑について、一旦貯蔵穴か廃棄土坑ではないかとの見解が示されたが、間内遺跡の昭和58年度調査と中竹矢遺跡の平成2年度調査では、国分寺など古代の瓦窯址が近く、近代においても瓦生産のための粘土採掘が行われていたことなどから、このような土坑群について、土器焼成の原料となる白色粘土の採掘坑である可能性を指摘している。

川原宮Ⅱ遺跡の粘土採掘坑からは奈良時代以降の遺物しか出土していないので、中竹矢遺跡や間内遺跡とは時期的に重ならないが、遺構の状況から共通性は明らかと思われる。

川原宮Ⅱ遺跡では古代瓦が20点近く出土している。瓦屋根の建造物が近隣にあったことが考えられる。経筒の蓋のつまみと思われる金属製品の破片1点(第78図22)、風字硯1点(第80図23)、転用硯と思われる須恵器の破片3点(第80図8.16.24)が出土していることもあって、近隣に寺院・官衙の存在がうかがわれる。しかし、土器の墨書など文字資料は出土していない。第74図3に掲げた青白磁合子の出土も注目される。

土馬が4体出土している。SK287から出土した土馬(第73図16)以外はいずれも包含層中からの出土であり、遺構に伴うものではなかった。SK287は粘土採掘坑である可能性が高く、土馬と直接関係のある遺構とは考えにくい。出土位置も脈絡はないと思われる。偶然かもしれないが、牡馬(第82図18)と牝馬(第82図20)が1体ずつ確認できる。牡馬の頭部と後ろ足が欠けているのは、それに携わる人々の願望など何かの祭祀の様相を反映していると考えられる。

自然河道を2条検出した。これは柳堀遺跡F・G・H区及び茶臼遺跡でも確認された現在の宇竜川の旧河道とされるべきものと思われる。これらの自然河道は、出土する遺物の時期幅が異っている。最も北で、合流する馬橋川に近い茶臼遺跡では、中世以前の遺物が出土している。その南に隣接する柳堀遺跡F・G・H区では近世以前の遺物が出土しており、茶臼遺跡出検した自然河道と円滑につながらない。しかし、狭い谷地形の中であれば旧河道の自然河道は自ずと限られており、これらが一つにつながっていたことは明らかだ。柳堀遺跡F・G・H区では旧河道が合流する様相

が検出された。最も南の川原宮Ⅱ遺跡で検出した自然河道は、奈良時代にすでに埋没したものであったことが考えられる。自然化学分析でも周囲の平地の耕地化について言及されているが、このような発掘調査の結果が各遺跡周辺の耕地化の様子を何かの形で反映している可能性が考えられる。

なお、川原宮Ⅱ遺跡は、古代山陰道の出雲国府から西に延びる正西道のルート上に当たるのではないかと推測されていた。⁽¹⁾ 4とおり以上ある推定ルートと調査区を重ね合わせると、そのうちの1本が川原宮Ⅱ遺跡A区とB区の境界付近を通っていた。今回の調査では、波板状遺構や側溝など古代道路に関わる遺構は一切検出していない。東西壁のセクションにも表れていない。これについては、推定ルート上が粘土採掘坑の最も濃密に分布する区域だったことも影響していると思われる。

注

- (1) 勝部昭、「正西道の検討」、『出雲古代史研究3』、出雲古代史研究会編、1993年

参考文献

- 『国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書(Ⅳ)』、鳥根県教育委員会編、1983年
『北松江幹線新設工事・松江連絡線新設工事予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』、鳥根県教育委員会編、1987年
『一般国道9号松江道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書X(中竹矢遺跡)』、鳥根県教育委員会編、1992年

第11表 川原宮Ⅱ遺跡土坑一覽表

探検番号	遺跡番号	断面図	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	形状	切り合い関係	土層堆積状況	出土遺物	備考
59	SK35	南北	0.60	0.58	0.24	正円形		2層		
59	SK36	南北・東西	4.74	3.37	0.45	不定形(土坑3層)		1,2層交層		大形土坑
59	SK37	南北	1.36	1.16	0.27	不定円形		1,2層交層		
59	SK38	南北・東西	1.17	0.68	0.23	不定円形		1層		
59	SK39	南北・東西	1.64	1.64	0.17	不定円形		1,2層交層		
59	SK40	東西	1.96	0.47	0.07	長楕円形		1層		
59	SK42	南北	11.55	10.64	0.23	円形	調査区東端に切られる	1,2層交層	須置器 1(杯 73-4)	
59	SK43	南北	11.33	10.91	0.25	不定円形	調査区東端に切られる	1,2層交層	須置器 1(杯)	
59	SK44	南北・東西	2.22	1.75	0.16	不定円形				
59	SK45	南北	1.86	1.44	0.19	不定円形	SK46と隣接	1,2層交層		
59	SK46	東西	2.74	2.04	0.14	不定円形	SK45に切られる	1,2層交層	土師器 1(甕)	
59	SK47	南北・東西	2.27	1.94	0.28	不定円形		1,2層交層		
59	SK48	南北・東西	1.27	1.27	0.32	円形		1層(灰白色ブロック多)		
59	SK49	南北・東西	1.61	1.02	0.15	不定円形		1層	須置器 1(杯)	
59	SK50	南北・東西	1.48	1.05	0.21	不定円形		1,2層交層		
59	SK51	東西	1.95	1.42	0.25	不定円形	SK53に切られる			
59	SK52	南北	0.38	0.34	0.07	円形		1,2層交層		
59	SK53	東西	1.65	1.26	0.17	不定円形	SK55に切られる	1層		
59	SK54	南北	1.89	1.67	0.17	不定円形		1,2層交層		
59	SK55	東西	1.70	1.58	0.29	不定円形	SK123と排水口に切られる	1,2層交層	須置器 1(杯身)	
59	SK56	南北・東西	2.05	1.67	0.17	不定円形		1,2層交層		
59	SK57	南北・東西	1.82	1.65	0.26	不定円形		1,2層交層		
59	SK58	南北	1.47	1.34	0.32	不定円形		2層		
59	SK59	南北	12.50	1.31	0.31	不定円形	SK58に切られる	2層		
59	SK60	南北	1.72	1.12	0.11	不定形	SK105に切られる	1,2層交層		
59	SK61	南北	2.30	1.92	0.22	不定形	SK60に切られる	1,2層交層	須置器 1(杯 73-2)	
59	SK62	南北・東西	1.17	1.09	0.28	円形		1,2層交層		
59	SK63	南北	1.04	0.94	0.18	円形		2層		
63	SK64	東西	1.67	1.50	0.19	不定円形	SK65と隣接			
63	SK65	東西	1.26	1.03	0.14	不定円形	SK64と隣接			
63	SK66	南北・東西	2.54	1.80	0.17	不定形	SK95・110に切られる	1,2層交層		
61	SK67	南北・南北(エレベーション)	2.55	2.06	0.30	不定形	SK144・179と隣接	1層	須置器 2	自然化学分析資料採取第65図にも掲載
61	SK68	南北・東西	2.84	2.00	0.21	不定形(土坑3層)	SK177・178と隣接	1層		第67図にも掲載
67	SK69	南北・東西	1.25	0.90	0.09	不定円形		1層(薄い)		
67	SK70	南北・東西	0.85	0.74	0.19	円形		1層		
57	SK72	南北・東西	2.06	0.76	0.24	不定長楕円形		2層		
61	SK73	南北	1.89	1.15	0.19	不定円形		1層(灰白色ブロック多)		第67図にも掲載
59	SK74	南北・東西	0.74	0.46	0.10	楕円形				
59	SK75	南北・東西	0.88	0.78	0.21	円形		1,2層交層(灰白色ブロック多)		
59	SK76	南北・東西	2.00	1.78	0.30	不定形(土坑2層)		1,2層交層(ほとんど1層)		
61	SK77	南北・東西	2.68	2.19	0.26	不定形(土坑2層)		1層(灰白色ブロック非常に多)		
61	SK78	南北・東西	1.37	1.26	0.22	円形				
59	SK79	南北・東西	2.02	1.58	0.26	不定円形	SK105に切られる	1,2層交層		第63図にも掲載
59	SK80	南北	1.95	0.92	0.27	不定長楕円形(土坑2層)		1,2層交層	土師器 11無高台(673)	第63図にも掲載
59	SK81	南北・東西(日本)	4.06	2.38	0.17	不定長楕円形(土坑3層)		1層		
59	SK82	南北・東西	1.83	1.44	0.21	不定円形		1,2層交層		
63	SK83	南北・東西(日本)	2.98	2.25	0.41	不定形(土坑3層)	SK93に切られる	1,2層交層		
63	SK84	南北	1.16	0.97	0.16	円形		1層		
63	SK85	南北	1.35	1.15	0.17	円形	SK105に切られる	1,2層交層		
61	SK86	南北(エレベーション)	2.27	1.56	0.15	不定円形				
61	SK87	東西	0.98	0.92	0.11	不定円形		1層		
61	SK88	南北・東西	1.58	1.15	0.06	不定形		1層		
61	SK89	南北	1.26	1.11	0.14	不定円形	SK115に切られる	1層		
61	SK90	南北・東西	1.89	1.83	0.23	不定形		1層		
61	SK91	南北	0.79	0.50	0.23	不定円形		1層		
61	SK92	東西	0.92	0.87	0.12	円形		1層		
63	SK93	南北	2.44	1.33	0.19	不定形	SK94・112・197に切られる			
63	SK94	南北・東西	2.95	2.18	0.18	不定形		1,2層交層(須置器)		
63	SK95	南北・東西	1.04	0.95	0.13	楕円形	SK66と隣接	1,2層交層(須置器山ブロック多)		
61	SK96	東西	0.68	0.57	0.11	円形		1層		
67	SK97	南北・南北(エレベーション)	2.24	1.90	0.16	不定円形		1層		
67	SK98	南北	1.57	1.43	0.08	円形				
67	SK99	東西	1.02	0.90	0.32	円形	SK177・178・179と隣接	1層		

検出 番号	遺構 番号	断面図	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	形状	切り合い関係	土層埋積状況	出土遺物	備考
67	SK100	東西(エレベーション)	3.30	1.85	0.19	不定形(土坑2基)		1層	須恵器(1貫) 埴化木	
61	SK101	南北(仮本)東西	3.11	1.60	0.11	不定形	明渠4に切られる			
67	SK102	南北・東西	1.94	1.44	0.08	不定形	調査区東壁に切られる			
67	SK103	南北	0.39	0.20	0.04	円形	調査区東壁に切られる			
67	SK104	南北	1.34	1.27	0.12	不定円形		1層		
63	SK105	南北・東西	5.02	3.05	0.25	不定形(土坑3基)	明渠4・SK60・78・79・85に切られる	1,2層交層		大形土坑
63	SK106	東西	1.35	0.74	0.22	円形	SK107に切られる			
63	SK107	南北	1.85	1.31	0.09	不定円形	SK108と隣接			
63	SK108	南北	2.12	1.91	0.17	不定形	SK135に切られる SK107に隣接		土師器(1無高台付73-4)	
63	SK109	東西・南北(エレベーション)	1.62	1.20	0.26	楕円形	SK108・112に切られる			
63	SK110	東西	2.17	1.54	0.09	不定形		1,2層交層		
63	SK111	東西	1.73	0.99	0.15	不定楕円形	SK85に切られる	1,2層交層		
63	SK112	東西	1.83	1.24	0.27	不定形	SK93・109と隣接	1,2層交層(1層多)		
61	SK113	南北・東西	3.96	2.06	0.13	不定形	明渠4・SK73に切られる	1層		
61	SK114	南北	2.53	1.79	0.13	不定形	SK73・121に切られる	1層	鉄貨(1) 凹形通貨(73-6)	
61	SK115	南北	2.19	1.31	0.26	不定形		1層		
61	SK116	南北(仮本)東西	4.70	3.33	0.19	不定形(土坑3基)	調査区東壁に切られる	1層	須恵器(1貫)	
63	SK117	東西(エレベーション)	2.28	1.75	0.16	不定形(土坑2基)	SK110に切られる	1,2層交層(2層多)		
61	SK118	東西(エレベーション)	3.02	1.78	0.23	不定形(土坑3基)		1,2層交層		
61	SK119	南北・東西(仮本)	3.95	2.96	0.27	不定形(土坑2基)				
61	SK120	南北・東西(仮本)	2.39	2.02	0.46	円形	調査区東壁に切られる	1層		
61	SK121	南北・東西	2.65	2.65	0.26	不定形(土坑2基)	SK94に切られる SK122に隣接	1層		
61	SK122	南北・東西(仮本)	4.41	2.25	0.23	不定形(土坑2基)	SK54・120に切られる SK121に隣接	1層		
59	SK123	南北・東西	2.60	2.50	0.22	不定形	SK55と隣接		軽石1	
59	SK124	南北(仮本)東西	8.07	4.03	0.38	不定形				大形土坑8基以上
67	SK125	東西(エレベーション)	1.92	1.75	0.13	不定円形				
67	SK126	南北(エレベーション)	2.53	1.67	0.21	楕円形(土坑2基)				
61	SK127	南北(エレベーション)	2.20	1.97	0.17	不定円形				
61	SK128	南北(エレベーション)	1.00	0.91	0.06	方形				
61	SK129	南北(エレベーション)	2.00	1.39	0.12	楕円形				第67図にも掲載
61	SK130	南北(エレベーション)	1.03	0.99	0.09	不定方形				
61	SK131	南北(エレベーション)	0.95	0.80	0.17	円形				
63	SK132	南北・東西	1.58	1.46	0.28	正円形		1,2層交層	石器(1無高台付)	
63	SK133	南北・東西	2.00	1.24	0.29	不定楕円形		2層	土師器(1貫73-5)	
63	SK134	南北・東西	2.16	1.72	0.33	不定楕円形		1,2層交層	須恵器(4貫273-8/9) 273-8	
63	SK135	南北・東西	3.19	1.79	0.31	不定形(土坑)	SK108に切られる	1,2層交層(1層多)		
63	SK136	東西	3.62	2.28	0.27	不定形(土坑2基)	調査区南壁・SK135・137に切られる	1,2層交層(1層多)	須恵器(1貫蓋)	
63	SK137	南北	1.03	1.03	0.29	円形	SK164・165に切られる	1,2層交層(1層多)	土師器(2貫小皿73-9,73-10)	
63	SK138	東西	1.43	1.05	0.08	不定形				
63	SK139	南北	1.29	0.77	—	円形	SK166・171に切られる	1,2層交層 土師器(1貫)	須恵器(3貫73-11)	
65	SK140		1.80	1.80	—	不定形	明渠5・SK141・190・191に切られる			
65	SK141		2.14	1.76	—	円形	明渠5に切られる			
65	SK142		2.67	1.79	—	不定楕円形				石器(1玉筒剣片)
63	SK143		2.75	1.41	—	不定形	SK191に切られる SK192・193と隣接			
63	SK144		2.57	1.43	—	不定形	SK67・193・194と隣接			第65図にも掲載
65	SK146		1.66	1.46	—	不定方形	SK240と隣接		須恵器(2貫171) 土師器(1無高台付)	
67	SK147		2.16	1.35	—	不定形	SK178に切られる		須恵器(1無高台付73-19) 土師器(1貫小皿)	
67	SK148		2.95	2.31	—	不定円形				
67	SK149	南北・エレベーション	2.78	1.91	0.09	不定形	明渠5・SK181に切られる			
67	SK150	東西	2.93	1.17	0.09	不定長楕円形	明渠5に切られる			
67	SK151	南北・エレベーション	3.03	1.71	0.11	不定楕円形	明渠5に切られる		石器(1無高台付)	
63	SK152	南北(エレベーション)	2.31	1.66	0.27	不定形	調査区南壁に切られる	1,2層交層(2層多)		
63	SK153	南北	1.38	0.72	0.28	楕円形	明渠5に切られる	1,2層交層(2層多)		

検出 番号	遺構 番号	断面図	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	形状	切り合い関係	土層堆積状況	出土遺物	備考
67	SK155		0.86	0.65	—	円形	SK157に切られる			
67	SK156		[1.92]	1.31	—	不定形	SK97・149・155に切られる			
67	SK157	南北(エレベーション)	1.72	1.61	0.13	不定方形				
67	SK158	東西	1.32	1.06	0.17	円形	SK160に切られる			
67	SK159	南北(エレベーション)	1.03	0.65	0.10	楕円形				
67	SK160	東西(エレベーション)	1.04	0.81	0.18	楕円形				
67	SK161	東西	1.69	1.08	0.13	不定形	SK160に切られる			
63	SK162	東西(エレベーション)	0.94	0.83	0.33	円形		1.2層交層(目撃多)		
63	SK163	南北(エレベーション)	[1.50]	[0.66]	0.04	不定形	調査(両壁)に入る		須恵器Ⅰ(高台付皿)	
63	SK164	東西	[2.23]	1.96	0.17	不定形	SK136・137・163に切られる		1.2層交層(目撃多)	須恵器Ⅰ(坏蓋)
63	SK165	南北	1.87	1.43	0.18	不定楕円形			1.2層交層(目撃多)	
63	SK166	南北	1.84	[1.13]	0.26	楕円形	SK171に切られる			
63	SK167		2.57	1.39	—	不定長楕円形	SK168・169・170・171と隣接			
63	SK168		[1.56]	0.93	—	不定楕円形	SK167と隣接			
63	SK169		0.91	0.86	—	円形	SK167・170・187・188と隣接			
63	SK170		1.75	1.19	—	円形	SK171に切られる			
63	SK171	南北	1.93	1.46	0.45	楕円形	SK167に切られる			
67	SK172		0.87	0.58	—	楕円形				
67	SK173	東西	3.86	3.26	0.25	不定形(土坑2基)			土師器Ⅱ(無高台杯)	
65	SK174	東西	3.46	3.41	0.29	不定形(土坑2基)	SK180に切られる		須恵器Ⅰ(敷73-14) 土師器Ⅰ(無高台杯73-13)	第71図にも掲載
65	SK175	東西	3.19	1.45	0.28	不定長楕円形		1.2層交層(目撃多)		第71図にも掲載
65	SK176	南北	1.44	1.31	0.13	不定円形		1.2層交層(目撃多)		第71図にも掲載
67	SK177	東西(エレベーション)	[1.03]	[0.44]	0.16	不定形	SK178に切られる			
67	SK178	南北(エレベーション)	1.66	1.47	0.15	不定形	SK68・99・147・177・179と隣接			
67	SK179	南北(エレベーション)	1.06	0.97	0.10	不定形	SK67・99・142・178と隣接			第65図にも掲載
67	SK180		2.75	1.51	—	不定形	SK181と隣接		須恵器Ⅰ(坏蓋) 土師器Ⅰ(坏)	第71図にも掲載
67	SK181		2.65	2.47	—	不定形	SK180と隣接			
65	SK182		2.53	1.09	—	不定長楕円形				
65	SK183		1.78	0.95	—	不定楕円形	SK240・247・256と隣接			
65	SK184		2.08	1.84	—	不定円形	SK232・235・237と隣接			土師器Ⅰ(坏)
63	SK185		1.13	1.11	0.14	不定形	調査区西壁・SK164に切られる			第71図にも掲載
63	SK186		2.08	1.96	—	不定方形	SK170に切られる			
63	SK187		1.31	1.29	—	不定形	SK169・170に切られる			
63	SK188		2.11	1.89	—	不定形	SK169・187・192に切られる			
63	SK189		1.55	1.41	—	不定形	SK188・192に切られる			
65	SK190	東西	1.10	1.04	0.16	不定形	SK191に切られる			
61	SK191	東西	1.85	1.68	0.36	不定方形				第63図にも掲載 第65図にも掲載
63	SK192		[4.68]	4.21	—	不定形	SK04・95・143・167・168・169に切られる			大形土坑
63	SK193		2.26	1.66	—	不定方形	SK143に切られる			
65	SK194	東西	1.26	1.15	0.26	不定方形	SK191に切られる			
65	SK195		3.55	1.38	—	不定形(土坑4基)			須恵器Ⅱ(No.58杯)	第71図にも掲載
65	SK196		1.25	1.10	—	円形			須恵器Ⅰ(輪状蓋173-15/敷17-片2)	第71図にも掲載
63	SK197	東西	1.93	1.56	0.22	楕円形				
63	SK198	南北	[1.87]	1.45	0.23	不定形	SK95・167に切られる			
67	SK199		1.74	1.57	—	不定円形				
67	SK200		1.96	[1.12]	—	不定形	SK148・199に切られる			
69	SK201		3.47	0.69	—	長楕円形	SK202・203と隣接			
69	SK202		1.56	1.61	—	不定方形	SK201・203と隣接			
69	SK203		3.65	0.88	—	長楕円形	SK201・202・204と隣接			
69	SK204		1.84	0.98	—	不定楕円形	SK203・205と隣接			
69	SK205		4.16	1.06	—	長楕円形	SK204・206・212と隣接			
69	SK206		2.01	0.97	—	楕円形	SK205・209と隣接			
69	SK207		1.88	1.16	—	楕円形	SK208・209と隣接			
69	SK208		[1.58]	1.95	0.23	不定形(土坑3基)	明渠6・SK207に切られる			
69	SK209		3.33	0.79	—	長楕円形	SK205・206・207・210・212と隣接			
69	SK210		3.19	0.74	—	長楕円形	明渠6に切られる SK209・212と隣接			
69	SK211		[1.96]	[1.28]	—	不定形	明渠6に切られる SK210と隣接			

第5章 川原宮Ⅱ遺跡

検出 番号	遺構 番号	断面図	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	形状	切り合い関係	土層埋積状況	出土遺物	備考
60	SK212		5.03	1.73	—	長楕円形	SK205・209・210・213・214と隣接			
60	SK213	[1.11]	1.02	—	—	不定形	SK214に切られる			
60	SK214		1.93	1.48	—	不定楕円形	SK212・213・215・216と隣接			
60	SK215		1.25	0.78	—	不定楕円形	SK214に切られる			
60	SK216		1.62	1.27	—	不定円形	SK214に切られる			
60	SK217	[1.12]	0.98	—	—	不定楕円形	T3に切られる			
60	SK218	[4.96]	1.90	—	—	溝状				
60	SK219	[0.72]	0.64	0.15	—	不定楕円形	調査区東壁に切られる SK220と隣接			
60	SK220	[1.34]	0.98	0.09	—	楕円形	調査区南壁に切られる SK219・223と隣接			
60	SK221		3.13	1.39	—	長楕円形				
60	SK222		2.98	0.91	—	長楕円形				
60	SK223		1.89	1.38	—	楕円形	南壁6・SK220に切られる			
60	SK224		3.41	1.58	—	不定楕円形	南壁6に切られる SK219・220・223と隣接			
60	SK225	[3.79]	1.06	—	—	溝状	SK226に切られる			
60	SK226	[2.01]	10.40	—	—	不定形				
60	SK227		3.95	0.99	—	不定形				
60	SK228		0.64	0.55	—	円形				
65	SK229		1.56	1.40	—	不定形				第71図にも掲載
65	SK230		2.37	1.96	—	不定形	SK196・229に切られる			第71図にも掲載
65	SK231		2.27	2.19	—	近円形				第71図にも掲載
65	SK232	[2.49]	1.25	—	—	不定形	SK231・233・234に切られる			第71図にも掲載
65	SK233		2.03	1.51	—	不定形				第71図にも掲載
65	SK234		2.87	1.90	—	不定形	調査区東壁に切られる SK232・235・239と隣接			第71図にも掲載
65	SK235		4.58	3.42	—	不定形(土坑 2個)	SK236・237に切られる			第71図にも掲載
65	SK236		1.27	0.78	—	楕円形				第71図にも掲載
65	SK237		3.42	1.72	—	不定形				第71図にも掲載
65	SK238	[1.88]	1.11	—	—	不定楕円形	SK237に切られる			第71図にも掲載
65	SK239		3.62	3.09	0.08	不定方形	調査区東壁・SK236に切られる			
65	SK240		1.28	1.08	—	不定円形				
65	SK241		2.62	1.88	—	不定形				
65	SK242		1.66	1.17	—	楕円形				
65	SK243		1.71	0.94	—	不定楕円形				
65	SK244		1.97	1.66	—	不定楕円形				
65	SK245	[1.61]	10.61	—	—	不定形	SK243・244に切られる			
65	SK246		2.64	2.51	—	不定形				
65	SK247		6.94	3.71	—	不定形	SK183・235・237・246・248・249に切られる			大型土坑
65	SK248		1.42	10.94	—	不定円形	SK249に切られる			
65	SK249		2.64	1.56	—	不定楕円形				
65	SK250	[4.34]	2.91	—	—	不定形	SK141・142・146・147・179・194・242に切られる			
67	SK251		1.29	0.71	—	楕円形				第71図にも掲載
67	SK252		1.31	0.92	—	不定楕円形				
67	SK253		1.82	1.77	—	不定楕円形	SK172に切られる			
67	SK254		2.57	0.88	—	不定長楕円形				第69図にも掲載
65	SK255		2.32	1.49	—	不定形	南壁5・SK147に切られる			
67	SK256		4.42	2.87	—	不定形	南壁5・SK146・182・183・255に切られる			第65図にも掲載
63	SK257		2.49	11.97	—	不定形	SK166・183・186に切られる			
63	SK258	[1.38]	1.02	0.13	—	不定形	調査区東壁・SK260に切られる			
63	SK259		2.07	10.79	0.31	不定形	調査区東壁に切られる			第65図にも掲載
63	SK260		2.28	1.58	—	不定円形	SK259に切られる			第65図にも掲載
65	SK261	[4.60]	2.12	—	—	不定形	SK260に切られる			
65	SK262		1.67	10.86	0.13	不定円形	調査区東壁に切られる			
63	SK263	[2.17]	2.02	—	—	不定形	SK260・262・271に切られる			第63図にも掲載
65	SK264	[1.95]	1.21	0.06	—	不定形	調査区東壁・SK239に切られる			
65	SK265	[1.40]	10.87	—	—	不定形	SK266・267に切られる			
65	SK266		1.13	0.74	—	不定形	SK267に切られる			
65	SK267	[1.97]	1.41	—	—	不定形	調査区東壁に切られる			
65	SK268	[0.96]	10.17	0.19	—	不定形	調査区東壁に切られる			
65	SK269		1.25	10.96	—	円形	SK249に切られる			
65	SK270	[3.79]	2.26	—	—	不定形	SK249に切られる			
65	SK271		3.33	3.27	—	不定形	SK270に切られる			
65	SK272		2.24	1.72	—	不定形	SK241・243・246に切られる			
65	SK273		1.71	0.78	—	不定楕円形				
65	SK274	[2.58]	1.82	0.10	—	不定形	調査区東壁・SK262に切られる			
67	SK275		1.37	0.87	—	不定楕円形				溝・土坑
67	SK276		0.82	0.55	—	不定楕円形				溝・土坑

採掘 番号	遺構 番号	断面図	長さ (m)	短径 (m)	深さ (m)	形状	切り合い関係	土層埋積状況	出土遺物	備考
67	SK277		11.30	0.78	—	不定形				
67	SK278		10.60	0.55	—	不定形				
67	SK279		1.06	0.88	—	不定形				浅い土坑
67	SK280		0.56	0.55	—	円形				浅い土坑
67	SK281		0.74	0.33	—	不定楕円形				浅い土坑
67	SK282		1.09	0.43	—	不定楕円形				浅い土坑、第65図、 第71図にも掲載
65	SK283		2.34	1.69	—	不定形(土坑 2個)				第71図にも掲載
67	SK284		2.36	0.82	—	不定形				浅い土坑
67	SK285		1.55	0.61	—	不定形				第71図にも掲載
65	SK286		0.93	0.75	—	楕円形				浅い土坑、第71図にも 掲載
65	SK287		2.16	1.28	—	不定楕円形		須恵器Ⅱ(費) 土師器Ⅱ(片) 土製品Ⅱ(土馬 73-10)		浅い土坑、第71図にも 掲載
71	SK288		1.79	1.25	—	不定形		須恵器Ⅱ(費)		浅い土坑、第71図にも 掲載
71	SK289		2.33	1.10	—	不定楕円形		須恵器Ⅱ(費)無高台付 73-17/費/高台付直 2.73-18.73-19)		第71図にも掲載
71	SK290		14.31	1.67	—	不定形	トレンチに切られる	須恵器Ⅱ(費)		
69	SK291		2.89	1.95	—	不定方形		須恵器Ⅱ(費)		第71図にも掲載
69	SK292		2.11	1.24	—	不定形				
69	SK293		1.52	1.00	—	不定楕円形				
67	SK294		1.03	0.88	—	不定円形				浅い土坑、第69図にも 掲載
65	SK295		0.80	0.48	—	不定楕円形				浅い土坑、第71図にも 掲載
71	SK296		1.12	0.66	—	不定楕円形				浅い土坑、第71図にも 掲載
67	SK297		0.98	0.73	—	不定楕円形				浅い土坑、第71図にも 掲載
61	SK298		6.35	4.50	—	不定方形	SK86・87・96に切られる			大型土坑
67	SK299		[6.50]	[4.15]	—	不定方形	SK68・97・126・148・ 155・156・159・200に 切られる			大型土坑

第12表 川原宮Ⅱ遺跡出土土器・瓦・土製品観察表

採掘 番号	遺物 番号	写真 図版	類別	器種	出土 地点	層位	口径 (cm)	その他の 寸法(cm)	残存率 (%)	形状・文様の 特徴	色調	備考	
72	1	56	須恵器	蓋(輪装 つまみ)	自然回 道1	5層	[15.0]	底径 [11.7]	10以下	1m以下の砂粒含む	口縁部直垂須 面	灰5/1.5Y	出雲国府第2型式
72	2	56	須恵器	高台付直 器1	自然回 道1	上層	—	底径 [8.6]	20	3m以下の砂粒含む	底部回転系切り /黏付高台	灰白 7/1.5Y	転用後の可能性あり 出雲国府第3～4型式
73	1	56	須恵器		SK42		[9.6]	器高 [4.0]	20	1m以下の砂粒含む	口縁部直ちびれ 状	灰5/N	出雲国府第3～4型式
73	2	56	土師器	無高台付	SK61		[14.4]	底径 6.4 器高 4.3	50	1m以下の砂粒少量 含む	底部回転系切り	外) 黄 8/3 2.5Y 内) 黄 緑 8/2.10Y	～12c代
73	3	56	土師器	無高台付	SK80		[13.4]	底径 [6.2]	40	1m以下の砂粒含む	底部回転系切り	灰白 8/2.10Y	～12c代
73	4	56	土師器	無高台付	SK108		14.1	底径 6.5 器高 5	90	1m以下の砂粒少量 含む	底部回転系切り	黄 8/4.2.5Y	～12c代
73	5		土師器	費	SK133		[19.8]	器高 [5.7]	10	1m以下の砂粒多量 含む	灰黄 5/2 10Y	風化顕著	
73	7	56	須恵器	直口直 器	SK134		[7.0]	器高 [3.4]	10	砂粒少量含む	灰6/N	出雲国府第2型式	
73	8	56	須恵器	無高台直 器	SK134		—	底径 [8.6]	20	1m以下の砂粒含む	底部内面撫押さ し状	外) 灰6/N 内) 灰白/7N	出雲国府第4型式
73	9	56	須恵器	柳小皿	SK137		8.4	底径 4.8 器高 2	完存	底部回転系切り	浅 黄 8/4 10Y	～12c代	
73	10	56	土師器	柳小皿	SK137		8.4	底径 4.7 器高 2	完存	2m以下の砂粒やや 多量含む	底部回転系切り	浅 黄 8/3.2.5Y	～12c代
73	11	57	須恵器	費	SK140		—	器高 [5.0]	10以下	1m以下の砂粒少量 含む	口縁部直垂2段 /或又11条	灰5/N 内) 灰白 7/N	8c末～10c代
73	12	56	須恵器	無高台直 器	SK147		—	底径 19.8 器高 14.9	10	1.5m以下の砂粒や 多量含む	底部回転系切り	灰6/N	8c末～10c代
73	13	57	土師器	無高台付	SK174		—	底径 16.6 器高 11.3	40	3m以下の砂粒含む	底部回転系切り	外) 黄 8/3 2.5Y 内) 灰 白 8/2.10Y	～12c代
73	14	57	須恵器	敷か費の 把手	SK174		—	器高 [4.6]	10以下	1m以下の砂粒少量 含む	内面同心円状 含む	外) 灰白 7/N 内) 灰5/N	8c末～10c代
73	15	56	須恵器	蓋(輪装 つまみ)	SK196		[16.6]	器高 [2.0]	10以下	1m以下の砂粒含む	口縁部直垂須 面	灰5/N	出雲国府第2型式
73	16	57	土師器	土馬	SK287		長 [13.0]	幅 [5.0] 厚 [3.5]	40	砂粒多量含む		灰白 8/2.2.5Y	土馬以外の可能性あり
73	17	57	須恵器	無高台付	SK289		—	底径 18.0 器高 [1.2]	10	砂粒少量含む	底部回転系切り	灰5/1.10Y	出雲国府第3～4型式
73	18	57	須恵器	高台付直 器	SK289		—	底径 12.0 器高 [2.5]	10以下	砂粒少量含む	底部回転系切り /黏付高台	外) 灰6/N 内) 灰5/1.5Y	出雲国府第3～4型式
73	19	57	須恵器	高台付直 器	SK289		—	底径 10.2 器高 [2.7]	20	1m以下の砂粒含む	底部回転系切り /黏付高台	外) 灰5/N 内) 灰白 3/N	出雲国府第3～4型式
74	1	57	須恵器	坏身	A区	地山 直上	[11.8]	受部 [14.5] 器高 3.6	60	1m以下の砂粒やや 多量含む		灰白 7/1.5Y	出雲 3期

採回 番号	遺物 番号	写真 図版	類別	器種	出土 地点	層位	口径 (cm)	その他の 寸法(φ)	残存率 (%)	胎土	形態・文様の 特徴	色調	備考
74	2	57	陶器類	坏身	A区	地山直上 [9]B		受部径11.7cm 器高12.2	10	砂粒少量含む	立ち上がりやや辛 低い	灰5/N	出雲3~4期
74	3	57	土師器	甕付鉢 (古子)	A区	地山直上 [6]B		受部径11.1cm 器高12.2	30	粗	青土(口縁部・ 底部無軸/方形 灰白8/10H 成形)	輪1軸青灰7/1 10H/無軸 灰白8/10H	中国/12c頃
74	4	57	土師器	甕の把手	A区	地山直上 [5]C	径13.4		10	1m以下の砂粒含む		灰黄8/2.5Y	~12c代
74	5	57	瓦	平瓦	A区	地山直上 [4]D	幅13.5 厚1.4		10以下	砂粒少量含む	凸面襷形目縁/ 凹面布目	灰白7/1.2.5Y	戦後, 11~12c頃
74	6	57	瓦	平瓦	A区	地山直上 [5]2	幅13.0 厚1.5		10以下	2m以下の砂粒やや 多量含む	凹面布目	灰5/N	戦後, 古代
75	1	58	陶器類	高坏	B区	6層	—	胴部径4.8 器高18.1	30	1m以下の砂粒多量 含む	胴部内面しぼり 目	灰6/1.5Y	出雲国府第3型式
75	2	58	陶器類	高台付甕	B区	6層	—	底径9.9 器高11.9	20	1m以下の砂粒含む	底部回転糸切り /胎付直行	灰6/N	出雲国府第2~3型式
75	3	58	陶器類	無高台甕	B区	6層	—	底径15.4 器高13.4	20	砂粒少量含む	底部両面指痕 多量	灰6/N	出雲国府第4~5型式
75	4	58	土師器	甕	B区	6層	[25.0]	器高13.7	10	1m以下の砂粒少量 含む		灰4/1.5Y	
75	5	58	土師器	甕の把手	B区	6層	径3.1		10	1m以下の砂粒多量 含む		灰黄8/3.2.5Y	
75	6	58	土製品	土製支脚	B区	6層	幅17.1 径6.6	[13.6]	60	2m以下の砂粒多量 含む		灰に濃い黄緑7/3 10H	8~9c前半
75	7	58	土製品	土製支脚	B区	6層	幅16.0 径5.0	[9]B	30	1m以下の砂粒多量 含む		灰1.1黄青7/3 2.5Y(内)灰黄 6/2.2.5Y	8~9c前半
75	8		土製品	土製支脚	B区	6層	—		10	2m以下の砂粒含む		灰黄8/4 10H	8~9c前半
75	9	58	瓦	平瓦	B区	6層	長11.0	幅17.0 厚1.9	10	砂粒少量含む	凸面襷形目縁/ 凹面布目	灰5/N	戦後, 縄文1 8c中葉
75	10	58	陶器類	高台付坏	B区	5層	—	底径19.2 器高12.6	20	2m以下の砂粒含む	胎付高台	外)灰4/N 内)灰6/N	出雲国府第2型式
77	1	59	陶器類	坏身	A区	3層	[10.6]	受部径13.6cm 器高12.2	10	砂粒少量含む	立ち上がりやや辛 低い	灰6/N	出雲4~5期
77	2	59	陶器類	坏身	A区	3層	[10.0]	受部径13.0cm 器高12.4	10	1m以下の砂粒少量 含む	立ち上がりやや辛 低い	灰白7/N	出雲4~5期
77	3	59	陶器類	甕(安珠 つまみ)	A区	3層	—	胴径2.4 高さ11.4	10	1m以下の砂粒少量 含む	胎付つまみ	灰6/N	出雲国府第2
77	4	59	陶器類	甕(輪状 つまみ)	A区	3層	—	胴径15.0 高さ11.4	30	2.5m以下の砂粒少 量含む	胎付つまみ	外)灰6/N 内)灰5/N	出雲国府第2型式
77	5	59	陶器類	高台付坏	A区	3層	—	底径19.4 器高13.9	30	1m以下の砂粒少量 含む	底部回転糸切り /胎付直行	灰白7/1.2.5Y	出雲国府第2型式
77	6	59	陶器類	高台付坏	A区	3層	—	底径17.2 器高13.0	30	1m以下の砂粒含む	底部回転糸切り /胎付直行	外)灰白7/N 内)灰7/N 7/1.2.5Y	出雲国府第4型式
77	7	59	陶器類	高台付坏	A区	3層	—	底径19.2 器高13.6	20	1m以下の砂粒少量 含む	底部回転糸切り /胎付直行	外)灰5/N 内)灰6/N	出雲国府第3型式
77	8	59	陶器類	高台付甕	A区	3層	[17.8]	底径112.0 器高4.4	40	1m以下の砂粒少量 含む	底部回転糸切り /胎付直行	灰6/1.0Y	出雲国府第4型式
77	9	59	陶器類	無高台坏	A区	3層	[10.8]	底径17.2 器高4.2	30	1m以下の砂粒少量 含む	口縁部深くびれ 状/底部回転糸 切り	明青灰5/1.5B	出雲国府第4~5型式
77	10	59	陶器類	無高台坏	A区	3層	—	底径6.8 器高12.2	20	1m以下の砂粒少量 含む	底部静止糸切り	灰白7/1.7.5Y	出雲国府第3~4型式
77	11		陶器類	短頸甕か	A区	3層	—	底径14.8 器高11.7	20	1m以下の砂粒少量 含む		外)期6/6 10Y(内)灰 白7/1.10Y	出雲国府第2~3型式
77	12	59	陶器類	甕	A区	3層	—	器高14.7	20	砂粒少量含む	底部波状文11 条	灰白7/N	出雲3~4期
77	13	59	陶器類	高坏	A区	3層	[24.0]	器高14.4	10	1m以下の砂粒含む		外)黄8/5/1 2.5Y(内)灰 4/1.4.5Y	出雲国府第4型式
77	14	59	陶器類	高坏	A区	3層	—	器高12.1	20	1m以下の砂粒少量 含む		灰5/N	出雲国府第3~4型式
77	15	59	陶器類	高坏	A区	3層	—	器高12.1	20	1m以下の砂粒多量 含む	胴部3方向切り 込み状通し	灰5/1.7.5Y	出雲4期
77	16	59	陶器類	高坏	A区	3層	—	底径111.6 器高13.6	10	1m以下の砂粒多量 含む		灰赤4/2.2.5Y	出雲4~5期(6c末~7c 初葉)
77	17	60	陶器類	甕	A区	3層	—	器高16.4	10以下	1m以下の砂粒少量 含む	口縁部波線4段/ 波状文10条	外)灰白6/1 7.5Y(内)灰 白7/1.7.5Y	8c末~10c代
77	18	60	陶器類	甕	A区	3層	—	器高14.7	10以下	1m以下の砂粒含む	口縁部波線2段/ 波状文7条2 内)灰白6/1.5Y	外)灰白7/1.5Y 内)灰6/1.5Y	8~9c代
77	19	60	陶器類	甕	A区	3層	[22.4]	器高16.5	10以下	1m以下の砂粒少量 含む	胴部外面平行 細き文/内面同 心/内付付具	外)灰白8/N 内)灰6/N	7c末~10c代
77	20	60	陶器類	甕	A区	3層	[18.0]	器高18.5	20	1m以下の砂粒少量 含む	胴部外面平行 細き文/内面同 心/内付付具	外)灰6/17.5Y 内)灰白7/1 7.5Y	8~9c代
78	1	60	弥生土 器	甕	A区	3層	—	器高12.8	10以下	2m以下の砂粒やや 多量含む	底部指痕1縦文 10H	灰黄8/3	弥生中期(松本第2期)
78	2	60	土師器	無高台坏	A区	3層	15.7	底径6.3 器高4.9	80	砂粒少量含む	底部回転糸切り	灰黄8/3 10Y	~12c代
78	3	60	土師器	無高台坏	A区	3層	—	底径5.8 器高12.2	40	1.5m以下の砂粒含 む	底部回転糸切り	灰 黄 8/3 10Y	~12c代
78	4	60	土師器	輪小皿	A区	3層	7	底径15.2 器高1.7	90	1m以下の砂粒含む	底部回転糸切り	灰 黄 8/8 12	12~13c代か16c以降
78	5	60	土師器	輪小皿	A区	3層	[9.0]	底径15.6 器高2.1	40	3m以下の砂粒含む	底部回転糸切り	灰白8/2.5Y	~12c代か16c以降

検出番号	遺物番号	写真図版	種別	器種	出土地点	層位	口径(φ)	その他の寸法(mm)	残存率(%)	出土	形態・文様の特徴	色調	備考
78	60		土師器	輪小皿	A区	3層	18.0	底径 10.0 器高 1.4	20	砂粒含む	底部回転糸切り	浅黄 8/4.25Y	~12c代・16c以降
78	7	60	瓦葺土器	坏	A区	3層	15.4	器高 14.0	10	砂粒含む	製部回転糸切り	外) 黄灰 3/N 内) 灰白 7/N	出雲国府第 3 型式
78	8	60	土師器	瓢の把手	A区	3層	長 13.4	幅 12.1	10 以下	砂粒含む		浅黄 8/4.75Y	~12c代
78	9	61	陶器	小皿	A区	3層	—	底径 15.4 器高 1.1	20	密	緑色釉 / 足込釉	輪 / 灰 オリーブ 5/N 7.5Y 無釉 浅黄 8/3.25Y	瀬戸・美濃 / 16c 頃
78	10	61	陶器	小皿	A区	3層	—	底径 15.1 器高 11.8	10	密	底部～高台無釉 / 足込砂目	灰黄 7/2.25Y	美濃 / 九島 II 期 (1610～50)
78	11	61	陶器	小皿(黄灰彫)	A区	3層	—	器高 13.0	30	密	黄灰色釉・緑色釉 磨り分け	輪 黄 8/8.25Y 黄 オリーブ 4/3.75Y	在地(布志名) / 19c 代
78	12	61	瓦葺土器	楕円	A区	3層	—	器高 17.0	10 以下	砂粒含む	内面磨り目	外) 灰白 8/2.25Y 内) 黄灰 5/1.25Y	
78	13	60	陶器	楕円	A区	3層	—	器高 17.0	10	密	無釉 / 内面磨り目 (1 単位 8 本)	外) 暗赤黒 3/4.5Y 内) 無灰 5/1.5Y	磯前 / 14～16c 頃
78	14	60	陶器	楕円	A区	3層	—	底径 14.0 器高 13.0	10	密	無釉 / 内面磨り目 (1 単位 7 本) 無磨り文面	にぶい暗緑 4/3.5Y	磯前 / 14c 頃
78	15	61	磁器(白磁)	中碗(黄灰彫)	A区	3層	10.0	器高 13.0	20	密	黄付(黄緑・赤黄草文)	灰白 8/1.5Y 黄付(暗赤灰 4/1.10BG)	美濃 / 九島 II - 2 期 (1630～50)
78	16	61	磁器(青磁)	小皿	A区	3層	11.0	底径 5.4 器高 2	40	密	青釉 / 底部外面無釉 / 足込赤花文(へう彫り)	輪 / オリーブ黄 6/3.75Y 無釉 灰白 7/N	中国西安窯系黒 1 類 / 12c 後半
78	17	61	磁器(青磁)	中碗	A区	3層	—	底径 14.8 器高 13.5	20	密	青釉 / 費付無釉	オリーブ 灰 6/2.10Y	中国西安窯系黒 1 類 / 14c～15c 代
78	18	61	磁器(青磁)	大皿(若緑彫)	A区	3層	23.4	器高 12.5	10	密	青釉 / 内面無釉	オリーブ 灰 5/2.10Y	中国(龍泉窯) / 15c 末
78	19	61	磁器(青磁)	碗	A区	3層	15.4	器高 13.5	20	密	青釉 / 外面赤花文(へう彫り)	灰 オリーブ 3/5.5Y	中国西安窯系黒 1 類 / 12c 後半～13c 前半
78	20	61	磁器(白磁)	碗	A区	3層	16.2	器高 14.5	20	密	白釉 / 底部無釉	灰白 7/1.75Y	中国白磁焼 II 類 / 12c 代
78	21	61	磁器(白磁)	碗	A区	3層	—	底径 16.0 器高 13.3	10	密	白釉 / 底部～高台無釉 / 足込赤花文 1 条	灰白 7/2.5Y	中国白磁焼 II 類 / 12c 代
79	1	62	瓦	軒丸瓦	A区	3層	長 12.3	幅 18.8 厚 11.9	10	1m 以下の砂粒少量含む		浅黄 8/3.25Y	数瓦、古代
79	2	62	瓦	丸瓦	A区	3層	長 15.2	幅 14.2 厚 1.5	10	1m 以下の砂粒含む		浅黄 8/4.75Y	数瓦、玉縁式、古代
79	3	62	瓦	平瓦	A区	3層	長 18.1	幅 17.7 厚 2.3	20	2m 以下の砂粒含む	凸面磨り目 彫 / 凹面布目	灰 5/N	破瓦、11～12c 頃
79	4	62	瓦	平瓦	A区	3層	長 10.2	幅 16.5 厚 2.1	10	1m 以下の砂粒少量含む	凸面磨り目 彫 / 凹面布目	浅黄 7/3.25Y	数瓦、鎌倉期
80	1	62	須恵器	坏蓋	B区	3層	11.2	器高 5.3	10	1m 以下の砂粒含む	大丹部回転へう彫り	外) 灰 5/N 内) 灰 6/N	出雲国府第 2 型式
80	2	62	須恵器	蓋(輪式つまみ)	B区	3層	—	幅径 13.3 器高 1.4	30	1m 以下の砂粒少量含む	彫付つまみ	外) 灰 6/N 内) オリーブ 灰 6/1.25Y	出雲国府第 2 型式
80	3	62	須恵器	蓋(輪式つまみ)	B区	3層	—	幅径 15.0 器高 1.5	20	1m 以下の砂粒少量含む	彫付つまみ	外) 灰 5/N 内) 灰 6/N	出雲国府第 2 型式
80	4	62	須恵器	蓋(平式つまみ)	B区	3層	—	幅径 1.9 器高 12.4	20	砂粒少量含む	彫付つまみ	灰 5/1.10Y	出雲国府第 4 型式
80	5	62	須恵器	蓋(輪式つまみ)	B区	3層	16.2	器高 12.4	20	砂粒少量含む	口縁底部垂直直線含む	灰白 7/N	出雲国府第 2 型式
80	6	62	須恵器	蓋(輪式つまみ)	B区	3層	17.0	器高 11.8	20	1m 以下の砂粒含む	口縁底部垂直直線含む	灰 6/N	出雲国府第 2 型式
80	7	62	須恵器	蓋(平式つまみ)	B区	3層	15.8	器高 12.0	30	2m 以下の砂粒含む	彫付つまみ / 口縁端部わずかに施部	青灰 6/1.5PB	出雲国府第 3～4 型式
80	8	62	須恵器	蓋(平式つまみ)	B区	3層	—	器高 11.2	20	1m 以下の砂粒少量含む	彫付つまみ	灰白 7/N	出雲国府第 3～4 型式 転用後の可能性あり
80	9	62	須恵器	高台付坏	B区	3層	113.2	底径 8.5 器高 4.9	80	1m 以下の砂粒少量含む	彫付高台	灰 6/N	出雲国府第 2 型式
80	10	62	須恵器	高台付坏	B区	3層	—	底径 18.2 器高 13.2	20	1m 以下の砂粒少量含む	底部回転糸切り / 彫付高台	灰白 8/N	出雲国府第 2 型式
80	11	62	須恵器	高台付坏	B区	3層	—	底径 18.4 器高 11.9	20	1m 以下の砂粒少量含む	底部回転糸切り / 彫付高台	灰 6/N	出雲国府第 2 型式
80	12	62	須恵器	高台付坏	B区	3層	—	底径 18.4 器高 13.8	20	砂粒少量含む	彫付高台	外) 灰 5/1.5Y 内) 灰 6/N	出雲国府第 2 型式
80	13	62	須恵器	高台付坏	B区	3層	—	底径 19.8 器高 12.3	20	1m 以下の砂粒少量含む	底部回転糸切り / 彫付高台	灰白 7/N	出雲国府第 3～4 型式
80	14	63	須恵器	高台付坏	B区	3層	—	底径 10.0 器高 12.3	20	1m 以下の砂粒少量含む	底部回転糸切り / 彫付高台	外) 青灰 6/1.5B 内) 青灰 6/1.5PB	出雲国府第 2 型式
80	15	63	須恵器	高台付坏	B区	3層	—	底径 19.0 器高 11.7	20	1m 以下の砂粒少量含む	底部回転糸切り / 彫付高台	外) オリーブ 灰 5/1.25CY 内) 灰 6/N	出雲国府第 3～4 型式
80	16	63	須恵器	高台付坏	B区	3層	—	底径 11.8 器高 11.0	20	3m 以下の砂粒少量含む	底部回転糸切り / 彫付高台	灰 5/N	出雲国府第 4 型式 転用後の可能性あり
80	17	63	須恵器	高台付坏	B区	3層	118.0	底径 11.0 器高 13.0	30	2m 以下の砂粒少量含む	底部回転糸切り / 彫付高台	暗青 灰 4/1.5PB	出雲国府第 5 型式
80	18	63	須恵器	高台付坏	B区	3層	—	底径 16.0 器高 12.3	10	砂粒少量含む	彫付高台	外) 灰 5/1.75CY 内) 灰 白 7/1.5Y	出雲国府第 4 型式
80	19	63	須恵器	無高台付坏	B区	3層	111.0	底径 16.0 器高 3.7	20	砂粒少量含む	底部回転糸切り	灰白 7/N	出雲国府第 5 型式

採石 番号	遺物 番号	写真 図版	種別	器種	出土 地点	層位	口径 (mm)	その他の 寸法(mm)	残存率 (%)	胎土	形態・文様 の特徴	色調	備考
80	20	63	須恵器	無高台杯	B区	3層	—	底径17.0 器高11.1	20	1㎝以下の砂粒少量 含む	底部回転糸切り	灰白 5/1 7.5YR	出雲国府第3～4型式
80	21	63	須恵器	無高台杯	B区	3層	—	底径15.6 器高1.8	20	1㎝以下の砂粒少量 含む	底部回転糸切り	灰白 8/N	出雲国府第5型式
80	22	63	須恵器	無高台杯	B区	3層	—	底径6.6 器高1.6	30	1㎝以下の砂粒少量 含む	底部回転糸切り	灰 5/N	出雲国府第5型式
80	23	63	須恵器	風子碗	B区	3層	—	器高12.8	20	1㎝以下の砂粒少量 含む	底部回転糸切り /脚1残存	外) 灰白 7/N 内) 明青灰 7/1 5B	出雲国府第4～5型式
80	24	63	須恵器	高杯	B区	3層	—	器高1.8	10	1㎝以下の砂粒少量 含む	—	灰 6/N 7.5Y	出雲国府第4型式 転用産の可能性あり
80	25	63	須恵器	高杯	B区	3層	—	器高1.5	20	1㎝以下の砂粒含む	—	灰 5/N	出雲国府第1～2型式
81	1	63	須恵器	甕	B区	3層	(13.2)	底径10.4 器高14.0	10	1㎝以下の砂粒含む	—	灰 6/N 1.5Y	7～9c代
81	2	63	須恵器	甕	B区	3層	(16.4)	器高14.0	10	1㎝以下の砂粒少量 含む	—	灰 6/N	7～9c代 胴部内面自然釉
81	3	63	須恵器	甕	B区	3層	(16.2)	器高15.5	10	1㎝以下の砂粒少量 含む	外面横方キ目・ 竹貫文	外) 灰 6/N 内) 灰白 7/N	7～9c代
81	4	63	須恵器	甕	B区	3層	(15.6)	器高1.8	10	1㎝以下の砂粒少量 含む	—	外) 灰 4/N 内) 灰 6/1.5Y	7～9c代
81	5	63	須恵器	壺	B区	3層	—	器高12.3	20	1㎝以下の砂粒少量 含む	底部回転ヘラ削り	外) 陶紫灰 4/1 5P / 内) 明青灰 7/1 5P	出雲3～4期 天井部外面ヘラ削りあり
81	6	63	須恵器	壺	B区	3層	—	胴部10.2 器高13.5	10	砂粒少量含む	頸部突帯文1条	灰白 7/1 2.5Y	出雲国府第5型式
81	7	63	須恵器	壺	B区	3層	—	胴部22.0 器高14.8	10	砂粒少量含む	肩部沈線2条	外) 灰 6/N 内) 灰白 7/N	7c代胴部外面自然釉
81	8	63	須恵器	壺	B区	3層	—	胴部18.0 器高15.9	30	砂粒少量含む	—	外) 灰 5/N 内) 灰 6/N	出雲国府第4型式
81	9	63	須恵器	壺	B区	3層	—	器高17.6	20	3㎝以上の砂粒少量 含む	—	外) 重沙 2/N 内) 灰 5/N	出雲国府第2～3型式
81	10	63	須恵器	高台付壺	B区	3層	—	器高14.3	20	2㎝以下の砂粒少量 含む	頸付高台	灰 6/N	出雲国府第2～3型式
81	11	63	須恵器	高台付壺	B区	3層	—	底径12.6 器高13.1	10	2㎝以下の砂粒少量 含む	頸付高台	外) 灰 6/N 内) 灰白 7/N	出雲国府第2～3型式
81	12	64	須恵器	無高台壺	B区	3層	—	底径18.6 器高13.9	20	3㎝以上の砂粒多量 含む	—	外) 灰白 8/N 内) 灰白 6/1 7.5Y	8～10c代
81	13	64	須恵器	無高台壺	B区	3層	—	底径11.2 器高15.5	10	1㎝以下の砂粒多量 含む	—	灰白 7/N	8～10c代
81	14	64	須恵器	無高台壺	B区	3層	—	底径13.0 器高14.1	10	2㎝以下の砂粒少量 含む	—	外) 灰 6/N 内) 灰 7.5Y	出雲国府第4～5型式
81	15	64	須恵器	無高台壺	B区	3層	—	底径12.4 器高14.8	10	1㎝以下の砂粒含む	—	外) 灰白 7/N 内) 灰 6/1 7.5Y	8～10c代
81	16	64	須恵器	瓢箪	B区	3層	—	底径15.8 器高16.1	10	3㎝以上の砂粒含む	外面格子状甲斐 文	灰 6/N	8～10c代
81	17	64	須恵器	?	B区	3層	—	器高13.7	10	1㎝以下の砂粒少量 含む	胴部外面平行甲 斐文/内面同心 円当て具痕	外) 灰白 7/N 内) 灰 7.5Y	7～9c代
81	18	64	須恵器	鉢	B区	3層	—	器高13.0	10	1㎝以下の砂粒含む	胴部外面平行甲 斐文/内面同心 円当て具痕	灰白 7/1 10Y	7～9c代
82	1	64	弥生 土器	口門盆	B区	3層	—	器高13.0	10以下	砂粒多量含む	—	浅黄緑 8/3 10YR	弥生中期
82	2	64	弥生 土器	甕	B区	3層	—	器高14.1	10以下	砂粒多量含む	—	浅黄緑 8/3 10YR	弥生前期?
82	3	64	埴輪	円筒埴輪	B区	3層	—	胴部22.6 器高15.9	10	1㎝以下の砂粒含む	胴部突帯文	にぶい・黄緑 6/3	—
82	4	64	土師器	無高台杯	B区	3層	—	底径16.2 器高1.2	20	1㎝以下の砂粒少量 含む	底部回転糸切り	浅黄緑 8/4 10YR	9c中～12c代
82	5	64	土師器	無高台杯	B区	3層	—	底径16.2 器高12.0	10	1㎝以下の砂粒含む	底部回転糸切り	浅黄緑 8/3 10YR	9c中～12c代
82	6	64	土師器	無高台杯	B区	3層	—	底径17.2 器高12.0	10	砂粒多量含む	底部回転糸切り	浅黄緑 8/3	9c中～12c代
82	7	64	土師器	無高台杯	B区	3層	—	底径15.2 器高1.2	20	1㎝以下の砂粒含む	—	淡黄 8/3 2.5Y	9c中～12c代
82	8	64	土師器	柱状高台 付杯	B区	3層	—	底径6.4 器高13.1	30	2㎝以下の砂粒含む	底部回転糸切り	浅黄緑 6/2 10YR	11c後～12c代
82	9	64	土師器	柱状高台 付杯	B区	3層	—	底径3.7 器高13.5	30	3㎝以上の砂粒含む	—	淡黄 8/3 2.5Y	11c後～12c代
82	10	64	土師器	柱状高台 付杯	B区	3層	—	底径13.6 器高13.0	30	3㎝以上の砂粒含む	底部回転糸切り	にぶい・黄緑 7/4 10YR	11c後～12c代
82	11	64	土師器	極小皿	B区	3層	19.0	底径14.1 器高2.3	40	砂粒少量含む	手づくね成形	淡黄 8/3 2.5Y	16c以降
82	12	64	土師器	極小皿	B区	3層	18.8	底径13.8 器高1.5	20	砂粒少量含む	手づくね成形/ 口縁部油押痕	灰白 8/2 10YR	16c以降 有明皿として使用
82	13	64	土師器	極小皿	B区	3層	18.0	器高2	40	砂粒少量含む	手づくね成形/ 口縁部油押痕	灰白 8/2 10YR	16c以降 有明皿として使用
82	14	64	土師器	極小皿	B区	3層	18.0	底径15.8 器高1.1	20	砂粒多量含む	底部回転糸切り	にぶい・黄緑 7/3	8～12c代
82	15	64	瓦葺 土器	高台付杯	B区	3層	—	底径17.0 器高11.8	10	砂粒少量含む	頸付高台	暗灰 3/N	9～12c代
82	16	64	瓦葺 土器	盥?	B区	3層	—	器高13.9	10	砂粒少量含む	胴部付突帯	外) 灰 6/N 内) 暗灰 3/N	9～12c代
82	17	64	瓦葺 土器	甕	B区	3層	—	—	10以下	砂粒少量含む	胴部外面格子状 甲斐文/内面同 心円当て具痕	外) 暗灰 3/N 内) 灰 4/N	9～12c代
82	18	65	土製品	土馬	B区	3層	長 117.5	胴15.0 器高14.0	80	砂粒少量含む	灰造・虹門表彫 /前後・脚3欠 損	淡黄 8/3 2.5Y	種馬(馬具なし) 牡馬

図号 番号	遺物 番号	写真 掲載	種別	器種	出土 地点	期位	口径 [cm]	その他の 寸法 [cm]	現存率 [%]	胎土	形態・文様 の特徴	色調	備考
82	19	65	土製品	土馬	B区	3層	長 14.8	幅12.6 厚13.0	10	砂粒多量含む	腹部のみ残存	淡黄8/2.5Y	馬具表裏
82	20	65	土製品	土馬	B区	3層	長 16.3	幅13.2 厚12.8	20	砂粒多量含む	腹部のみ残存	灰白8/2.10YR	たてがみ
83	1	65	陶器	小皿	B区	3層	—	底径4 器高1.7	30	密	底部→裏面無胎 /見込足 三日月高台・葉 文	外)にぶい黄緑 6/3.10YR 内)淡黄7/2.2.5Y	斐高/九陶Ⅰ-2期(1504~ 1616)
83	2	65	陶器	中碗	B区	3層	—	底径4.2 器高13.4	20	密	費付無胎/高台 無胎	外)にぶい黄 6/3.10YR 内)淡黄8/4 2.5Y	斐高/九陶Ⅱ-5期(1650 ~1800)高台手碗の一種
83	3	65	陶器	蓋鉢	B区	3層	[26.0]	器高1.0	10以下	密	無胎/内面磨り目 目1単位7~8	灰4/6.7.5Y	須谷城(山形県長市)/18c代 本
83	4	65	磁器 (色絵)	小碗 (丸形)	B区	3層	[9.0]	器高3.2	20	密	外面色絵	灰白8/N 色 10B 暗赤3/4	斐高/九陶Ⅱ期(1690~ 1780)
83	5	65	磁器 (染付)	中碗 (丸形)	B区	3層	[10.2]	器高5.1	20	密	外面染付(開帳 ・草花文)	灰白8/N 染 10B 青灰4/1	斐高/九陶Ⅲ期(1650~ 90)
83	6	65	磁器 (白磁)	極小皿	B区	3層	[7.8]	底径14.6 器高1.8	20	密	白磁/費付無胎・ 砂付着	灰白8/N	斐高/九陶Ⅱ-2期(1630~ 50)中国の可能性あり
83	7	65	磁器 (白磁)	小皿	B区	3層	—	底径4.4 器高1.8	20	密	白磁/底部→高 付無胎/見込足 /白釉刺さ/三 日月高台・葉文	灰白8/N	斐高/九陶Ⅱ-2期(1630~ 50)
83	8	65	磁器 (白磁)	小皿	B区	3層	—	底径3.8 器高2.8	20	密	白磁/底部→高 付無胎/見込足 /白釉刺さ・砂 付着/葉文	灰白8/N	斐高/九陶Ⅱ期(1690~ 1780)
83	9	65	磁器 (染付)	小皿	B区	3層	—	底径5.6 器高1.0	20	密	内面染付(開 帳・砂付着 無胎)	灰白8/N 染 10B 青灰4/1	斐高/九陶Ⅲ期(1650~ 90)
83	10	65	陶器 (海狗 染付)	香炉	B区	3層	—	胴部11.0 器高3.2	10	密	外面染付(開 帳・葉文/内面 無胎)	灰白8/6/10Y 7.5C 内)緑 灰6/1.20Y	斐高/九陶Ⅳ期(1690~ 1780)
83	11	66	磁器 (青磁)	小皿	B区	3層	—	底径17.8 器高1.0	20	密	青磁/足込印 文/裏面無胎	外)緑灰6/1 7.5C 内)緑 灰6/1.20Y	中国龍泉系IV類/15c末
83	12	66	磁器 (白磁)	碗	B区	3層	[16.4]	器高4.1	10	密	青磁/内面磨り 目(ハツク)	灰白7/1.5Y 2.5C	中国龍泉系Ⅰ類/12c末 ~13c前半
83	13	65	磁器 (白磁)	小杯 (扁反形)	B区	3層	[9.4]	器高2.8	10	密	白磁/口縁無胎	灰白7/1 7.5Y 無胎	中国白磁Ⅱ系Ⅱ類/12~ 13c代
83	14	65	磁器 (白磁)	碗	B区	3層	[15.6]	器高3.1	10	密	白磁/口縁無胎	灰白7/1.5Y 無胎	中国白磁Ⅱ類/12~13c 前半
84	1	66	瓦(須 恵式)	丸瓦(玉 縁式)	B区	3層	長 [7.3]	幅15.0 厚1.2	10以下	砂粒少量含む	外)灰4/N 内) 葉2/N	硬質、古代	
84	2	66	瓦	丸瓦	B区	3層	長 [5.8]	幅16.2 厚3.0	10以下	1cm以下の砂粒少量 含む	淡黄8/2.2.5Y	軟質、古代	
84	3	66	瓦	平瓦	B区	3層	長 [10.3]	幅16.5 厚2.2	10以下	1cm以下の砂粒少量 含む	灰白ナデ/内面 布目	淡黄 粗 8/3	軟質、古代
84	4	66	瓦	平瓦	B区	3層	長 [10.3]	幅17.5 厚2.3	20	1cm以下の砂粒多量 含む	灰白ナデ/内面 布目	にぶい黄緑7/4 10YR	軟質、古代
84	5	66	瓦	平瓦	B区	3層	長 [11.5]	幅18.5 厚2.1	20	砂粒少量含む	凸面磨り目 /内面布目	外)淡黄粗8/3 10YR 内)黄 灰6/1.2.5Y	軟質、古代
84	6	66	瓦	平瓦	B区	3層	長 [6.2]	幅18.5 厚3.3	10以下	1cm以下の砂粒少量 含む	凸面ナデ/内面 布目	灰白7/1.5Y	硬質、古代
84	7	66	瓦	平瓦	B区	3層	長 [8.7]	幅18.0 厚2.4	20	1cm以下の砂粒含む	にぶい黄緑7/3 10YR	軟質、古代	
85	1	67	須恵器	高台付壺	B区	1層 / 底面	—	底径14.2 器高13.8	20	1cm以下の砂粒含む	胎付高台	灰白7/1.5Y	出雲国第1~2型式
85	2	67	土師器	柱状高台 付杯	B区	2層	—	底径4.0 器高3.7	30	1cm以下の砂粒含む	底部回転糸切り	淡黄 粗 8/3 10YR	11c後~12c代
86	1	67	須恵器	蓋(輪状 つまみ)	—	—	—	幅径5.0 器高1.4	10	1cm以下の砂粒少量 含む	胎付つまみ	灰白7/N	出雲国第2型式 転用版の可能性あり
86	2	67	須恵器	高台付壺	—	—	—	器高2.6	10	1cm以下の砂粒少量 含む	底部回転糸切り /胎付高台	外)灰5/1.5Y 内)灰白8/1.5Y	出雲国第2~3型式
86	3	67	須恵器	蓋	—	—	—	器高9.2	10	1cm以下の砂粒少量 含む	製部内面同心 当て具	外)濁灰6/1 10YR 内)濁 灰5/1.10YR	7c末~9c代
86	4	67	陶器	蓋鉢	—	—	—	器高3.2	10以下	密	内面磨り目	外)にぶい赤黒5/4 2.5Y	藤原/13c頃
86	5	67	磁器 (青磁)	碗 (扁反形)	—	—	[11.0]	器高3.2	20	密	青磁/外面磨り 目・葉文(ハツク)	灰 6/1 7.5C	中国龍泉系Ⅱ類/13c頃
86	6	67	磁器 (白磁)	鉢弁碗	—	—	[16.2]	器高3.0	10	密	白磁/口縁無胎	灰白7/1.5Y	中国白磁Ⅱ類/12c~13c 前半
86	7	67	磁器 (白磁)	碗	—	—	—	底径16.4 器高12.0	10	密	白磁/底部→高 付無胎/見込足 縁1条	外)灰白8/N 内)灰白8/1.5Y	中国白磁Ⅱ類/12c~13c 前半
86	8	67	磁器 (白磁)	小杯 (扁反形)	—	—	—	器高1.8	20	密	白磁	灰白8/1.5Y	斐高/九陶Ⅲ期(1650~ 90)
86	9	67	磁器 (染付)	小杯 (扁反形)	—	—	—	底径2.2 器高2.2	40	密	外面染付(開 帳・費付無胎 ・砂付着)	灰白8/1.5Y 10B 青灰4/1	斐高/九陶Ⅱ-2期(1630~ 50)

第13表 川原宮Ⅱ遺跡出土木製品観察表

検出番号	遺物番号	写真回数	種別	器種	出土地点	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	形態・文様の特徴	木取り	備考
76	1	59	農具	杵	B区	6	60.6	9.5	3.2			

第14表 川原宮Ⅱ遺跡出土金属製品観察表

検出番号	遺物番号	写真回数	種別	出土地点	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	その他の寸法・法量(cm)	備考
78	22	61	蓋のつまみ	A区	3	器高残存3.0	幅径最大1.3	幅径最大1.3	残存11.9g	青銅製。経筒蓋か
78	23	61	煙管(扉首)	A区	3	7.0	1.0	1.0	火口径1.5	真鍮

第15表 川原宮Ⅱ遺跡出土石器石製品観察表

検出番号	遺物番号	写真回数	種別	出土地点	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考
72	3	56	打製石片	自然河遺	底部	(8.6)	7.6	1.9	(140.6)	流紋岩	楕形
72	4	56	石錘	自然河遺	上層	2.2	1.5	0.3	0.6	黒曜石	二等辺三角形四角式
74	7	57	石錘	A区	地山 直上	(1.7)	(1.1)	0.3	(0.4)	黒曜石	四角式
83	15	66	石錘	B区	3層	6.05	8.2	1.5	104.5		
85	3	67	五輪塔	B区	2層	22.4	15.5	12.6	4900		空風輪のみ。風化顕著

第16表 川原宮Ⅱ遺跡出土銭貨観察表

検出番号	遺物番号	写真回数	名称	出土地点	層位	銭径(A) / 銭径(B) (mm)	内径(C) / 内径(D) (mm)	銭厚 (mm)	量口 (g)	備考
73	6	57	崇寧通寶	SK114		25.19/25.52	20.28/20.2	15	1.0	北宋、初鑄年崇寧元(1023)年、現存率30%
78	24	61	熙寧元寶	A区	3層	23.75/23.98	19.05/19.3	15	3.0	北宋、初鑄年熙寧元(1068)年、完存
78	25	61	熙寧元寶	A区	3層	23.4/23.3	19.45/19	16	3.1	北宋、初鑄年熙寧元(1068)年、完存
78	26	61	元符通寶	A区	3層	24.6/24.8	20.3/20.3	18	3.6	北宋、初鑄年元符元(1098)年、行書、完存
83	16	66	寬永通寶	B区	3層	25.19/25.52	20.28/20.2	15	2.6	銅貨、寛永通寶、1期(古寛永)寛永13年(1636)~万治2年(1650)、完存
83	17	66	開元通寶	B区	3層	24.5/23.3	20.42/20.5	13	1.8	唐、初鑄年武德4(621)年、完存

第6章 自然化学分析

渡辺正巳（文化財調査コンサルタント（株））

第1節 柳堀遺跡

はじめに

本報は鳥根県教育庁埋蔵文化財調査センターが、発掘調査において検出された奈良（あるいは平安）時代から鎌倉時代にかけての耕作土及び連続する堆積物について、「耕作面の検出」、「作物の確認」の目的で、文化財調査コンサルタント株式会社に委託して実施した「堆積層の軟X線写真観察」、「花粉分析」に関する調査報告を、まとめ直したものである。

また柳堀遺跡は、松江市南部、大庭町長者原に位置する遺跡である。

分析試料について

調査区：柳堀遺跡 A 区の平面図（第 87 図）に、試料採取地点を示す。更に、軟X線写真観察試料採取位置を含む断面図を第 88 図に示した。試料はブロックで持ち帰り、実験室内で調整後、軟X線写真を撮影した。その後、試料の観察・分割を行い、各種分析に用いた。軟X線観察による詳細な記載を後述の観察結果及び第 89 図、分析試料の分割位置を第 90 図に示した。また、平面図及び断面図は鳥根県教育庁埋蔵文化財調査センターより御提供頂いた原図をもとに、作成した。

分析方法及び分析結果

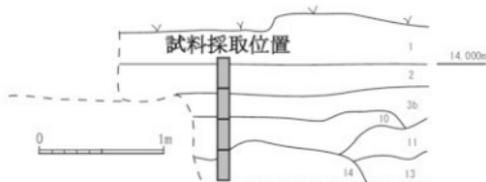
(1) 軟X線写真撮影・記載（観察）

① 試料採取・調整・撮影・記載方法

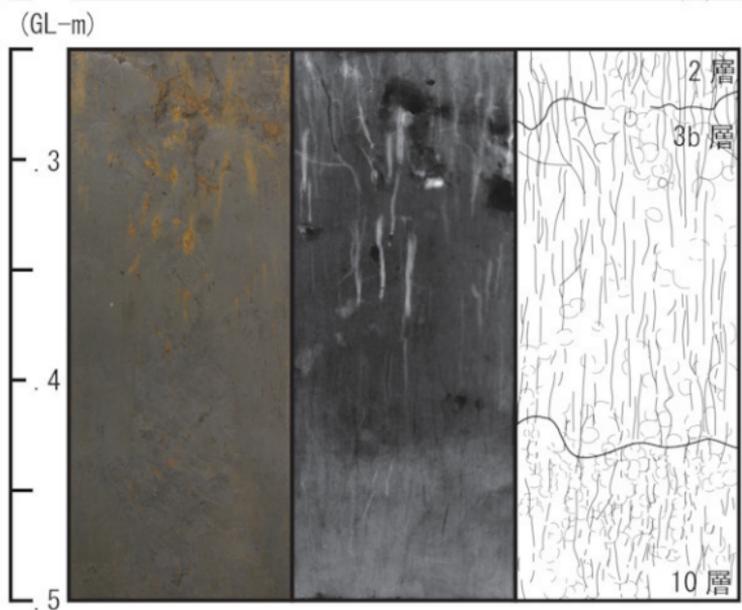
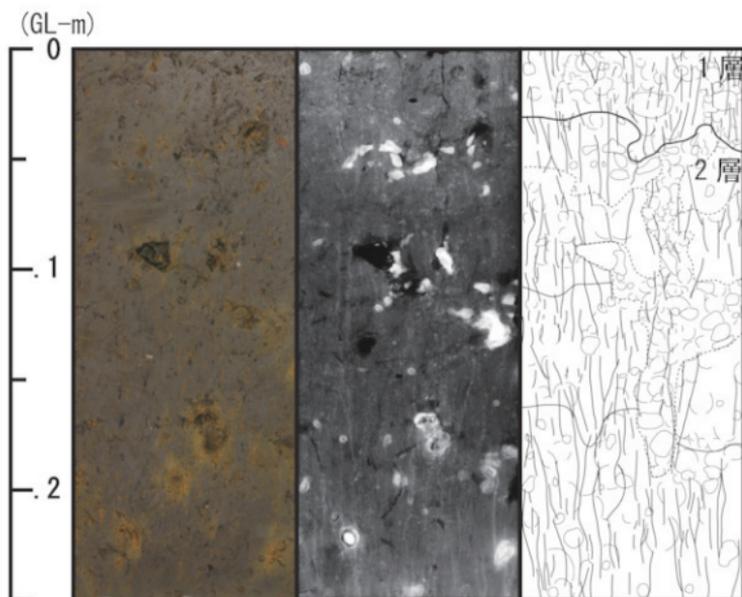
25cm × 10cm × 1cm の透明アクリルケースを用いて試料採取を行い、現試験室内にて試料調整を行った。軟X線撮影は、増感紙を挟んだ印画紙に 40 ~ 45kVp・30mA の電流で 50 秒 ~ 1 分 20 秒の間、軟X線を照射した（観察し



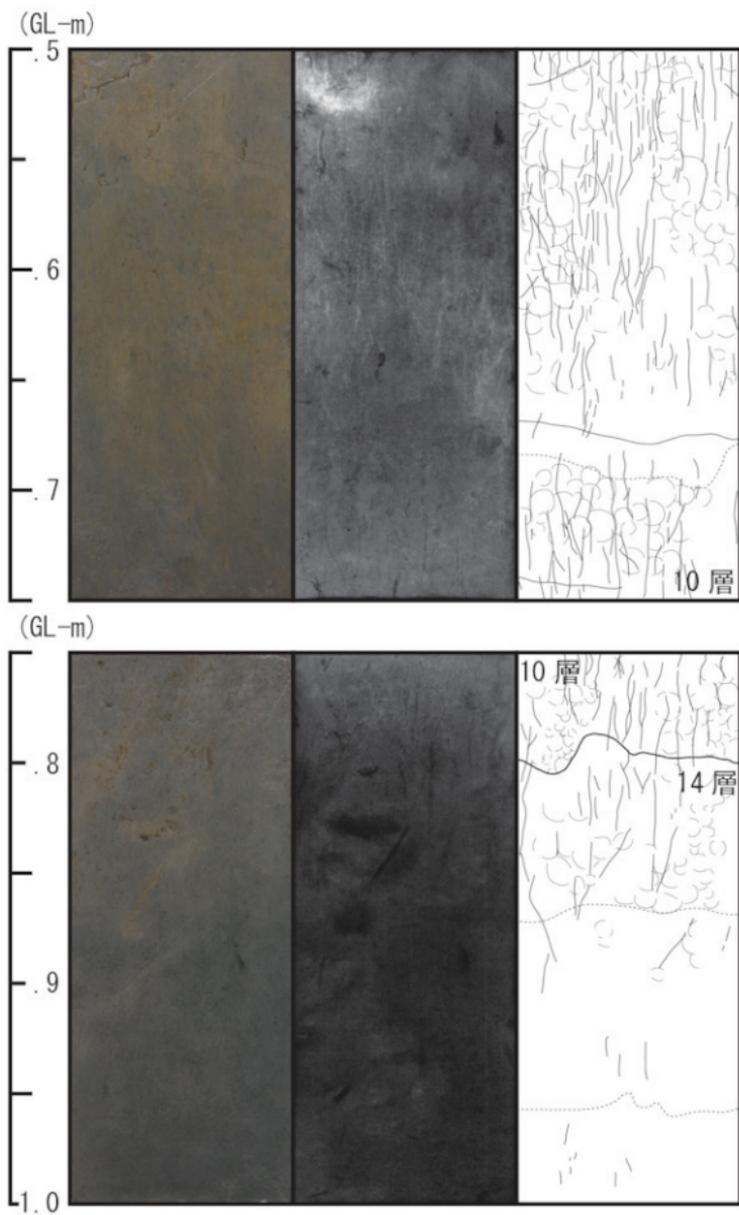
第 87 図 柳堀遺跡 A 区平面図（試料採取地点）



- 1: 耕作土 盛土 2: 暗灰黄色 砂混じる 硬い
3b: 褐灰色 粘質 鉱物多い (奈良 (平安) ~ 鎌倉の耕土)
10: 灰黄褐色 粘質 11: にぶい黄褐色 粘質
13: にぶい黄褐色 砂質 14: 黒色 砂質大
- 第 88 図 柳堀遺跡 A 区東壁断面図と試料採取位置



第 89-1 図 軟X線写真 左：軟X線 中：実視 右：解析結果



第89-2図 軟X線写真 左：軟X線 中：実視 右：解析結果

た軟X線写真は、ネガ画像である。記載は、「土壌記載薄片ハンドブック(久馬・八木: 訳監修, 1989)」に準じて行い、併せて分析試料を分取した。

② 分析結果

第89図に、実視写真、軟X線写真、解析結果を、第90図に試料採取位置を示す。また、以下に層ごとの記載を行う。

1) 1層

粘土。実視では多量のMn(酸化マンガ)が小粒状に検出しているほか、Fe(酸化鉄)の染み出しによって全体が黄褐色を呈している。軟X線では、酸化鉄の影響で全体が灰色を帯び、酸化マンガの粒子がやや明るく抜けている。また、根跡と考えられる直線的なチャンネルや、強から中度に発達する粗粒の小粒状ベッドが認められる。

2) 2層

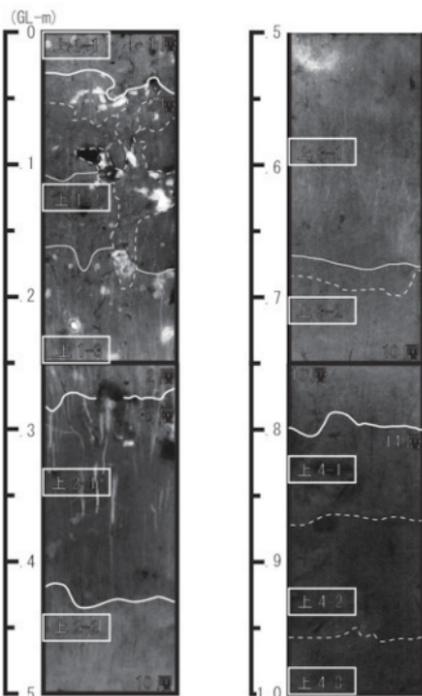
細～中粒砂の混じる粘土。実視では小粒状の酸化マンガが目立つほか、酸化鉄がベッドやブロック、根跡を準被覆し、ベッドフィーチャーを成している。更にベ

ッドフィーチャーの周辺は、酸化鉄の染み出しによって黄褐色を呈す。軟X線では、ベッドやブロック、大径の根跡を準被覆するベッドフィーチャーが顕著である。また、直線的なチャンネル(根跡)を準被覆するベッドフィーチャーも多く認められる。また中から弱度に発達した極粗粒から粗粒の小粒状ベッドが、(上下方向の)帯状に連続する(根による擾乱の可能性のある)部分がある。その他の部分では中から弱度に発達した極粗粒の小粒状ベッドが散在する。ただし、ベッドの周囲とチャンネルが重なっている部分が多く、ベッドの発達強度のほかベッドの存在そのものが不明瞭な部分が多い。

さらに、色調の僅かな違いから3層に細分したが、土壌構造上の差異は認め難かった。ただし、最上部の2～3cmは、1層からの擾乱を受けているものと考えられ、1層との地層境界が乱れるほか、小粒状の酸化マンガや、ベッドフィーチャーが多く認められた。

3) 3b層

粘土。実視では、上位(2層)との境界付近で、酸化鉄がベッドやブロック、根跡を準被覆する、ベッドフィーチャーが顕著である。軟X線では、一般的な直線的なチャンネル(根跡)のほか、量的には少ないが直線的なチャンネル(根跡)を準被覆するベッドフィーチャーが中部から上部で顕著である。また、ベッドの周囲とチャンネルが重なっている部分が多く、ベッドの発達強度のほか、ベッ



第90図 軟X線写真と分割資料

第17表 軟X線写真と分割資料

試料No.	花粉	炭	植物片	珪藻	火山ガラス	植物珪酸体
上1-1	◎	△	△	×	△	◎
上1-2	◎	○	○	×	○	◎
上1-3	◎	○	○	×	○	◎
上2-1	◎	○	○	×	△	◎
上2-2	○	◎	△	×	△	◎
上3-1	○	◎	△	×	△	◎
上3-2	○	◎	△	×	○	◎
上4-1	◎	◎	△	×	○	◎
上4-2	◎	◎	△	△	○	◎
上4-3	◎	◎	△×	△	△	○

凡例 ◎ : 十分な数量が検出できる ○ : 少ないが検出できる △ : 非常に少ない
 △× : 極めてまれに検出できる × : 検出できない

下の存在そのものが不明瞭である。明瞭なベッドは極粗粒の小粒状で、発達は弱度を示す。

4) 10層

細砂質粘土。実視では中央部に、酸化鉄の染み出しによる黄褐色が認められ、これを挟んで上部、中央部、下部に3分される。軟X線では、粒度を反映し全体に灰色を帯びているが、実視に反し中部の色調がやや暗い。上部では直線的なチャンネル（根跡）が顕著であるが、短いものが多い。また、最上部（3b層との境界）で粗粒のベッドが中～強度に発達する。ベッドの発達状態から、10層上面が旧地表面であった可能性が高い。中央部では上部に比べ直線的なチャンネル（根跡）が長く、酸化鉄が準被覆するベドフィーチャーが顕著に認められる。中度に発達した極粗～粗粒のベッドが部分的に固まる傾向にあり、大径の根跡が存在する可能性がある。下部と中部の間に、粗砂混の部分で2cm程度の薄層を成す。粗砂混薄層内から直線的なチャンネル（根跡）が下方に伸びる。これらには酸化鉄が準被覆するベドフィーチャーが認められる。粗砂混薄層直下から下位では、中から弱度に発達する極粗粒の小粒状ベッドが顕著である。

5) 14層

腐植質粘土。実視では、上部に酸化鉄の染み出しがあり、黄褐色を呈している。軟X線では、直線的なチャンネル（根跡）が上部に認められるほか、中度に発達するベッドが顕著である。中部では植物片と考えられる、幅広で短いチャンネルが顕著で、ベッドが僅かに認められる。下部では、植物片と考えられるチャンネルが細かくランダムに認められる。

(2) 微化石概査

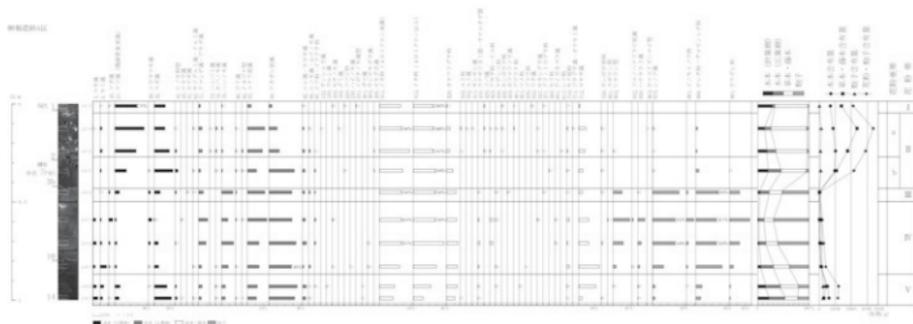
① 分析方法

花粉分析用プレパラートを用いて光学顕微鏡下で、微粒炭、植物片の含有状況を概観し、5段階で記載した。また、花粉分析処理残渣を用いて光学顕微鏡下で、珪藻、火山ガラス、植物珪酸体の含有状況を概観し、5段階で記載した。また花粉についても、含有状況の概観を記載している。

② 分析結果

分析結果を、第17表に示す。

(3) 花粉分析



第91図 花粉ダイアグラム

① 分析方法

渡辺(2010a)にしたがって分析処理を行った。花粉化石の同定は光学顕微鏡下(400～1000倍)で、原則的に木本花粉総数が200粒以上になるまで行い、同時に検出される草本・胞子化石の同定も行った。また中村(1974)に従ってイネ科花粉を、イネを含む可能性が高い大型のイネ科(40ミクロン以上)と、イネを含む可能性が低い小型のイネ科(40ミクロン未満)に細分している。

② 分析結果

花粉分析の結果を、花粉ダイアグラム(第91図)と花粉化石組成表(第18表)に示す。「花粉ダイアグラム」では、各々の木本花粉については木本花粉内部での割合(百分率)を算出してスペクトルで、草本・藤本花粉と形態分類群を除く胞子については計数した花粉・胞子の総数を基数にした百分率を算出してスペクトルで表している。さらに、木本花粉を針葉樹花粉、広葉樹花粉に細分し、これらに草本・藤本花粉、胞子の総数を加えたものの割合を算出し、累積グラフとして示した外、分類群ごとの含有量(粒/g)を示した。

花粉分帯と既知の結果との比較

(1) 花粉分帯

花粉分析結果を基に、局地花粉帯を設定した。また、花粉化石群集の時系列上の変化を明解にするために、下位から上位に向かって示す。

① V帯(上4-3、上4-2)

木本花粉の割合が40-50%を占める。木本花粉ではアカガシ亜属が卓越し、スギ属、コナラ亜属を伴う。草本花粉ではイネ科(40ミクロン未満)、イネ科(40ミクロン以上)、カヤツリグサ科、ヨモギ属が他の分類群に比べ高率を示す。

② IV帯(上4-1～上3-1)

花粉・胞子化石含有量が数千粒/gと少ない。木本花粉の割合が減少する一方で、胞子が増加する。木本花粉ではアカガシ亜属が卓越し、コナラ亜属、ハンノキ属、クマシデ属・アサダ属を伴う。草本花粉ではイネ科(40ミクロン未満)、イネ科(40ミクロン以上)が急増する。更にオシダ科・チャセンシダ科、シノブ属などの胞子も急増する。

③ III帯(上2-2)

第18表 花粉化石組成表

科群名	上-1	上-2	上-3	上-1	上-2	上-3	上-1	上-2	上-3	上-1	上-2	上-3
3. Podocarpaceae	マツ属											
5. Alnus	アザミ属	1.0%	4.3%	10.3%	4.2%	1.1%	4.4%	5.4%	6.2%	10.3%	10.3%	10.3%
10. Tilia	マツ属											
21. Pinus(Quercus?)	マツ属	147.7%	32.7%	30.27%	30.15%	11.1%	7.2%	3.2%	2.1%	15.7%	13.2%	1.0%
30. Escalloniaceae	コウヤクモ属											
32. Dipterocarpaceae	スギ属	29.14%	30.14%	64.19%	56.24%	14.2%	1.1%	6.3%	12.6%	36.13%	32.22%	32.22%
41. Cupressaceae type	ヒノキ属	1.0%										
43. Ephedraceae	マツ属											
45. Salix	ヤブコウソク属											
62. Phytolacca-sapidae	ササヅクミズミ属-ウルミ属											
69. Gramineae-Quercus	ササヅクミズミ属-アザミ属	5.2%		10.2%	2.1%	6.2%	11.6%	13.12%	11.9%	2.1%	10.3%	2.1%
73. Corylaceae	ハシバミ属											
74. Urticaceae	ウラボシ属											
75. Alnus	アザミ属	2.1%	3.1%	5.2%	3.1%	1.0%	27.15%	9.8%	18.15%	10.3%	11.3%	11.3%
80. Fagaceae	ブナ属											
82. Fagaceae type	イノモト属											
83. Quercus	コナラ属	10.3%	48.22%	63.19%	27.11%	61.22%	28.23%	17.15%	31.15%	28.13%	27.11%	27.11%
84. Combretaceae	アカガシ属	5.4%	23.15%	44.13%	76.22%	54.22%	33.22%	40.24%	35.45%	78.28%	77.22%	77.22%
92. Ulmaceae-Zelkoveae	ニレ属-カヤクサ属	1.0%	4.2%	9.2%	7.2%	5.2%	4.4%	6.3%	3.2%	11.1%	10.4%	10.4%
93. Menispermaceae	ムシゴケ属-ユズリ根属	2.1%	1.0%	2.1%	2.1%	4.2%	2.2%	2.2%	3.2%	1.0%	2.1%	2.1%
132. Zamiaceae	ウレシクサ属											
180. Alnus	ウレシクサ属	1.0%										
180. Alnus	モミジ属											
190. Gramineae	ツバコ属	1.0%	1.0%			1.0%				1.0%		1.0%
230. Gramineae	ハシバミ属											
241. Labiales type	イボバラシ属	1.0%										
261. Tilia	アザミ属											
308. Alnus	ササヅクミズミ属											
309. Sapindaceae	オウゴン属											
311. Gramineae(40)	イネ科(40ミクロン未満)	55.27%	101.46%	127.30%	69.29%	77.42%	74.60%	78.67%	53.25%	42.13%	41.17%	41.17%
312. Gramineae(40)	イネ科(40ミクロン以上)	338.162%	439.205%	367.117%	150.64%	98.62%	59.35%	48.36%	62.30%	50.14%	30.13%	30.13%
320. Cyperaceae	ホトケアザミ属	2.1%	4.2%	12.4%	19.3%	22.12%	14.12%	17.15%	29.14%	30.13%	28.11%	28.11%
343. Libidaceae	ユリ科											
352. Lilium	ユリ属	1.0%										
351. Ranunculaceae	アケボノ属											
418. Euforbiaceae-Phytolacca	ウツクシ属-ササヅクミズミ属											
422. Agropyron	ツバコ属	3.1%	3.1%	3.1%		1.1%	2.2%	3.2%	3.1%	2.1%	1.0%	1.0%
423. Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカガシ-ヒユ科											
430. Caryophyllaceae	アザミ属	1.0%										
430. Caryophyllaceae	キキョウ科											
455. Thalictrum	カラマツソウ属											
461. Cruciferae	アブラナ科	1.0%				1.1%						
501. Leguminosae	マメ科											
520. Vitaceae	ブドウ属											
542. Gramineae	ツバコ属	1.0%										
557. Alnus	アザミ属											
571. Halimolobos	アリノトウグサ属	1.0%	1.0%	1.0%		1.1%						
580. Umbelliferae	セリ科											
601. Ranunculaceae	アケボノ科											
611. Lamiaceae	シソ科											
710. Carabidae	キク科	1.0%	4.2%	1.0%	2.1%	1.1%	4.4%	2.2%	5.4%	2.1%	1.0%	1.0%
711. Androsace-Ranunculaceae	オウゴン属-オウゴン属											
712. Androsace	オウゴン属											
720. Dipterocarpaceae	スギ属	4.2%	10.15%	27.30%	13.2%	9.2%	15.13%	15.13%	58.24%	48.22%	11.1%	11.1%
801. Urticaceae-cryptogamium type	スギ属											
802. Urticaceae-sclerite type	スギ属											
842. Subgenus Saccardium	ツバコ属											
850. Orobanchaceae	ハシバミ科											
863. Orobanchaceae-sclerite type	ササヅクミズミ属											
175. Scrophulariaceae	シソ科											
881. Poinciaceae	イノモト科											
888. Aspid.-Aspid.	オウゴン属-アザミ属											
891. Tricolpate type-SPORE	ウツクシ属	3.1%	4.2%	4.2%	1.0%	69.34%	86.38%	81.32%	42.30%	22.13%	10.4%	10.4%
898. Monolete type-SPORE	三葉蕨孢子											
科群名合計		207.28%	239.28%	333.35%	238.43%	180.23%	113.27%	117.18%	211.25%	221.44%	227.55%	227.55%
草本花粉数		406.65%	388.70%	573.62%	259.50%	210.29%	176.24%	170.28%	216.25%	176.25%	112.29%	112.29%
木本花粉数		164.44%	164.44%	239.28%	180.23%	113.27%	113.27%	113.27%	113.27%	113.27%	113.27%	113.27%
科群名合計		570.72%	573.12%	812.90%	439.73%	323.56%	289.51%	283.55%	329.52%	289.52%	225.58%	225.58%
科群名合計		570.72%	573.12%	812.90%	439.73%	323.56%	289.51%	283.55%	329.52%	289.52%	225.58%	225.58%

花粉・胞子化石の含有量が、更に減少する。木本花粉の割合はやや増加し、胞子は減少する。花粉化石群集にIV帯からの大きな変化はないが、IV帯まで連続して出現していたマキ属が出現しなくなる一方で、マツ属（複雑管束亜属）、スギ属が増加する。

④ II帯 (上-2 ~ 上-1-2)

花粉・胞子化石の含有量は、およそ数万粒/gと急増する。木本花粉の割合が減少し、草本・藤本花粉が増加する。一方、胞子は激減する。木本花粉では、マツ属（複雑管束亜属）が下位のIII帯から引き続き増加する。一方、コナラ亜属は最下部の上-2-1で減少するが、その後増加する。スギ属、アカガシ亜属はこの間では減少するが、スギ属は最下部の上-2-1で増加している。また、III帯まで10%程度の出現率を示していたハンノキ属が1%と急減する。草本花粉ではイネ科(40ミクロン以上)が増加する。更に上-1-3から上位でソバ属が検出される。

以上のように、この間で一連の変化を示す分類群が多い。一方、上-2-1と上-1-3の間で顕著な差異を示す分類群もあることから下部(上-2-1)をb亜帯、上部(上-1-3, u上-1-2)をa亜帯とした。

⑤ I帯 (上-1-1)

花粉・胞子化石の含有量に、II帯から大きな変化はなく、木本花粉と草本・藤本花粉、胞子の割合にも大きな変化はない。木本花粉ではマツ属（複雑管束亜属）が卓越し、スギ属を伴う。草本花

粉ではイネ科(40ミクロン以上)が高率を示し、イネ科(40ミクロン未満)も他の草本花粉に比べ高い出現率を示す。また、ソバ属、ワタ属が検出される。

(2) 既知の結果との比較

今回の調査では、出土遺物から3b層が奈良(あるいは平安)～鎌倉時代に堆積したものと考えられていた。また、1層は近年まで耕作されていた耕土の下部である。今回調査地近辺では、出雲国府跡での花粉分析結果があり、古代を中心とした断続的な花粉化石群集が得られている(渡辺, 2004, 2006)。

ここでは、奈良時代～平安時代の花粉化石群集としてⅢ帯が、現代の花粉化石群集としてⅠ帯が設定されている。Ⅲ帯はスギ属の卓越と、アカガシ亜属の卓越から減少、随伴するマツ属(複維管束亜属)の増加で特徴付けられている。今回のⅡ帯がこの特徴と一致し、対比可能である。このことは、3b層が奈良(あるいは平安)～鎌倉時代に堆積したと矛盾しない。また、Ⅰ帯はマツ属(複維管束亜属)の卓越とスギ属の随伴で特徴付けられている。今回のⅠ帯はこの特徴と一致し、今回のⅠ層が、現代耕土の下部であることと矛盾しない。

一方、今回のⅢ、Ⅳ帯ではスギ属が低率で、アカガシ亜属が卓越する。更に下位のⅤ帯では、スギ属が減少傾向を示している。このような花粉化石群集の変遷は、日岸田地区15、16年度調査(渡辺, 2006)において、4区南壁と北壁での66号下層溝と上層溝(奈良～平安時代)の花粉化石群集の変遷として得られている。今回調査のⅢ、Ⅳ帯(10層)では酸化鉄の検出が顕著あり、花粉・孢子化石の含有量が少ない。このことは渡辺(2006)で指摘したように、一部の花粉(例えばスギ属)が選択的に消滅したことによると考えることが可能である。しかし、局地的な植生の反映など、今後の検討課題として残る。

耕作層(堆積環境)について

(1) 1層

1層は現耕作土であり、分析試料は調査時の地表面から25cm程度下位から採取していた。試料採取時の観察では、地表下15cmほどは直近の稲作により擾乱を受けているが、それより深くには孔隙の多少など明瞭な差が認められている(第92図)。軟X線写真では、直線的なチャンネルや、強から中度に発達する粗粒の小粒状ベッドが認められるなど、耕作土の特徴を持つ。一方、



第92図 水田での生物擾乱の影響

上: 試料採取地点 下: 遺跡内別地点

酸化鉄や酸化マンガンの検出は耕作土としての機能が終わってからの現象であり、この層準が耕作土であったことの証拠とはならない。これらのことから分析試料を採取した1層下部は、現在から幾らか遡った時期の耕作土と考えられる。このことは、現在では栽培されることがほとんどない(昭和40年(1965年)頃までは工芸作物として全国で栽培されていた。)ワタが検出されたこととも矛盾しない。

また1層から採取した上1-1では、イネ科(40ミクロ以上)花粉が162%と高率で検出され、同時に水田雑草を含むイネ科(40ミクロ未満)、カヤツリグサ科、キンボウゲ科、アリノトウグサ科も検出されるなど、この場所が水田であったと考えられる。一方低率であるがソバ属やワタ属が検出され、これらもこの場所で栽培されていたものと考えられる。ソバは民俗例では畑に限らず、畦でも栽培されている。また、イネの刈り取り後に裏作として栽培されることもある。ワタは「鳥畑」で栽培されていたことが知られており、調査地近辺にこのような耕作土が存在した可能性もある。

(2) 2層

ほぼ水平に堆積し、トレンチ全面に分布している。軟X線写真では、直線的なチャンネルが顕著であるが、ベッドの発達が中度から弱度とあまりよくない(ただし、ベッドの周囲とチャンネルが重なっている部分が多いようである)。耕作土の特徴を持つものの、1層に比べると、根拠として弱い。

2層から採取した上1-2、上1-3では、イネ科(40ミクロ以上)が200%、117%と高率で検出され、同時に水田雑草を含むイネ科(40ミクロ未満)、オモダカ属、カヤツリグサ科、キンボウゲ科、カカシグサ属、アリノトウグサ科なども検出される。このことから、この場所が水田であったと考えられる。一方低率であるがソバ属が検出され、この場所で栽培されていたものと考えられる。以上の事柄から、2層が耕作層(水田耕土)であった可能性は高い。

(3) 3b層

ほぼ水平に堆積し、トレンチ全面に分布している。3a層に覆われる場所と、3a層が欠如し2層に直接覆われる場所がある。現地記載(第94図-2)では「粘質 鈣物多い」とあるが、調査地点では淘汰の良い粘土であった。軟X線では、直線的なチャンネルが顕著である。明瞭なベッドは極粗粒の小粒状で、発達は弱度とあまりよくない(ただし、ベッドの周囲とチャンネルが重なっている部分が多いようである)。耕作土の特徴を持つものの、1、2層に比べると、根拠として弱い。

3b層から採取した上2-1では、イネ科(40ミクロ以上)が64%と高率で検出され、同時に水田雑草を含むイネ科(40ミクロ未満)、オモダカ属、カヤツリグサ科、セリ科なども検出されるなど、この場所が水田であった可能性が指摘できる。以上の事柄から、本層が耕作層(水田耕土)であった可能性は指摘できるが、1、2層に比べ低い。

(4) 10層

凹地(SX08)の埋土で、細砂質粘土。現地で観察した範囲では、河川堆積物とは考えにくい。軟X線では、最上部(3b層との境界)で粗粒のベッドが中～強度に発達し、上面が旧地表面であり、土壌化を強く受けたと考えられる。また、下部最上部に2cm程度の粗砂混粘土の薄層があり、直線的なチャンネル(根跡)が下方に伸びる。さらに、全体に中から弱度に発達する極粗粒の小粒状ベッドが顕著である。これらのことから下部上面で堆積が一旦止まるとともに、土壌化を受けた可能性がある。

10層から採取した上2-2～上3-2では花粉化石・胞子化石の含有量が低く、酸化鉄の検出などによって花粉・胞子化石が消滅した可能性が指摘できる。一方、最上部の上2-2では3試料のうち最も含有量が少ない。上面が旧地表面と考えられることから、土壌化の影響等によって花粉・胞子化石が消滅した可能性も指摘できる。

また、草本花粉化石群集ではイネ科（40ミクロン以上）が39.52%とやや高い出現率を示すが、イネ科（40ミクロン未満）も42.67%と更に高い出現率を示し、シダ類胞子もこれら以上に高率を示す。一方水田雑草を含むカヤツリグサ科やサジオモダカ属、アリノトウグサ科、キカシグサ科などが検出される試料があるが、荒地雑草を含むヨモギ属、アカザ科・ヒユ科やテイカカズラ属などが検出される試料もある。

以上のことから、10層には水田耕土の可能性は低く、凹地埋土であることから湿地で堆積した可能性が高い。イネ科（40ミクロン以上）花粉は、近辺から流入あるいは風によって運ばれたものと考えられ、湿地内にはイネ科のほかカヤツリグサ科やサジオモダカ属、アリノトウグサ科、キカシグサ科などの水田雑草を含む水生植物が生育していたと考えられる。さらに、周辺には荒地地が広がり、シダ類やヨモギ属、アカザ科・ヒユ科やテイカカズラ属などの荒地雑草が生育していたと考えられる。

(5) 14層

凹地（SX08）の埋土で、腐植質粘土。現地で観察した範囲では、河川堆積物とは考えにくい。軟X線では、上部には直線的なチャンネル（根跡）や、中度に発達するベッドが顕著である。上面で堆積が一旦止まるとともに、土壌化を受けた可能性もある。上位の10層下部の土壌化が顕著なことから、ここからの擾乱が及んだ可能性もある。中部、下部では根跡と考えられる直線的なチャンネルがほとんど認められず、ベッドも僅かに認められる程度である。

花粉・胞子化石の含有量は上部の上4-1で少ないが、中部、下部の上4-2、上4-3では多い。このことは、軟X線観察結果と一致し、上部では土壌化等の影響によって花粉・胞子化石が消滅したものと考えられる。

草本花粉化石群集ではイネ科（40ミクロン以上）が検出されるものの、イネ科（40ミクロン未満）と同程度か低率である。また、ヨモギ属やシダ類胞子なども高率を示す。以上のことから10層同様に水田耕土の可能性は低く、凹地埋土であることから湿地で堆積した可能性が高い。ただし10層に比べ腐植に富むことから、水位が低い湿原状態であった可能性も指摘できる。また、10層同様にイネ科（40ミクロン以上）花粉は、近辺から流入あるいは風によって運ばれたものと考えられる。湿原内にはイネ科のほかカヤツリグサ科やガマ属が生育していたと考えられる。さらに、周辺には荒地地が広がり、シダ類やヨモギ属などの荒地雑草が生育していたと考えられる。

古環境変遷

花粉分析結果を基に、花粉帯ごとに古環境を推定する。また、今回の分析結果では草本花粉及び胞子花粉の割合が高く、木本花粉の割合が低い。調査地は東に比高差5mを超す尾根、東に比高差5m未満の尾根で境される、幅200mほどの緩やかな谷（低地）の中央部に位置する、またこの谷の集水域は、最遠の分水嶺まで2kmほどで、1kmに満たないものと見込まれる。これらのことから、木本花粉の多くはこの谷奥あるいは周囲の尾根上に分布した森林から飛来、あるいは水流とともに

調査地点にもたらされ、草本花粉や胞子は谷治いの草地の植生を示すものと考えられる。

(1) V帯

① 堆積時期

「(2) 既知の結果との比較」で述べたように、出雲国府跡日岸田地区 H16 年調査の南壁-1 (66 号下層溝) の木本花粉化石群集と類似し、奈良時代から平安時代にかけての植生を示していると考えられる。

② 森林植生

周囲の尾根はカシ類を主要素とし、イヌマキ、モミなどの針葉樹が混落する照葉樹林で、その大部分が覆われていたと考えられる。また、尾根の一部ではコナラ類、シデ類やアカマツを要素とする「薪炭林・里山」が、分布していた可能性がある。さらに、尾根に切れ込む小谷治いにはスギ林が分布した可能性もある。

③ 低地植生

「5-2 耕作層 (堆積環境) について」で述べたように、調査地点は凹地 (SX08) 内部であり、イネ科のほかカヤツリグサ科やガマ属が生育する「湿原」であったと考えられる。周辺の「荒地 (草地?)」には、シダ類やヨモギ属などが生育していたと考えられる。また、凹地内あるいは周囲にはハンノキ類が生育していた可能性も指摘できる。

(2) IV帯

① 堆積時期

「(2) 既知の結果との比較」で述べたように、出雲国府跡日岸田地区 H16 年調査の北壁-1 (66 号上層溝) の木本花粉化石群集と類似し、奈良時代から平安時代にかけての植生を示していると考えられる。

② 森林植生

V帯の時期同様に周囲の尾根はカシ類を主要素とし、イヌマキ、モミ、ツガなどの針葉樹が混落する照葉樹林で、その大部分が覆われていたと考えられる。また、尾根の一部ではコナラ類、シデ類やアカマツを要素とする「薪炭林・里山」が、分布していた可能性がある。水環境の変化があったと考えられ、小谷治いのスギ林が縮小したと考えられる。

③ 低地植生

「5-2 耕作層 (堆積環境) について」で述べたように、調査地点は凹地 (SX08) 内部であり、イネ科のほかカヤツリグサ科やガマ属が生育する「湿原：14 層」からイネ科のほかカヤツリグサ科やサジオモダカ属、キカシグサ科などが生育する「湿地：10 層」に移り変わったと考えられる。周辺の「荒地 (草地?)」には、シダ類やヨモギ属、アカザ科・ヒユ科やテイカカズラ属などが生育していたと考えられる。また、凹地内あるいは周囲にはハンノキ類が生育していたと考えられる。

(3) III帯

① 堆積時期

「(2) 既知の結果との比較」で述べたように、出雲国府跡日岸田地区 H16 年調査の北壁-1 (66

号上層溝)の木本花粉化石群集と類似し、奈良時代から平安時代にかけての植生を示していると考えられる。

② 森林植生

周囲の尾根の植生はV帯から大差なく、カシ類を主要素としモミ、ツガなどの針葉樹が混濁する照葉樹林で、その大部分が覆われていたと考えられる。ただし、コナラ類、シデ類やアカマツを要素とする「薪炭林・里山」が、徐々に拡大した可能性がある。

③ 低地植生

「5-2 耕作層(堆積環境)について」で述べたように、調査地点は凹地(SX08)内部であり、イネ科のほかカヤツリグサ科やサジオモダカ属、アリノトウグサ科、などが生育する「湿地」であったと考えられる。周辺の「荒地(草地?)」には、シダ類やヨモギ属などが生育していたと考えられる。また、凹地内あるいは周囲にはハンノキ類が生育していたと考えられる。

(4) II帯

① 堆積時期

「(2) 既知の結果との比較」で述べたように、発掘調査の成果及び既知の結果との比較から、奈良時代から平安時代にかけての植生を示していると考えられる。

② 森林植生

周囲の尾根はカシ類を主要素としモミなどの針葉樹が混濁する照葉樹林に覆われていたが、この間で急激に縮小し、「薪炭林・里山」が、急激に拡大したと考えられる。また、「薪炭林・里山」は、それまでのコナラ類、シデ類などの落葉広葉樹主体から、アカマツ主体に替わっていった可能性がある。一方、III帯、IV帯の時期に縮小していたスギ林が拡大する。

③ 低地植生

「5-2 耕作層(堆積環境)について」で述べたように、調査地点周辺の低地には水田が広がっていた可能性がある。またa亜帯の時期には、畦や休耕田、あるいは裏作としてソバが栽培されていた。

(5) I帯

① 堆積時期

「(2) 既知の結果との比較」で述べたように、ワタ属花粉が検出されたことから、昭和40年頃までの植生を示していると考えられる。

② 森林植生

周囲の尾根はアカマツを主要素とし、コナラ類、シデ類、カシ類のほかモミやツガも伴う「薪炭林・里山」に覆われていたと考えられる。II帯(奈良時代から平安時代)までの「スギ」は、天然林に由来する可能性が高い。一方I帯は現代(昭和40年頃まで)の植生を示していることから、ここでの「スギ」は、植林に由来していると考えられる。周囲の尾根や背後の山地で、スギの植林が拡大したものと考えられる。

③ 低地植生

「5-2 耕作層(堆積環境)について」で述べたように、調査地点周辺の低地には、現在同様に水田が広がっていたと考えられる。一方でワタやソバなどの畑作物も行われていた。前述のように、ワ

タモソバも独特の栽培形態を持ち、ほ場整備が進み規格化された水田とは、景観が異なったものと考えられる。

まとめ

大庭ハイパス建設に伴う柳屋遺跡発掘調査に伴う堆積層の軟X線写真観察及び花粉分析の結果、以下の事柄が明らかになった。

(1) 堆積層の軟X線写真観察によって、1～14層の記載を行った。特筆すべき事柄は以下の通りである。

① 耕作層の可能性が指摘されていた1～3b層では小粒状ベッドの発達強い傾向にあった。

② 凹地(SX08)埋土の10、14層には、直線的なチャンネルが顕著に認められたり、ベッドが強度に発達したりする部分があり、堆積休止期(土壌化を受けた時期)が存在することが分かった。

(2) 花粉分析結果を基にI～V帯の局地花粉帯を設定し、更にII帯をa、b亜帯に細分した。これを基に出雲国府跡(渡辺, 2004, 2007)との比較から、それぞれの花粉帯の示す時期を推定した。さらに、軟X線写真観察結果と併せ、堆積環境、水田、畑作物を含む周辺地域の古植生を推定した。特筆すべき事柄は、以下の通りである。

① V帯(14層中部、下部)は奈良時代から平安時代の植生を示す。凹地(SX08)内は湿原であった。また、周囲の尾根には照葉樹林が広がり、一部ではコナラ類、シデ類やアカマツを要素とする「薪炭林・里山」が分布していた。さらに、尾根に切れ込む小谷沿いにはスギ林が分布した可能性もある。

② III帯(10層最上部)、IV帯(10層中部から14層最上部)は奈良時代から平安時代の植生を示す。凹地(SX08)内は湿地で、堆積休止(土壌化)が度々起こると共に、堆積後の酸化鉄の検出により花粉・胞子化石が消滅した可能性が指摘できた。また、IV帯の時期にはそれまで認められたスギ林が突然縮小した。

③ II帯(2層、3b層)は奈良時代から平安時代の植生を示す。調査地近辺では水田耕作が行われ、a亜帯の時期にはソバ栽培が始まった。周囲の尾根には照葉樹林が広がるが、徐々にアカマツ林などに変わっていった。

④ I帯(1層下部)は昭和40年頃以前の植生を示す。調査地近辺では水田耕作が行われる傍らで、ワタソバが栽培されていた。また、周囲の尾根にはアカマツ林(薪炭林・里山)が広がり、スギ植生も認められた。

引用文献

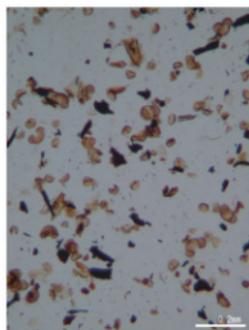
久馬一剛・八木久義監修(1989)土壌薄片記載ハンドブック. p.176. 博友社.

中村 純(1974)イネ科花粉について、とくにイネを中心として、第四紀研究. 13, 187-197.

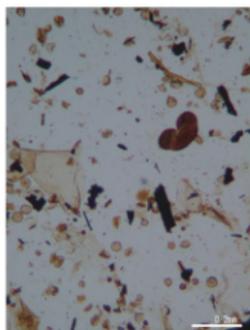
渡辺正巳(2004)出雲国府跡発掘調査に係る花粉分析、史跡出雲国府跡-2、112-115. 鳥根県教育委員会.

渡辺正巳(2006)出雲国府跡平成17年度発掘調査に係る微化石分析、史跡出雲国府跡-4-1、111-118. 鳥根県教育委員会.

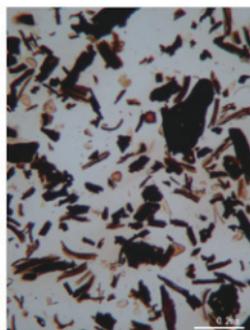
渡辺正巳(2010)花粉分析法. 必携 考古資料の自然科学調査法. 174-177. ニュー・サイエンス社



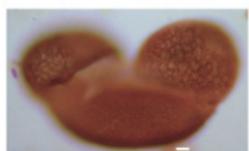
状況写真：試料 上1-1



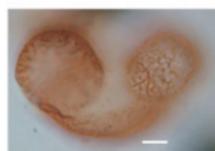
状況写真：試料 上1-2



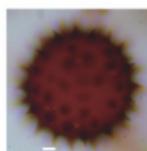
状況写真：試料 上3-1



モミ属



マツ属 (複維管束亜属)



ワタ属



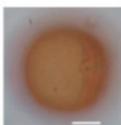
ソバ属



スギ属



ハンノキ属



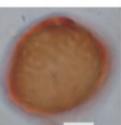
ブナ属



コナラ亜属



アカガシ亜属



ニレ属-ケヤキ属



モチノキ属



イボタノキ属型



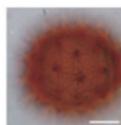
ユリ属



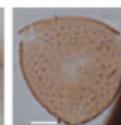
イネ科 (40ミクロン以上)



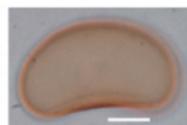
ヨモギ属



キク亜科



ヒモラン型



オシダ科-チャセンシダ科



イノモトソウ科



シノブ属

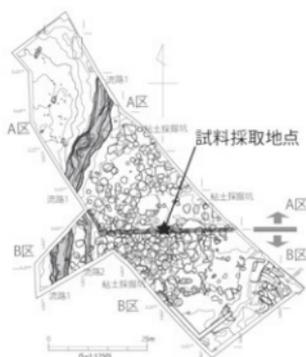
スケールバーは0.01mm

第2節 川原宮Ⅱ遺跡

はじめに

川原宮Ⅱ遺跡は、鳥根県東部松江市の南部、大庭町に位置する

本報は、文化財調査コンサルタント株式会社が、鳥根県教育庁埋蔵文化財調査センターから、発掘調査により検出された各層の堆積時期の推定、耕作層と作物の推定、及び遺跡周辺の古植生を明らかにする目的で委託を受け、実施・報告した軟X線観察、花粉分析、AMS年代測定に関する調査報告書の概報である。

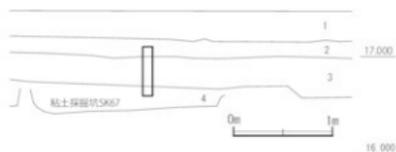


第93図 川原宮Ⅱ遺跡試料採取地点

18,000

分析試料について

分析試料はすべて鳥根県教育庁埋蔵文化財調査センターとの協議の上、文化財調査コンサルタント株式会社が採取した。以下に示す平面図及び断面図は、鳥根県教育庁埋蔵文化財調査センターより提供を受けた原図をもとに作成した。



1:水田耕土 2:水田床土 3:遺物包含層(古墳~近世) 4:遺構覆土

第94図 試料採取層準

第93図の調査区平面図中に試料採取地点を示し、第94図に試料採取地点の断面図及び軟X線写真観察用のブロック試料採取位置を示す。ただし、試料は断面図作成の後に壁面を整形して採取している。このため、後に示す観察試料の画像(地層境界)と本断面図との間でズレが生じている。また、各種分析試料の分取位置を第95図に示す。

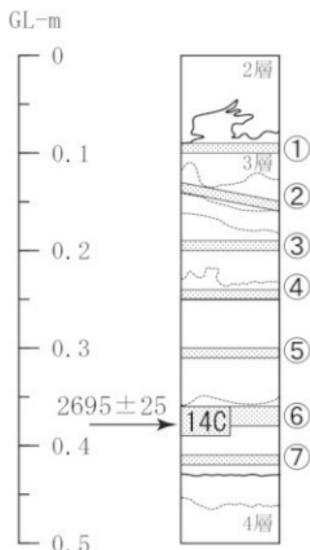
分析方法

(1) 軟X線観察方法

試料採取、調整及び軟X線写真撮影は、渡辺(2009)に従って実施した。撮影写真は「ネガ」に相当する。撮影写真を基にスケッチを行うとともに、「土壌記載薄片ハンドブック(久馬・八木:訳監修, 1989)」に準じて記載を行った。

(2) AMS年代測定方法

塩酸による酸洗浄の後に二酸化炭素を生成、精製し、グラファイトに調整した。 ^{14}C 濃度の測



第95図 分析試料採取状況

定にはタンデム型イオン加速器を用い、半減期：5568年で年代計算を行った。暦年代較正には OxCal ver. 4.2.4 (Bronk Ramsey, 2009) を用い、IntCal13 (Reymer et al., 2013) を利用した。

(3) 微化石概査

花粉分析用プレパラート、及び花粉分析処理残渣を観察し、花粉（胞子）、植物片、炭片、珪藻、火山ガラス、植物珪酸体の含有状況を概観した。

(4) 花粉分析

渡辺（2010）に従って実施した。花粉化石の観察・同定は、光学顕微鏡により通常 400 倍で、必要に応じ 600 倍あるいは 1000 倍を用いて実施した。原則的に木本花粉総数が 200 粒以上になるまで同定を行い、同時に検出される草本・胞子化石の同定も行った。また中村（1974）に従ってイネ科花粉を、イネを含む可能性が高い大型のイネ科（40 ミクロン以上）と、イネを含む可能性が低い小型のイネ科（40 ミクロン未満）に細分している。

分析結果

(1) 軟X線写真観察結果

第 96 図に試料ごとの実視写真、軟X線写真、解析結果を示す。また、試料分取位置は第 95 図及び第 98 図の花粉ダイアグラム中に示す。

① 2 層（上部）

中粒砂混じり腐植質粘土に、中粒砂質粘土のブロックが多量に混じる。また、酸化鉄の検出が激しい。軟X線写真では細粒～極粗粒の小粒状ベッドが中度に発達していることが確認できる。実視でも根跡と考えられる直線的なチャンネルが僅かに確認されるが、軟X線写真では多くの直線的なチャンネルが確認できる。更にチャンネルを酸化鉄が準被覆するベドフィーチャーも顕著に認められる。

② 3 層（上部）

腐植質粘土から成る。軟X線写真では根跡と考えられる直線的なチャンネルが極めて多く認められるほか、細粒～極粗粒の小粒状ベッドが中度に発達していることが確認できる。含まれる砂粒の状態から細分が可能で、最上部では中～粗粒砂を含む。また、酸化鉄が塊状に検出されている。上部では細～中粒砂を含む。中部では上部、下部に比べ細～中粒砂の量が多い。下部では細砂～中粒砂を含む。最下部では下部に比べ砂粒が少なくなる。

③ 3 層（下部）

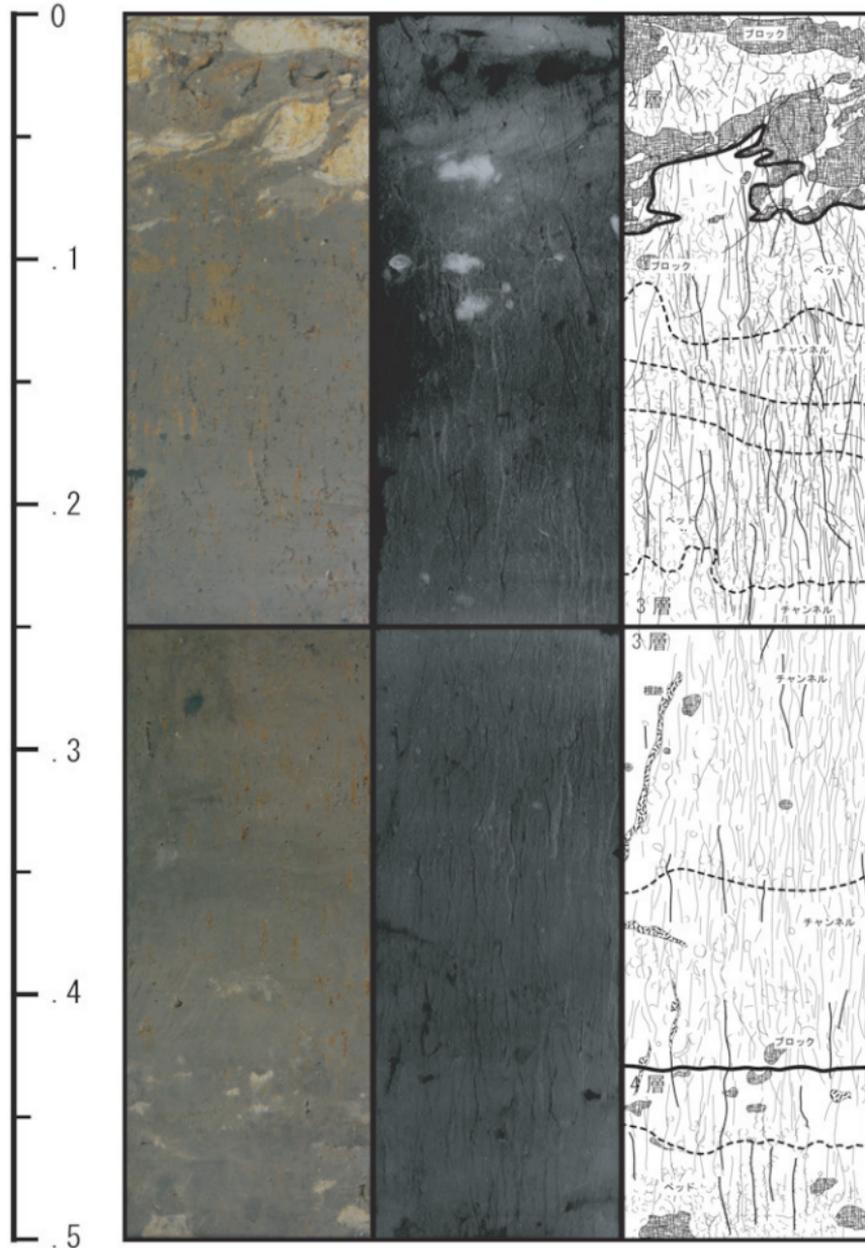
腐植質粘土から成る。軟X線写真では根跡と考えられる直線的なチャンネルが極めて多く認められる。一方ベッドの発達は弱く、細粒～極粗粒の小粒状ベッドが僅かに認められる。上部は細～中粒砂を含み暗褐色を呈す。下部は細砂を含み、黒褐色を呈す。また、僅かに暗灰色のブロックを含む。

④ 4 層（下部）

腐植質粘土に暗灰色シルトと黒色粘土のブロックが多く混じる。軟X線写真では根跡と考えられる直線的なチャンネルが極めて多く認められる。上部ではベッドの発達は弱く、細粒の小粒状ベッドが僅かに認められる。一方、下部では細～粗粒の小粒状ベッドが中～強度に発達する。

(2) AMS 年代測定結果

年代測定結果を表 1 に、OxCal ver.4.2.3 による暦年代較正図を第 97 図に示す。また第 19 表には、



第96図 軟X線写真観察結果 (左: 実視 中: 軟X線 右: 解析結果)

測定年代、 $\delta^{13}\text{C}$ 値と3種類の年代を示している。

(3) 微化石概査結果

微化石概査結果を第20表に示す。各微化石の含有状況を凡例に示した5段階で示した。

(4) 花粉分析結果

分析結果を第98図の花粉ダイアグラムに示す。花粉ダイアグラムでは木本花粉総数を基数として分類群ごとに百分率を算出し、木本(針葉樹)花粉、木本(広葉樹)花粉、草本・藤本花粉、胞子の区分でスペクトルの色を変えて示した。また花粉総合ダイアグラムでは、区分ごとの累積百分率を示した。右端の含有量グラフでは、1g当たりの花粉と胞子の含有量を対数目盛りで示した。

年代測定値について

測定結果は第19表、第97図に示した通りで、縄文時代晩期(あるいは弥生時代早期)を示す。一方後述のように、近隣の柳堀遺跡においてII帯に対比できる花粉化石群集が、奈良(平安)～鎌倉時代の植生を示すことが明らかになっていた(渡辺2016)。このことは、今回の年代測定結果と矛盾する。一般に ^{14}C 年代測定値は、実際の年代より古い値を示す傾向にある。特に今回の測定試料は堆積物中の有機物を集めた平均的な値であり、堆積速度や混入物の影響を受け、実際より古い年代が得られる可能性があった。年代測定値と花粉帯(花粉化石群集)対比結果とが大きく異なることから、何らかの影響で古い時期の炭素が多量に混入していた可能性が指摘できる。したがってII帯は、奈良(平安)～鎌倉時代の植生を示す可能性が高い。

花粉分帯と既知の結果との比較

(1) 花粉分帯

花粉分析結果を基に局地花粉帯を設定した。また、花粉化石群集の時系列上の変化を明解するために、下位から上位に向かって示す。

① II帯(試料No 7～4)

スギ属、マツ属(複雑管束亜属)が高率を示すほか、アカガシ亜属、コナラ亜属が特徴的に出現する。マツ属(複雑管束亜属)は緩やかな増加傾向を、アカガシ亜属は減少傾向を示す。

② I帯(試料No 3～1)

マツ属(複雑管束亜属)が高率を示すほか、コナラ亜属も他の種類と比べ高率を示す。一方、下位のII帯で高率を示したスギ属、アカガシ亜属は低率である。

(2) 既知の結果との比較

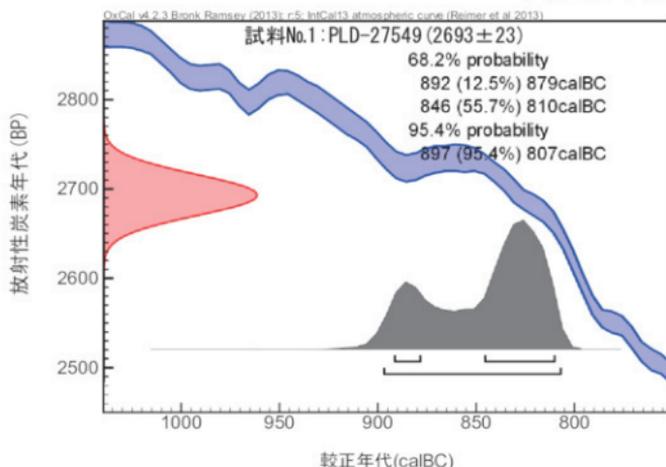
川原宮II遺跡北方300mに位置する柳堀遺跡では、花粉分析結果の報告がある(渡辺, 2016)。今回の分析結果と、柳堀遺跡の分析結果を比較、対比する。

① II帯(試料No 7～4): 奈良(平安)～鎌倉時代

柳堀遺跡でスギ属が高率を示すのは、最下位のV帯と中位のII帯b亜帯である。これらのうちV帯ではマツ属(複雑管束亜属)の出現率は低く、マキ属やモミ属と同程度を示す。一方II帯b亜帯では、スギ属のほかマツ属(複雑管束亜属)、コナラ亜属、アカガシ亜属が特徴的に出現する。今回のII帯ではスギ属のほかマツ属(複雑管束亜属)、コナラ亜属、アカガシ亜属が特徴的に検出されるなど、柳堀遺跡でのII帯b亜帯と花粉化石群集が類似し、対比できる。ただし、今回のII

第19表 AMS年代測定結果

試料No.	試料	試料重量(g)	測定年代 ¹⁾ (calBP ± 1σ)	δ ¹³ C (‰)	標準校正年代 ²⁾ (calBP ± 1σ)	測定年代 ³⁾ (calBP ± 1σ)	放射性炭素年代		測定番号 (試料)	
							1σ測定年代範囲	2σ測定年代範囲		
1909-1)	炭母土	3層	214312	式試測付: 70‰ ± 0.3‰ 式試測付: (標準: -1.2‰)	2670 ± 23	-23.58 ± 0.30	2693 ± 23	2695 ± 25	BC897 - 807 (95.4%) BC897 - 810 (95.7%)	27549



第97図 暦年較正図

帯の方が、スギ属の出現率が高く、その他の種類の出現率が低い傾向にある。

また、3b層 (Ⅱ帯b亜帯) が、奈良 (平安) ~ 鎌倉時代に堆積したとされることから、今回のⅡも同時期の植生を示すと考えられる。

② I帯 (試料No. 3 ~ 1)

前述のようにI帯ではマツ属 (複維管束亜属) が高率を示すほか、コナラ亜属も特徴的に出現する。このような特徴は、柳堀遺跡でのⅡ帯a亜帯で認められ、対比できる。ただし今回のI帯の方がマツ属 (複維管束亜属)、コナラ亜属の出現率が高い。柳堀遺跡ではI帯で、マツ属 (複維管束亜属) が更に高率になることから、Ⅱa亜帯よりやや後の時期の植生を反映した可能性もある。

3層での耕作について

軟X線写真観察では直線的なチャンネルが顕著に認められ、根による擾乱が顕著なことが分かる。一方でベッドの発達も弱く、土壌化の程度が計りにくい。

上部の試料No. 3 ~ 1では、イネを含む可能性の高いイネ科 (40ミクロ以上) が200%を超える極めて高い出現率を示し、栽培種のソバ属や、栽培種を含むアブラナ科、アカザ科 - ヒユ科、ナデシコ科、オモダカ属なども検出される。草本花粉は現地性が高いことから、試料No. 3 ~ 1の層準が耕作土であり、イネの外ソバやナタネ、アカザ、クワイなどが栽培されていた可能性が指摘できる。また、ガマ属、サジオモダカ属、イネ科 (40ミクロ未満)、カヤツリグサ科、キカシグサ属、オオバコ属などの「水田雑草」が多く検出されることから、イネは水稲であったと考えられる。一方でソバなどの栽培も推定されることから、水田裏作や休耕田の時期に畑作が行われたと考えられる。

第20表 微化石概査結果

試料No.	花 粉	炭	植物片	珪 藻	火山がら	アラント・ホルム
1	◎	○	○	△	◎	◎
2	◎	○	○	△x	◎	◎
3	◎	△	○	△	◎	◎
4	◎	△	○	△	◎	◎
5	◎	△	△	△	◎	◎
6	◎	△	△	△x	◎	◎
7	◎	△	△	△x	◎	◎

凡例 ◎ : 十分な数量が検出できる ○ : 少ないが検出できる △ : 非常に少ない
 △x : 極めてまれに検出できる × : 検出できない

中部の試料No. 5、4では、イネを含む可能性の高いイネ科（40ミクロン以上）が上位の試料No. 3～1に比べ減少するものの、100%を超える高い出現率を示す。更に試料No. 3～1同様に栽培種のソバ属や、栽培種を含むアブラナ科、アカザ科・ヒユ科、ナデシコ科、オモダカ属なども検出されることから、この層準も耕作土であったと考えられる。

下部の試料No. 7、6では、イネ科（40ミクロン以上）が50%程度の出現率を示す。この値は中～上部の出現率に比べ少ないものの、この層準が耕作土層とするには十分な量である。更にソバ属も検出され、少量であるがアブラナ科、アカザ科・ヒユ科、ナデシコ科、オモダカ属なども検出され、上位の層準同様に、この層準も耕作土であったと考えられる。

周辺地域の古環境の推定

(1) II 帯期（奈良（平安）～鎌倉時代）

花粉分析では草本花粉の割合が高く、特にイネ科（40ミクロン以上）が高率で検出されている。前述のようにガマ属、サジオモダカ属やイネ科（40ミクロン未満）などの水田雑草由来と考えられる花粉も特徴的に検出されることから、調査地及び周辺には水田が広がっていたと考えられる。調査地は谷部に位置し、水利環境が良いことから開墾が行われたと考えられる。また、栽培種であるソバ属や栽培の可能性のあるアカザ科・ヒユ科、ナデシコ科、アブラナ科、オモダカ属なども検出され、休耕田の利用や、裏作、あるいは畦を利用した畑作が行われていたと考えられる。

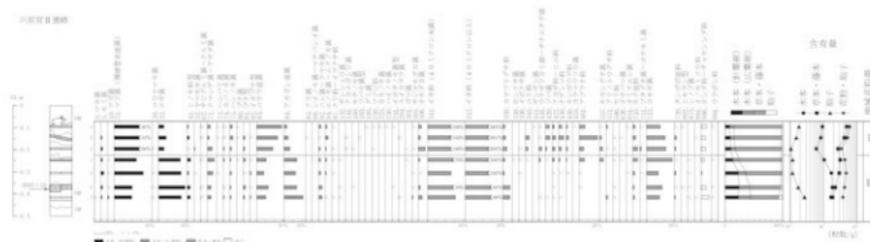
柳堀遺跡の分析結果では、この時期以前に周辺の丘陵をカシ林が覆っていたと考えられていた。この時期に入ると周辺の丘陵で開発が進み、カシ林（照葉樹林）が伐採され、アカマツ林やナラ林（あるいはこれらの混雑林）などの「里山」が広がったと考えられる。一方で未開の谷筋を中心にスギ林が残存しており、やや拡大した可能性がある。

(2) I 帯期

前述のように調査地及び周辺には水田が広がっており、休耕田や裏作などでソバなどが栽培されていたと考えられる。周辺の丘陵では、アカマツ林やコナラ林（あるいはこれらの混雑林）などの「里山」が広がった。谷筋の開墾も進み、スギ林も伐採され、背後の山地にはカシ林（照葉樹林）が残存していたと考えられる。

まとめ

大庭バイパス建設に伴う川原宮Ⅱ遺跡発掘調査に伴う堆積層の軟X線写真観察及び花粉分析、AMS年代測定の結果、以下の事柄について考察した。



第98図 花粉ダイヤグラム

- (1) AMS年代測定結果から縄文時代晩期（あるいは弥生時代早期）を示す年代値が得られたが、近隣の柳堀遺跡での花粉化石群集との対比から、3層の堆積時期は、奈良（平安）～鎌倉時代と推定できた。
- (2) 軟X線写真観察ではチャンネル、ベドフェューチャー以外の土壌構造は明確でなかったが、イネ科花粉などの栽培関連花粉が多量に検出された。このことから、調査地（川原宮Ⅱ遺跡）及び周辺で、奈良（平安）～鎌倉時代以降、水田耕作やソバなどの畑作が行われていたと推定できた。
- (3) I、II帯の局地花粉帯を設定し、近隣の柳堀遺跡の花粉分析結果と比較・対比した。この結果、II帯が柳堀遺跡でのII帯b亜帯（奈良（平安）～鎌倉時代の植生を示す）、I帯が柳堀遺跡でのII帯a亜帯にそれぞれ対比できた。
- (4) 花粉帯ごとに、調査地近辺の古植生を推定した。II帯の時期は「里山」の拡大期で、カシ林が伐採され、アカマツ林やコナラ林が拡大した。一方で、スギ林は谷筋に残存していた。I帯の時期に入ると周辺の丘陵はアカマツ林やコナラ林で覆われ、カシ林は背後の山地に残存するのみであった。また、スギ林も伐採された。

参考文献

- Bronk Ramsey, C. (2009). Bayesian analysis of radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51(1), 337-360.
- 渡辺正巳 (2016) 自然化学分析, 柳堀遺跡・茶臼遺跡・川原宮Ⅱ遺跡国道432号大庭バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 105-118, 島根県土木部・島根県教育委員会.
- 中村 純 (1974) イネ科花粉について, とくにイネを中心として, 第四紀研究, 13, 187-197.
- 久馬一剛・八木久義監修 (1989) 土壌記載薄片ハンドブック, p.176, 博友社, 東京.
- Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hafflidason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J. (2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP. *Radiocarbon*, 55(4), 1869-1887.
- 渡辺正巳 (2009) 五丁遺跡・庵寺遺跡における堆積相の軟X線観察, 五丁遺跡 庵寺遺跡 I 於才道遺跡一般国道9号仁摩温泉津道路建設予定地埋蔵文化財発掘調査報告書, 2, 145-160, 国土交通省中国地方整備局・島根県教育委員会.
- 渡辺正巳 (2010) 花粉分析法, 必携 考古資料の自然科学調査法, 174-177, ニュー・サイエンス社.

第7章 総括

第1節 柳堀遺跡

柳堀遺跡A～E区の調査では、弥生時代後期や奈良・平安時代のものを含む溝状遺構5、中世の杭列2条、平安時代のものを含む性格不明不定形遺構5などを検出した。

A区で検出したSD10は今回報告する大庭バイパスの3遺跡の中で唯一、弥生時代後期のものとして確認できた遺構である。また、奈良時代の遺構としてSD13を検出した。D区では、平安時代に埋没したと考えられるSX05から下駄が出土している。A区とB区では中世の杭列が出土した。

A区の東壁で採取した試料の自然科学的分析から、奈良・平安時代に近辺で水田耕作が行われていた可能性があることが指摘されたが、調査区内で水田耕作の痕跡を遺構としてとらえることはできなかった。遺構や包含層からは弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、木製品などが出土した。

柳堀遺跡F・G・H区の調査では、H区の北西隅に2条の溝状遺構を検出した。SD14とSD15である(第23図)。SD14からは古墳時代後期の須恵器や土師器とともに建築部材や容器などの多様な木製品が出土した。自然河道が検出される谷底低地ということもあり、集落本体にかかる顕著な遺構は検出されなかった。出土した木製品は、建築部材と思われるものが多い。ついで容器、農耕具の順である。柳堀遺跡A区の自然化学分析によって遺跡近辺で奈良時代以降に水田化された可能性が指摘されているが、第27図1及び2に掲げた農耕具などがかるうじてそのことを示していると言えよう。

F区南端で検出した集石と杭などの建材で構築された道路状遺構は、明治初頭の切図では表現されていない。この時までには、すでに廃絶されていた可能性が考えられ、下限が近代にまで及ばないと考えられる。今回の発掘調査で湿地を横断する道路状遺構が検出されたことにより、谷底を横断する道路網の一端が明らかになった。石敷きが調査区内東側で南に屈折していたように、丘陵に沿って一旦南北に延伸していたことがうかがえる。

古地形や近世以前の土地利用を考えるうえで今回の発掘調査で貴重な資料を得ることができた。

第2節 茶臼遺跡

茶臼遺跡の今回の調査では、自然河道や水田耕作等による削平が著しく検出された遺構は極めて少なかったものの、SD01の存在は古墳時代前期にはこの地域に集落等が営まれていたことが想定できる貴重な成果といえる。また、遺物の大半は自然河道から出土し、弥生時代～中世までと時期幅が認められるが、風土記の丘地内の特異性からか石製巡方が出土していることが注意される。

鳥根県の腰帯具の出土例としては40例目、石製巡方としては8例目となり(第7表)、縦4.05cm、横4.2cmの規模のものは大型の石帯に分類され、鳥根県内では江津市波来浜遺跡出土例のものと同規模の大きさを測る。この大きさと帯幅は一致するものと指摘され、帯幅の太さは位階の違いを示しているとも考えられている。また、衣服令では、五位以上には「金銀装腰帯」、六位以下は「烏油腰帯」を着けることとされており、当遺跡出土のものは六位以下のものであることは確実であろうが、その大きさから察すれば正六位の可能性が高いと推測されよう。ただ、

官衙遺跡や墓などからの出土ではないことから、この位階を有する人物像については知り得ることはできない。

【参考文献】

『鈞帯をめぐる諸問題』、奈良文化財研究所、2002年

『波来品遺跡発掘調査報告書』、江津市教育委員会編、1973年

第3節 川原宮Ⅱ遺跡

川原宮Ⅱ遺跡では、300基に及ぶ非常に多くの土坑を検出した。ほとんどの土坑が不整系ではあるが、形状をよく残しているものは、平面円形で断面砲弾状あるいは弧状に掘り進めている。これらの土坑の性格については次のようなことが考えられる。

- ・土層中に落ち込みや弛みがほとんど見られず廃棄物の痕跡がないと思われるので、廃棄物を埋め立てるための土坑ではないと思われる。
- ・断面袋状など貯蔵穴特有の形状が見られないので貯蔵穴とも考えにくい。
- ・墓坑としては大きすぎるものがほとんどである。坑の底部を加工して平らに作る意識が感じられない。木棺や石棺など棺の痕跡がない。副葬品のものが伴っていない。などのことから墓坑としては考えにくい。

以上のようなことから、廃棄土坑や貯蔵穴、墓坑などの遺構の可能性は低く、ほとんどすべての土坑に共通しているのは、灰白色粘土層を狙って掘り出し、すぐに埋め立てて資源を保護した粘土採掘坑の痕跡と考えられることである。土坑埋土の堆積状況を見るとほとんど一様で、セクションの端部に斜めの立ち上がり無く、必要な白色粘土を選んで掘り出した後にすぐ埋め戻していると思われる。さらに言えば、この土坑群は、土坑を掘った後にその坑を何かに利用するために掘り込まれたのではなく、灰白色粘土の採掘を目的にして掘った跡を、今日的に発掘調査してみると、土坑が密集して切り合っているように見えると思われる。

これらの粘土採掘坑の中には遺物が出土していて時期が特定できるものがある。SK108あるいはSK137などである。特にSK137については粘土採掘の作業が一段落したか、一定の操業期間が終わった段階で祭祀が行われたことを反映していると考えられる。これらの遺物及び第73図に掲げた遺物によって、粘土採掘の操業期間が奈良時代から平安時代末に限定されてくると考えられる。

また、粘土採掘坑が自然河道の北に一切展開していないことについては、その粘土が褐鉄鉱の浸潤を受けて黄色に変色していることが関係しているのではないかと考えた。ただし、奈良時代から平安時代末にかけてとした採掘時期に、自然河道以北の粘土が黄色みを帯びていたかどうかはわからない。さらに、B区南東部の粘土採掘坑の様相は他の区域に展開する採掘坑と異なり、細長い痕跡を残している。また、掘り出された粘土も黄色みを帯びたものだったことが、残された部分の土質からうかがえる。この区域の採掘坑からは、近代以降の陶磁器などの異物が混入しており、この区域の採掘坑については近代以後の時期も考慮する必要があると思われる。

確証はないが、これらの粘土採掘によって掘り出された白色粘土は、土器などを焼成する原料として窯業の素材に供せられたと思われる。川原宮Ⅱ遺跡は、まず、このような多数の土坑によって特徴付けられる。

このような粘土採掘坑の例は、当遺跡の近隣においては、松江市竹矢町の中竹矢遺跡同矢田町間内遺跡にその例がある。中竹矢遺跡では、昭和55（1980）年度に189基と平成2（1990）年度に73基の計262基の土坑が2次にわたって発掘調査されている。昭和55年度調査の189基については、弥生時代前期後半から古墳時代前期までの年代が与えられている。平成2年度調査の73基については、縄文時代晩期から古墳時代中期までの年代が与えられている。また、この間、昭和58（1983）年度には、間内遺跡でも同様の土坑が43基検出され、その中には、縄文時代晩期から奈良時代までの遺物が出土するものがあり、個別に年代が与えられている。中竹矢遺跡の昭和55年度調査の時点では、これらの土坑について、一旦貯蔵穴か廃棄土坑ではないかとの見解が示されたが、間内遺跡の昭和58年度調査と中竹矢遺跡の平成2年度調査では、国分寺など古代の瓦窯址が近く、近代においても瓦生産のための粘土採掘が行われていたことなどから、このような土坑群について、土器焼成の原料となる白色粘土の採掘坑である可能性を指摘している。

川原宮Ⅱ遺跡の粘土採掘坑からは奈良時代以降の遺物しか出土していないので、中竹矢遺跡や間内遺跡とは時期的に重ならないと思われるが、遺構の状況から共通性は明らかと思われる。

川原宮Ⅱ遺跡では古代瓦が20点近く出土している。凸面縄目瓦痕凹面布目痕のものが多く、凸面に格子叩き目文を残すものは全く出土していない。瓦屋根の建造物が近隣にあったことが考えられる。経筒の蓋のつまみと思われる金属製品の破片1点（第78図22）、風車硯1点（第80図23）、転用硯と思われる須臾器の破片3点（第80図8.16,24）が出土していることもあって、近隣に寺院・官衙の存在がうかがわれる。しかし、土器の墨書など文字資料は出土していない。第74図3に掲げた青白磁合子の出土も注目される。

土馬が4体出土している。SK287上部から出土した土馬（第73図16）以外は、いずれも包含層中からの出土であり、遺構に伴うものではなかった。SK287は粘土採掘坑の可能性が高く、土馬と直接関係のある遺構とは考えにくい。偶然かもしれないが、牡馬（第82図18）と牝馬（第82図20）が1体ずつ確認できる。牡馬の頭部と後ろ足が欠けているのは、それに携わる人々の願望など何かの祭祀の様相を反映していると考えられる。

自然河道を2条検出した。これは柳堀遺跡F・G・H区及び茶臼遺跡でも確認された現在の宇竜川の旧河道とされるべきものと思われる。これらの自然河道はすべて出土する遺物の時期幅が異なる。最も北で、合流する馬橋川に近い茶臼遺跡では、中世以前の遺物が出土している。その南に隣接する柳堀遺跡F・G・H区では近世以前の遺物が出土しており、茶臼遺跡で検出した自然河道と円滑につながらない。しかし、狭い谷地形の中であれば旧河道の流路は自ずと限られており、これらが一につながっていたことは明らかだ。柳堀遺跡F・G・H区では旧河道が合流する様相が検出された。最も南の川原宮Ⅱ遺跡で検出した自然河道は、奈良時代にすでに埋没したものであったことが考えられる。自然化学分析でも周囲の平地の耕地化について言及されているが、このような発掘調査の結果が各遺跡周辺の耕地化の様子を何かの形で反映している可能性が考えられる。

【参考文献】

- 『国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書（Ⅳ）』、鳥根県教育委員会編、1983年
 『北松江幹線新設工事・松江連絡線新設工事予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』、鳥根県教育委員会編、1987年
 『一般国道9号松江道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書X（中竹矢遺跡）』、鳥根県教育委員会編、1992年

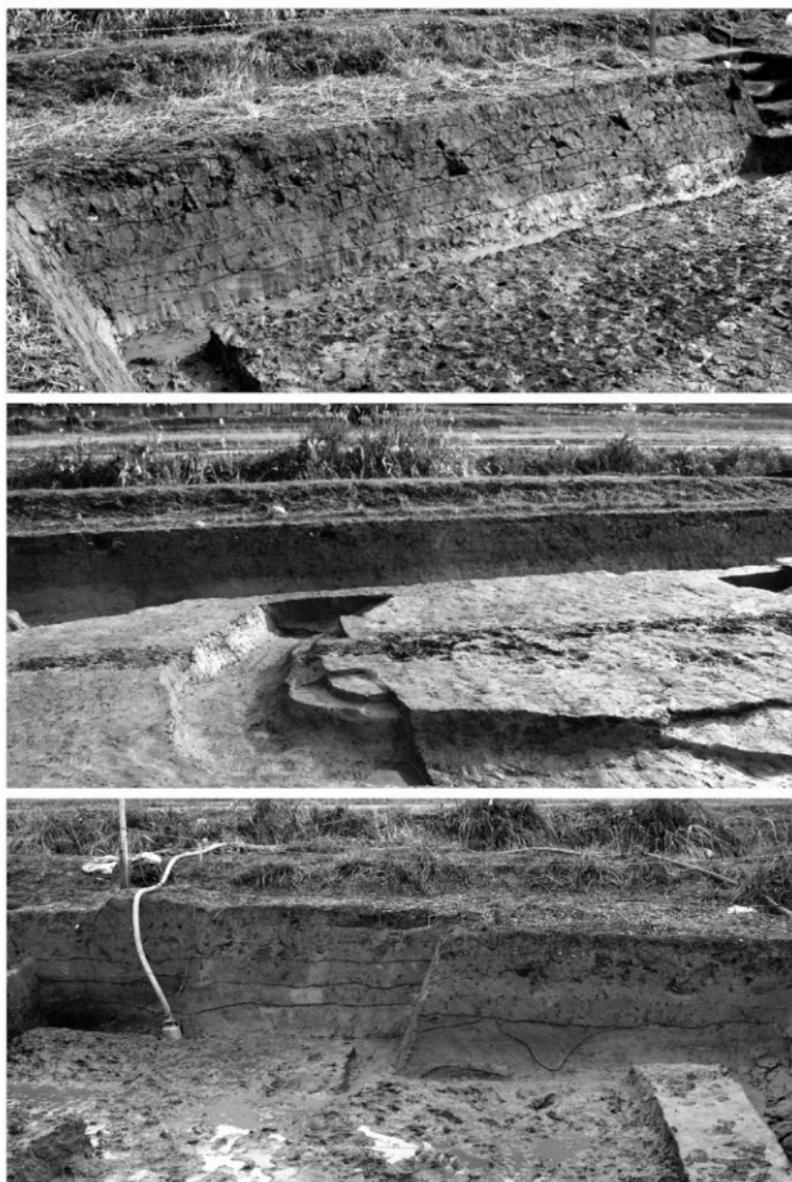
写真図版



1. 柳堀遺跡調査前（南から）



2. 柳堀遺跡 A 区北壁土層



1. 柳堀遺跡 A 区東壁土層 (上: 北側 中: 中央 下: 南側)

1. 柳堀遺跡 A 区
SD10 東断面



2. 柳堀遺跡 A 区
SD10 北側土層



3. 柳堀遺跡 A 区
SD10 中央土層





1. 柳堀遺跡 A 区
SD10 南側土層



2. 柳堀遺跡 A 区
SD13 東側土層



3. 柳堀遺跡 A 区
SD13 東断面



1. 柳堀遺跡 A 区完掘 (北から)



2. 柳堀遺跡 B 区東壁土層



1. 柳堀遺跡 B 区南壁 SX07 土層



2. 柳堀遺跡 B 区北壁 SX08 土層



1. 柳墟遗址 B 区 SX08 完掘



2. 柳墟遗址 B 区坑列检出



1. 柳堀遺跡 B 区完掘 (北から)



2. 柳堀遺跡 C 区南壁土層